東京大学埋蔵文化財調査室報告書 5
東京大学本郷構内の遺跡
医学部附属病院外来診療棟地点
二〇〇五

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 5

東京大学本郷構内の遺跡

医学部附属病院外来診療棟地点

2005

東京大学埋蔵文化財調査室

東京大学本郷構内の遺跡

医学部附属病院外来診療棟地点

2005

東京大学埋蔵文化財調査室

九谷産染付小坏（SK171）

調査区全景

例　言

1. 本書は、東京大学医学部附属病院外来診療棟新営に伴う発掘調査報告書である。
2. 本地点の略称は「HG」とする。
3. 調査地は、東京都文京区本郷７丁目３番１号東京大学本郷構内に所在し、調査面積は約5,500㎡であった。
4. 本地点は、東京都遺跡地図「文京区№47　本郷台遺跡群」内に位置している。
5. 発掘調査は、東京大学埋蔵文化財調査室が行い、調査担当者は寺島孝一、武藤康弘（現奈良女子大学）、成瀬晃司、堀内秀樹であった。
6. 調査期間は1990年６月27日から1991年２月21日及び1991年５月８日から21日である。
7. 本書の編集は、成瀬晃司、堀内秀樹を中心に執筆者の協議の上行った。
8. 執筆分担は以下の通りである。
   第Ⅰ章第１節　寺島孝一、第２、３節　成瀬晃司
   第Ⅱ章　寺島
   第Ⅲ章　成瀬・堀内秀樹
   第Ⅳ章第１節　堀内・大成可乃、第２節　寺島、第３、４、５節　安芸毬子、第６節　大貫浩子、第７節　原祐一・北野信彦
9. 降旗順子・村上　隆氏（独立行政法人奈良文化財研究所）には、出土した磁器の蛍光Ｘ線分析を依頼し、玉稿を頂戴した。記して感謝したい。
10. 北野信彦氏（くらしき作陽大学）には、漆器資料の分析を依頼し、玉稿を頂戴した。記して感謝したい。
11. パリノ・サーヴェイ株式会社には、SK18出土、瀬戸・美濃産五合徳利内容物の分析を依頼した。
12. 遺構写真は主に寺島孝一が、遺物写真は青山正昭が撮影した。
13. 遺構の浄書は㈱セビアスにデジタルトレースを委託した。遺物の実測、浄書は主に今井雅子・坂野貞子・中村和子・佐藤智子が行い、最終的に㈱セビアスによってデジタル化を行った。
14. 本書に添付したCD-ROMには、検出遺構一覧表・出土遺物一覧表、遺物組成表（xls形式）、遺構写真・遺物写真（jpg形式）、電子報告書（pdf形式）を収録している。特に出土遺物一覧表、陶磁器・土器組成表は報告編には掲載されていないので注意されたい。
15. グリッドは平面直角座標系第Ⅸ系を基準にしている。
16. 発掘調査に伴う図面・写真・出土文化財は東京大学埋蔵文化財調査室が駒場リサーチキャンパス、茨城県新治郡八郷町柿岡414東京大学柿岡教育研究施設内において、運用・保管している。
17. 発掘調査及び報告書作成にあたり下記の諸氏・機関より御協力・御教示を賜った。記

して謝意を表する。（敬称略）

今村　啓爾　小川　望　梶原　勝　古泉　弘　小林　克　小林　謙一
小林　茂之　鈴木　裕子　高橋　三郎　谷口　栄　長佐古真也　西田　泰民
橋口　定志　宮崎　勝美　両角　まり　吉田　邦夫　鴻池組　㈱三浦工業
㈱セビアス　施設部　医学部附属病院　文学部考古学研究室

発掘調査参加者

三浦工業㈱

整理作業参加者（五十音順）

青山　正昭　安芸　毬子　阿部　常樹　池田奈津代　今井　雅子　遠藤　香
大島美智子　大貫　浩子　岡澤　麦子　小野　美恵　香取　祐一　川原　良子
坂野　貞子　佐藤　智子　佐藤　直子　佐藤　律子　中村　和子　野々村　海
野村　遊　宮本　直子　矢島　正子　柳　絢子

凡　　例

1. 遺構の実測図は原則として１／40で掲載している。
2. 陶磁器・土器の実測図は原則として１／４で掲載している。その他の遺物の尺度は、各図版にスケールを表示している。
3. 実測図に付けられる記号及びトーンは以下のことを表している。
   - ▲は高台、見込みなどの釉際を表しており、磁器と釉際の描写が不可能な陶器に用いている。
   - ＼――／は、口唇部の口銹を表している。
   - ＼⟷／は、人為的な磨耗痕、敲打痕、擂鉢の体部擂目範囲を表している。
   - 中心線上下端の破線は、推定口径を表している。
   - スクリーントーンは、 が青磁の が施釉土器の施釉範囲を表している。
   - 本文中で記載した陶磁器・土器分類は『東京大学構内遺跡調査研究年報２別冊 東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）』に、段階設定は、堀内秀樹「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』１に基づいている。
4. 遺構番号は、原則調査順に通し番号を付した。ただし調査担当者が複数介在しているため、必ずしも遺構番号の大小が、遺構の新旧を表すものではない。また冠詞に付けた略号は以下の通りである。

   SA：塀跡　SB：建物跡　SD：溝　SE：井戸　SK：土坑　SL：厠　SP：小穴
   SU：地下室　SX：性格不明遺構
5. グリッドは、調査区北西隅を基準点とし（A1）、そこから東へアルファベットを、南へ整数（アラビア数字）を10m間隔で付した。よってグリッド名は10m四方枡の北西コーナーを交点とする英数字を当てている。またA1の座標値は平面直角座標系第Ⅸ系（X＝－32,350、Y＝－5,970）である。
6. 遺構断面図などに記載された標高は、東京湾平均海面（T.P.）を基準とし、基標番号「郷（2）」本郷七丁目３東大赤門前（T.P.：23.4072m）から、小数点第四位を四捨五入して算出した。なお、「郷（2）」のT.P.は、平成３年７月東京都土木技術研究所刊行の『水準基標測量成果表』に基づいている。

目　次

例　言
凡　例
目　次

報　告　編

第Ⅰ章　調査の経過と概要 …… 1
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の方法と経過 …… 1
第３節　遺跡の位置と環境 …… 3

第Ⅱ章　近代の遺構 …… 9

第Ⅲ章　江戸時代の遺構 …… 13
第１節　調査地点の概要 …… 13
第２節　検出された遺構 …… 22

第Ⅳ章　出土した遺物 …… 247
第１節　出土遺物の取り扱いについて …… 247
第２節　陶磁器・土器類 …… 247
第３節　人形・ミニチュア・遊戯具類 …… 410
第４節　瓦 …… 423
第５節　金 属 製 品 …… 427
第６節　木　製　品 …… 466
第７節　石　製　品 …… 473
第８節　骨角・ガラス製品 …… 483

おわりに …… 489

参考文献 …… 492

研　究　編

外来診療棟地点における藩邸周縁部土地利用 …… 成瀬　晃司　495
－遺構属性による空間復元の試み－

外来診療棟地点出土陶磁器・土器類について …… 堀内　秀樹　521

外来診療棟地点SK171出土陶磁器の自然科学的調査
…… 降幡　順子・村上　隆・堀内　秀樹　537

加賀藩・大聖寺藩江戸屋敷で使用された肥前磁器と「古九谷」 …… 堀内　秀樹　543

外来診療棟地点出土漆器資料の材質と製作方法 …… 北野　信彦　561

医学部附属病院外来診療棟地点出土の動物遺体
…… 野々村　海・江田　真毅・阿部　常樹　569

加賀藩邸徳利内容物の材質調査 …… パリノ・サーヴェイ株式会社　615

江戸遺跡出土のキセル　－東大構内遺跡における時期別様相－ …… 安芸　毬子　627

報告書抄録 …… 巻末

報　告　編

第Ⅰ章　調査の経過と概要

第１節　調査に至る経緯

東京大学医学部では、附属病院外来診療棟の新築工事を計画した。本郷キャンパス内は、東京都の「周知の遺跡」として登録されているため発掘調査が必要と判断された。ただ、現行の附属病院管理棟とかなりの部分重複しているため、遺構の残存状況、またローム面までの盛土の堆積状況を調べるため、試掘調査を行った。この試掘調査は、日程・予算などとの関連から現行建物の解体と並行して行うこととした。

試掘調査の結果、現行建物の基礎はかなり深く、新築敷地（調査地）の北側と西側では遺構の残りはきわめて悪いと推定された。

この知見から、当初残りの悪いと推定される北側・西側について調査し、後に、この部分を廃土置き場として利用して、残りの良い南部・西部の調査を行うこととなった。

発掘調査は株式会社鴻池組が施設部と委託契約し、調査室が指揮をとった。調査は寺島孝一・武藤康弘・成瀬晃司・堀内秀樹が担当した。発掘面積は4,870m^2、調査は平成２年６月27日から３年２月21日までの約８ヶ月であった。

発掘の作業を行う手元としては、三浦工業（株）の方々にお願いした。

なお発掘調査終了後の翌年５月８日～21日にかけて、病院の外構工事に伴う発掘調査を行った。これについては、工期の都合などから、はなはだ不十分な調査しか行えなかったことを記しておきたい。

第２節　調査の方法と経過

（1）調査の方法

調査は、外来診療棟建設範囲及び中央診療棟との連結施設、基幹共同溝との連結部分などの外構工事範囲全域を対象とした。新営建物がほぼ真北に建設されることから、平面直角座標系を基準とした10×10mのグリッドを設定した。グリッドは調査区の北西隅を基準とし（A1）、そこから東へアルファベットを、南へ整数（アラビア数字）を降順で付した。よってグリッド名は10m四方枡の北西コーナーを交点とする英数字を当てている。またA1の座標値は平面直角座標系第Ⅸ系（X＝－32,350、Y＝－5,970）である（Ⅰ-2図）。

（2）調査の経過

調査は、病院管理棟建物などの解体及び整地作業終了を受けて、残存する表土及び残土を重機に

試掘・立ち会い調査を除く

Ⅰ-1図　調査地点（1/8000）

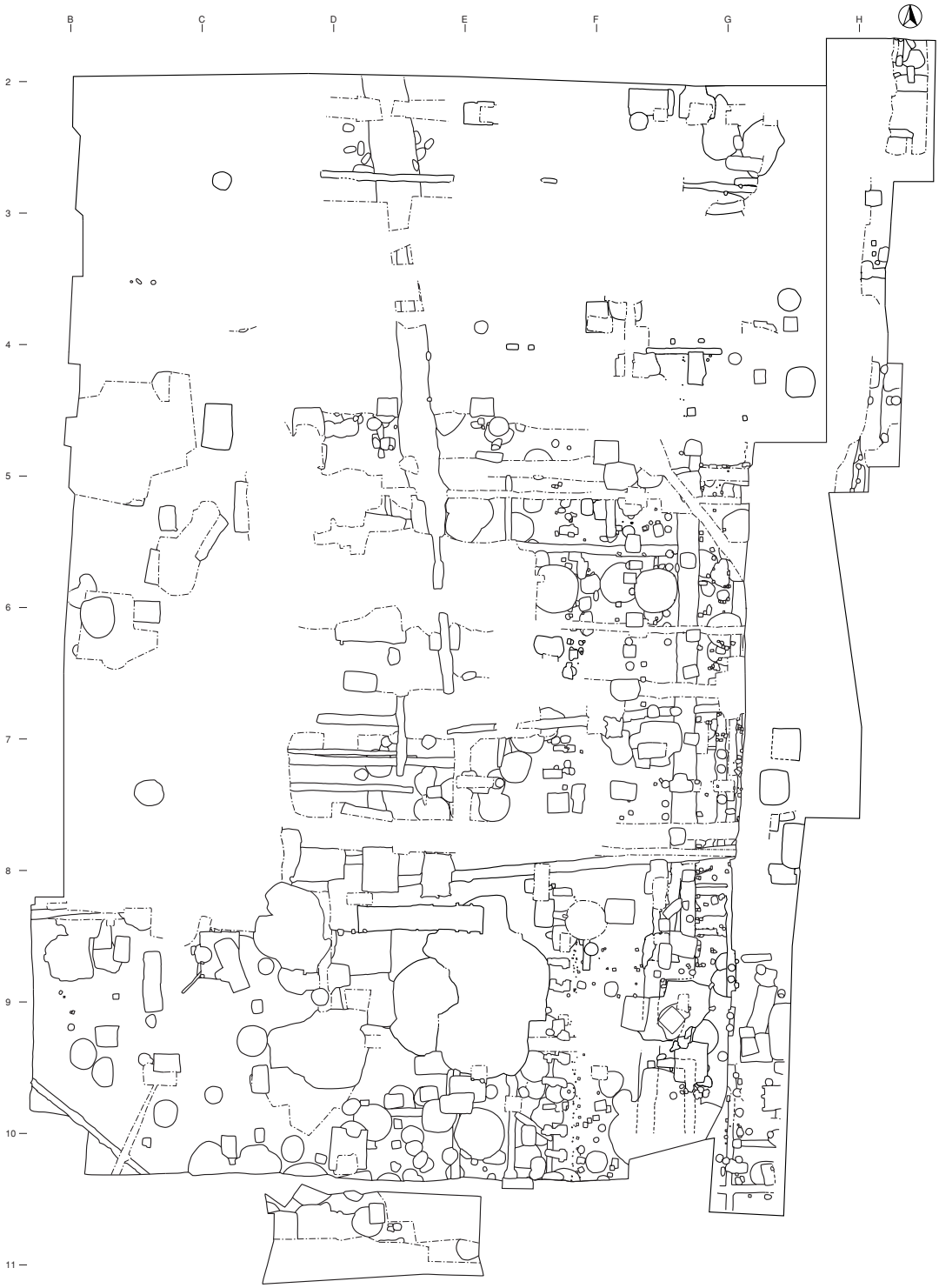
よって掘削した後、人力による遺構確認作業に入った。前節で述べたように旧建物位置はその基礎によって、立川ローム層下部まで撹乱が及んでいた。それ以外の範囲もＧライン付近の一部を除き、立川ローム層上面まで近代以降の削平による撹乱が達していたため、遺構確認は基本的に立川ローム層Ⅲ層上面で行った。また、重機掘削段階で管理棟以前の病院建物煉瓦基礎が残存していることが判明し、その部分は江戸時代の遺構を極力破壊しないように配慮しながら、トレンチ状に基礎を除去した。

調査にあたっては、基本的に各遺構に対し、調査に着手した順に通し番号を付したが、３人の担当者で遺構番号を適宜割り振ったため、番号の大小が遺構の新旧と結びつかない場合もある。また、冠に付したアルファベット記号は報告書作成時に発掘時の所見と異なる見解が生じた場合は随時変更を加えている。

第３節　遺跡の位置と環境

調査地点は東京都文京区本郷７丁目３番１号、東京大学本郷キャンパスの東部分にあたる医学部附属病院南西部に位置している（Ⅰ-1図）。本地点は本郷台地東縁上にあり、現標高は16m前後を測る。本郷キャンパスにおける本郷台地の様相は、理学部７号館地点報告書で鈴木正章によって詳しく分析されているが（鈴木　1989）、病院地区に関しては、明治16年の参謀本部陸軍部測量局作成「五千分一東京図測量原図」から読み取れる不忍池方向の沖積低地に開く幅広く浅い谷地形と、武蔵野ローム中にTPが含まれていないことから、「おそらく沖積低地に埋没する立川段丘面に連続する、台地の化石谷と推測される。」と説明されている。この幅広く浅い谷地形に関して、藤本強は病院地点報告書において「現在はその目で見ないとその痕跡すら確認することの困難な、本郷三丁目と春木町の間あたりを源流にし、東北流し大学の構内に入り、今回調査の給水設備棟地点、設備管理棟地点を通り、中央診療棟地点に至り、そこで向きを変え東流し、不忍池方面に流れていた沢があったことが確認された。この沢は江戸時代の初頭には、既にかなり埋っており、常時水のあるものではなかったものと考えられる。（中略）平安時代ごろにはかなり埋っており、それから江戸時代までの間にさらに埋ったものと考えられる。その後江戸時代にこの上に大規模な盛土がされ、さらに大学の用地になってから大規模な造成がなされ、現在見るような平坦な台地状の地形と沖積地につながる急な崖という地形が作られた。」と、報告している（藤本　1990）。現状でも本地点南側の車道がバス通りから東へ向けて緩やかに下がっていることが確認できる。実際表土掘削を行ったところ、ローム確認面の標高は調査区域南西隅が一番高く、そこから北東方向にごく緩やかに下がっている状況が確認された。これは、「五千分一東京図測量原図」に表記された等高線とほぼ一致する結果となった（Ⅰ-3図）。ローム層がごく緩やかではあるが傾斜していることから、調査地点の東端Ｇライン付近で遺存状況が良好な部分に限って江戸時代の盛土層を確認している。ただし、沖積層は江戸時代における造成作業によって削平され、調査区域内では確認されなかった。また、傾斜変換点からの距離に左右されてか、古墳時代～古代の遺構も存在していない。

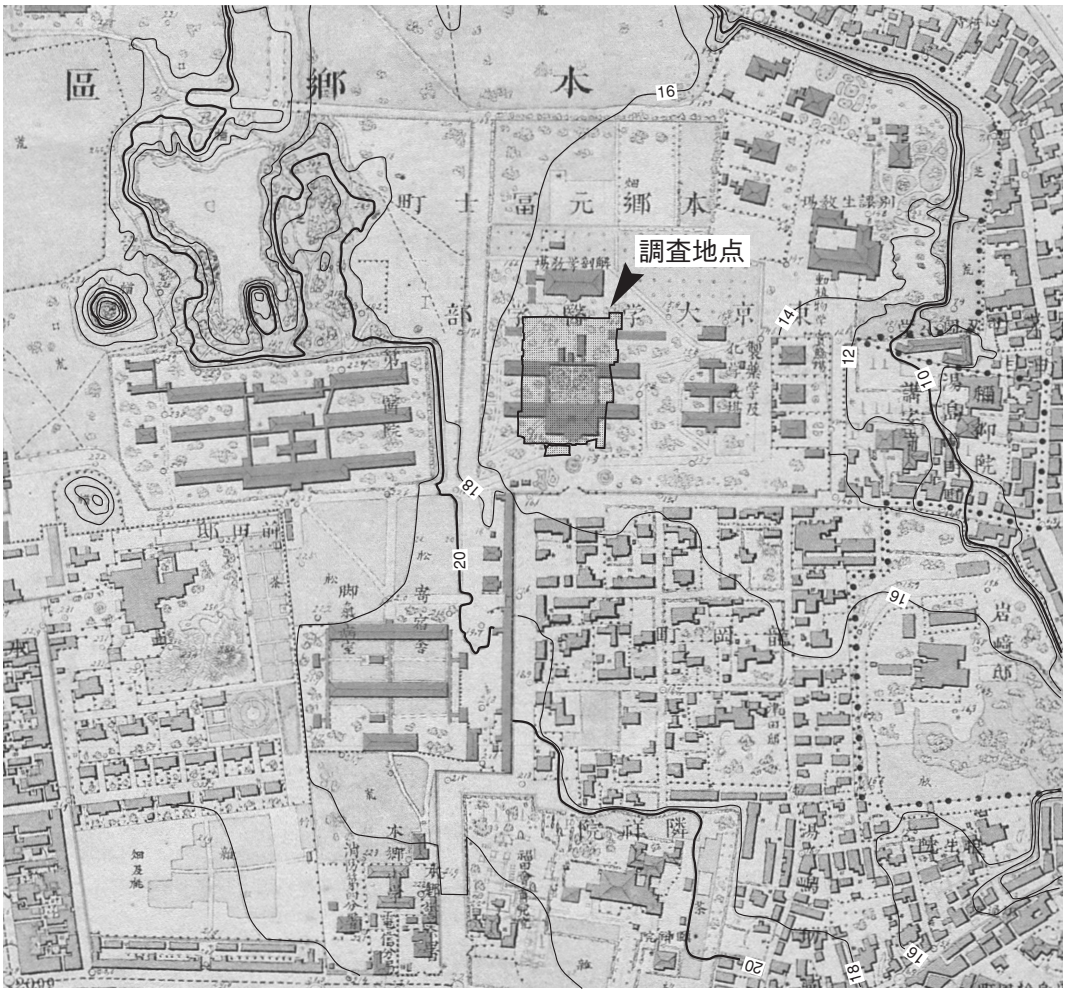
江戸時代の調査地点は、一貫して大名屋敷地であった。始まりは定かでないが、大坂の陣後の元和２・３（1616・17）年まで大久保相模守忠隣邸であったといわれる。そしてその跡地を加賀藩



Ⅰ-2図　遺構全体図

に下屋敷として拝領された。寛永16（1639）年に加賀藩の支藩として誕生した富山藩、大聖寺藩の上屋敷地として藩邸東側が貸し与えられ、ほぼ本地点全域が大聖寺藩邸に含まれることになる。天和２（1682）年の火災による藩邸全焼が一つの契機となり、翌年３月に本郷邸は上屋敷となり、邸内の全面再建がスタートした。そのとき大聖寺藩邸の東側に飛び地として孤立していた「黒多門邸」が大聖寺藩邸中に含まれることとなり、代替えとして大聖寺藩邸西側が加賀藩邸に戻されるなど、三藩邸の地境変更が行われた。天和３年以降の大聖寺藩邸外周石垣の東南角石が現存するたんぽぽ保育園周壁東南角からの距離から、加賀藩邸と大聖寺藩邸の境は本地点Ｆライン西４～5mにあたり、両藩の地境遺構にはSA155が比定される。従って本地点の東約1/3が大聖寺藩邸、西約2/3が加賀藩邸に該当することになる。またごく一部ではあるが、本地点北東隅（２ライン以北）は富山藩邸に該当する。

本地点の加賀藩邸側の変遷は藩邸絵図資料から以下のようになる。最も古い元禄年間の絵図では、



（参謀本部陸軍部測量局　五千分一東京図測量原図より作成）

Ⅰ-3図　調査地点周辺の地形

まだ計画段階のためか区画表示のみで具体的な建物の平面図は描かれていない。山上会館龍岡門別館東側に現存する藩邸外周石垣を基準に絵図面と重ね合わせると、本地点内には絵図に表記された3区画が含まれることがわかる。このうち北側の区画には注釈があり「役所一」と書かれているが、その東南の南北に長い長方形区画の南端には「御作事門」と書かれていることから、「役所一」は御作事所として設定されていることがわかる。1760年代の絵図面では調査区北側（7ライン付近以北）は、「御作事所」となり、所内での建物変遷はあるものの19世紀第一四半期まではその状態が続く。一方、南側は1760年代には番所などの小規模建物と井戸が描かれているが、1770年代の絵図面では建物はなく緑地帯を表す表記となっており「空地」と書かれている。その後1790年代の絵図面で、南北に伸びる2棟の長屋が描かれ、19世紀第一四半期までその状態が継続する。そして、文政12（1829）年に加賀藩は大聖寺藩邸新広式建設のため、邸内東側「御作事所」周辺942坪余を大聖寺藩に対して「貸地」を行った。それにより、本地点の大部分が大聖寺藩邸に組み込まれることになった。絵図面との対比によると、西側はBライン付近が、南側は11ラインがその境界と推定され、本地点の大部分が大聖寺藩邸に含まれることになる。

一方、大聖寺藩邸側は、確認できる藩邸絵図が文化年間と称される「江戸藩邸上屋敷図」のみであり、藩邸変遷の詳細を知ることはできないが、江戸切絵図、加賀藩邸関連絵図を参照にすると、大聖寺藩邸御表門は藩邸の南もしくは東側に面しており、その位置から推測するに本地点は藩邸の奥向きにあたると考えられる。文化年間の絵図面においても本地点は詰人空間にあたり、南北に延びる長屋区域の一角に該当する。また調査の結果、17世紀末から18世紀前半の陶磁器類を伴う2類タイプの地下室（成瀬　1994）の存在からも江戸時代を通し詰人空間として利用されていたことが推測される。その後、文政12年に先述したように新広式建設のために加賀藩より新たに942坪余を貸与され、藩邸西側を拡張した。その後は本地点における大きな変革はなく、明治維新を迎える。

明治4（1871）年、加賀藩は本郷邸の一部（南西隅15,078坪）を私邸として、そのほかは全て新政府に返上し、文部省用地となった。明治9（1876）年に下谷和泉橋の旧津藩藤堂邸にあった東京医学校が、衛生管理上の問題などから台地上静閑地への移転希望が強く、紆余曲折を経て本郷の地（育徳園南西域で現在の医学部地域から病院地区）に移転してきた。そのときの状況は、育徳園、御門塀及び前田邸などに藩邸の旧状を残すのみで、邸内を埋め尽くしていた長屋跡地は荒れ地化していたといわれる。そして本地点を含む病院地区南側に木造2階建て疑似洋風建築の医学校本館が建設された。翌10年には神田錦町の東京開成学校（法・文・理）と統合し、東京大学が誕生した。明治17年に法文学部が移転、明治18年に理学部が移転、そして明治21年に工科大学の合併と移転が行われ、現在の本郷キャンパス（弥生、浅野地区を除く）の基礎が築かれた。

医学校本館は明治37年から始まった内科病室建設の障害となり、明治42年に撤去されたが、明治末年に赤門脇に移設され、史料編纂掛、営繕課（現施設部）として昭和41年まで使用された。

さて、本地点周辺では大正元年に内科病室が増築され、南北に並ぶ6棟の病棟が完成した。表土掘削時に除去した煉瓦基礎はこの内科病室の基礎である。大正12年の関東大震災では本郷キャンパスの約1/3の建物が崩壊・炎上した。そのため、内科病室南側の空き地には医学部及び文学部仮教室、図書閲覧所が設けられた。震災復興後も仮教室建物は、外来診療別室1～3号として引き

続き使用された。昭和７年外来診療棟新営に伴い、６棟あった内科病室は１番南の１棟を残し、取り壊された。残った１棟は内科西病室と呼ばれた。昭和10年には外来診療棟別室が、さらに昭和13年には内科西病室も取り壊され、調査地点全域が空き地となった。その状態は戦後の昭和25年に建設が始まった外来病室新営まで続いた。外来病室は昭和41年に管理棟（病院事務部）に使用変更され、平成２年、本件の新外来診療棟建設に伴い解体され、三度更地になった。

江戸時代から連綿と続いてきたスクラップ　アンド　ビルドの歴史である。

第Ⅱ章　近代の遺構

東京大学医学部（旧東京医学校）本館の礎石

神田和泉町にあった東京医学校の本郷移転は明治７年に決定し、本郷構内に明治９年には完成していた（Ⅱ-1図）。『東京大学本郷キャンパスの百年』（東京大学総合研究資料館　1988）によれば、「医学校校舎は、木造２階建の軽快な建築である。正面入口部にはポーティコが設けられており、屋上には時計塔が載っていた。後に医学部の校舎が赤門付近に集中すると、病院として活用されたが、明治末に赤門脇に移されて史料編纂掛に使われ、さらに昭和44年には理学部附属小石川植物園に移築された」とあり翌年には重要文化財に指定されている。また同書に載せられた明治30年の配置図（挿図３）によれば、この建物は医科大学仮事務室となっている。

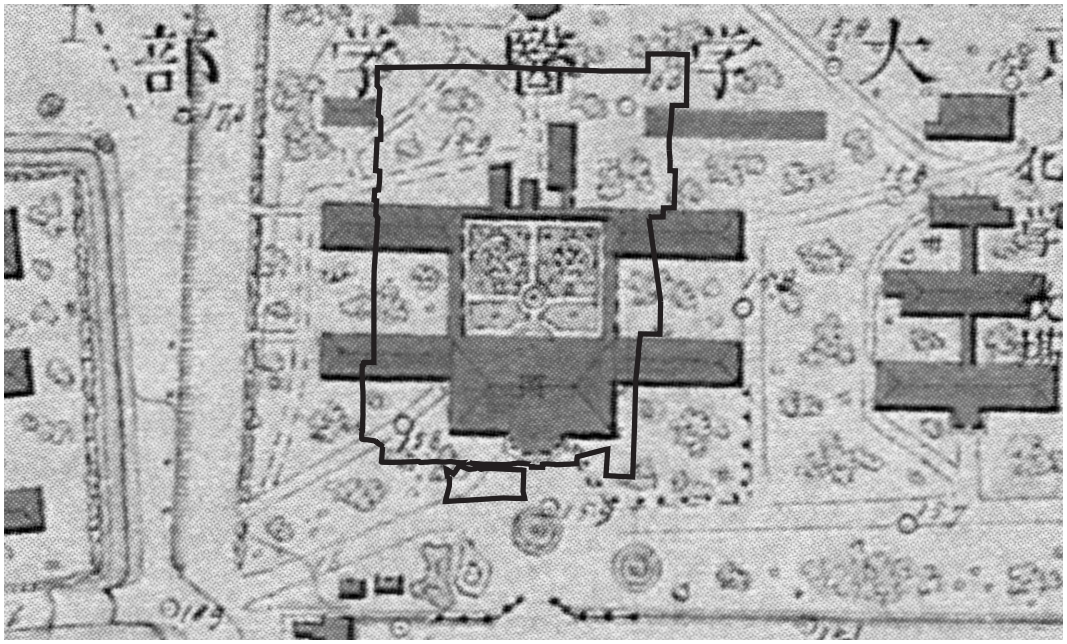
発掘で見つかったのは「ポーティコ」部分を含む建物本体の大部分と、両翼建物のうち、西側の一部である（Ⅱ-2図）。明治末年の赤門脇移転の際には、基礎部分は放置されたらしく、一部残りの悪い部分もあるが、概して用いられていた石材はよく残されていた。基礎の作りかたは、外壁部分は溝状に地山を掘った「布掘り」で、その中に川原石や切石をぎっしりと詰め込んでいた。外壁部分以外は、「ポーティコ」を含め柱の部分のみを掘削し、根石・礎石を置く工法であった（付図３）。

この基礎の工法で興味ぶかいのは、江戸時代に数多く掘られた穴蔵などの跡の処理である。基礎の掘り方の底が、ロームであれば、そのまま石を詰めるが、穴蔵を埋めたような軟弱な基盤の場合、必ずロームが出てくるまで（穴蔵の底まで）掘り下げ、そこに石を詰め込んでいる（Ⅱ-3・４図）。柱がその上に乗るような場合、凝灰岩の柱石（ローソク石）を何段も積み重ね、基礎が沈み込まない工夫をしている。また江戸時代に掘られた穴が大きく、基礎の溝の壁が軟弱となる場合には、規定の巾より溝を広く掘って、全体に石を詰めて強度をましている（付図３のD9付近など）様子も見てとれた。

加賀藩本郷邸に19世紀初めに立てられた「梅の御殿」の基礎を観察すると、二重三重の根石で突き固めた基礎であっても、それが古い穴蔵などの上に築かれた場合、建物の重圧に負けてずいぶんと沈み込んでいる状態が観察されている。それらの経験の蓄積と、明治政府の新しい時代にふさわしいしっかりとした建築を望む姿勢が、２階建ての建物にしては過剰ともいえる強固な基礎を築かせたのかもしれない。

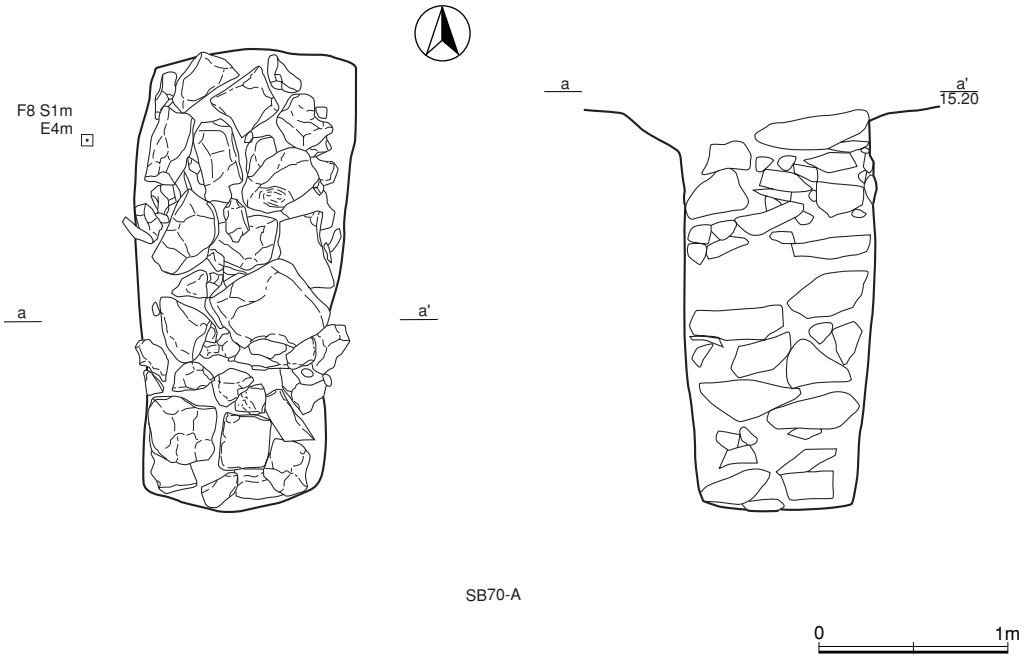
（「東京大学の百年　1877-1977」より）

Ⅱ-1図　医学部（東京医学校）本館（明治12年頃）

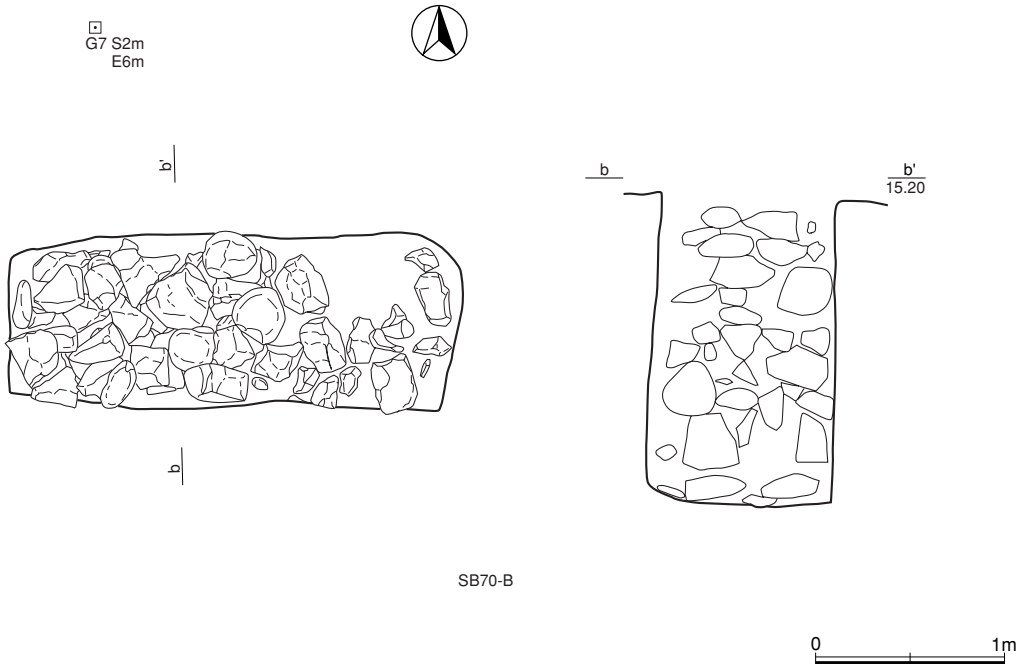


（参謀本部陸軍部測量局　五千分一東京図測量局原図）

Ⅱ-2図　本館と調査地点の位置（1/1600）



Ⅱ-3図　SB70-A



Ⅱ-4図　SB70-B

第Ⅲ章　江戸時代の遺構

第１節　調査地点の概要

第Ⅰ章第１節でも触れたように調査区の北及び西側は附属病院旧管理棟の基礎などがローム深く及んでいたため遺存状況は極めて悪く、地下室、井戸などの掘削深度が深い遺構がわずかに遺存するのみであった。その結果、検出遺構は見かけ上調査区域の東南に偏在する形になった。

本調査地点から出土した遺構には、小ピット、不定形遺構の一部を除いて原則として通し番号による遺構名を付し、形態的特徴から推定される遺構の性格に基づいた英記号を冠詞として付している。検出遺構は番号を持つ遺構で393遺構を数える。その内訳は建物跡９基、地下室（半地下室を含む）63基、溝37基、井戸10基、厠の下穴16基、土坑189基、ピット59基、性格不明遺構６基である。なお、これらの遺構には本文中でも触れられているように、第Ⅱ章の旧東京医学校本館建物に帰属するものも一部含まれている。

さて、検出遺構の概要を示す上で、本調査地点の江戸時代における様相について若干触れておきたい。既刊行の本郷構内関連の各報告書でも触れられているが、元和２・３（1616・1617）年に加賀藩は本郷邸を下屋敷として拝領し、本調査地点もその一部に含まれる。その後寛永16（1639）年には富山藩、大聖寺藩上屋敷地として藩邸東部一画を両藩に貸し与えた。残された絵図面との対比から加賀藩邸との境は調査地点Ｂライン付近にあたるため、調査地点の大部分が大聖寺藩邸に位置する。その後、天和２（1682）年の火災による藩邸全焼を契機に地境が変更された。絵図面との対比から、本調査地点内に加賀藩邸と大聖寺藩邸の地境が存在することが予想されたが、遺構年代と絵図面に記された屋敷外郭寸法の復元から、Ｅ－Ｆライン間を南北に延びるSA155が両藩邸の地境に該当することが判明した。その後しばらく変更がなかったが、文政12（1829）年に大聖寺藩上屋敷新広式建設のために加賀藩邸内「御作事所」周辺942坪余が大聖寺藩へ貸地されることになった。これによって大聖寺藩邸は西側へ拡幅し、加賀藩邸との地境はＢ－Ｃライン間付近に移動、調査地点の大部分は再び大聖寺藩邸に含まれることになる。

このように本調査地点は元和２・３年～寛永15年までの加賀藩邸期、寛永16年～天和２年までの第１次大聖寺藩邸期、天和３年～文政11年までの加賀藩邸・大聖寺藩邸期、文政12年以降の第２次大聖寺藩邸期の大きく４期の段階を設定することができる。特に加賀藩邸・大聖寺藩邸並行期において、SA155を挟んで東の大聖寺藩邸側では詰人空間タイプの地下室（成瀬　1994）と、それに付随するように厠遺構が整然と並ぶ様相がしばらく継続するのに対し、西の加賀藩邸側では御殿空間タイプの地下室が存在する段階と、採土坑及びその再利用としての廃棄遺構が存在する段階などが認められ、東西の様相がそれぞれの藩邸内機能を表出しているなど、区画を挟んだ土地利用の様相差が明確に認められたことは本地点の成果の一つに揚げられる。

※「火災」欄の（天）は天和２（1682）年、（元）は元禄16（1703）年、（享）は享保15（1730）年もしくは元文３（1738）年、（明）は明治元（1868）年を指す。

遺構名	遺構図版（Ⅲ－@）	遺物図版（Ⅳ－@）							動物遺体	年代	火災	備考
		陶磁器	人形	瓦	金属	石	木	骨・ガラス				
SU1	1	1	103，105		109，117，119			131	鳥	19c前		
SU2	2	1，2	103		109，114，117，120	128				17c末	○（元）	
SU3	3									？		
SK4	4	2			109							
SK5	4				109					17c後～18c前		
SK6	23											
SK7	121				109，117					17c末～18c前		
SK8	121											
SP9	附図1											
SE10	5		103							17c後		
SU11	6	2～4	103，105		109，110	126				19c前		
SE12	7									19c～近代		
SK13	7	5								17c末	○（元）	
SD14	22，120，附図1				110，120					?		
SD15	120									?		
SD16	120											
SP17	120									?		
SK18	8，9	5～8	103	107，108	114	126，127				Ⅴa期		
SK19	7											
SU20	10	9，10	103		110					Ⅴa期		
SK21	附図1	11			119			131		19c前～中		
SK22	11	11			119	128				18c後～19c初		
SK23	12	12								18c後		
SU24	13	12			110			131		18c後		
SK25	14	12								18c後		
SK26	15	12								17c後	○（天）	
SK27	16				120					17c		
SU28	17				110					17c後～18c		
SU29	18	12，13			114			131		17c後～18c初		
SD30	121									?		
SK31	19		103							18c前	○（享）	
SP32	121											
SP33	附図1											
SU34	5	13，14			110					18c前	○（享）	
SP35	附図1											
SK36	120	14，15								17c後		
SK37	120											
SU38	20，21	15								17c中		
SE41	附図1	15								19c		
SK42	附図1									19c		
SK43	14											
SK44	附図1											
SD45	22～26	15，16		107	114					17c前		
SK46	121											
SU47	27									18c前		
SK48	27	16			110					18c前		
SU49	28	17	105		114					18c前	○（享）	
SK50	29	17，18	105		110					19c前～中		
SK51	30	18		106	110，120					19c前～中	○（明）	
SU52	31			107	117，120							
SD53	32，33				120					19c前～中		
SD54	54，92，138，140											

Ⅲ-1表　検出遺構一覧表（1）

遺構名	遺構図版（Ⅲ－@）	遺物図版（Ⅳ－@）							動物遺体	年代	火災	備考
		陶磁器	人形	瓦	金属	石	木	骨・ガラス				
SK55	34									17c前～中		
SK56	35	18			114					17c後		
SK57	34											
SU58	37，38	18			110，120					18c前～中	○（享？）	
SK59	35											
SK60	36	19	105		120	105				17c末～18c後		
SU61	39，40	19	105		119，120	105，128				18c前		
SD62	41～44	19，20	105		110			131	哺	19c前～中		
SU63	45	21，22			110，114，117，119，120					18c前	○（享）	
SU64	46	22，23			110，114	128				18c前		
SU65	47				111					18c前		
SK66	126											
SK67	130											
SK68	130											
SK69	130				111					18c前と19c		
SB70	2-1，2-2，附図3				114，117	126，128				明治9年		
SL71	49～51，137											
SK72	128									19c		
SK73	131									?		
SK74	128									19c		
SU75	48	23，24			111，114，117，119					18c前		
SU76	124	24								17c末	○（元）	
SK77	124	24								19c前		
SL78	131				117							
SL79	137				117							
SL80	136	24	103		111，117	127				19c		
SK81	52，53	24～32	103，105	107	111，114，117，119	127		131	貝・魚・哺	Ⅷb期		
SP82	32											
SK83	32									18c?		
SK84	32									?		
SK85	32									18c後		
SP86	34											
SP87	34											
SP88	34									?		
SP89	34											
SK90	54									17c後～18c前		
SD92	125～127											
SD93	126											
SK94	123											
SK95	125											
SK96	25									17c		
SD97	125											
SK98	55	32，33	105							19c		
SK99	56	34	105		119					19c		
SE100	57	34，35			120					17c後	○（天）	
SK101	141				117，119	129，130				17c後	○（天）	
SK102	58	36								17c末	○（元）	
SK103	59									17c後～18c		
SK104	59	36								18c		
SE105	60	36，37			111，114，120					18c前	○（享）	

Ⅲ-1表　検出遺構一覧表（2）

遺構名	遺構図版（Ⅲ－@）	遺物図版（Ⅳ－@）							動物遺体	年代	火災	備考
		陶磁器	人形	瓦	金属	石	木	骨・ガラス				
SK111	141											
SK112	138									18c		
SK113	138									18c?		
SP114	141									?		
SU115	61	38	103							18前～中		
SK116	62					128				19c		
SU117	63				114					18c前		
SB118	49，50											
SA120	124，128，131，136，137，140，142		105							19c		
SD121	131，136，137									18c末～19c		
SA123	131，136											
SB124	131，136											
SK125	129									?		
SK126	64									17c前		
SE127	90				120，CD-ROM			131		19c～明治		
SP128	34											
SP129	34											
SK130	52，53									18c～19c前		
SK131	65	38								18c後～19初		
SK132	65											
SK133	64	39			115					18c後		
SK134	54	39			111，115					17c後～18c前		
SK135	52											
SK136	65											
SK137	66	39～44	103～105	107	111，115，117，120	128		131	貝・魚・鳥・哺	Ⅴb期		
SU138	67，68									18c末～19c		
SK139	69	45～49	105		111，112，115，117，119，121	105，126，127，128				Ⅳb期	○（元）	
SK141	70，72	50，51			112					Ⅴa期	○（享）	
SU142	71，72											
SU143	70，72	51		107	112	126				18c前～中		
SK144	73	52			112，117，121			131	魚・鳥	18c前		
SE145	74									19c前		
SU146	75	52，53				128				18c前		
SK147	76，77	54								19c前		
SK148	76，77									17c後		
SU150	76，77	54			112，118，121					18c前		
SU151	78	55								18c前		
SK152	79	55～60，100	104		115，118	126，127			貝・爬・哺	Ⅵa期		
SP153	138											
SP154	138											
SA155	80～84，126，129，134									17c後～18c前		
SK156	129	60								18c後		
SK157	132				115							
SK158	26	60								17c後		
SK159	85	60								17c後		
SK160	86	61			112					17c末	○（元）	

Ⅲ-1表　検出遺構一覧表（3）

遺構名	遺構図版（Ⅲ－@）	遺物図版（Ⅳ－@）							動物遺体	年代	火災	備考
		陶磁器	人形	瓦	金属	石	木	骨・ガラス				
SD161	25											
SK162	25											
SU163	75	61								18c前～中		
SK164	128	62								19c前		
SK165	附図1，附図2	62								18c後		
SK166	87	62，63	104，105		118	126		131	魚・鳥・哺	Ⅷc期		
SK167	145				112			131		17c～近代		
SK168	88		104							18c後		
SD169	145～147	63								17c後～19c		
SK170	147									17c後		
SK171	89	63								17c後		
SK173	89											
SK174	90	64～66	104		112，116	128	122～125			Ⅵa期		
SK175	91	67				128				18c後		
SK176	92	67			112，113，116，118					17c末		遺物はSD239と不分離
SK177	145											
SK178	146											
SK179	144											
SD180	144，145									19c?		
SK181	141											
SK182	152									19c前		
SK183	141											
SK184	138									17c後	○（天）	
SU185	93	68								19c前		
SK186	98	68			116					近代		
SB187	141											
SP188	139											
SP189	139											
SP190	139											
SD191	133											
SD192	133											
SP193	85											
SK194	133											
SD195	133											
SD196	133									?		
SD197	133				116							
SK198	94	68								18c前		
SK199	133											
SX200	95											
SP201	141											
SP202	141											
SP203	141											
SP204	141											
SP205	141											
SP206	141											
SP207	141											
SP209	141											
SP210	141											
SU211	39，40	68								18c後		

Ⅲ-1表　検出遺構一覧表（4）

遺構名	遺構図版（Ⅲ－@）	遺物図版（Ⅳ－@）							動物遺体	年代	火災	備考
		陶磁器	人形	瓦	金属	石	木	骨・ガラス				
SD212	139									19c前		
SE213	96									19c前		
SU214	97	69								17c末	○（元）	
SK215	137									?		
SD216	136，137									17c後～19c前		
SP217	138									17c後	○（天）	
SK218	138											
SK219	139									18c		
SK220	98	69	105		113，116，118					19c前		
SD221	140									18c		
SP222	140											
SL223	152											
SL224	152											
SK225	139	69								19c～近代		
SD226	142	70								19c前		
SP227	140	70								19c前		
SB228	99											
SU230	100	70～74			113，116	128				18c前		
SP231	144									18c?		
SK232	147											
SP233	147											
SP234	147											
SK236	147											
SK237	147											
SK238	92									?		
SD239	92	67										遺物はSK176と不分離
SK240	147											
SK241	143											
SK242	143									18c?		
SK243	143											
SK244	145											
SK245	145											
SK246	145											
SK247	145											
SP248	145											
SK249	144									18c		
SK250	144											
SK251	125									18c前		
SK252	129											
SD253	132，134～136											
SK254	134											
SK255	134											
SU256	101											
SK257	24											
SK258	122											
SD259	86，122											
SK260	122				118							
SK261	145											
SU262	102				113					17c末～18c初		
SK263	143											
SK264	103，104	74								19c		
SK265	103，104	75～77			113，116	127		131		18c末～19c初		遺物はSK304と不分離

Ⅲ-1表　検出遺構一覧表（5）

遺構名	遺構図版（Ⅲ－@）	遺物図版（Ⅳ－@）							動物遺体	年代	火災	備考
		陶磁器	人形	瓦	金属	石	木	骨・ガラス				
SK266	103，104									18c前		
SK268	144											
SK269	105	77								18c後～19c前		
SE271	106	78，79，102			113，119，121					Ⅷb期		
SP273	153											
SP274	153											
SK275	150											
SP276	153											
SP277	153											
SP278	152											
SU279	107	79～82	104		113，116，121	127				Ⅴa期	○（享）	
SU280	150，151	82								18c中～後		
SL281	136									18c?		
SK282	124	82			116					19c～明治		
SU283	108	82								17c末	○（元）	
SU284	109	83								17c末	○（元）	
SU285	110	83，102								17c末	○（元）	
SU286	111	83								17c末	○（元）	
SK288	134											
SK289	126											
SK290	79	84～89，100，101	104		116，118，121	127		131	貝・魚・爬・鳥・哺	Ⅴb期		
SU291	107	89，90	104							17c末～18c前		
SK292	153											
SP293	152											
SP294	152											
SP295	152											
SP296	152											
SP297	153											
SP298	152									19c?		
SK299	142									18c?		
SU300	112	90								17c中～18c前		
SK301	113									17c後～18c		遺物はSK302と不分離
SK302	113									17c後～18c		遺物はSK301と不分離
SK303	69											
SK304	103，104	75～77				127				18c末～19c初		遺物はSK265と不分離
SK306	113	90			116					17c末～18c初		
SK307	103											
SD308	148，150											
SK309	150											
SK311	113											
SK312	146											
SU313	114	90，91	104，105		116，118，119，121	105				17c末	○（元）	
SE314	67									?		
SK315	146											
SK318	103											
SD319	103											
SK320	115	92								18c		
SB321	152											
SK322	79				118					?		

Ⅲ-1表　検出遺構一覧表（6）

遺構名	遺構図版（Ⅲ－@）	遺物図版（Ⅳ－@）							動物遺体	年代	火災	備考
		陶磁器	人形	瓦	金属	石	木	骨・ガラス				
SU323	116									18c後～19c		
SE324	117	92			118	128				18c前と19c前		
SB325	154											
SP326	154											
SX327	154											
SP328	154											
SP329	154											
SL330	118											
SX331	148											
SK332	148，149											
SK333	148，149											
SK334	148，149											
SK335	148，149											
SK336	148，149											
SK337	153											
SK339	154									18c		
SX340	150，151											
SK341	137	93								18c末～19c前		
SK342	附図1，附図2									18c		
SD343	150，151											
SD344	150，151											
SU345	119											
SL346	142											
SL347	142				118					19c前		
SD348	140，142											
SK349	142											
SX350	150，151											
SL351	118											
SL352	118									19c		
SK353	154											
SK354	154											
SP355	154											
SL356	118									17c末	○（元）	
SK357	154											
SP358	154											
SX359	154											
SP360	154											
SK361	155	93				127			魚・鳥・哺	17c中～後		
SK362	155									17c?		
SK363	155											
SK364	155	93								18c前		
SP365	155									18c?		
SD366	155									?		
SP367	155											
SU368	156	93			116，118					17c末	○（元）	
SU370	157	93	104							17c末		
SP371	157											
SP372	157											
SP373	157											
SD374	157											
SK376	155											
SK377	155											
SD378	158，159											

Ⅲ-1表　検出遺構一覧表（7）

遺構名	遺構図版（Ⅲ－@）	遺物図版（Ⅳ－@）							動物遺体	年代	火災	備考
		陶磁器	人形	瓦	金属	石	木	骨・ガラス				
SL379	158											
SK380	159	94								19c		
SK381	159	101	104		116					19c		
SU382	160	95								18c前	○（享）	遺物はSU383と不分離
SU383	160	95								18c前	○（享）	遺物はSU382と不分離
SK384	166											
SP385	166											
SK386	166											
SU387	165，166	95								18c末～19c初		
SK388	165	96								19c前		
SK389	165									19c前		
SK390	165											
SK391	165											
SK392	165	96			116，118，119	127		131		Ⅷc期		
SK393	165	96										
SK394	162	97			118					19c前～中		
SK395	162											
SK396	162											
SK397	162	97			116					19c前		
SP398	162											
SU399	162，163	97	105		118					19c前		
SK400	163											
SK401	163											
SK402	163	98								18c末～19c初		
SK403	163											
SP404	163											
SB405	163											
SK406	163	98								19c前～中		
SP407	163											
SL408	163											
SD409	163											
SD410	164											
SK411	164	98								19c前		
SL412	163											
SK413	164	98										
SB414	164											
SK415	164	98								19c中		
SL416	164											
SP417	164											
SD418	164											
SU419	161	98				127				18c末～19c前		
SU420	161	98								18c前		
遺構外		99			113，118							

Ⅲ-1表　検出遺構一覧表（8）

第２節　検出された遺構

SU1（Ⅲ-1図）

G4グリッドに位置する方形の地下室である。入口が崩落している以外は遺存状態は比較的良好である。規模は東西240cm、南北270cm、深さ180cmを計測する。東壁中央には奥行50cm程度の張り出しが間口約120cmにわたり設けられている。壁及び坑底は凹凸はあるものの平滑に整形されている。覆土は6層に分層される。3～6層上の黄褐色土層（2層）は、天井あるいは壁の崩落土であると推定される。その上層からは、遺物を多く含む層が確認されており、本遺構の廃棄時とは年代的ラグを有する可能性もある。

遺物は陶磁器、桟瓦、多量の釘などが出土している。陶磁器は19世紀前半の製品で構成されている。

SU2（Ⅲ-2図）

G4グリッドに位置する地下室である。遺存状態は良好である。入口は長方形を呈し、規模は南北110cm、東西90cmを計測する。坑底は隅丸方形を呈し、規模は東西140cm、南北170cm、確認面からの深さは220cmを計測する。室部は入口から北、東、南側に張り出して設けられているが、室部天井、壁や坑底の隅などの調整はラフである。覆土は調査途中で土層観察面の剥落により断面図作成が行えなかったが、多量の焼土が充填されていた。火災の一括廃棄が想定できる。

遺物は陶磁器、焼本瓦、多量の釘などが出土しており、二次的な火熱を受けたものが多い。陶磁器の様相から元禄16（1703）年の火災であろうと推定される。

SU3（Ⅲ-3図）

G3グリッドに位置する地下室である。南側の多くを撹乱によって削平され全体を復元できないが、遺存部の形状から方形あるいは長方形を呈していたと推定される。遺存している規模は、東西150cm、削平を受けている南北が100cm、確認面からの深さは160cmを計測する。室部は現状で入口から北、東方に広がりを見せている。壁は所々平状の工具痕が認められるものの比較的平滑に調整されている。覆土は西より東に傾斜を有しており、下層に暗褐色土、上層にローム土を主体とした土で構成されていた。

遺物は18世紀初頭の本瓦と陶磁器片数点が全体的に散漫に認められた。

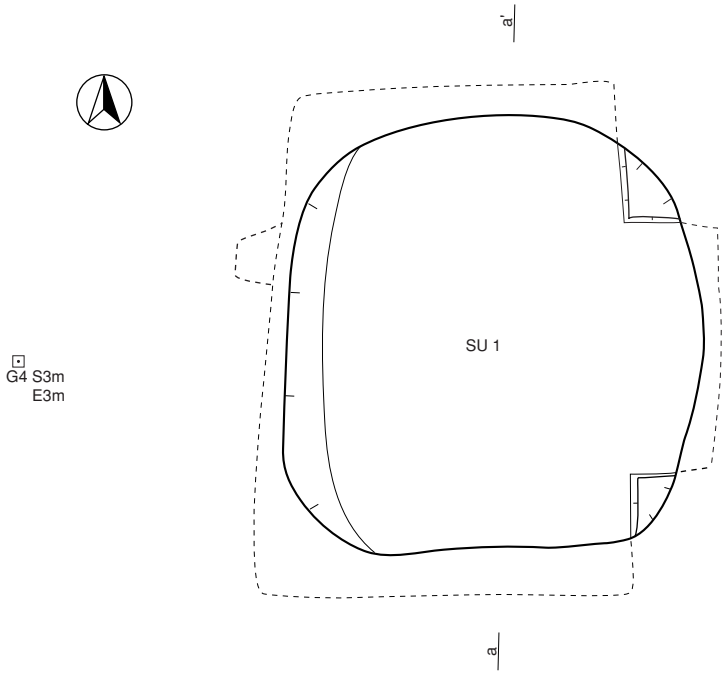
SK4（Ⅲ-4図）

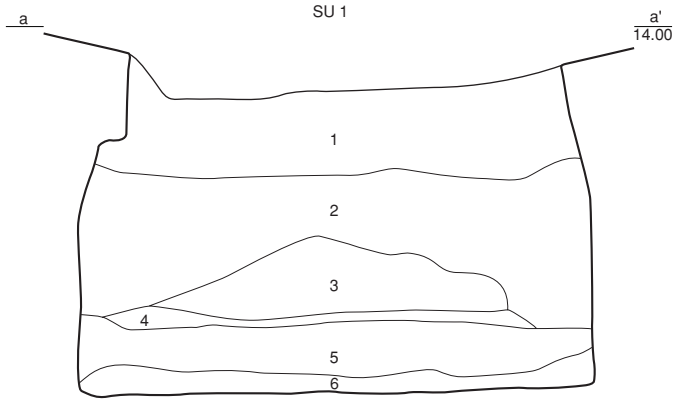
E3、F3グリッドにまたがって位置する土坑である。南側の一部は撹乱によって削平されている。平面形は長方形を呈し、規模は東西120cm、南北230cm、確認面からの深さは80cmを測る。壁及び坑底は凹凸はあるものの平滑に整形されている。

遺物は18～19世紀前半の陶磁器、桟瓦、金属製品が微量出土している。

SK5（Ⅲ-4図）

F3グリッドに位置する土坑である。遺構の北半及び中央を撹乱によって削平されている。遺存部の規模は東西250cm、南北140cm、確認面からの深さは70cmを測る。南壁に沿ってピットがほぼ半間間隔で3基検出されている。坑底、壁は凹凸が激しく、工具痕が顕著に認められる。覆



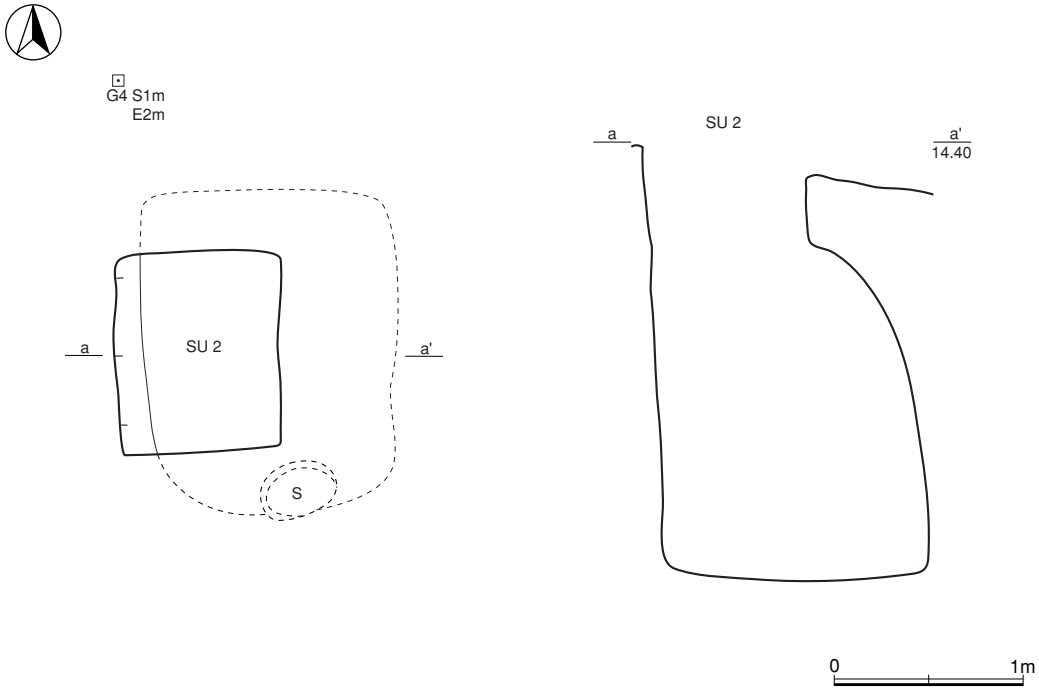


SU 1

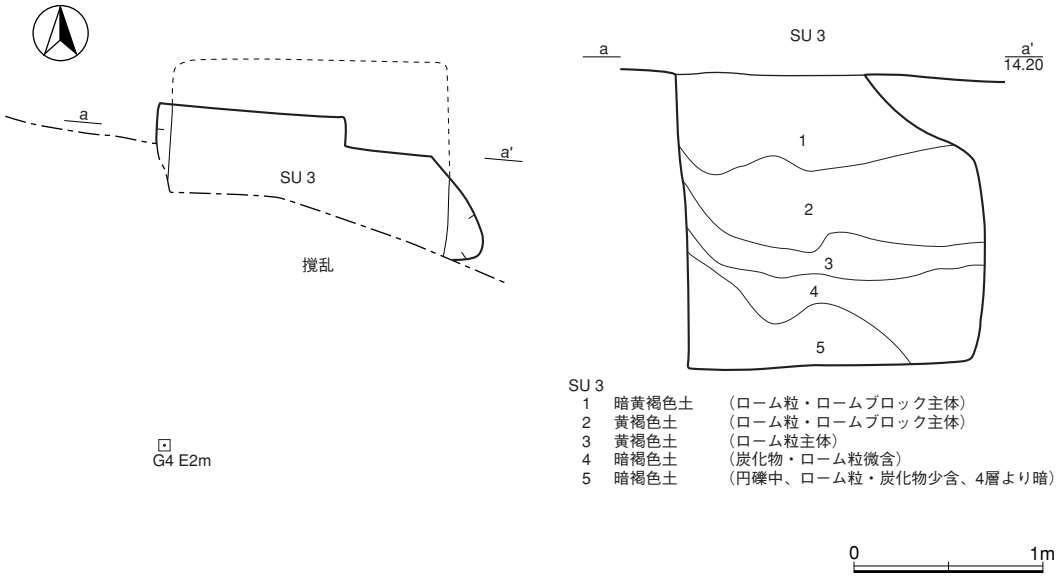
1	黒褐色土	（ローム粒・炭化物・黄褐色砂粒少含、遺物多含、粘性強）
2	黄褐色土	（炭化物・黒色土粒微含、ローム主体、粘性弱）
3	暗褐色土	（ローム粒・ロームブロック中、炭化物微含）
4	黄褐色土	（ローム主体、粘性弱）
5	暗褐色土	（ローム粒・ロームブロック少含、粘性強）
6	暗褐色土	（ローム粒多含、5層より明、粘性強）

0　1m

Ⅲ-1図　SU1

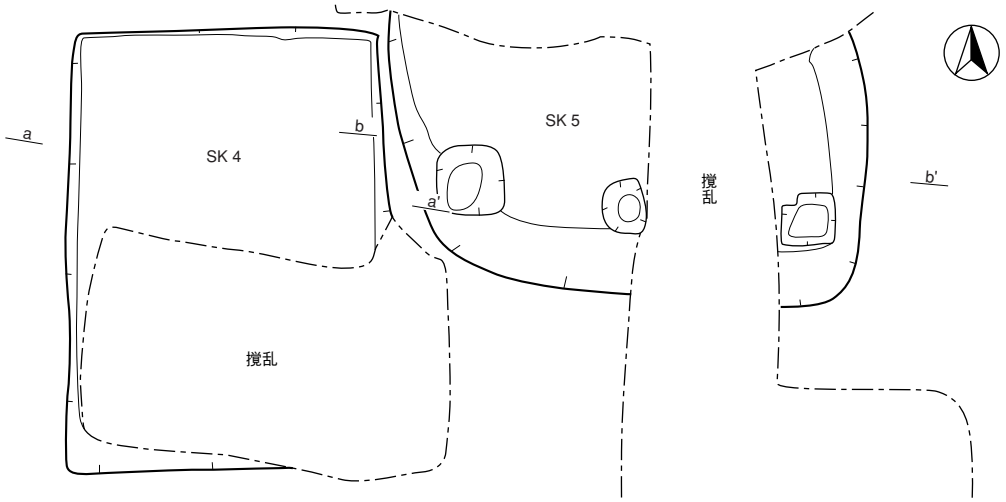


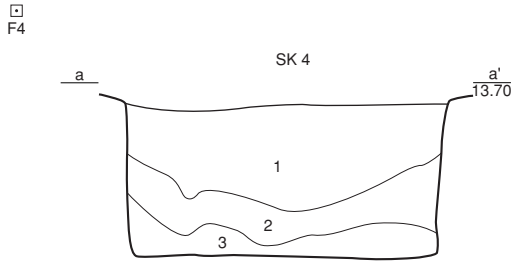
Ⅲ-2図　SU2



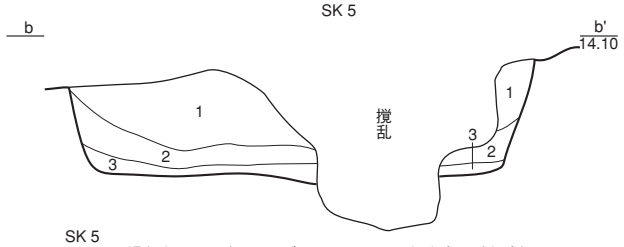
SU 3
1　暗黄褐色土　（ローム粒・ロームブロック主体）
2　黄褐色土　（ローム粒・ロームブロック主体）
3　黄褐色土　（ローム粒主体）
4　暗褐色土　（炭化物・ローム粒微含）
5　暗褐色土　（円礫中、ローム粒・炭化物少含、4層より暗）

Ⅲ-3図　SU3

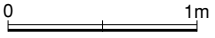




SK 4
1　暗褐色土　（ロームブロック・ローム粒中、円礫・黒色土粒少含）
2　暗褐色土　（ローム粒多、ロームブロック・炭化物粒少含）
3　暗褐色土　（ローム粒・砂粒・黒色土粒多、円礫少含、粘性強）



SK 5
1　黒褐色土　（ロームブロック・ローム粒少含、砂粒含）
2　黒褐色土　（ロームブロック・ローム粒中含）
3　黒褐色土　（ロームブロック・ローム粒多含、しまり強）



Ⅲ-4図　SK4・SK5

土はいずれも中央に向かって傾斜を有して堆積していた。

遺物は17世紀後半～18世紀前半の陶磁器十数点、瓦片が数点出土した。

SK6（Ⅲ-23図）

E3グリッドに位置する浅い円形の土坑である。規模は径100cm、深さは確認面より30cmを計測する。坑底はやや中央にくぼみを持つが、平滑に調整されている。壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がる。覆土は単層で黒褐色土である。

遺物は出土していない。

SK7（Ⅲ-121図）

F4グリッドに位置する長方形の土坑である。北端でSD30と重複しており、新旧関係は本遺構が新である。開口部は坑底よりオーバーハングしており、開口部の規模は東西110cm、南北240cm、坑底の規模は東西130cm、南北250cm、確認面からの深さは70cmを計測する。壁及び坑底は平滑に調整されている。

遺物は上層を中心に17世紀末～18世紀前半の二次的な火熱を受けた陶磁器・瓦が20数点出土している。

SK8（Ⅲ-121図）

F4グリッドに位置する方形の小土坑である。規模は一辺60cm、深さは15cm程度である。坑底は平滑に調整されており、壁はそこから垂直に立ち上がる。覆土はローム粒子を多く含む黒褐色土を呈していた。

遺物は出土していない。

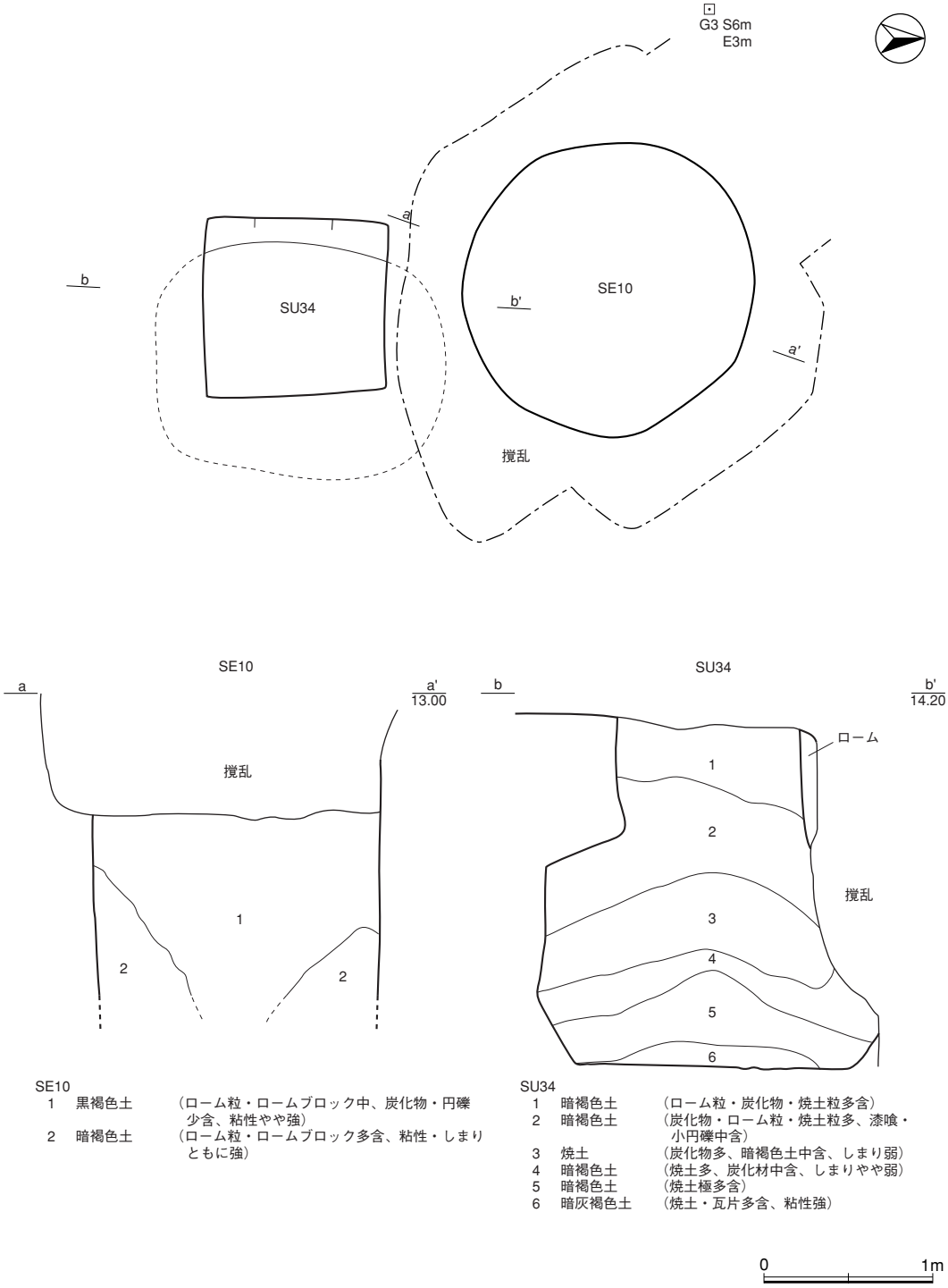
SE10（Ⅲ-5図）

G3グリッドに位置する井戸である。上部を撹乱によって削平されている。崩落の危険のため、確認面から深さ180cmまでしか行っていない。規模は井戸としては大形で、径170cmを測り、壁は平滑に調整されており、垂直に落ちている。

遺物は17世紀後半の陶磁器と瓦片が数点出土しているのみである。

SU11（Ⅲ-6図）

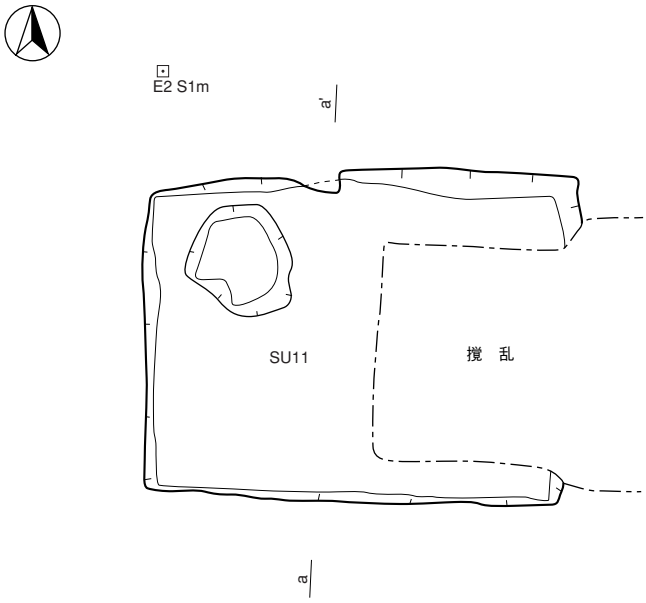
D2、D3グリッドに位置する地下室で、東側約1/3が撹乱によって破壊され残存していない。平面形は長方形を呈し、東西230cm、南北180cmを測る。ほぼ東西方向に主軸を有する。北壁上部にわずかながら、天井の痕跡が観察され、その状態から、遺構東半部に天井を有し、西側に縦坑が存在したものと考えられる。壁面、坑底ともに丁寧な整形が施され、平滑に仕上がっている。坑底北東部には、直径約60cmを測る不整円形の浅い掘り込みが存在する。掘り込み全体に顕著な工具痕が認められる。このような浅い落ち込みは地下室の坑底からしばしば検出され、水抜き穴などの用途が推定されている。覆土は南から北方向へ緩やかな傾斜を呈している。最下層の8層はローム粒を多量に含み天井崩落土の堆積と考えられる。その後は灰褐色土（2、5、7層）と暗褐色土（1、3、4、6層）が交互に堆積し、覆土を形成している。灰褐色土層からは、食物残滓を含む遺物が多量に出土しており、覆土の堆積状況も合わせ、遺構廃絶後（天井崩落後）に、廃棄遺構として再利用され、少なくとも3回の廃棄が行われ、廃棄後にはその上に暗褐色土を盛り、廃棄物をパックしていたことが想定される。

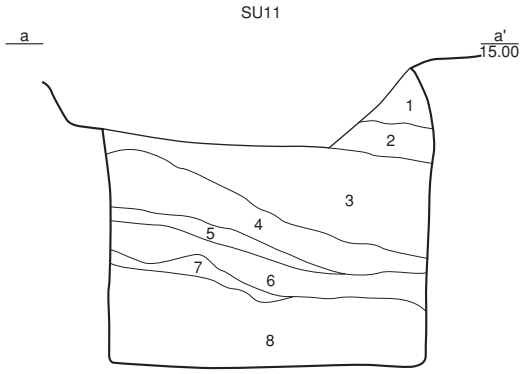


SE10
1　黒褐色土　（ローム粒・ロームブロック中、炭化物・円礫少含、粘性やや強）
2　暗褐色土　（ローム粒・ロームブロック多含、粘性・しまりともに強）

SU34
1　暗褐色土　（ローム粒・炭化物・焼土粒多含）
2　暗褐色土　（炭化物・ローム粒・焼土粒多、漆喰・小円礫中含）
3　焼土　（炭化物多、暗褐色土中含、しまり弱）
4　暗褐色土　（焼土多、炭化材中含、しまりやや弱）
5　暗褐色土　（焼土極多含）
6　暗灰褐色土　（焼土・瓦片多含、粘性強）

Ⅲ-5図　SE10・SU34





SU11

1	暗褐色土	（ローム粒多含、しまり強）
2	暗灰褐色土	（ローム粒含、しまり強）
3	暗褐色土	（ローム粒多含、しまり強）
4	暗褐色土	（炭化材・砂利・貝殻含）
5	暗灰褐色土	（炭化材多含）
6	暗褐色土	（ローム粒・炭化材含）
7	灰白色土	（炭化物含、粘性強）
8	暗褐色土	（ローム粒多含）

0　1m

Ⅲ-6図　SU11

遺物は19世紀前半の陶磁器・土器がコンテナ５箱出土したほか、桟瓦、釘などが出土している。

SE12（Ⅲ-7図）

F2グリッドに位置する井戸で、重複するSK13より新しい。平面形は直径約140cmを測る円形を呈している。覆土中より煉瓦片が検出されており、近代以降の東京帝国大学に帰属する遺構と考えられる。

遺物は近代を含む19世紀の陶磁器、土器がコンテナ７箱出土している。

SK13（Ⅲ-7図）

F2グリッドに位置する土坑で、南壁の一部がSE12と撹乱によって破壊されている。また東側ではSK19と重複し、それより新しい。平面形は、東西300cm、南北200cmを測る長方形を呈し、確認面からの深さは100cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、北壁から東西各壁の途中にかけて、床面上5cmに幅約10cmを測る帯状のテラスを有する。このテラスは室部から壁方向に緩やかに傾斜し、さらに西壁の一部では室部側に凸帯を有し、溝状を呈している部分も存在する。本遺構に伴う何らかの施設と考えられるが、その用途は不明である。覆土はロームブロック主体層（2、４層）と、焼土層（1、３層）で交互に埋め戻されている。焼土層からは、瓦片を中心に多量の遺物が出土している。覆土の様相と出土遺物の年代観より、元禄16（1703）年の火災を契機に廃絶され、瓦礫整理坑として再利用、埋め戻しが行われた遺構と考えられる。

遺物は17世紀末の陶磁器、土器がコンテナ９箱出土したほか、本瓦、釘などが出土している。

SD14（Ⅲ-22・120図、附図1）

東西方向にほぼ直線状に延びる溝で、D2～G2グリッドにかけて確認された。但し、東西両端ともに撹乱を受けているため、本来は両方向ともにさらに延びていたと考えられる。SD16、SK37より古く、SD45より新しい。遺構の規模は、幅60～70cm、確認面からの深さは最大30cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は長方形を呈している。壁面における板材の痕跡も、坑底における杭跡もなく、素掘りの溝である。出土遺物はほとんどみられない。

遺構の稼働、廃絶時期は出土遺物がないことから、詳細な設定はできないが、天和３（1683）年から文政12（1829）年までの大聖寺藩邸北側の地境に比定されるSD366よりも南に位置し、加賀藩邸との地境に比定されるSA155をまたいでいることより、天和３年以前の大聖寺藩邸に帰属する施設か、文政12年以降の施設と考えられる。

SK18（Ⅲ-8・９図）

F2、G2グリッドに位置する遺構である。北西部をSU20によって、北東部を撹乱によって破壊されている。平面形は雨滴状を呈し、規模は南北500cm、東西295cm、確認面からの深さ300cm（最大）を測る。内部形態は、北側で確認面下75cmに三角形状のテラスを有し、そこから反時計回りの螺旋状階段が壁面を半周し、室部へ移行する。階段は螺旋状を呈しているため、仰角約25°と比較的緩やかな傾斜である。８段あるステップ形状には規格性が無く、奥行き、幅、ステップ高は統一されていない。また、ステップの調整もほとんど認められず、粗雑な作りを呈している。室部は南北200cm、東西110cmを測る不整楕円形を呈している。坑底は工具痕による凹凸が残存している。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、南から東壁にかけてはやや膨らみを有する。壁面には全面にわたり、上から下方向への著しい工具痕が認められ、壁面調整が施された痕跡は認めら

れない。

覆土は、南北方向にはほぼ水平に堆積している。遺構空間の約1/3を埋める５層の様相から、本遺構は、廃絶後に日常的な廃棄遺構として二次利用されたことが推定される。また、1、２層には、焼土粒、炭化材が多量に含有されていることから、最終的に火災後の瓦礫整理によって埋め戻されたものと判断される。

壁面の工具痕が確認面まで拡がることと、天井崩落の痕跡となるロームブロックが含まれない覆土の様相から、本遺構は天井を有さない形態と判断でき、それに加え、不整形な形態、全体的な未調整の状況から、本遺構の性格は、採土坑の可能性が高い。

遺物は、最下層の５層を中心に陶磁器、土器がコンテナ８箱出土したほか、釘、石臼、木製品などが出土しており、その年代観はＶａ期に比定される。そのことから、1、２層に認められる火災の痕跡は、享保15年、もしくは元文３年の火災と考えられる。

SK19（Ⅲ-7図）

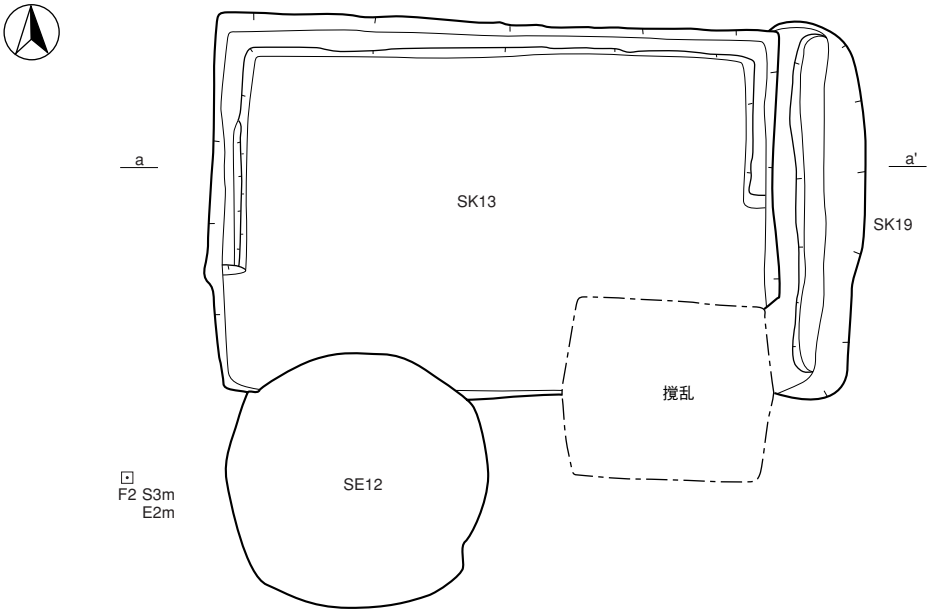
F2グリッドに位置する土坑で、西側に隣接するSK13より古い。平面形は、隅丸長方形を呈すると思われ、坑底は西側で１段テラスを有する。覆土は、ロームブロック主体の褐色土で、短期間で埋め戻されたことが想定される。周辺に本遺構と関連する遺構はなく、性格は不明であるが、遺構主軸はSK13などと同じく藩邸地境に規制されている。

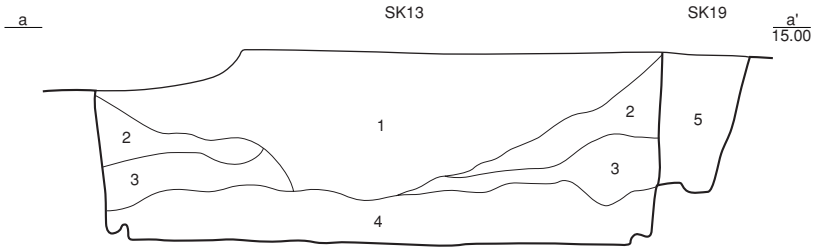
遺物は出土していない。

SU20（Ⅲ-10図）

F2グリッドに位置する地下室である。北辺部は調査区外に延び、南半部は大きく撹乱によって破壊されている。また、東側で重複するSK18より新しい。形状は入口施設と室部に大別される。入口施設は、階段、テラス、足掛け坑から構成される。階段は、２段確認されているが、各々のステップの先端は、補強パーツを取り付けた痕跡と考えられる段が設けられている。規模は、北側が調査区域外、南側は天井部崩落のため不明である。階段の東側には、確認面下約80cmの位置に踊り場が設けられている。そこから室部へは、壁面に穿たれた３ヶ所の足掛け坑によって繋がっている。足掛け穴は壁面上半部に分布し、約15cm間隔で設置されている。その規模は幅約40cm、高さ20～30cm、奥行きは10cmと浅い。室部は、Ｌ字状の平面形を呈し、東西270cm、南北220cmを測る。床面には３基のピットが設けられているが、撹乱を受けた東南部にもう１基存在したと考えられ、東西200cm、南北140cmの長方形を呈する４本の柱で構成されていたと考えられる。壁面の観察から、４本柱の外側にあたる北部と東部の張り出し部分にのみ天井部が存在していたことが確認され、柱の内側は開口部で、４本の柱は上屋を支える主柱として機能していた可能性が高い。また、室部南西コーナー付近に不定形の小土坑が存在するが、過去の類例から排水施設としての機能が推定される。

覆土は北側から流れ込んでおり、東西セクションでは、緩やかな凸レンズ状の堆積を呈している。７層は焼土粒を多く含んでおり、火災後に廃絶された可能性もある。3、4、６層はいずれも暗灰褐色土で炭化材、人工遺物を多量に含有しており、遺構廃絶後に日常的な廃棄遺構として二次利用されていたことがわかる。また５層は、廃棄物をパックする目的で埋め込まれた土の可能性が高い。同様に、３層も山砂主体の２層でパックされており、有機物を含む日常的廃棄行為と廃棄層をパッ



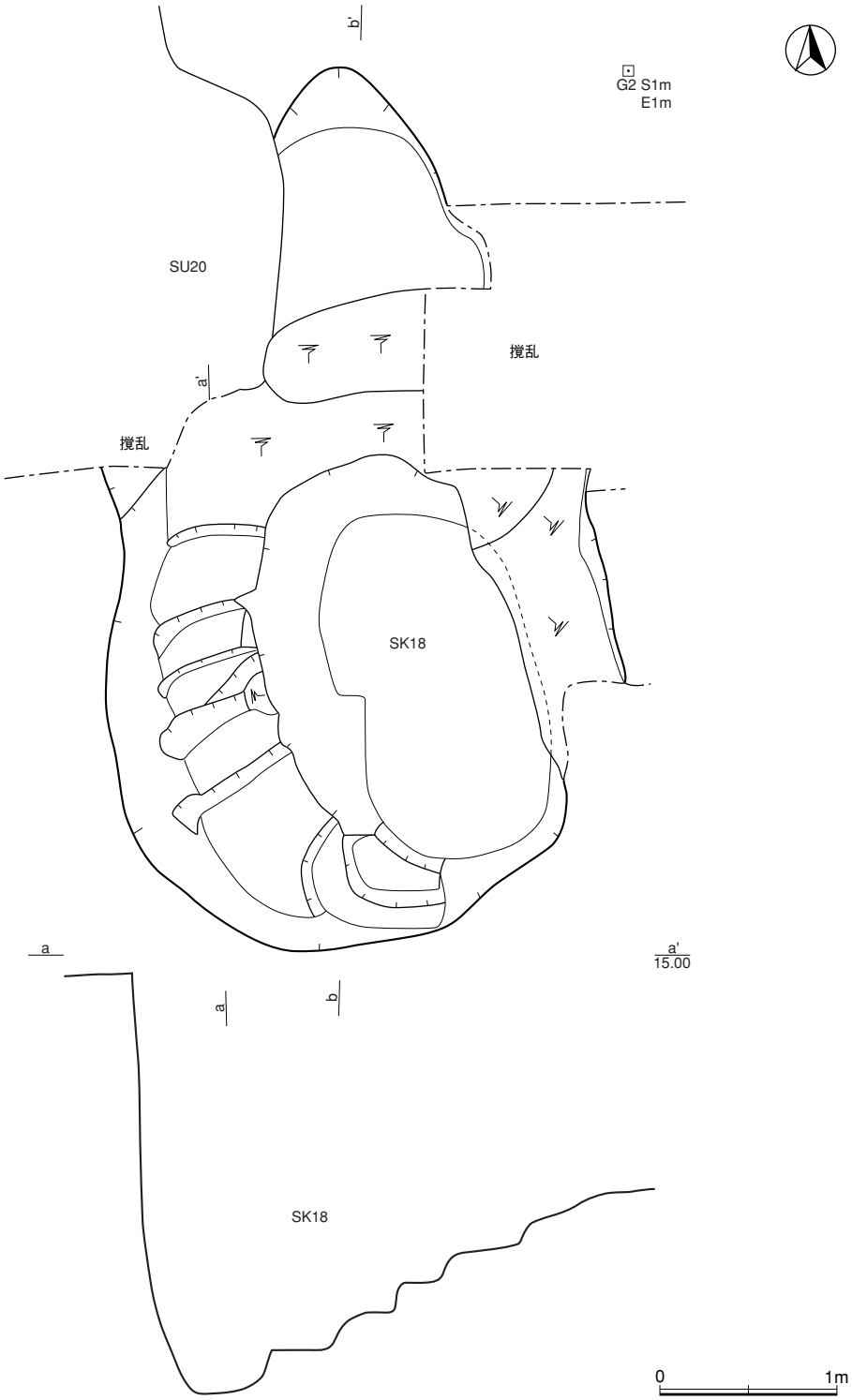


SK13
1　暗赤褐色土　（焼土粒極多、遺物多含、粘性弱）
2　褐色土　（ロームブロック多含）
3　暗褐色土　（焼土粒多含）
4　褐色土　（ロームブロック多含）

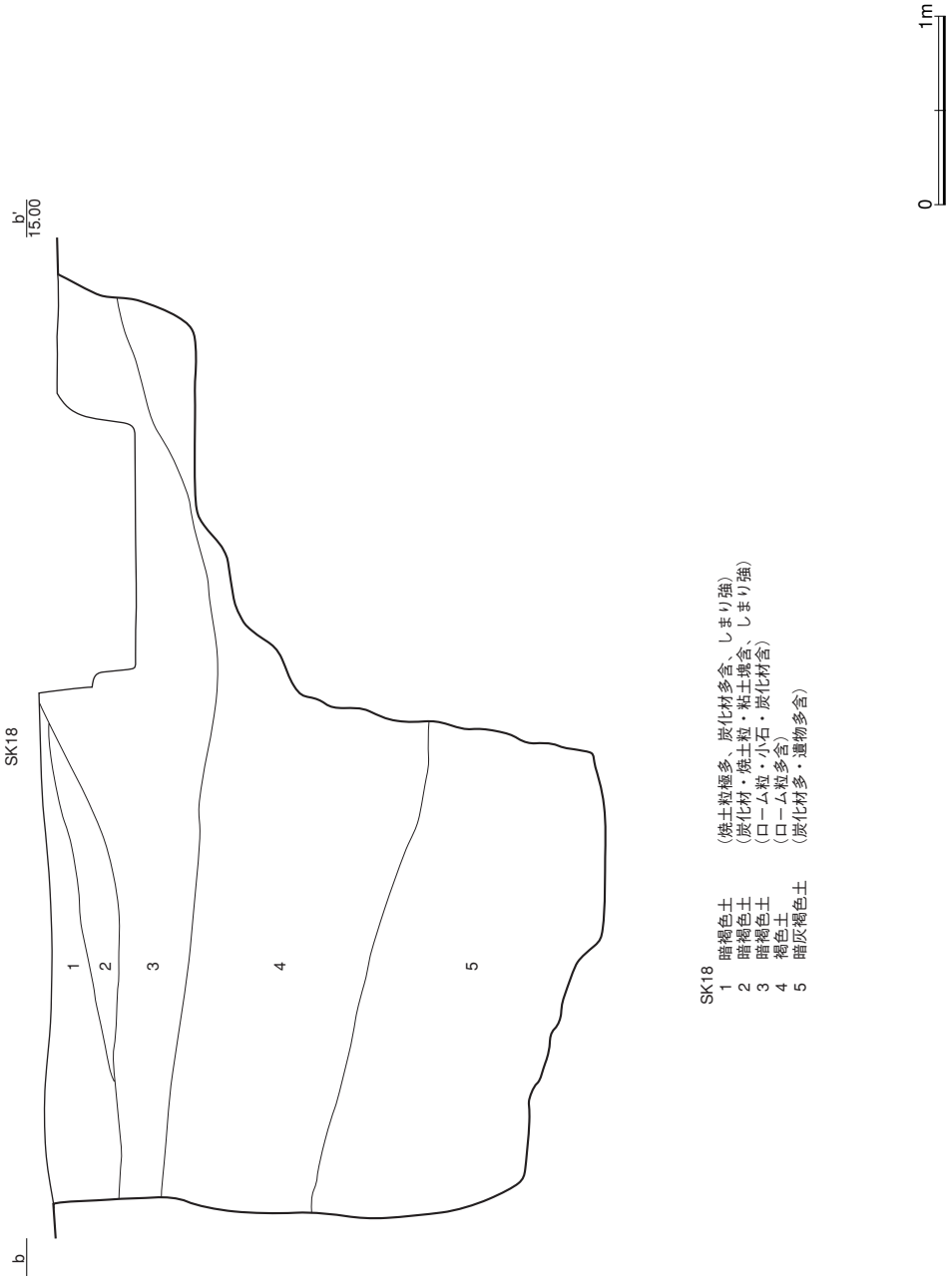
SK19
5　褐色土　（ロームブロック・ローム粒多含、しまり強）

0　1m

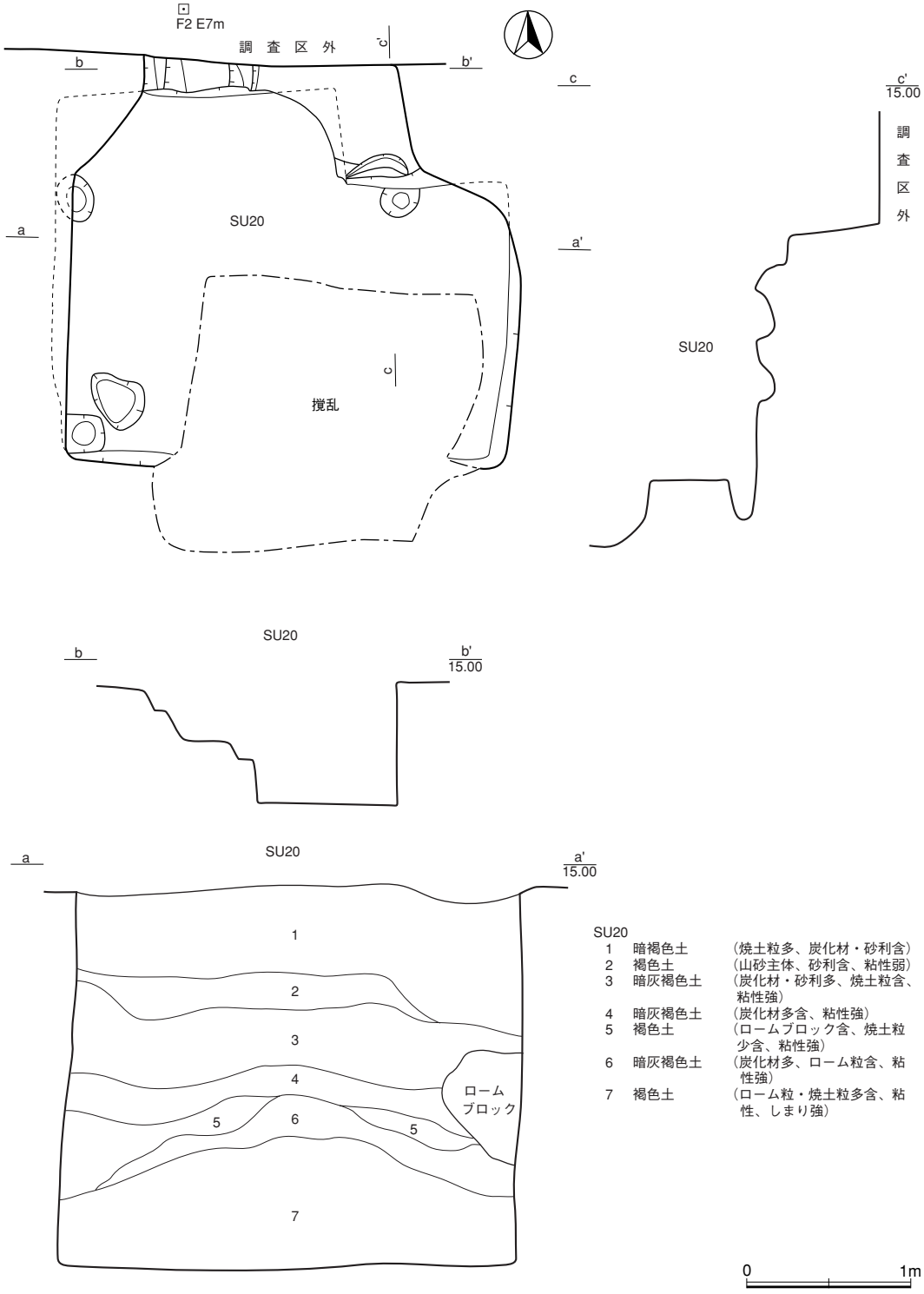
Ⅲ-7図　SE12・SK13・SK19



Ⅲ-8図　SK18（1）


b'
15.00
SK18
1
2
3
4
5
b
SK18
1　暗褐色土　（焼土粒極多、炭化材多含、しまり強）
2　暗褐色土　（炭化材・焼土粒・粘土塊含、しまり強）
3　暗褐色土　（ローム粒・小石・炭化材含）
4　褐色土　（ローム粒多含）
5　暗灰褐色土　（炭化材多・遺物多含）
0
1m

Ⅲ-9図　SK18（2）


F2 E7m
調 査 区 外
b
b'
c
c'
a
a'
SU20
撹乱
c'
15.00
調
査
区
外
SU20
b
b'
15.00
SU20
a
a'
15.00
SU20
1
2
3
4
5
6
5
7
ローム
ブロック
SU20
1　暗褐色土　（焼土粒多、炭化材・砂利含）
2　褐色土　（山砂主体、砂利含、粘性弱）
3　暗灰褐色土　（炭化材・砂利多、焼土粒含、粘性強）
4　暗灰褐色土　（炭化材多含、粘性強）
5　褐色土　（ロームブロック含、焼土粒少含、粘性強）
6　暗灰褐色土　（炭化材多、ローム粒含、粘性強）
7　褐色土　（ローム粒・焼土粒多含、粘性、しまり強）
0
1m

Ⅲ-10図　SU20

クする行為がセットで行われていたことが読み取れる。本遺構は、その直後に１層で完全に埋め戻されている。１層には多量の焼土粒と炭化材が含まれており、再び火災後の瓦礫整理との関係が想起される。なお、４層東側のロームブロックは天井の崩落土である。

遺物はⅤａ期の陶磁器、土器がコンテナ７箱出土したほか、釘などの金属製品が出土している。

SK21（附図１）

B4グリッドに位置する土坑である。北側を除き遺構の大半を撹乱によって削平されている。

遺物は19世紀前～中葉の陶磁器、桟瓦が比較的多く出土している。

SK22（Ⅲ-11図）

C4グリッドに位置する長方形の土坑である。規模は東西120cm、南北350cm、確認面からの深さは220cmを計測する。また、一部を東京医学校本館の基礎SB70によって削平されている。坑底、壁は凹凸は見られるものの比較的平滑に整形されていた。また、壁のオーバーハングは認められなかった。

遺物は18世紀後半～19世紀初頭の陶磁器が比較的多く出土し、桟瓦、金属製品、犬の骨などが少量認められる。

SK23（Ⅲ-12図）

B5、C5グリッドに位置する土坑である。遺構は旧医学部附属病院管理棟の基礎により上部、西側を大きく削平され、Ⅲ層上面より1m以上下面にて確認された。遺構の深さから地下室の可能性が高い。また、周囲の遺構とは主軸方向が異なり、平面形は単純な方形ではない可能性もある。現存している規模は長軸370cm、短軸80cm、確認面からの深さは80cmを測る。壁、坑底は凹凸は見られるものの比較的平滑に整形されている。覆土は壁から中央に傾斜を有して堆積している。

遺物は18世紀後半の陶磁器、桟瓦が出土している。

SU24（Ⅲ-13図）

B5グリッドに位置するおそらく方形の地下室である。遺構の上部、東側は撹乱のために大きく削平を受けている。遺存してる規模は東西80cm、南北200cm、確認面からの深さは90cmを計測する。壁、坑底は非常に丁寧に平滑に整形されており、壁と坑底、壁の屈曲部などは直角に角を作っている。天井は弱いアーチ状に湾曲させて構築している。覆土は埋める途中で入口などを壊したと思われ、３層にはロームの大きなブロックが確認された。

遺物は18世紀後半を中心とした陶磁器・土器類、桟瓦が比較的多く出土している。

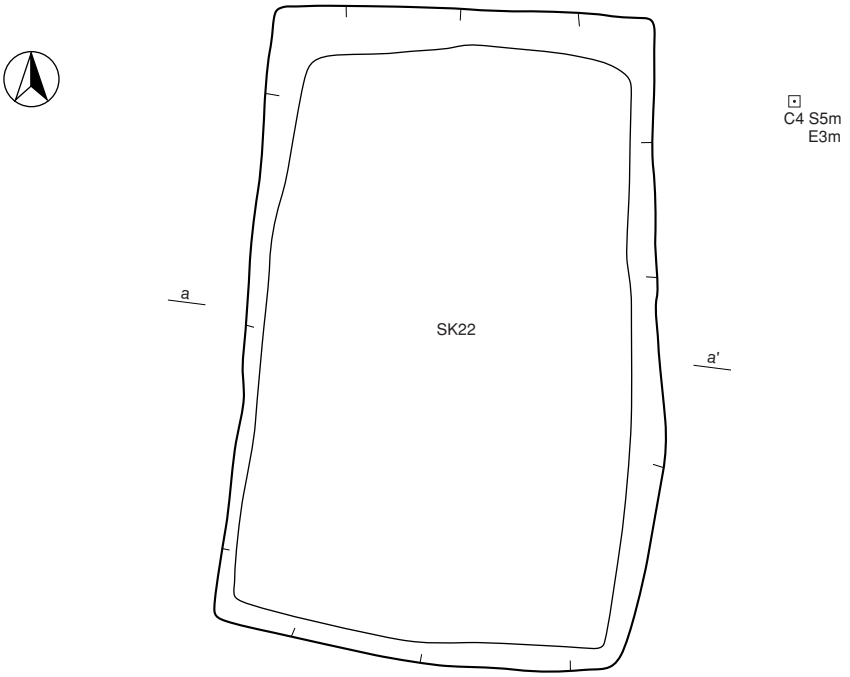
SK25（Ⅲ-14図）

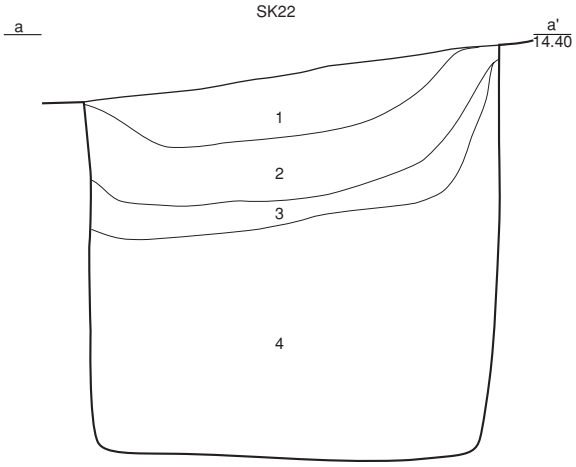
B5、B6グリッドに位置する楕円形の土坑である。遺構の上部を撹乱によって削平されている。調査は崩落の危険のため東側のみ行った。規模は、東西250cm、南北310cm、確認面からの深さは西側で最大300cmを計測する。壁、坑底は遺構の掘削後未調整である。覆土は北側から南に向けて傾斜している。

遺物量は少ないが、18世紀後半を中心とした陶磁器・土器類、桟瓦が出土している。

SK26（Ⅲ-15図）

B5グリッドに位置する長方形の土坑である。北東、北西、南東隅には方形のピットが壁から張り出すように確認されている。上部施設に関係するものと推定できるが、南西コーナーには確認で

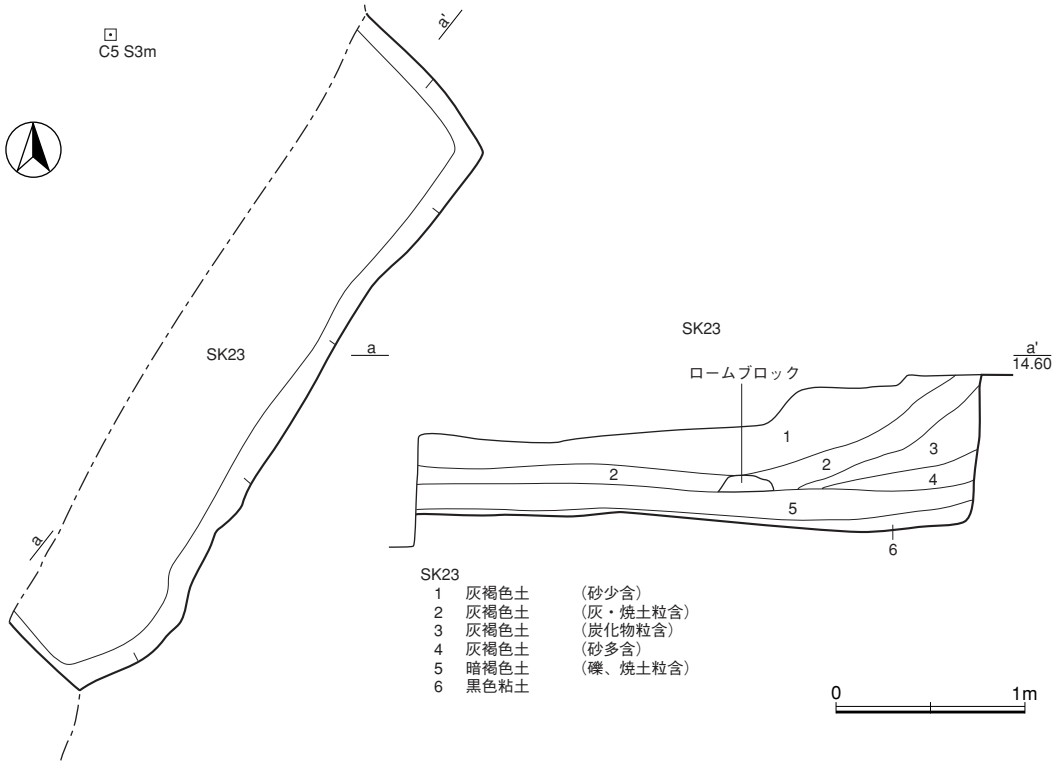




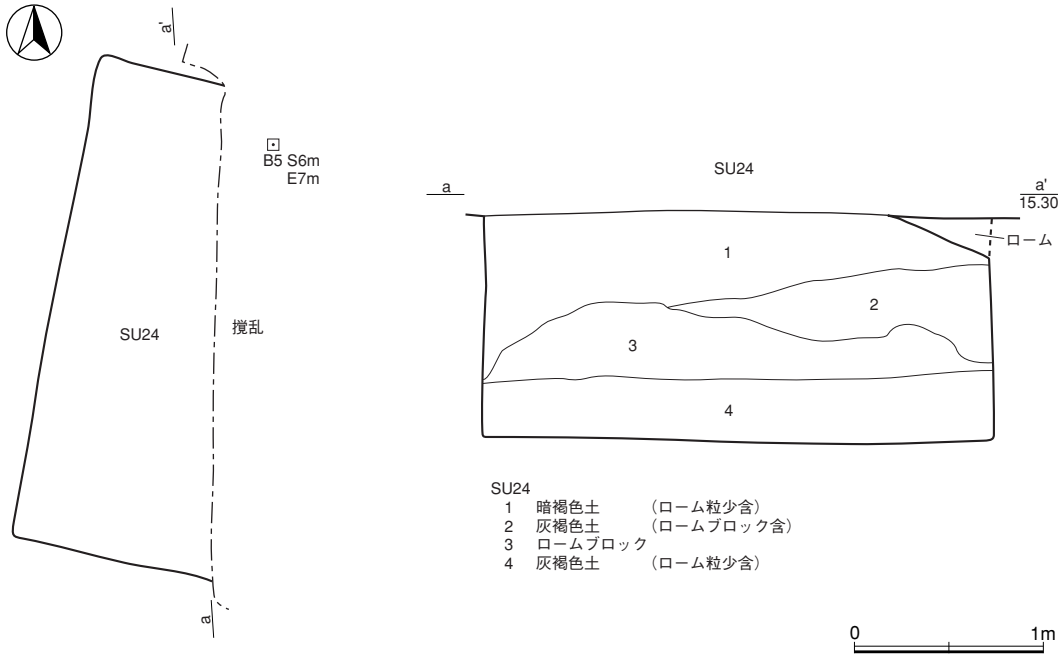
SK22
1　暗褐色土　（ローム粒含）
2　暗灰褐色土　（ローム粒少含）
3　暗褐色土　（ローム粒多含）
4　暗灰褐色土　（礫、灰褐色粘土粒含）

0　1m

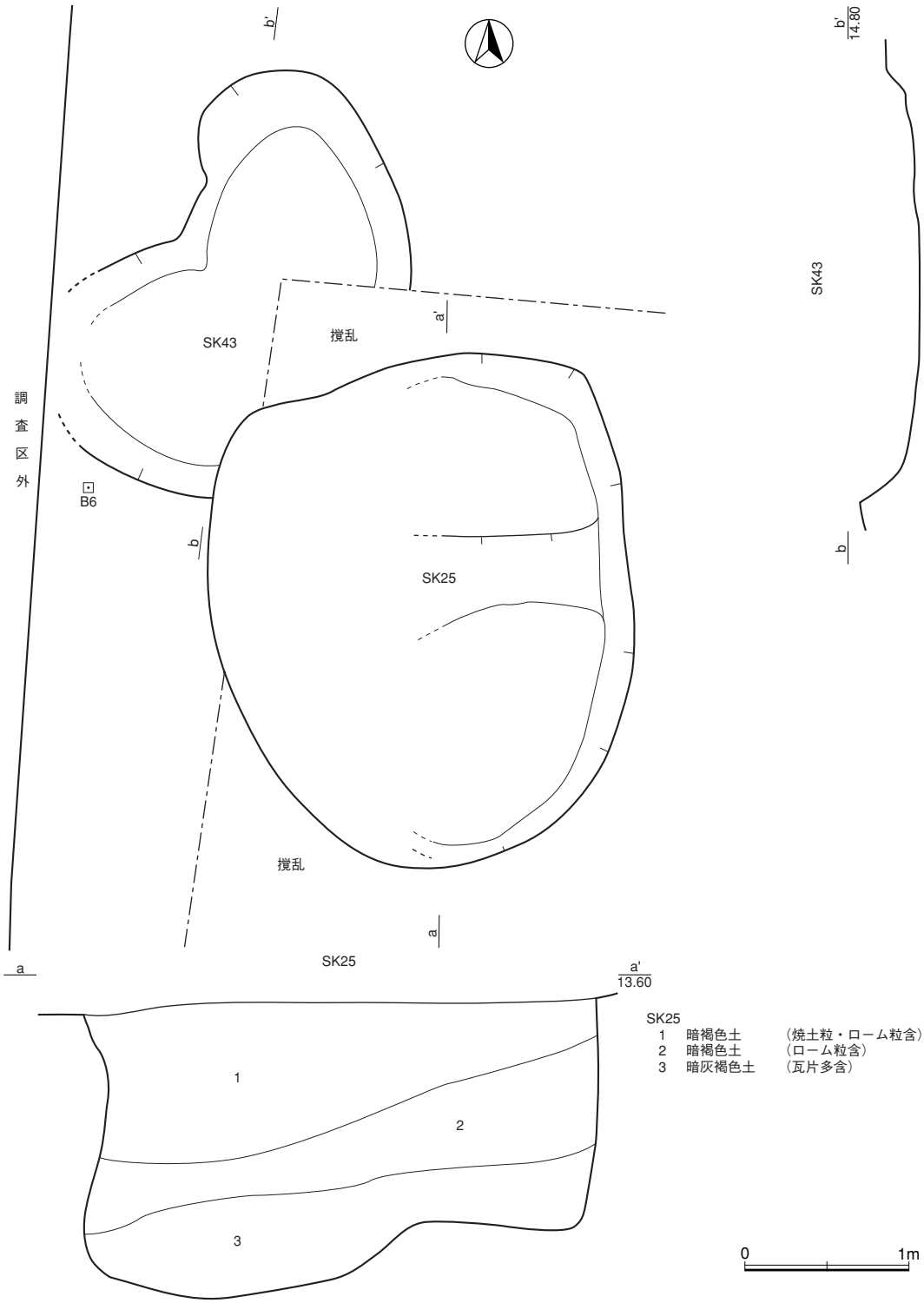
Ⅲ-11図　SK22



Ⅲ-12図　SK23



Ⅲ-13図　SU24



Ⅲ-14図　SK25・SK43

きなかった。坑底、壁は平滑に整形されている。壁は坑底よりやや開きながら立ち上がる。規模は確認面で、東西130cm、南北190cm、深さ120cmを計測する。

遺物は17世紀後半の二次的な火熱を受けた陶磁器、瓦が少量出土している。

SK27（Ⅲ-16図）

B5、B6グリッドに位置する長方形の土坑である。上部及び西側を撹乱によって削平されている。遺存している規模は東西200cm、南北160cm、確認面からの深さは120cmを計測する。壁や坑底は丁寧に平滑に整形されている。

遺物は17世紀の陶磁器片が少量出土している。

SU28（Ⅲ-17図）

B6グリッドに位置する地下室である。東、北側を大きく削平されており、遺存状態は悪い。遺存している形状から楕円の袋状を呈する地下室であろうと推定される。坑底は入口から強くオーバーハングしている。遺存している規模は、坑底で東西190cm、南北160cm、深さは150cmを計測する。

遺物は17世紀後半～18世紀の陶磁器・土器、平瓦、犬の骨が少量出土している。

SU29（Ⅲ-18図）

B7グリッドに位置する円形を呈する地下室である。規模は確認面で径140cm、坑底で東西220cm、南北200cm、深さは80cmを計測する。坑底、壁は粗掘りの状態で、工具痕が明瞭に観察された。室部はオーバーハングしているものの狭窄で、坑底から天井までの高さが40cm程度しかない。

遺物は二次的火熱を受けた17世紀後半～18世紀初頭の陶磁器・土器が数十点出土している。

SD30（Ⅲ-121図）

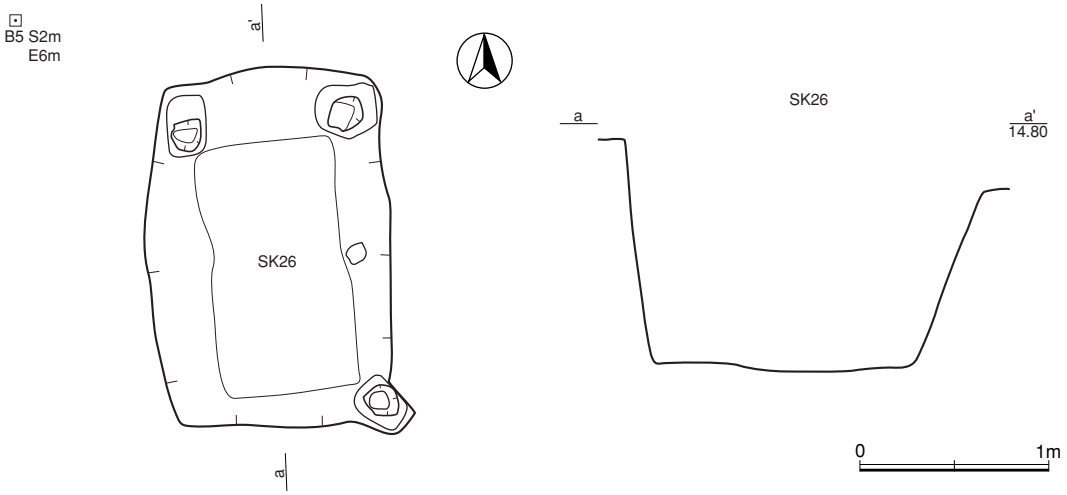
F4グリッドに位置する溝状遺構である。SK7と重複しており、SK7より旧である。遺存している規模は長さ580cm、幅40cm、確認面からの深さは20cmを計測する。溝の断面形はU字状を呈しており、本溝に伴うと考えられる2基の隅丸方形のピットが確認されている。深さは溝底より10cm程度であるが、ピットの坑底には柱があたった跡が確認された。

遺物は瓦片が少量出土したのみである。

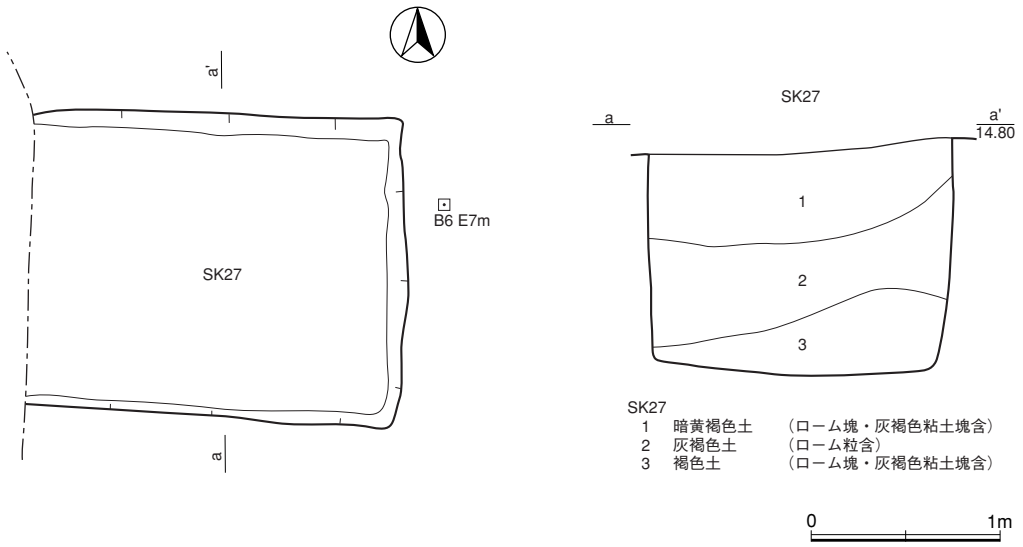
SK31（Ⅲ-19図）

F4グリッドに位置する土坑である。ピットを有する方形の土坑とやや主軸を異にする隅丸方形の土坑が切り合っている可能性がある。土層の堆積状況からはピットを有するものが新である。隅丸方形の土坑の規模は、東西170cm、南北150cm、深さは最大190cmを計測する。坑底及び壁は工具痕が明瞭に残り、粗掘りのままであった。ピットを有する土坑は南側を撹乱によって削平されており、遺存状態は悪い。土坑の北側に40cm程度の張り出しが確認された。遺存している規模は東西270cm、南北170cm、深さ150cmを計測する。壁は工具痕が明瞭に残る部分もあるが坑底は比較的平滑に調整されていた。ピットは、おおむね方形を呈しており、一定間隔ではないものの壁の外周40～60cm間隔で7基認められた。覆土は中央に向かって傾斜を有している。

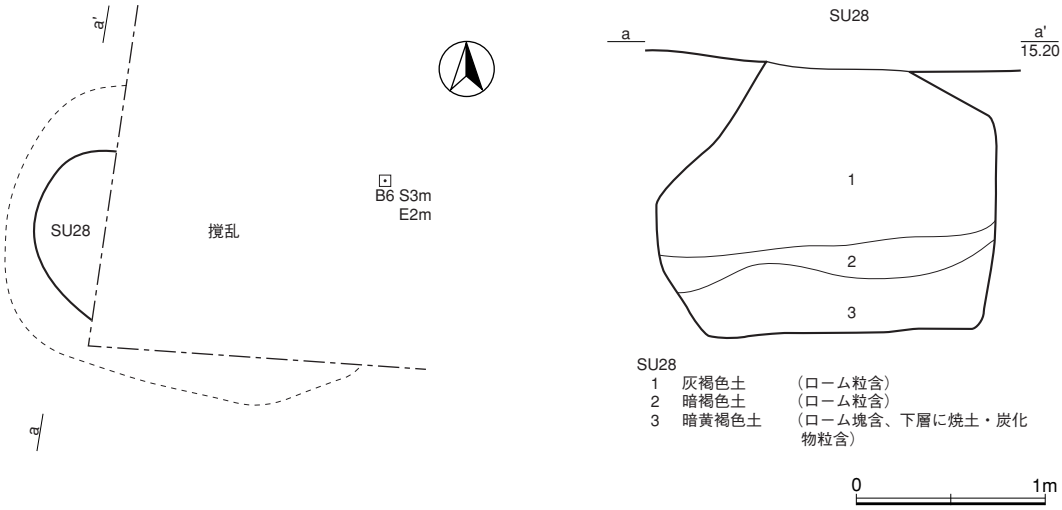
遺物は、二次的火熱を受けた18世紀前半の陶磁器・土器が数十点出土している。



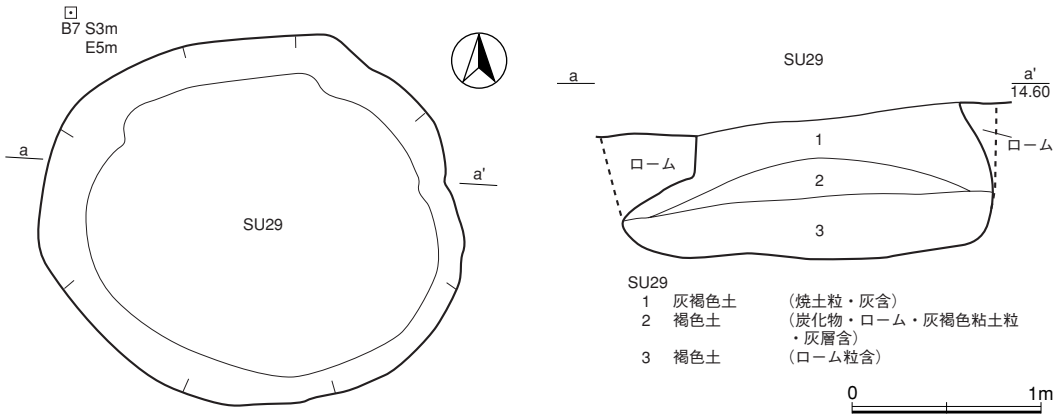
Ⅲ-15図　SK26



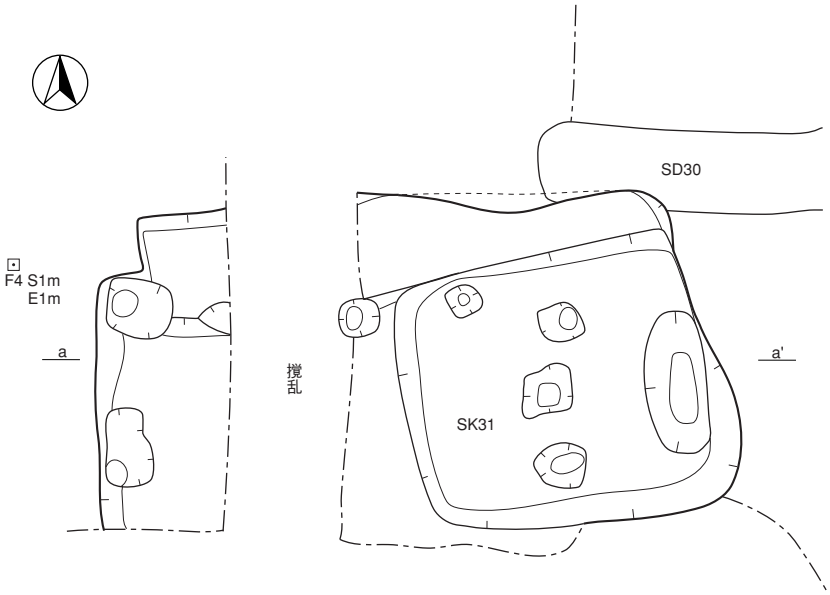
Ⅲ-16図　SK27

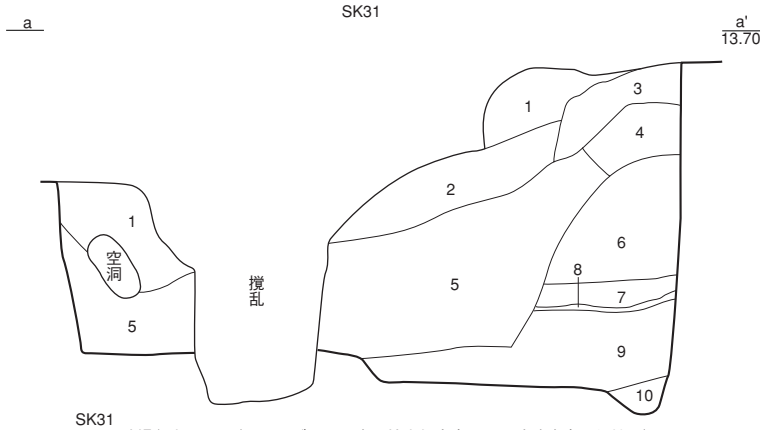


Ⅲ-17図　SU28



Ⅲ-18図　SU29



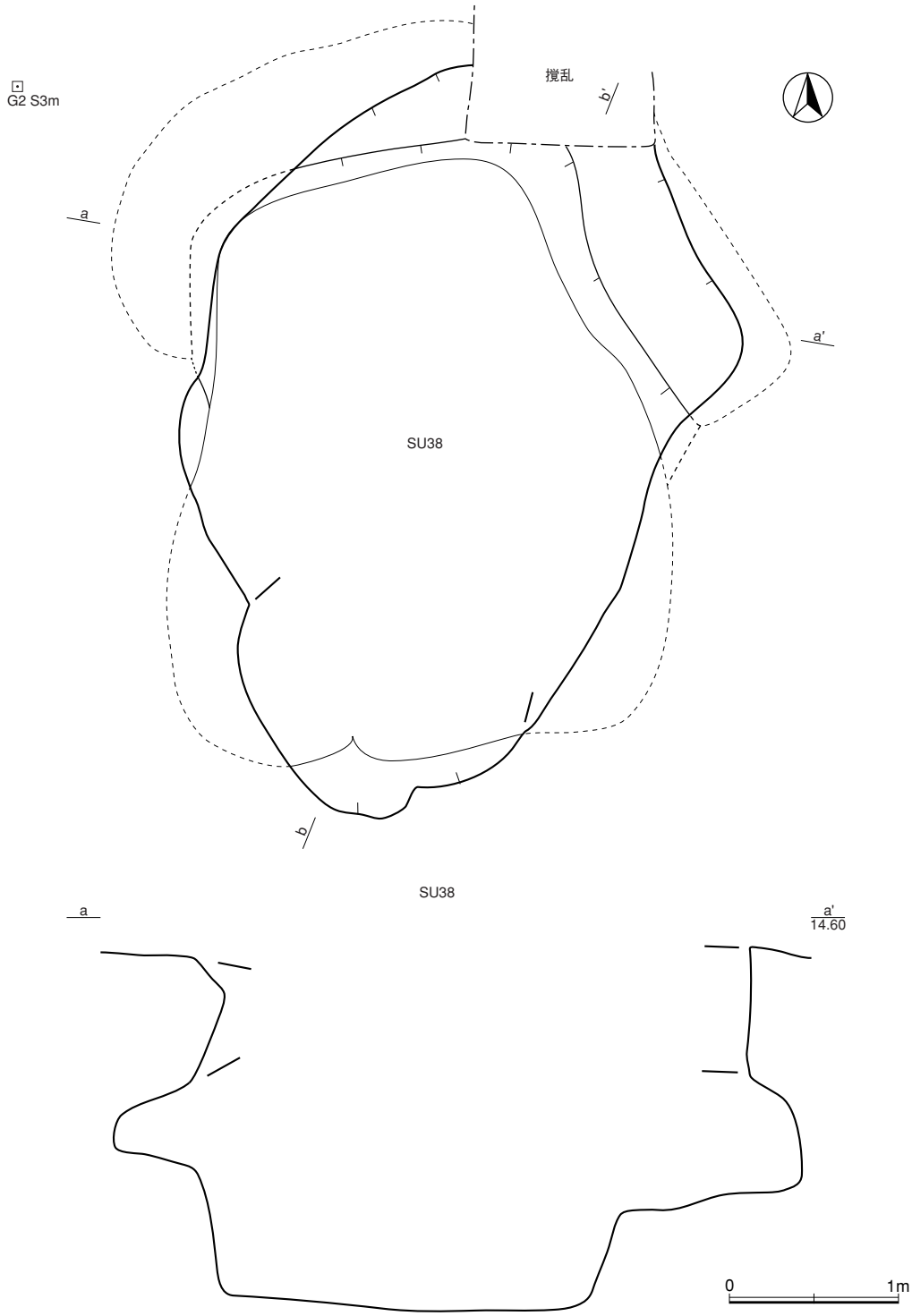


SK31

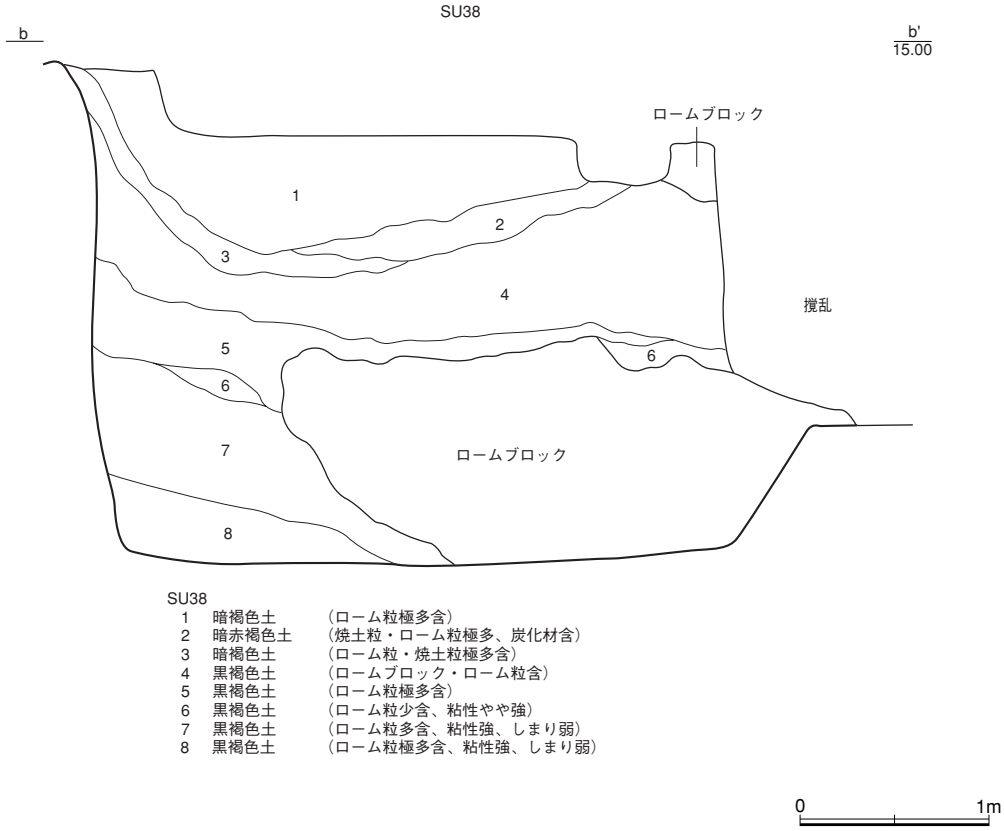
1	暗褐色土	（ロームブロック多、焼土粒中含、瓦・漆喰多含、粘性弱）
2	暗褐色土	（ロームブロック中含）
3	黒褐色土	（ロームブロック中含）
4	褐色土	（ローム粒多、ロームブロック少含）
5	暗褐色土	（ロームブロック・ローム粒中含）
6	黒褐色土	（ロームブロック・ローム粒少含、しまりやや強）
7	黄褐色土	（ローム主体、粘性弱、しまり強）
8	黒褐色土	（粘性強）
9	黄褐色土	（ローム主体、粘性弱、しまり強）
10	黒褐色土	（ローム粒多、灰褐色粘土少含、粘性やや強）

0　1m

Ⅲ-19図　SK31



Ⅲ-20図　SU38（1）



SU38
1　暗褐色土　（ローム粒極多含）
2　暗赤褐色土　（焼土粒・ローム粒極多、炭化材含）
3　暗褐色土　（ローム粒・焼土粒極多含）
4　黒褐色土　（ロームブロック・ローム粒含）
5　黒褐色土　（ローム粒極多含）
6　黒褐色土　（ローム粒少含、粘性やや強）
7　黒褐色土　（ローム粒多含、粘性強、しまり弱）
8　黒褐色土　（ローム粒極多含、粘性強、しまり弱）

Ⅲ-21図　SU38（2）

SU34（Ⅲ-5図）

E4グリッドに位置する地下室である。平面形は入口で方形、室部は隅丸長方形を呈している。規模は入口で東西100cm、南北110cm、坑底で東西140cm、南北170cm、確認面からの深さは200cmを計測する。入口部の壁面は比較的丁寧に整形されているが、室部では工具痕の痕跡が認められ、ややラフである。覆土はほぼ全てに焼土が確認でき、特に3層は純焼土層であった。火災の後始末であろうと推定できる。

出土遺物は二次的火熱を受けており、18世紀前半の陶磁器・土器、焼本瓦、金属製品などが出土している。火災の年代は遺物の様相から享保15年あるいは元文3年であろうと推定される。

SK36（Ⅲ-120図）

G2グリッドに位置する、隅丸長方形を呈する土坑である。SU38より新しい。規模は、東側を撹乱によって破壊されているため、東西長は不明であるが、南北長は110cmを測り、確認面からの深さは20cmと浅い。性格は不明であるが、主軸が近接するSD14と共通していることから、大聖寺藩邸の建物配置に規制された遺構と推定される。覆土は単層であるが、その中から、17世紀後半の陶磁器とともに、カワラケがまとまって出土している。

SU38（Ⅲ-20・21図）

G2グリッドに位置する地下室である。確認面での平面形は、天井部の崩落のため、不整形を呈していた。壁面は南壁において（図の推定線までの範囲）、確認面まで及ぶ加工痕が認められたが、それ以外の壁面には、確認面下約50cmまでロームの剥落痕が認められ、さらに南北セクションには南壁付近を除く床面直上に巨大ロームブロックが存在していることから、南側に開口部を有したものと判断される。壁面の状態は開口部では床面から確認面まで丁寧に整形されているが、それ以外の天井を有する部分では、工具痕による凹凸が顕著である。床面の形態は隅丸不整台形を呈し、入口部で広く奥壁に行くに従い狭くなっている。その規模は南北約350cm、北辺約180cm、南辺約300cmを測る。また、奥壁付近には床面上約60cmにテラスを有する。テラスは奥壁に沿って弧を描き、奥行きは約50～80cmを測る。

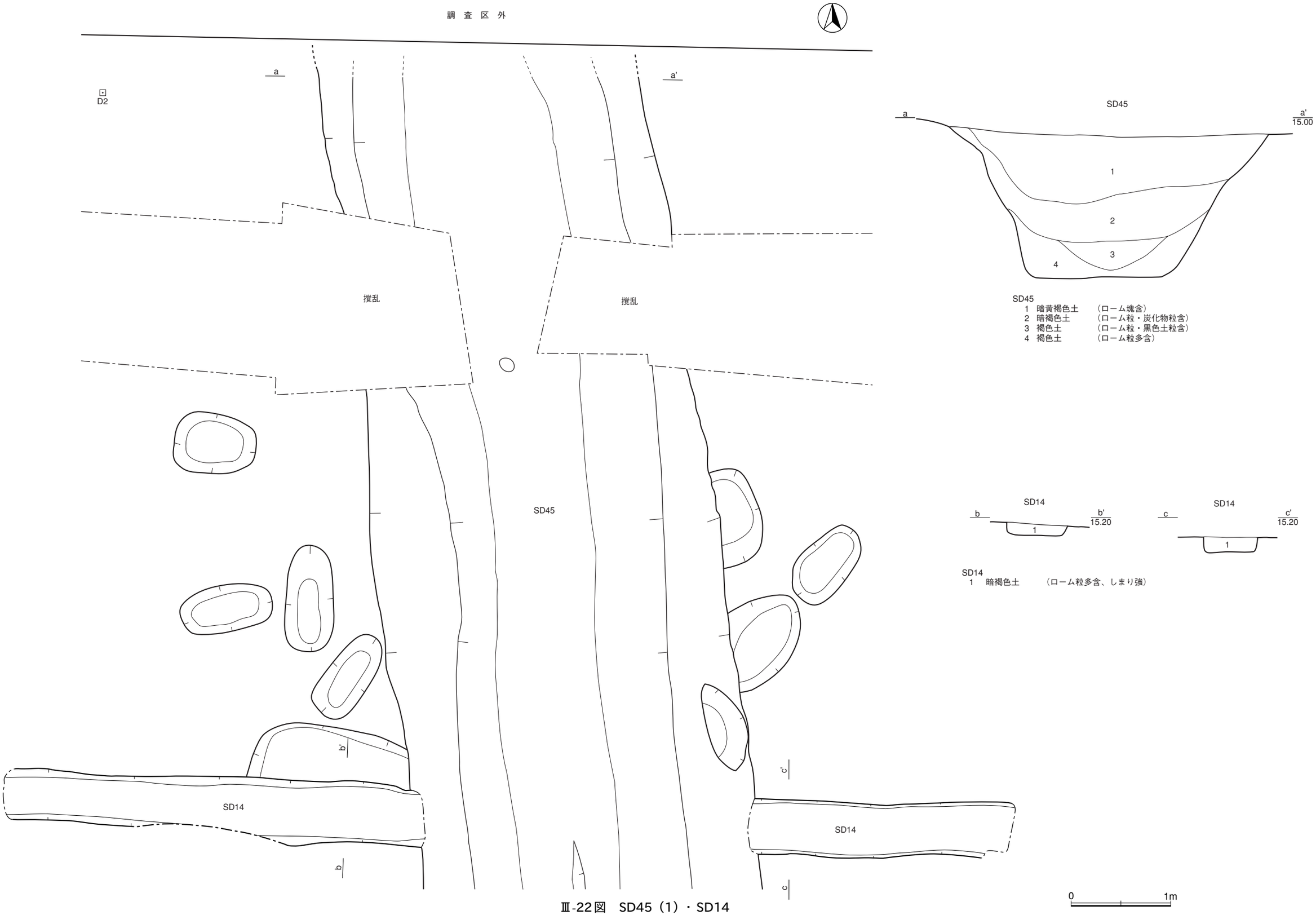
覆土の大半は黒褐色土で、特に巨大ロームブロック東側と奥壁テラス部分ではしまりが強い。また、上層部には（2、3層）焼土粒を多量に含有する覆土が存在することから、遺構埋没過程で、火災後の瓦礫整理に利用されたことが推定される。

覆土中からは、ほとんど遺物は検出されなかったが、17世紀中葉の陶磁器と完形のカワラケが数点検出されている。

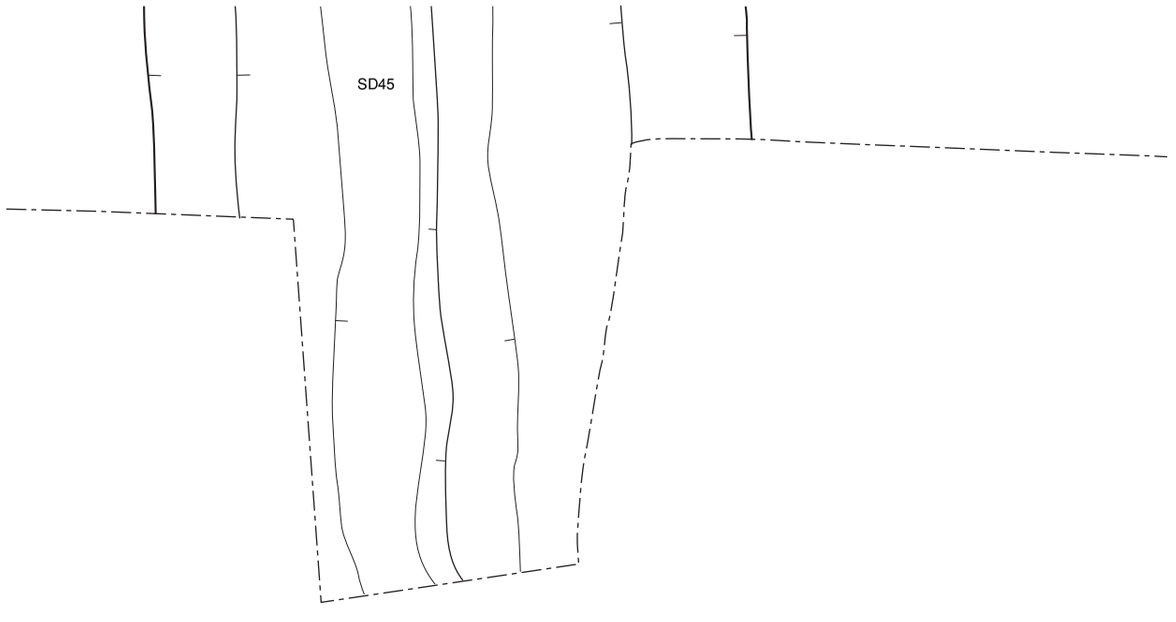
本遺構は、入口部と天井を有する室部によって構成されることから、地下室としての性格が考えられる。しかし、室部壁面にみられた工具痕の状態、床面直上に崩落した天井部ロームの状態などから、遺構製作途中の天井崩落による廃絶の可能性も考えられる。

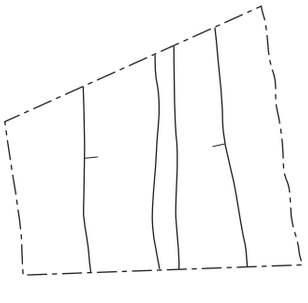
SD45（Ⅲ-22～26図）

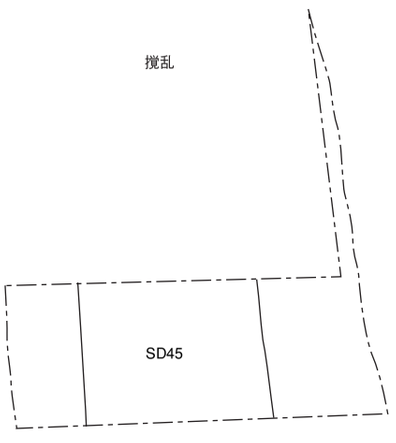
D1～6グリッドにかけて位置する溝状遺構である。主軸方位は他の遺構群よりやや西に振れている。近代以降の撹乱や他の遺構に切られ、遺存状態はあまりよくない。SD14、SK158、SD161と重複関係にあり、新旧はSD161より新で、SD14、SK158より旧である。溝は北側では丁寧に構築されており、断面逆台形を呈し掘り込みも深いのに対し、5ライン付近より南側では

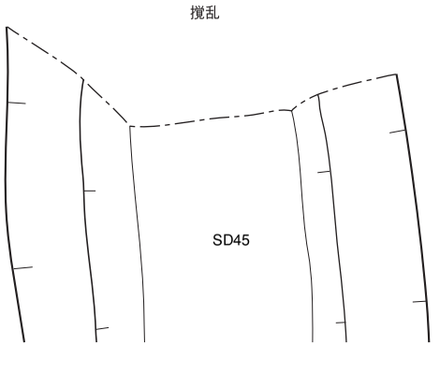


Ⅲ-22図 SD45（1）・SD14

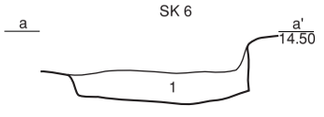




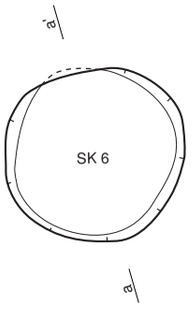




E3



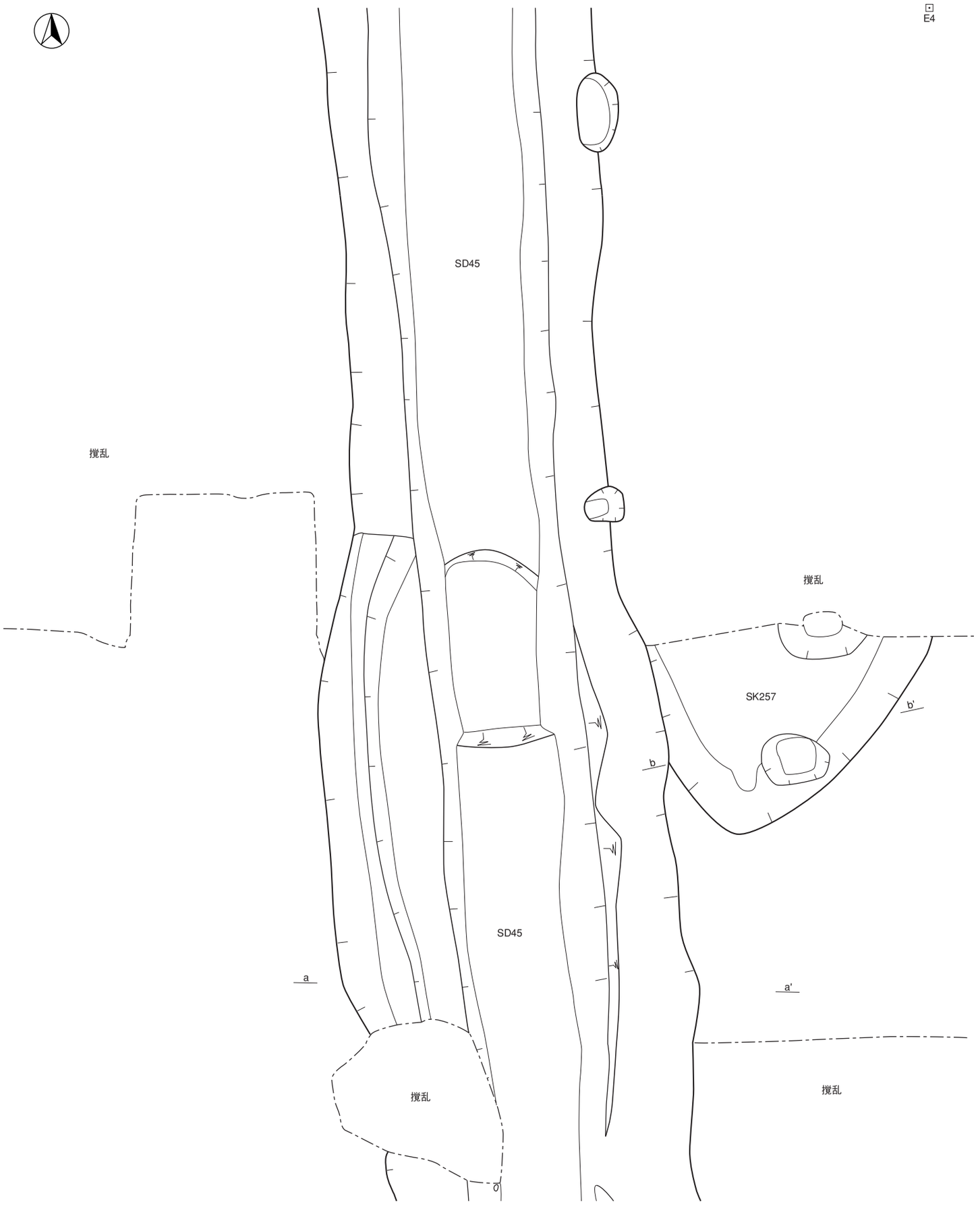
1　黒褐色土　　（ローム粒 ・円礫少含、しまり強）

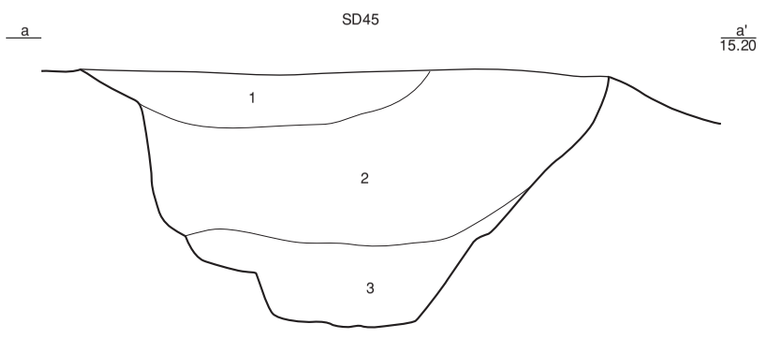


E4

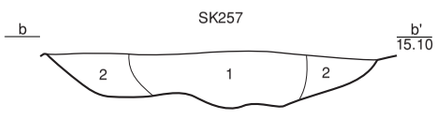
0　1m

Ⅲ-23図　SD45（2）・SK6





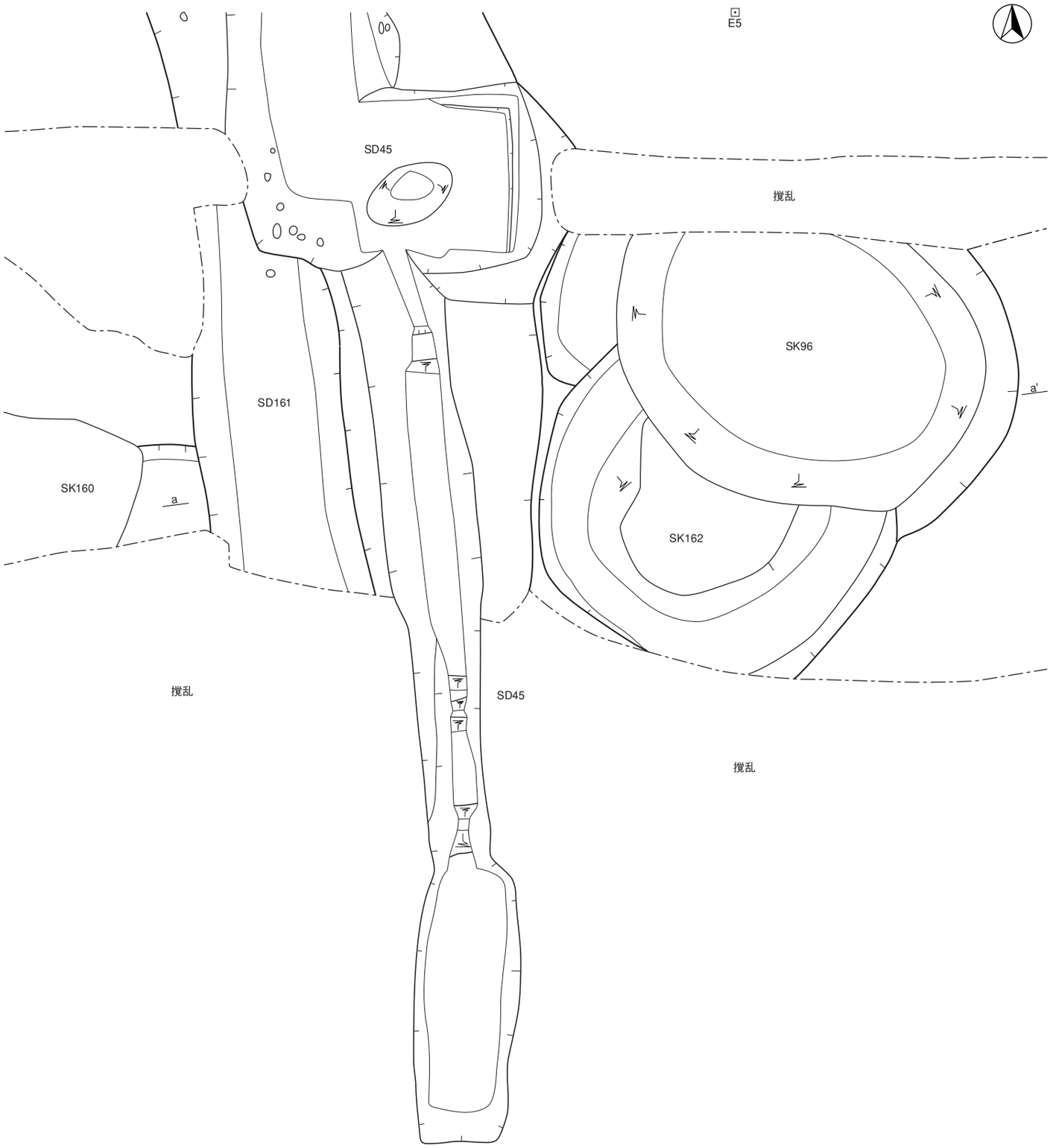
SD45
1　暗褐色土　（砂利・ローム粒・黒色土粒含）
2　暗黄褐色土　（ローム塊多含）
3　暗褐色土　（炭化物粒・焼土粒少含）

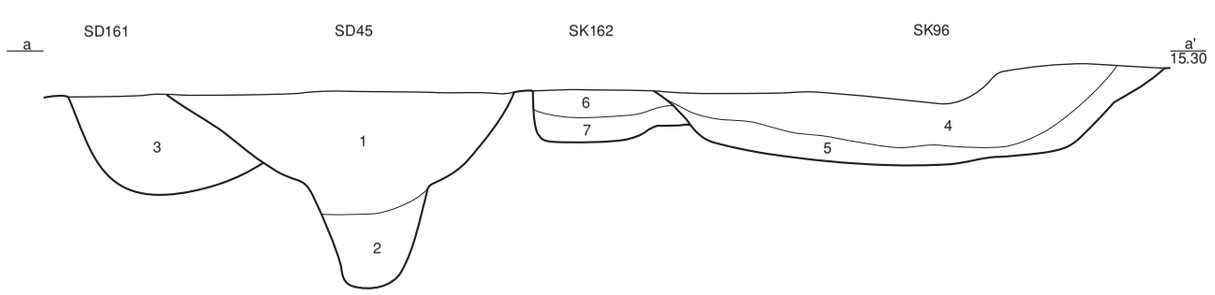


SK257
1　暗褐色土　（ローム粒含）
2　黒褐色土　（ローム粒少含）

0　1m

Ⅲ-24図　SD45（3）・SK257





SD45
1　暗黄褐色土　（ローム塊含）
2　暗褐色土　（ローム粒含）

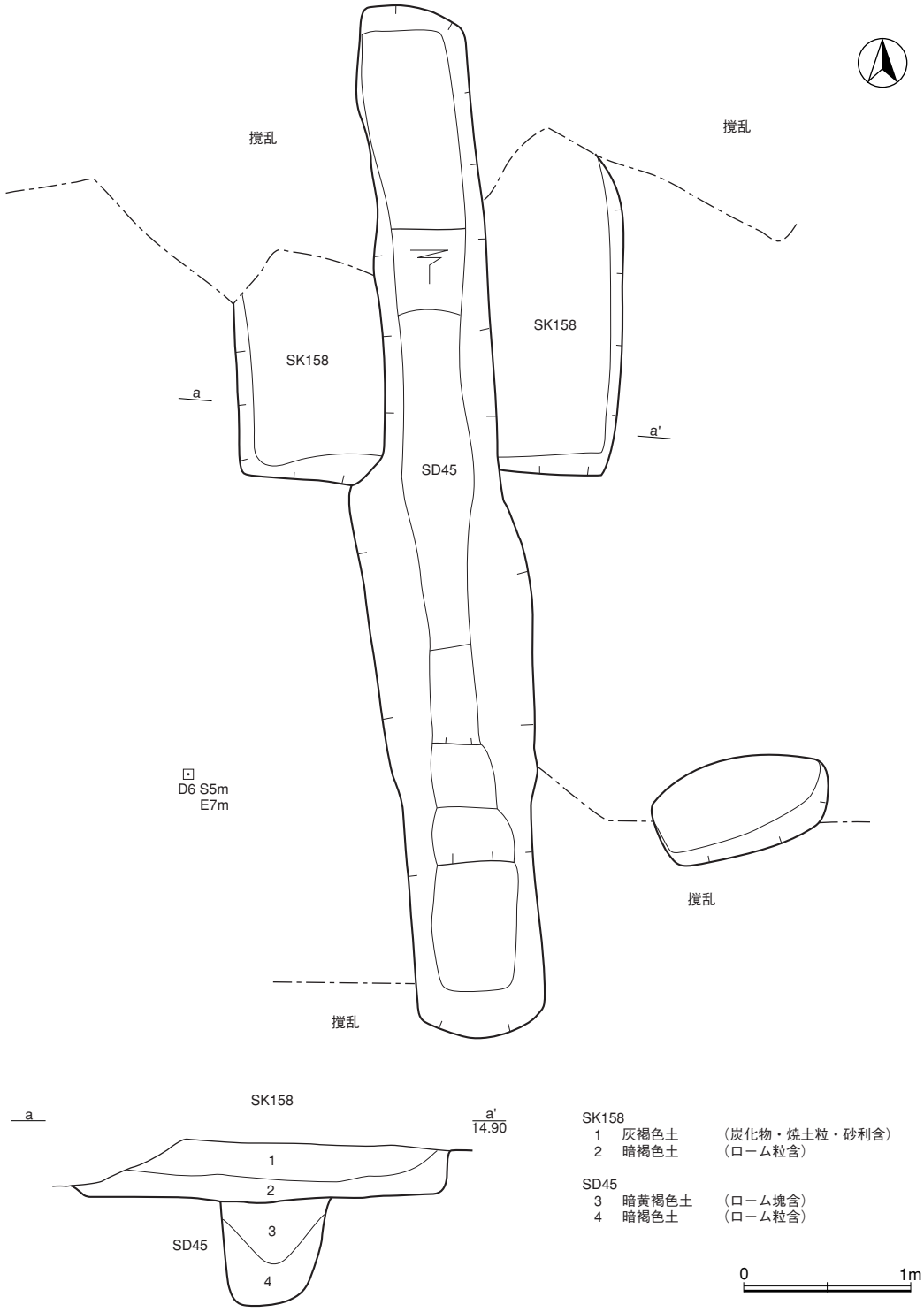
SD161
3　暗褐色土　（ローム粒含）

SK96
4　暗褐色土　（砂利・ローム粒含）
5　暗褐色土　（ローム粒微含）

SK162
6　暗褐色土　（砂利・焼土粒含）
7　暗黄褐色土　（ローム塊含）

0　1m

Ⅲ-25図　SD45（4）・SK96・SD161・SK162



Ⅲ-26図　SD45（5）・SK158

幅が細くなり、断面もＵ字状に形状が変化している。溝底も北側では平滑、南側では丸く成形されている。溝底のレヴェルも南側は起伏が激しく一定していないが、５ライン以北では南から北に傾斜している。覆土は最下層では砂層が一部に確認されており、流水路としても機能していたと推定される。下～中層には粒子の細かな褐色土、上層にはロームブロックを多く含む層で構成されていた。規模は北端で溝幅320cm、深さ140cm、南端で溝幅70cm、深さ60cm、溝の長さは約48mを計測する。

遺物は陶磁器・土器、本瓦などが散漫にコンテナ箱にして２箱ほど確認されたが、いずれも17世紀前半に比定される製品である。

SU47（Ⅲ-27図）

F4、F5グリッドに位置する地下室である。東側で重複するSK48より新しい。天井部は崩落し、その残骸が遺構西側に巨大ロームブロックとして存在している。そのため、開口部の形状は不明であるが、遺構東側に設置され、西側へ室部が展開する構造をしていたことがわかる。室部の形態はホームベース形の五角形を呈し、その頂点に開口部が位置する。規模は南北220cm、東西260cm、確認面からの深さ200cmを測る。床面、壁面ともに工具痕が残っているものの比較的平滑に整形されている。覆土は開口部から室部へ流れ込んでおり、本遺構埋没終了以降に天井部の崩落が起こったと推定される。

遺物は18世紀前半の陶磁器、土器、釘が少量出土している。遺物の年代観とSA155との位置関係により、大聖寺藩邸に帰属する地下室である。

SK48（Ⅲ-27図）

F4、F5グリッドに位置する遺構である。西側でSU47と重複し、北半部は撹乱で破壊され、遺存状態は良好ではない。平面形は不整楕円形を呈しており、南北約150cm、東西約200cm、確認面からの深さ50cmを測る。壁面、坑底ともに比較的丁寧な調整が施されている。

遺物は18世紀前半の陶磁器・土器が数十点出土している。遺物の年代観とSA155との位置関係により、大聖寺藩邸に帰属する遺構である。

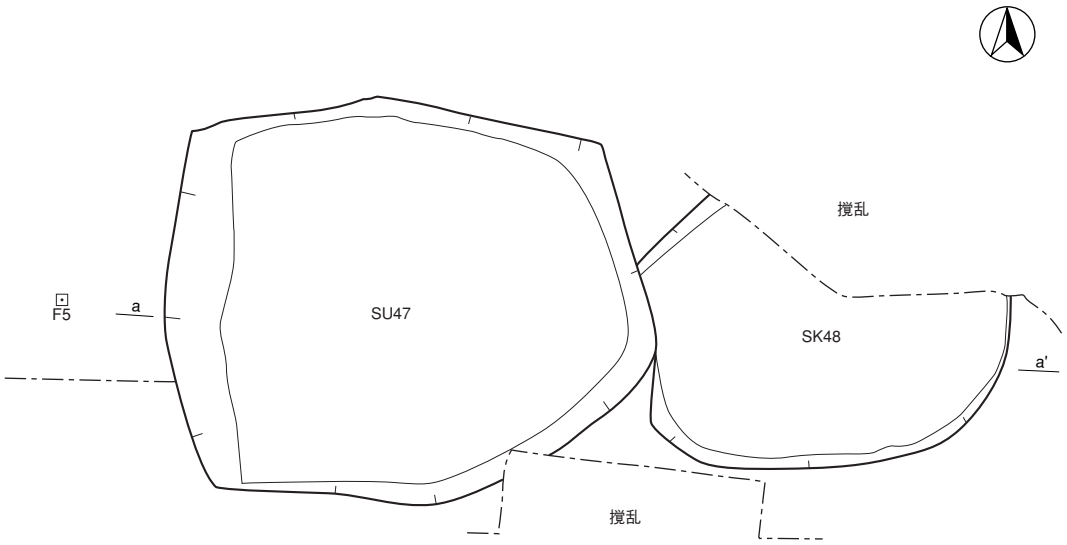
SU49（Ⅲ-28図）

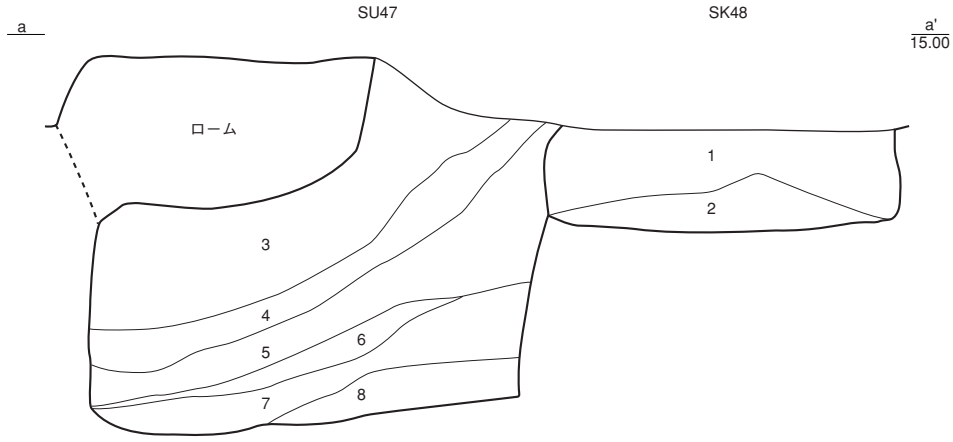
F5グリッドに位置する地下室である。遺構北半部が撹乱を受けているため、遺存状態は悪く、規模、形態ともに詳細は不明である。壁面の状態と、遺構西寄りに天井部の崩落による巨大ロームブロックが存在していることより、開口部は東側に存在し、東壁を除く三方に室部が拡がっていたと推定される。室部には工具痕が残り、坑底、壁面ともに凹凸が認められるが、特に壁面上方から天井部に欠けて著しい。なお確認面からの深さは180cmを測る。覆土は焼土粒、炭化物粒を多量に含む黒褐色土を基本としており、火災後の瓦礫整理により、埋め戻されたことがわかる。火災年代は、出土遺物の様相から享保15年もしくは元文３年の火災に比定される。遺物の年代観とSA155との位置関係により、大聖寺藩邸に帰属する地下室である。

遺物は17世紀後葉の陶磁器、土器がコンテナ１箱出土している。

SK50（Ⅲ-29図）

E4、F4グリッドに位置する遺構である。南壁の一部で重複するSU47より新しい。平面形は1辺190cmを測る方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは70cmを測る。



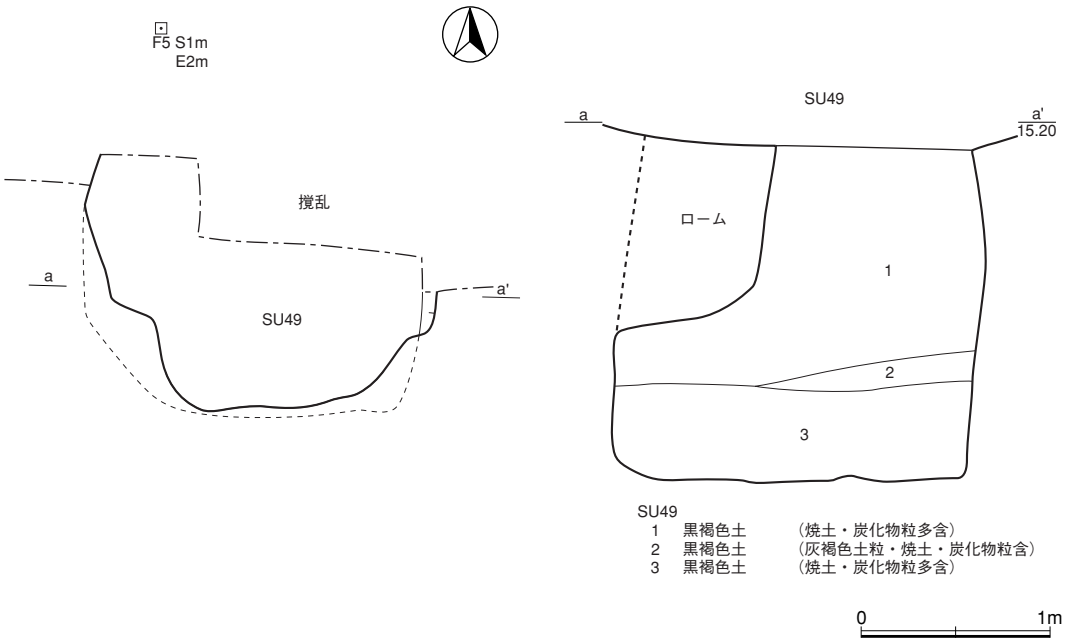


SK48
1　暗黄褐色土　（ローム粒含）
2　暗褐色土　（ローム・灰褐色粘土粒含）

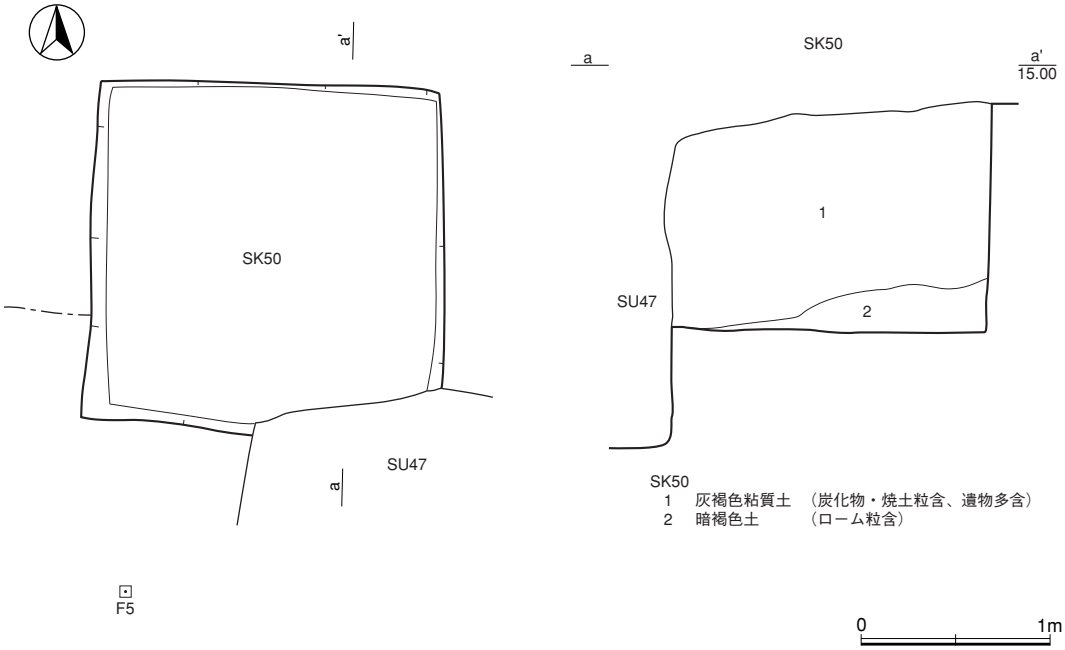
SU47
3　暗灰褐色土　（ローム・灰褐色粘土粒含）
4　暗黄褐色粘質土
5　暗褐色土　（灰褐色粘土粒含）
6　黒褐色土　（灰褐色粘土粒含）
7　灰褐色粘質土　（ローム粒含）
8　暗黄褐色土　（ローム粒含）

0　1m

Ⅲ-27図　SU47・SK48



Ⅲ-28図　SU49



Ⅲ-29図　SK50

壁面、坑底ともに比較的丁寧に整形されている。覆土は坑底直上に暗褐色土が薄く堆積している以外は（2層）、炭化物、焼土粒を多量に含む灰褐色粘質土で形成されている（1層）。

覆土中からは、19世紀前～中葉の多量の陶磁器、土器とともに、簪などの金属製品、食物残滓などが検出された。遺物の年代観より、大聖寺藩邸に帰属する遺構である。

SK51（Ⅲ-30図）

A8、B8グリッドに位置する不定形の土坑である。北側を撹乱に切られ全体は復元できなかった。隅丸方形の遺構が2基重複しているような形状を呈するが、土層の観察から1基であることが確認された。坑底や壁は凹凸が顕著である。覆土は焼土と破砕瓦あるいは焼瓦を多く含む暗褐色土の単層である。これらから火災による桟瓦の一括廃棄土坑であると考えられる。

遺物は二次的な火熱を受けたコンテナ箱に約1箱の陶磁器・土器と多量の焼瓦、金属製品などが出土しているが、19世紀前～中葉の製品が中心である。火災の年代は遺物から19世紀中葉を下限とすると推定できるが、明治元年に火災の記録があり、これに対応するものと推定される。

SU52（Ⅲ-31図）

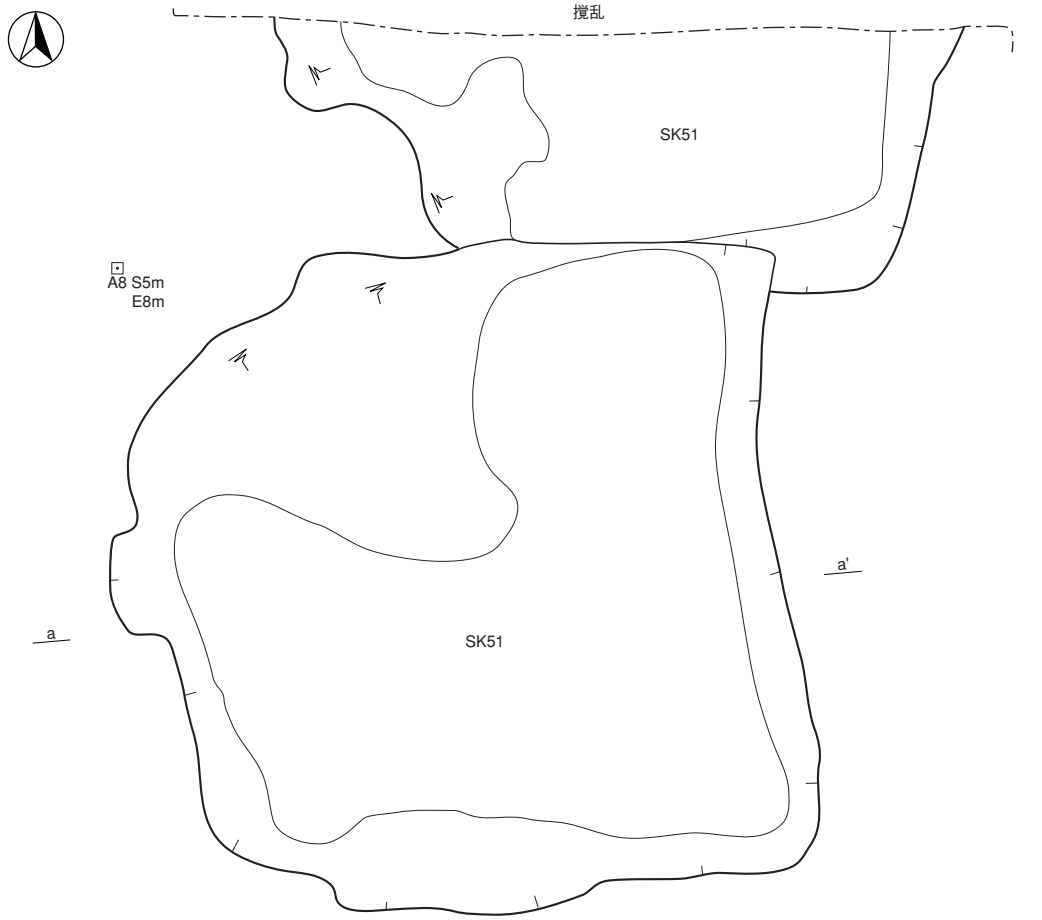
B8グリッドに位置する地下室である。平面形は入口が長方形、室部はやや変形した隅丸方形を呈する。SK90と重複しており、新旧はSK90より新である。規模は入口で東西120cm、南北200cm、坑底で東西260cm、南北290cm、確認面からの深さは350cmを計測する。入口はやや平滑に調整されているが、室部の壁、坑底は凹凸が顕著である。室部は入口より約150cm下から拡がっている。覆土には多くの焼土、炭化物が含まれており、また、焼本瓦も上層を中心に認められた。火災の後始末であろうか？

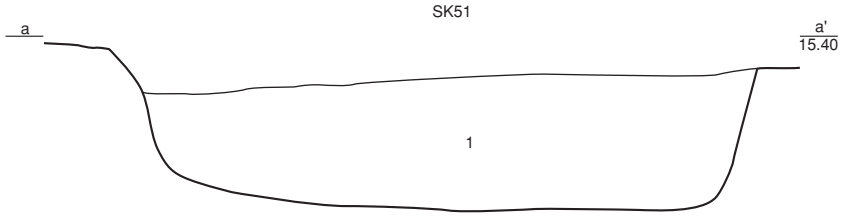
遺物は瓦が出土している。本瓦なので18世紀前半以前であろうが、陶磁器類が出土していないので、詳細な年代的な位置付けは不明である。

SD53（Ⅲ-32・33図）

調査区南西隅A9、A10、B9グリッドにまたがって位置する溝状遺構である。主軸方向は他の遺構とは異なり、西に大きく振れている。規模は長さ11.5m、幅50～70cm、深さは最大80cmを計測する。溝底からやや浮いて断面長方形の空洞が認められた。空洞の外周には腐食した木部、両側には並行する二列の釘列が確認された。釘は頭部の大きないわゆる犬釘状を呈し、対になって30～40cm間隔で58対確認された。空洞の上には土がかぶせられており、暗渠になっている。また、部分的に掘方が膨らみを有する部分が確認されており、木樋を接いでいる部分に該当すると考えられる。以上のような構造は上水道の施設であると考えられるが、両側が調査区域外に抜けているため、詳細は不明である。しかし、本遺構は位置、構造の特徴から『医学部附属病院地点』の中で共同溝建設地点として既報告の「江戸時代の水道」と同一遺構であると推定できる。これを含めた長さは32m程度になるが、この間に桝状遺構などの付帯施設は確認されていない。さらに南東延長上の設備管理棟地点には確認されていないことから、この間で、南方に方向を変じていると推定できる。本郷台地における上水道の記録は千川上水が元禄9（1696）～享保7（1722）年と安永年間の数年に通っていたとされているが、SD53から出土した遺物は19世紀の遺物が中心であり、これには該当しないと思われる。

遺物は上記釘の他には19世紀前～中葉の陶磁器片が数点、瓦片が数点出土している。

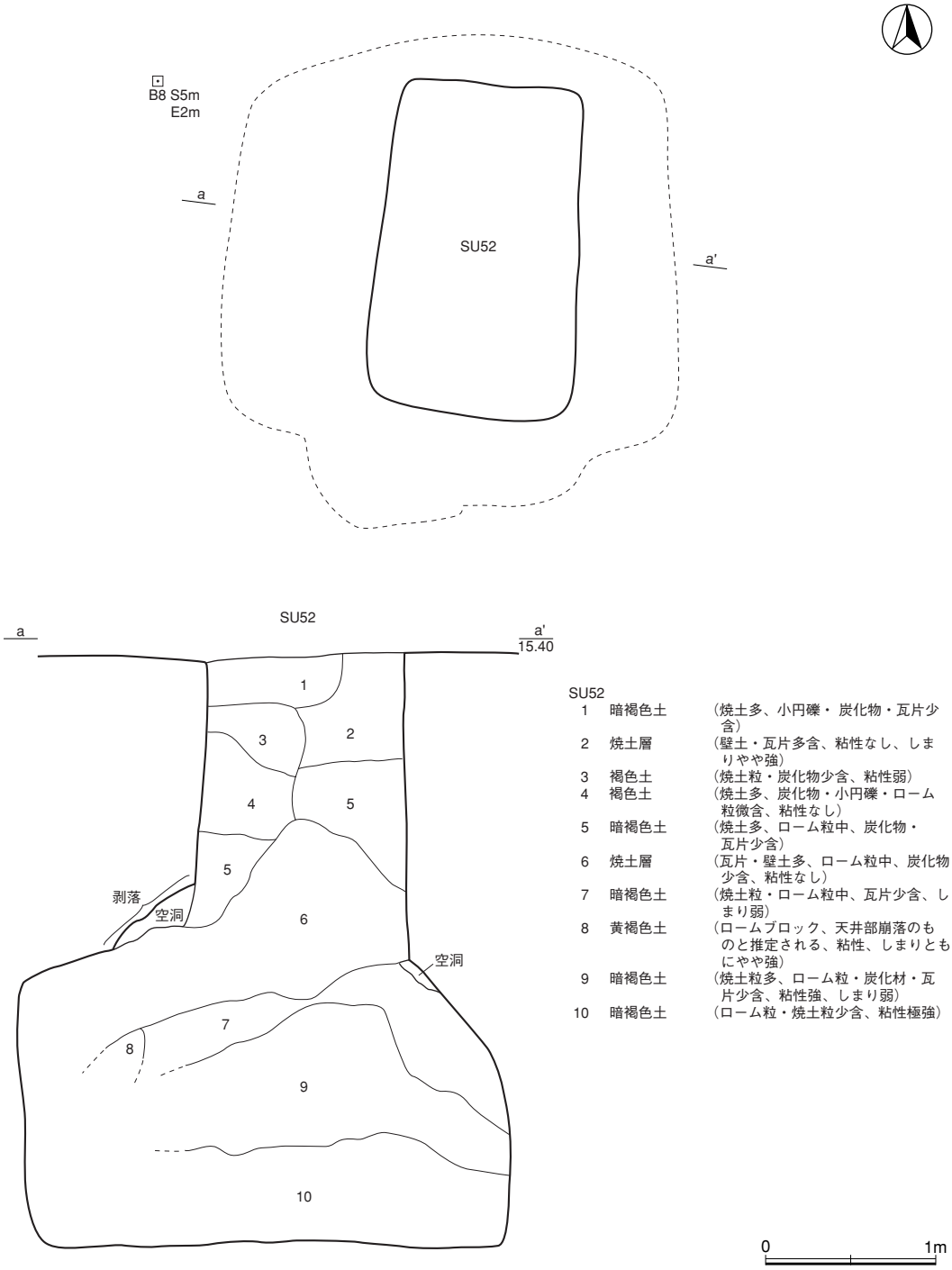




SK51
1　暗褐色土　（焼土・焼土ブロック多、瓦片極多含）

0　1m

Ⅲ-30図　SK51



SU52

1	暗褐色土	（焼土多、小円礫・ 炭化物・瓦片少含）
2	焼土層	（壁土・瓦片多含、粘性なし、しまりやや強）
3	褐色土	（焼土粒・炭化物少含、粘性弱）
4	褐色土	（焼土多、炭化物・小円礫・ローム粒微含、粘性なし）
5	暗褐色土	（焼土多、ローム粒中、炭化物・瓦片少含）
6	焼土層	（瓦片・壁土多、ローム粒中、炭化物少含、粘性なし）
7	暗褐色土	（焼土粒・ローム粒中、瓦片少含、しまり弱）
8	黄褐色土	（ロームブロック、天井部崩落のものと推定される、粘性、しまりともにやや強）
9	暗褐色土	（焼土粒多、ローム粒・炭化材・瓦片少含、粘性強、しまり弱）
10	暗褐色土	（ローム粒・焼土粒少含、粘性極強）

Ⅲ-31図　SU52

SD54（Ⅲ-54・92・138・140図）

A8、B8、C8、D8、E7、E8、F7グリッドに調査区を東西に横断するように位置する溝状遺構である。所々近代以降の撹乱によって削平されている。東からSD216、SK215、SD62、SU211、SU313、SK139、SK137、SK174、SK175、SK238と重複関係にあり、そのいずれより旧である。溝の断面形は箱形に近い逆台形を呈している。溝の主軸は他の遺構より若干振れており、時期差が想定される。規模は長さ34m、幅70cm、確認面からの深さは最大80cmを計測する。溝底、壁は極めて丁寧に整形されている。覆土は粒子の細かい黒褐色土で構成されている。

遺物は出土していない。

SK55（Ⅲ-34図）

B9グリッドに位置する円形を呈する土坑である。規模は東西200cm、南北230cm、確認面からの深さは20cmを計測する。坑底、壁は凹凸が顕著である。覆土は粒子の細かい黒褐色土で構成されている。

遺物は17世紀前～中葉の陶磁器・土器片が出土している。

SK56（Ⅲ-35図）

B9グリッドに位置する方形の土坑である。北東の隅がやや張り出している。規模は東西160cm、南北160cm、確認面からの深さは40cmを計測する。坑底、壁は凹凸が顕著である。北東隅は壁がやや傾斜を持ってスロープ状に立ち上がっている。

遺物は17世紀後半の陶磁器・土器類が数十点出土している。

SK57（Ⅲ-34図）

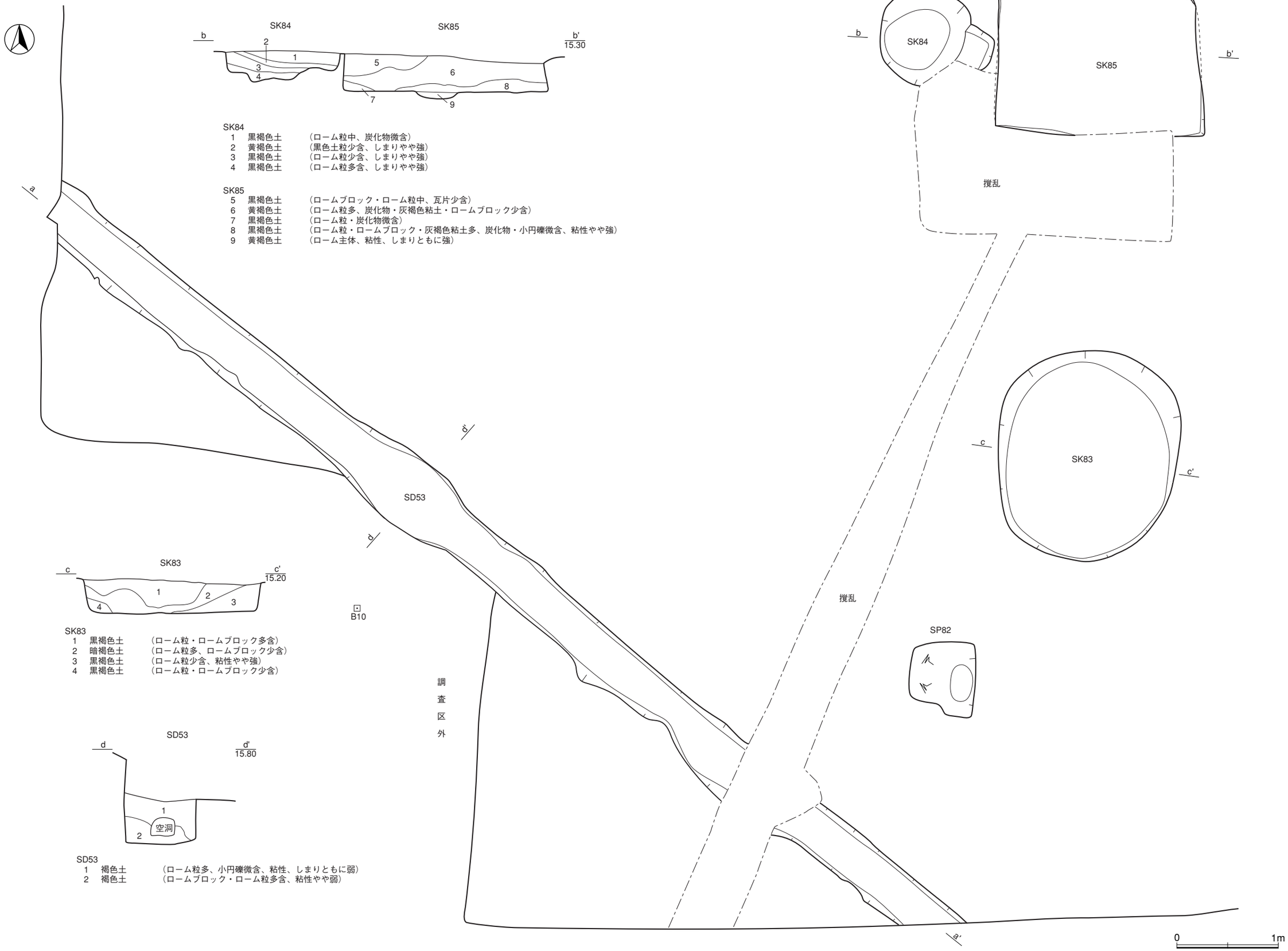
B9グリッドに位置する土坑である。平面形はやや西側に張り出した楕円形で、半円形に近い。また、坑底は西側がやや深く、東に向かって上がっている。規模は東西160cm、南北230cm、確認面からの深さは最大30cmを計測する。坑底、壁は凹凸が顕著である。覆土は西側上層に純焼土層が確認され、下層はSK55覆土と近似した黒褐色土が確認できた。

遺物は出土していないが、SK55との覆土の共通性から17世紀の遺構である可能性もあろう。

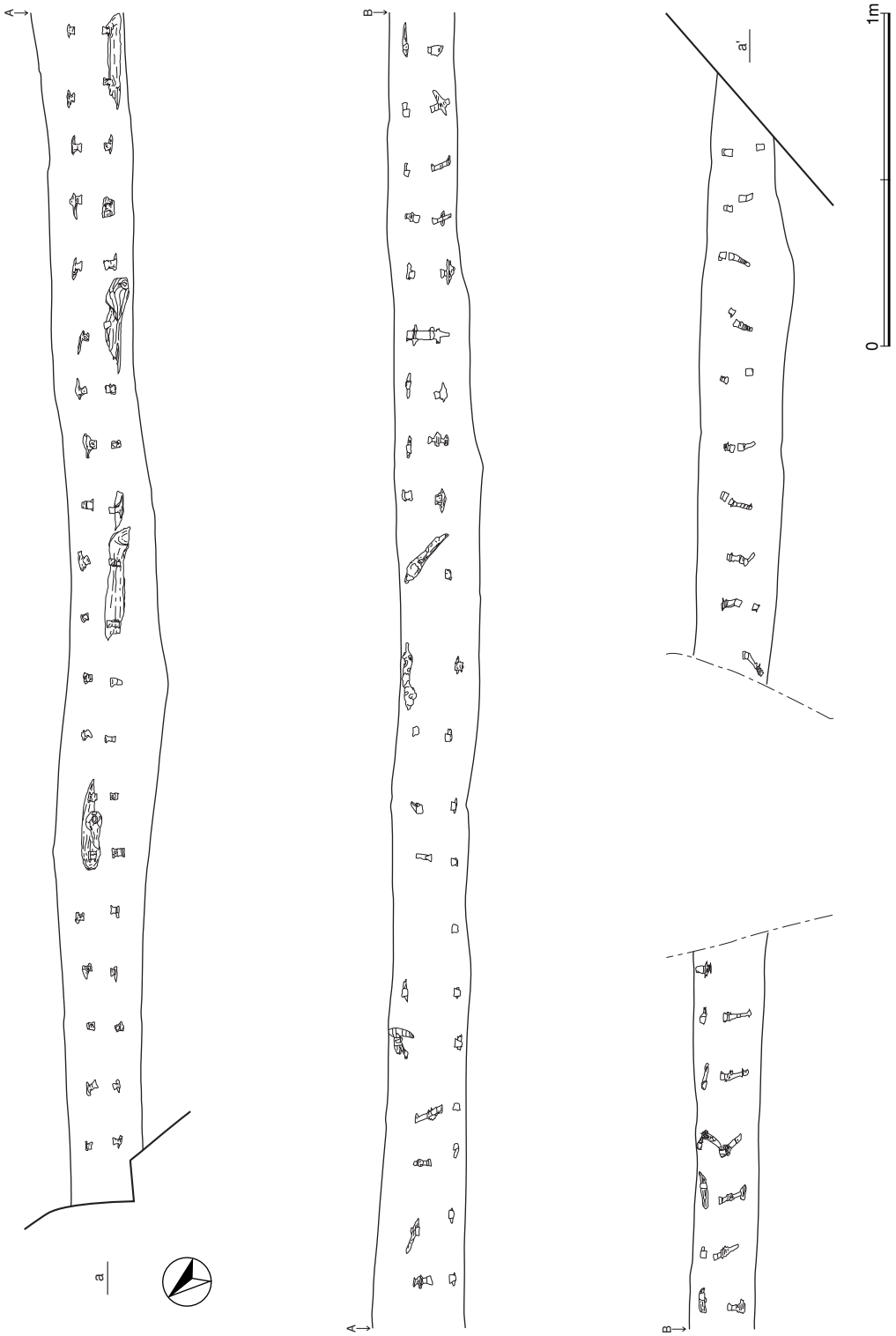
SU58（Ⅲ-37・38図）

B8、9グリッドに位置する地下室である。階段が付く入口部と「L」字状を呈する室部に分かれる。入口の階段は7段分確認されたが、きれいに段が検出されなかったことや板や杭などを当てた痕跡が認められたことから、ロームを粗掘りした後に板や杭などでステップを作っていたと考えられる。ステップの幅は130cm、確認できたステップの長さは300cmを計測する。室部の入口と階段の下段の両側にはピットが確認され、このうち階段の下3段にある6基のピットの底には平石が設置されていた。これらのピットは天井崩落防止のための支え施設の基礎であろうと推定される。室部は階段の延長方向にやや拡がり、420cmの奥行を持つ。また、この室部から西方向に「T」字状に室が延びており、360cmで奥壁に達する。確認面から坑底までの深さは240cm、室部の幅は180cm、坑底から天井までは180cmを計測する。坑底や壁面は丁寧に平滑に整形されている。覆土は下層と室部にはロームあるいはローム主体の土で、階段部上層は焼瓦や漆喰が多く混入した土で構成されていた。

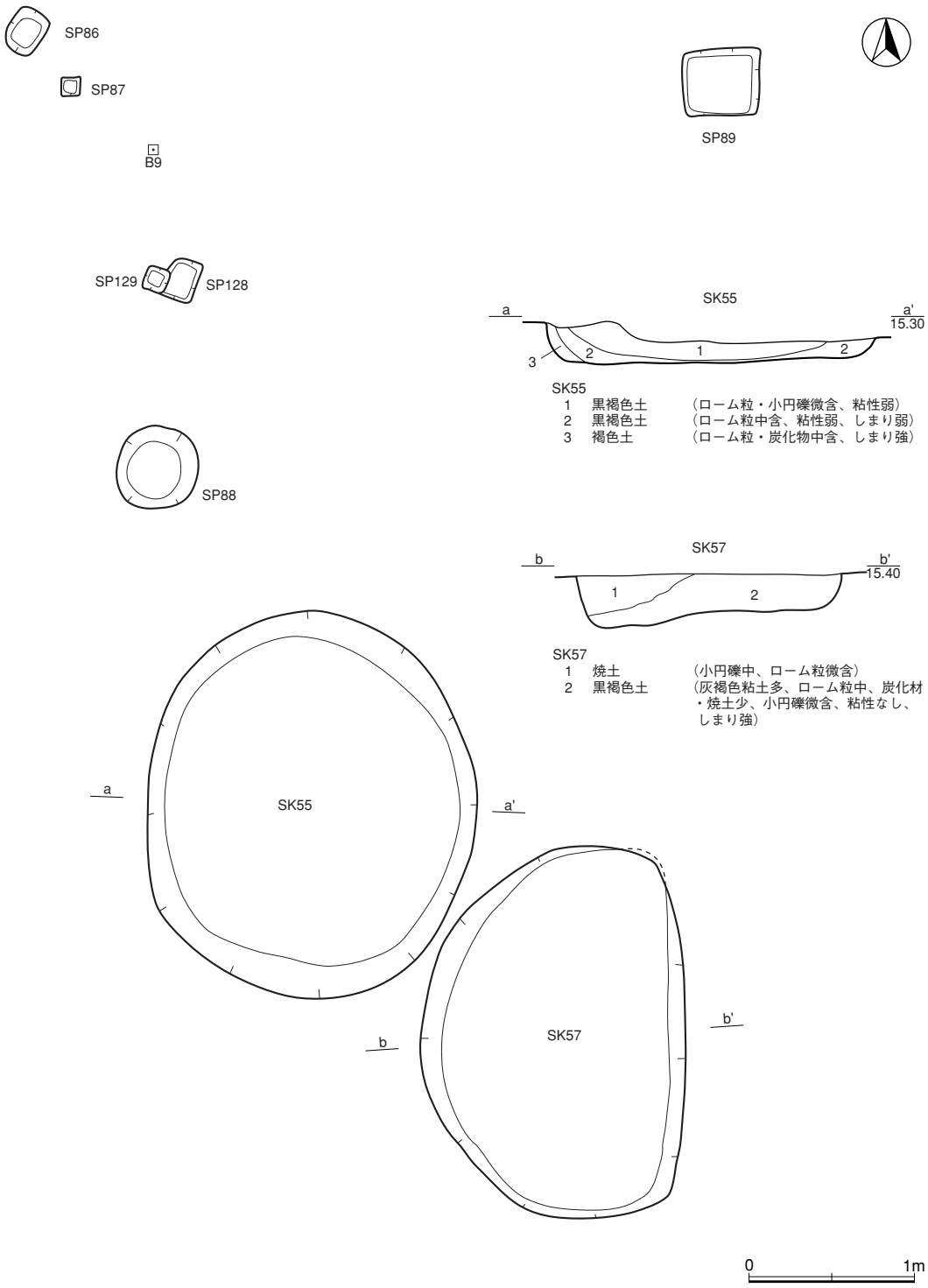
遺物は18世紀前半～中葉の陶磁器・土器がコンテナ箱に5箱のほか桟瓦、金属製品などが少量



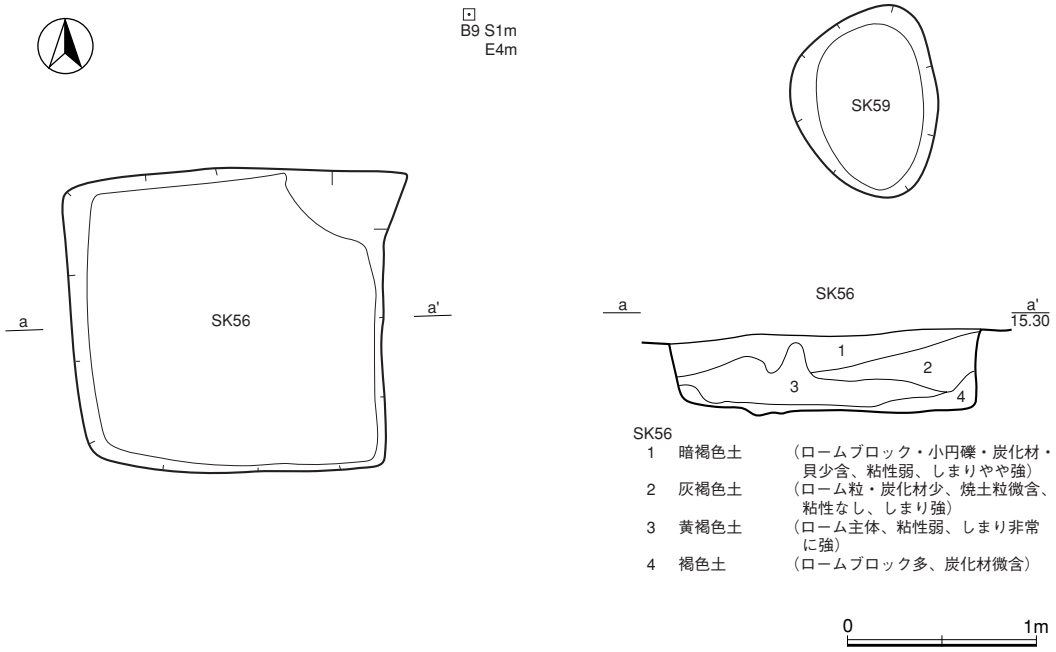
Ⅲ-32図　SD53（1）・SP82・SK83・SK84・SK85



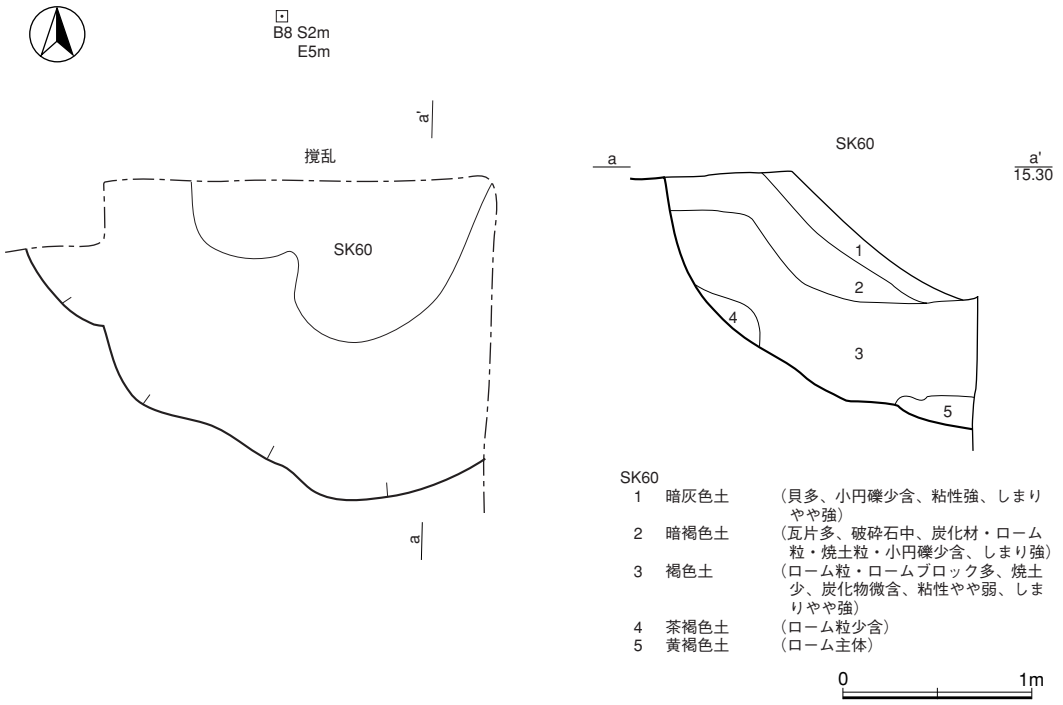
Ⅲ-33図　SD53（2）



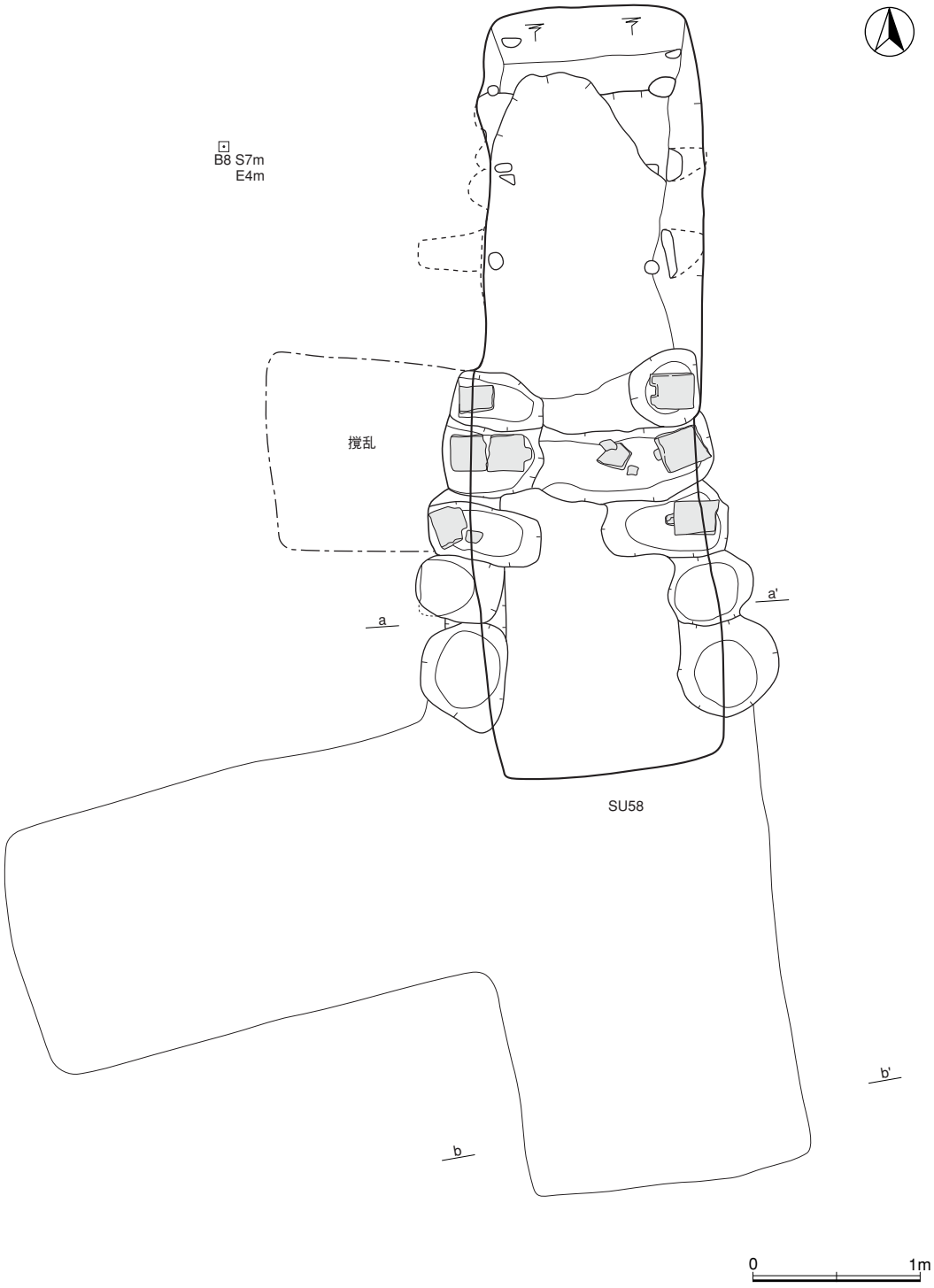
Ⅲ-34図　SK55・57・SP86・87・88・89・128・129



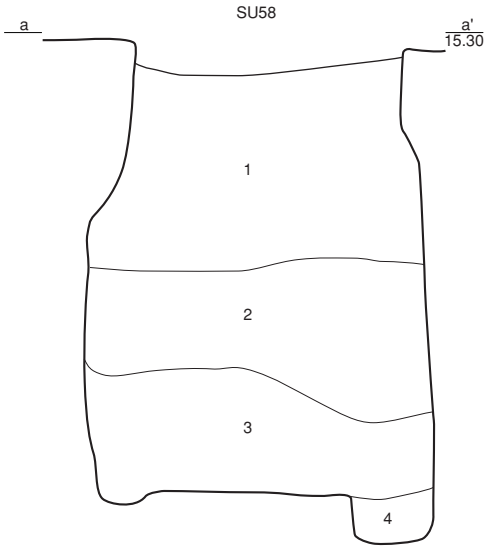
Ⅲ-35図　SK56・SK59



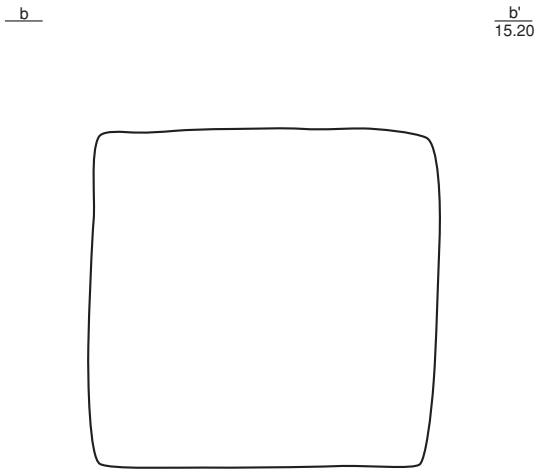
Ⅲ-36図　SK60



Ⅲ-37図　SU58（1）



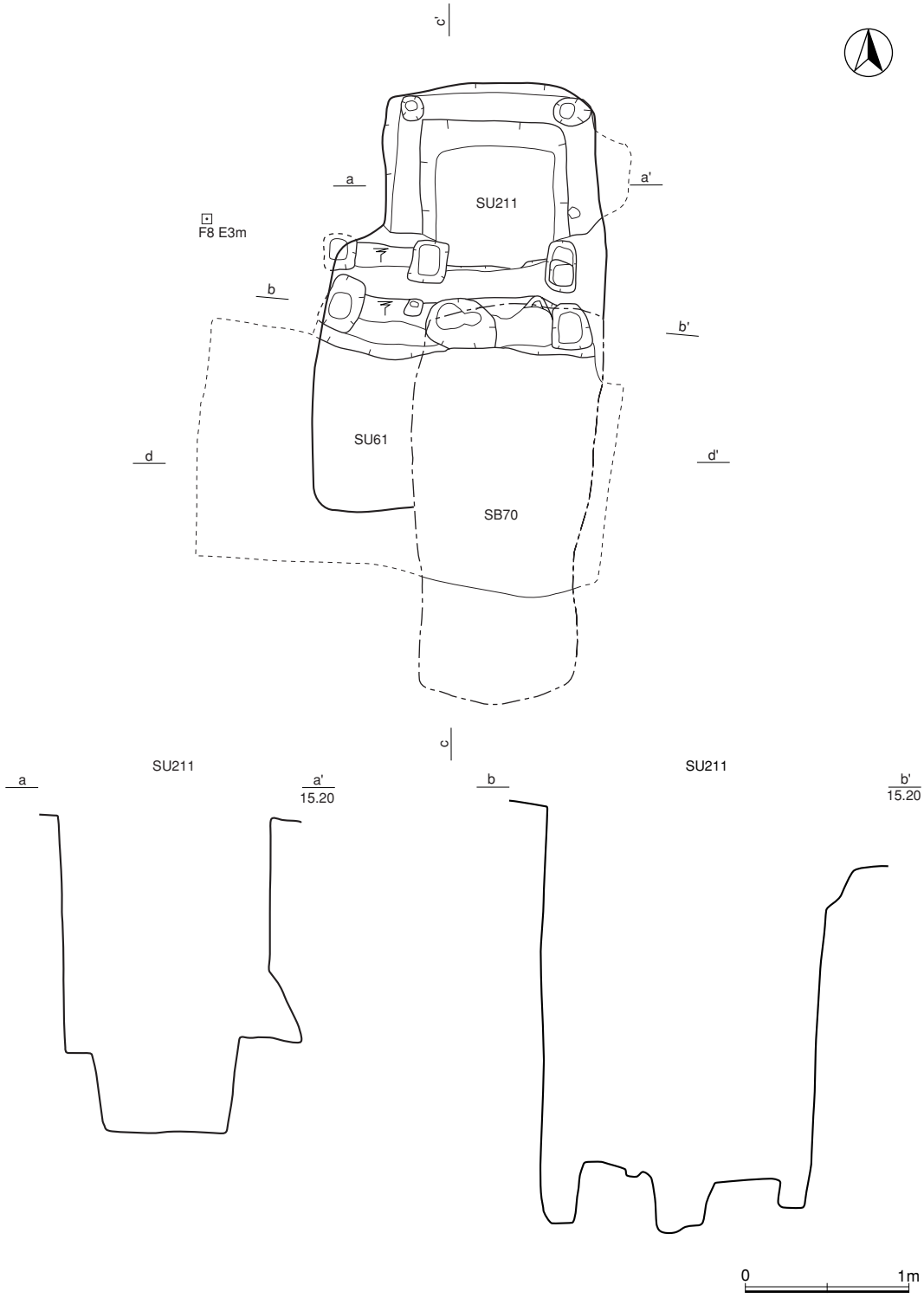
SU58
1　暗灰褐色土　（灰褐色粘土・瓦片・漆喰・円礫多含）
2　明褐色土　（ローム粒・ロームブロック主体、粘性やや強）
3　褐色土　（ローム粒・ロームブロック多、小円礫・黒色土粒少含、粘性強）
4　黄褐色土　（ローム主体、粘性非常に強）



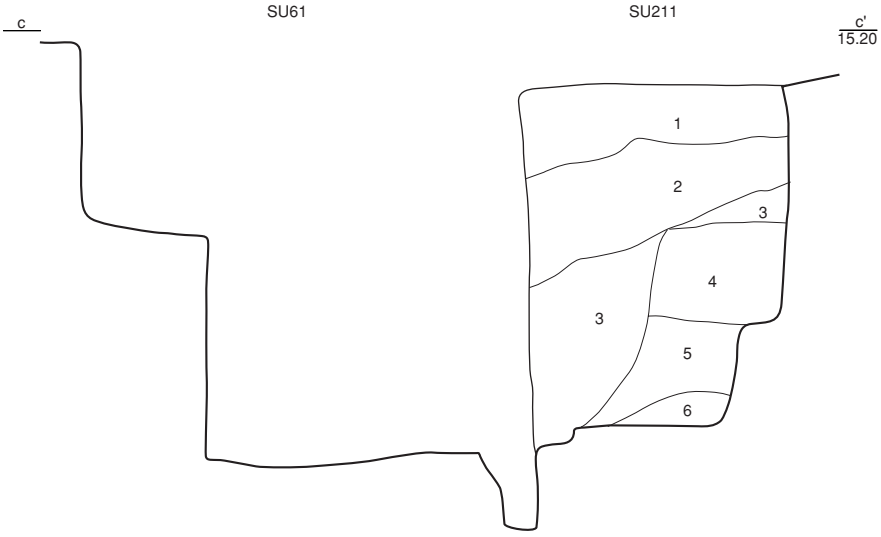
SU58室部分

0　1m

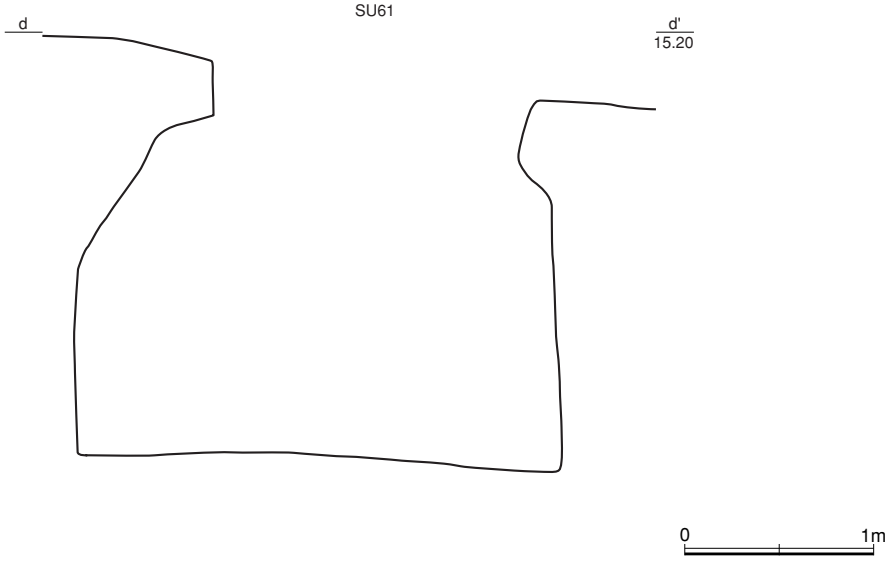
Ⅲ-38図　SU58（2）



Ⅲ-39図　SU61（1）・SU211（1）



SU211
1　褐色土　（ローム粒極多、炭化物・焼土粒少含、粘性・しまりやや強）
2　灰褐色土　（粘土粒・ローム粒・粘土塊多、炭化物少含、粘性強、しまりやや強）
3　暗褐色土　（ロームブロック・ローム粒多、炭化物粒微含、粘性強、しまりやや強）
4　灰褐色土　（ローム粒・炭化物粒少含、粘性強）
5　暗灰褐色土　（砂質粘土・ローム粒・炭化物粒少含、粘性強、しまり弱）
6　暗黄褐色土　（ローム粒主体、炭化物粒少含、粘性強、しまりやや弱）



Ⅲ-40図　SU61（2）・SU211（2）

出土している。

SK60（Ⅲ-36図）

B8グリッドに位置する土坑である。旧附属病院管理棟の基礎によって北及び東側を削平を受けており、遺存状態は悪い。遺存している規模は東西240cm、南北170cm、確認面からの深さは150cmを計測する。坑底や壁は凹凸が多く、丸底状を呈する。覆土は坑底に沿って傾斜をもって堆積している。

遺物は上層を中心に貝、魚骨、動物骨など自然遺物や17世紀末～18世紀後半の陶磁器がコンテナ箱で3箱のほか本瓦などが出土し、生活ゴミを廃棄していたと推定される。

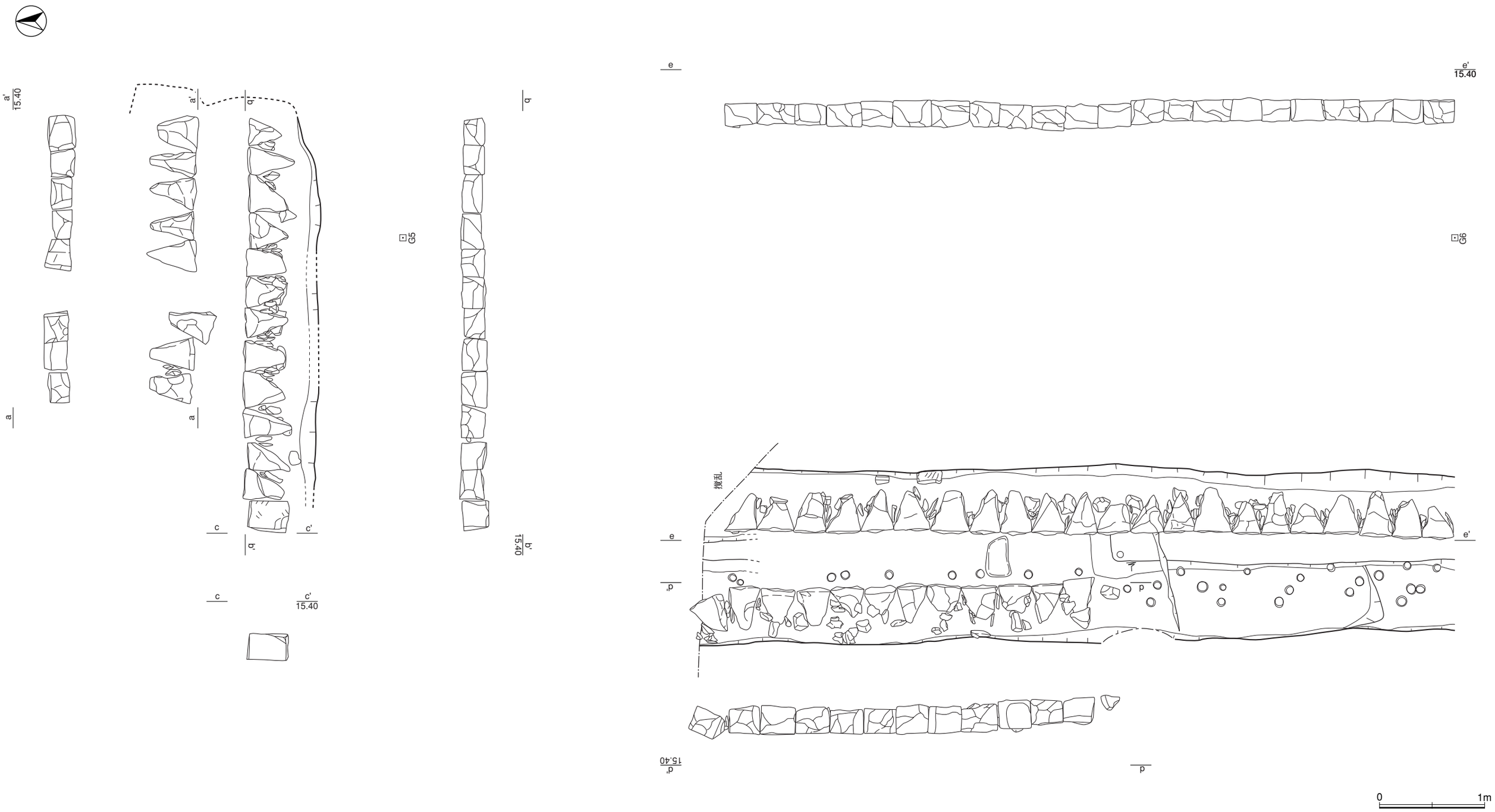
SU61（Ⅲ-39・40図）

F8グリッドに位置する地下室である。遺構東側を旧東京医学校本館基礎（SB70）によって撹乱され、SU211より新しい。入口部の平面形は長方形を呈し、その規模は東西170cm、南北120cmを測る。室部は、東へ25cm、南へ40cm、西へ75cmと、北壁を除く3方向に拡がっている。室部の平面形は長方形を呈し、東西250cm、南北140cm、確認面から床面までの深さは210cmを測る。床面、壁面ともに丁寧な調整が施されているが、天井は崩落により壁際を除いてほとんど残存していない。天井高は東壁で140cm、西壁で100cmと壁面に段差が生じている。北壁ではSU211を切って構築されており、その重複部分に幅25cm、深さ10cmの溝を設け、その両脇と中央に3基のピットを配置している。ピットには柱痕が、ピットの北側には板材の痕跡が認められ、ロームを持たない壁面に対する補強を執り行っている。

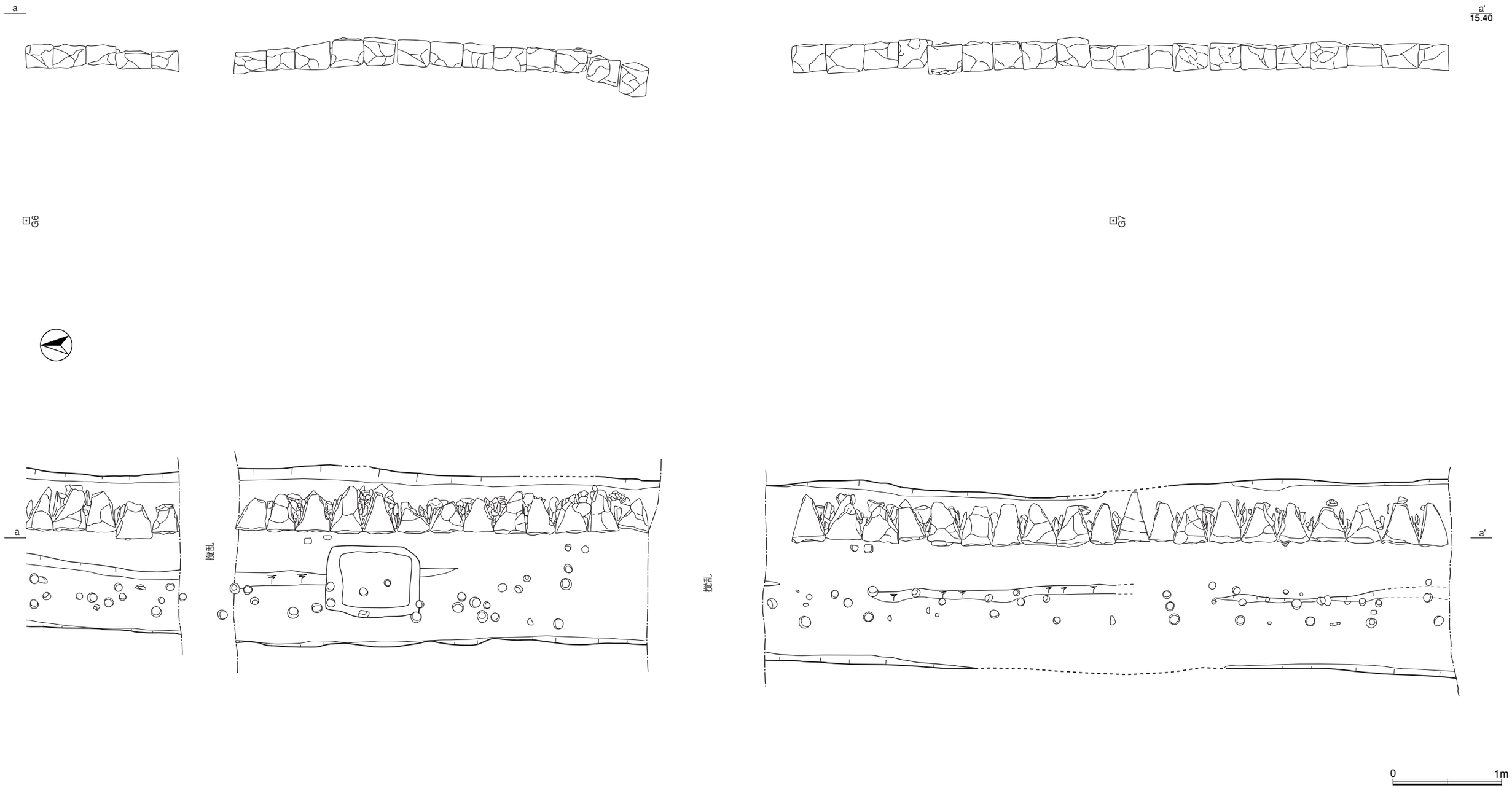
遺物は18世紀前半の陶磁器、土器がコンテナ2箱出土したほか、本瓦、釘、小柄などの金属製品が出土している。

SD62（Ⅲ-41～44図）

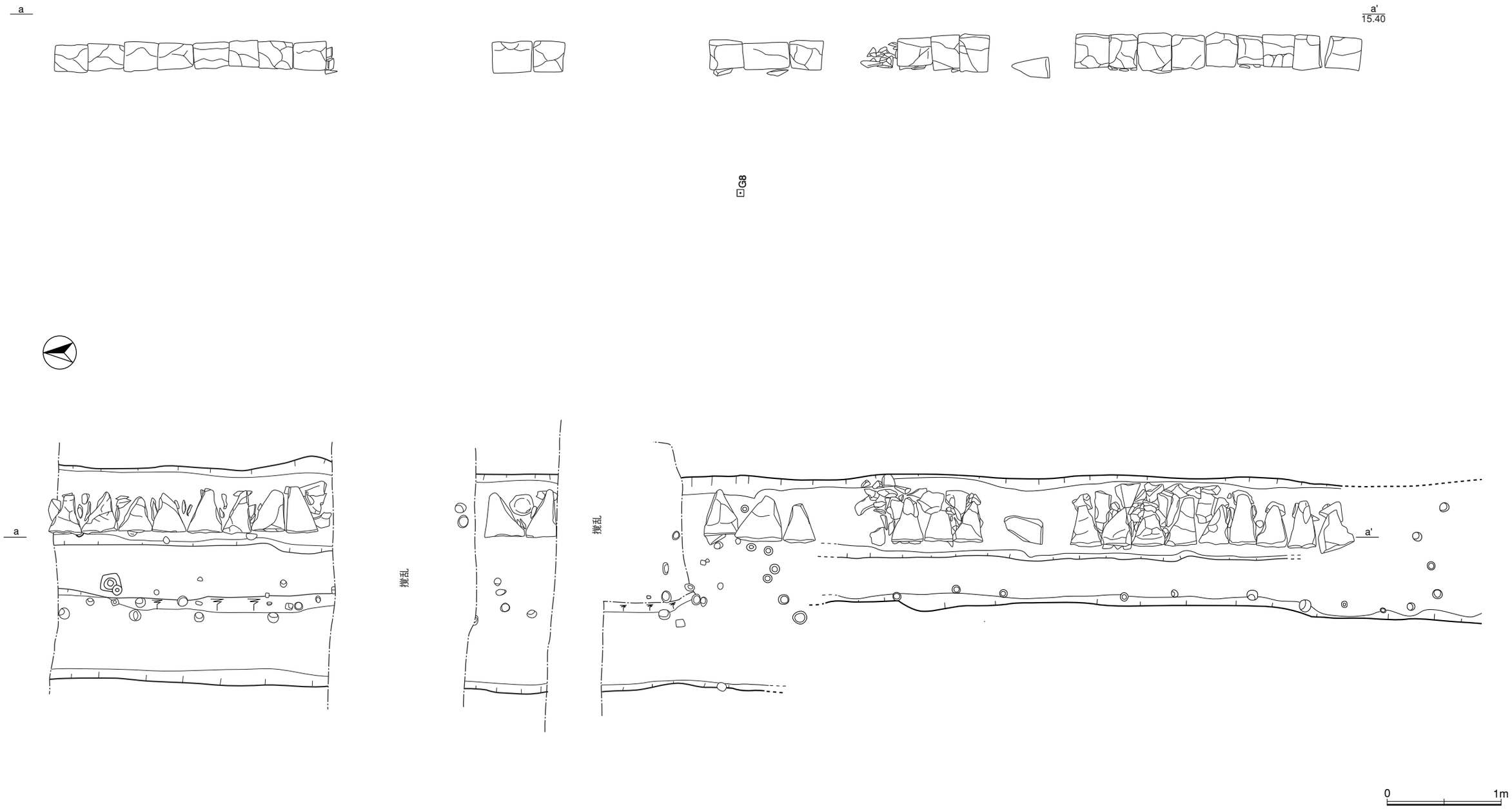
F4～F9グリッドにかけて南北に延びる石組溝で、調査区内では南北長53mを確認した。近代以降の撹乱及び石の抜き取りによって遺存状況は良好ではない。以下、構造について北部から説明を加える。F4～G4グリッドにかけて東西に延びる石組溝が存在する。東西両側とも撹乱を受け、詳細な状況を掴むことはできないが、西側に関しては、溝の南側縁石の最西端の切石のみが長方形を呈し、北面、西面が丁寧に調整されていることから、この部分で溝が南へ直角に折れることが理解できる。その切石より撹乱を挟み南へ約450cmの位置に、南北に続く石組溝が存在し、側縁石の規模、石材、掘方の規模などが東西に延びる溝と同様であることから、逆L字状に屈曲する同一遺構であると判断できる。この南北部分の西側は5ライン南6.5m以南では、側縁石は存在しなかった。掘方の幅は150～180cmで推移する。その断面形は逆凹字状を呈し、切石設置部分が流路よりも1段低くなっている。この状態は8ラインまで続く。8ライン以南では、西側の1段低い部分が無くなり、掘方の幅が急激に細くなる。東側には変化は認められない。その後、8ライン南7mで西側へ直角に折れ、さらに250cm先で再び南へほぼ直角に折れる。この西から南に折れるコーナー付近で西壁の様相が変化し、1段テラスを有するようになる。さらに9ライン南約430cmで、南下する溝に対し、東方向へもう1本の石組溝が派生する。南下する溝には側縁石が残存していなかったこと、東に延びる溝との交点の切石が長方形を呈し、西側、南側の2面が丁寧に整形されていることから、当初直線状に延びていた石組溝が、何らかの理由で東寄りに造り直さ



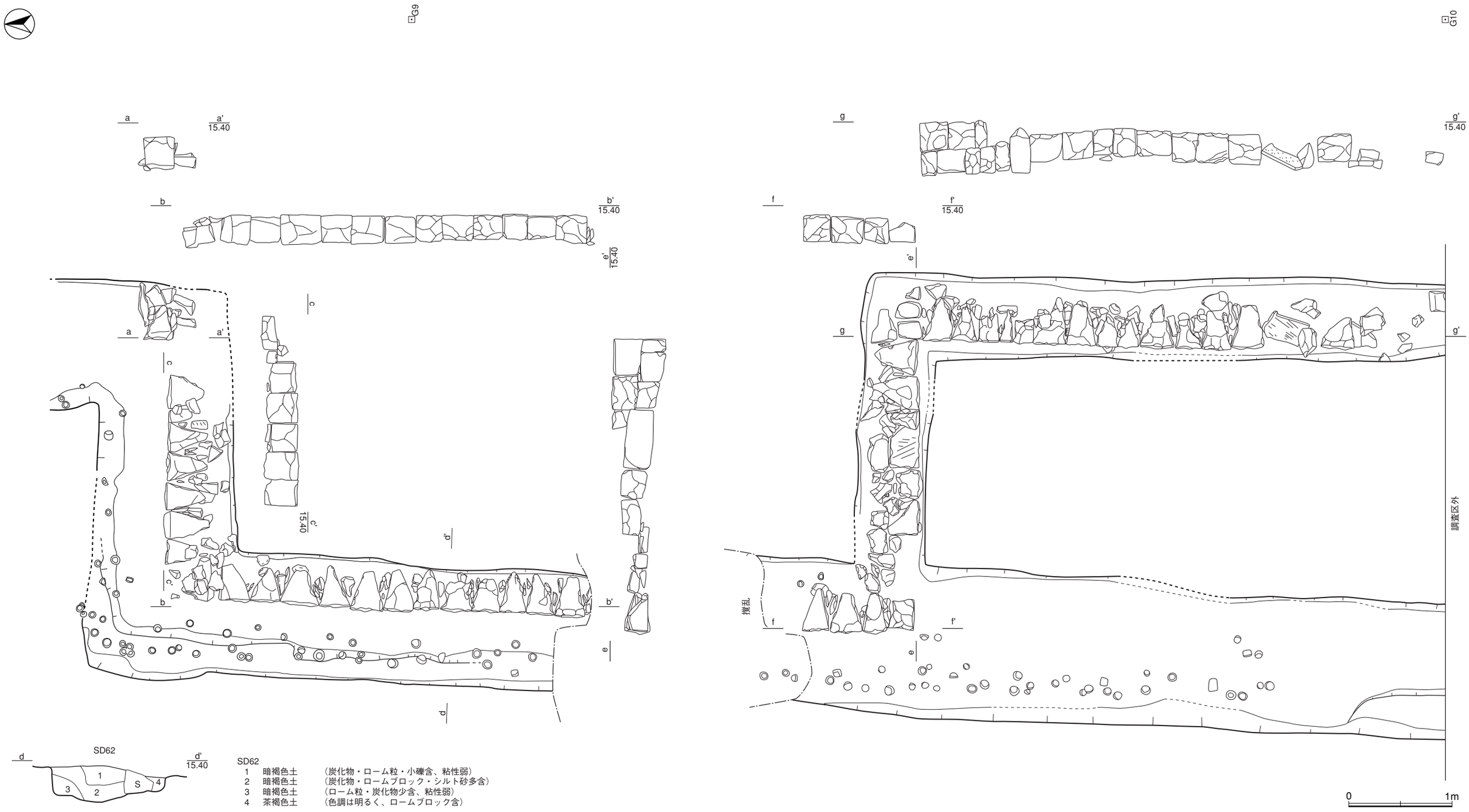
Ⅲ-41図　SD62（1）



Ⅲ-42図　SD62（2）



Ⅲ-43図　SD62（3）



SD62

1	暗褐色土	（炭化物・ローム粒・小礫含、粘性弱）
2	暗褐色土	（炭化物・ロームブロック・シルト砂多含）
3	暗褐色土	（ローム粒・炭化物少含、粘性弱）
4	茶褐色土	（色調は明るく、ロームブロック含）

Ⅲ-44図　SD62（4）

れた可能性がある。

使用された石は、コーナーなどの特殊部分を除き、全体的に同一石材の間知石が利用され、割石、川原石は認められない。裏込めには間知石製作時に発生した剥片、砕片を用いている。また、先述したように東側への分岐部分では、石組の前面に流路のスペースが全くない。さらに南へ折れるクランク部分では、掘方の溝底レベルが低く、その部分のみ間知石を２段積み上げ、石の上面が水平になるように意識している。何故流路がないのに間知石を埋設したのかは不明である。

本遺構の特徴のひとつに、南北部分西寄りに多数検出された杭穴がある。この杭穴は一見すると無規則に打たれているように観えるが、流路と西側段差の境を中心に存在している。なかには、ほぼ直線状に並ぶものも存在し、F5グリッドではその列が切石の前面に延びていることが注目される。その反面、この杭穴は東側側縁石下にはほとんど存在していない。その様相からこの石組溝の流路西側部分は、元来、木枠によって構築された溝であったことが推定される。そして少なくとも、西側石組が存在する部分の掘方と同様の幅を有する８ライン以北に関しては、西側壁が木枠から、石組に改築されたことが考えられる。

以上の所見から、本遺構の形態変遷をまとめると、溝東側は石組、西側は木枠という構造によって構築され、溝南北部分は、SE271の北側で西側へクランク状に折れ、そのまま直線を成し調査区域外へ延びていた。その後、改築が施され、８ライン以北で溝西側が木枠から石組に変更され、SE271南側で再び東側へクランク状に折れ、結果的にSE271の周囲のみ西側へ張り出す形状に変化した。

本遺構の掘方より、瀬戸・美濃の染付端反碗（Ⅳ-19図３）が出土しており、19世紀以降に構築されたことは明かである。また、覆土中出土遺物にはⅧｄ期に限定される遺物は認められなかったものの、江戸絵付け（錦書）を施した瀬戸・美濃の磁器小坏（Ⅳ-20図９）が出土していることより、Ⅷｃ期以降に廃絶されたことが確認され、おそらく幕末まで機能していたことが予想される。一方、本遺構クランク部分東側に隣接するSE271（Ⅲ-106図）は、構築時期こそ限定できないものの、文化年間の様子が描かれたとされる「江戸藩邸上屋敷図」記載の井戸に対比することができる。また出土遺物から幕末まで機能していたことも確認されていることから、本遺構と同時期に機能していたことは想像に難くなく、本遺構のクランク部分は、SE271との共存が大きく関与していることが想定される。

遺物は、覆土中より19世紀前～中葉の陶磁器、土器がコンテナ11箱出土したほか、桟瓦、金属製品が出土している。また、掘方からは19世紀前葉の陶磁器、土器がコンテナ５箱出土している。

SU63（Ⅲ-45図）

F5グリッドに位置する地下室である。遺構南半部でSD92と重複している。天井部の損壊が著しく、開口部の形状は不明であるが、壁面の状態より北東部に存在したと考えられる。室部は、東西、南北長ともに150cmを測る鉤形を呈し、南壁と西壁側にそれぞれ拡がっている。坑底から天井までの高さは西奥壁で50cmと低い。坑底、壁面は、開口部と考えられる東壁では丁寧に整形されているが、それ以外では工具痕による凹凸が残存する。覆土は坑底直上から天井部付近にかけて粘土、炭化物などが堆積しているが（２～４層）、竪坑部は焼土で埋め尽くされている。その様相

から遺構廃絶途中に火災が発生し、その瓦礫整理によって最終的に埋め戻されたと推定される。遺物は18世紀前半の陶磁器、土器類がコンテナ２箱出土しており、その大半は二次焼成を受けていることから、享保15年もしくは元文３年の火災に比定される。よって本遺構は大聖寺藩邸に帰属する地下室である。

SU64（Ⅲ-46図）

F5グリッドに位置する地下室である。開口部、天井部ともに原形を残しており、遺存状況は良好である。開口部の平面形は長方形を呈し、南北80cm、東西90cmを測る。室部は四方全てハの字状に緩やかに拡がり、さらに西壁では大きくオーバーハングし、明確な天井部が形成されている。室部の平面形は長方形を呈し、南北125cm、東西170cmを測る。確認面からの深さは開口部直下で190cmを測り、西壁に向かって緩やかに下がっている。壁面、床面ともに丁寧な整形が施されている。覆土は暗灰褐色土の単層で、短期間に埋め戻されたことを物語っている。

遺物は18世紀前半の陶磁器、土器がコンテナ１箱出土したほか、ガラス小玉などが出土している。出土遺物の年代観とSA155との位置関係から大聖寺藩邸に帰属する地下室である。

SU65（Ⅲ-47図）

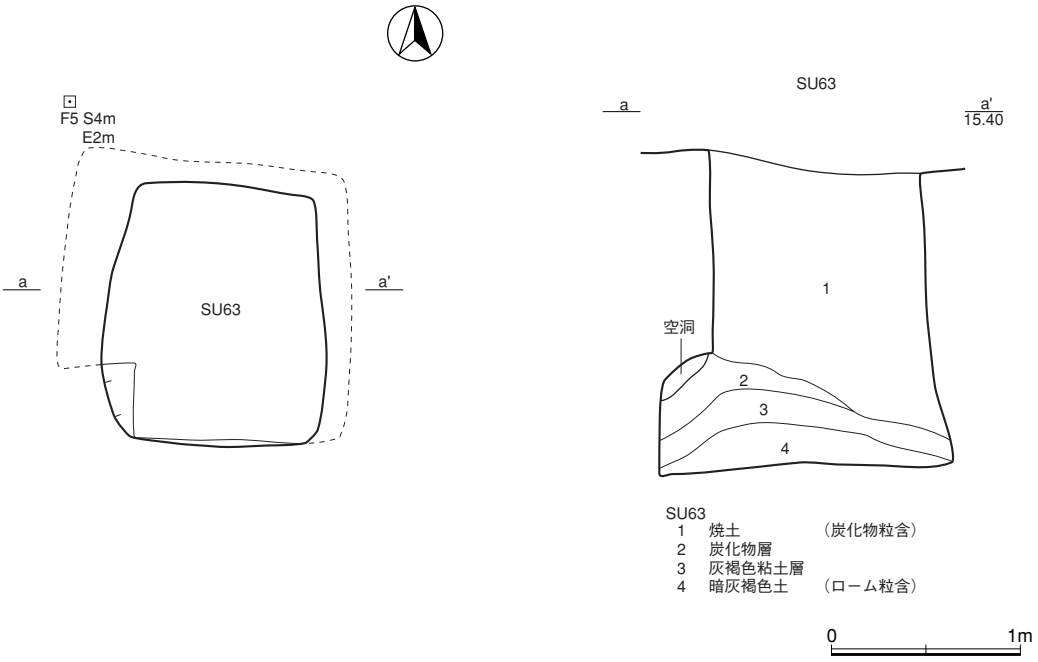
F6グリッドに位置する地下室である。開口部東壁は崩落しているが、本来は南北に長い長方形を呈していたと考えられる。その規模は、南北110cm、東西推定80cmを測る。竪坑はハの字状に緩やかに拡がり、西壁側に室部を有している。室部は長方形を呈し、南北110cm、東西150cmを測る。確認面からの深さは170cmを測る。天井高は奥壁で90cmを測り、竪坑部から奥壁までの坑底、壁面ともに丁寧な整形が施されている。覆土は開口部から奥壁に向けて灰褐色土（1、3層）と暗黄褐色土（2層）が交互に堆積している。

遺物は18世紀前半の陶磁器、土器がコンテナ１箱出土しているほか、包丁が出土している。出土遺物の年代観とSA155との位置関係から、大聖寺藩邸に帰属する地下室である。

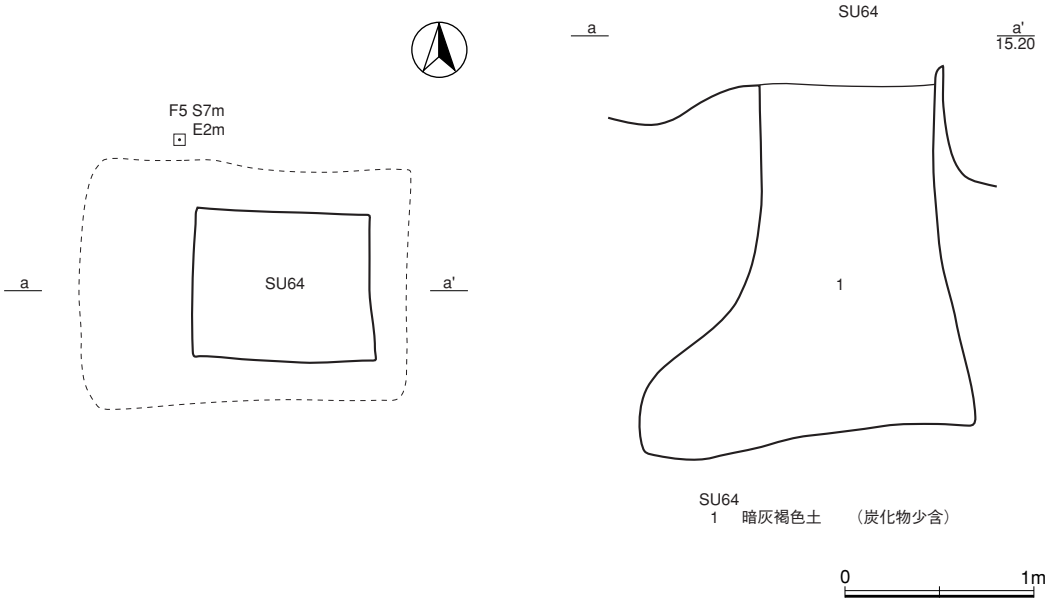
SL71（Ⅲ-49～51・137図）

F5～F7グリッドにかけて南北に並ぶ円形土坑群でａ～ｊとｋ～ｐの２列、15基を確認した。両ラインともN-1°-Eで、ほぼ南北方向を示し、3m間隔で平行に並んでいる。東列ではｃがSD92を切っている他は他遺構との重複関係は存在しない。一方、西列ではｋがSU49に、lがSU63に、ｍがSK67に切られている。東列の円形土坑の規模は直径50～60cm、確認面からの深さ10～20cmと浅い。西列の円形土坑の規模は直径90cmを測るlを除けば50～60cm、確認面からの深さ10～20cmと東列とほぼ同様の値を示す。覆土は粘性の強い灰褐色土を基調としている。各円形土坑の性格は遺構形態、覆土の様相から便漕と考えられる。また、各土坑の配置はa-b、c-d、e-f、i-j間が40～45cmと、それ以外と比較して近接して配されている。この遺構間距離の1/2（20cm）を直径50cmの円形土坑の両側に加えると、円形土坑１単位に幅90cmを与えることができる。すなわち、厠１区画が90cm四方を表し、それが２区画連続して構築された様相を示していると考えられる。

覆土最上層に焼土層が堆積している土坑が数基認められ、火災を契機とした廃絶が想像される。出土遺物はないものの、遺構の新旧関係より元禄16年の火災の可能性が最も高い。



Ⅲ-45図　SU63



Ⅲ-46図　SU64

SK74（Ⅲ-128図）

F5、G5グリッドに位置する遺構である。平面形は不定形を呈し、南北205cm、東西145cm、確認面からの深さ30cmを測る。覆土は灰褐色粘土粒を含む黒褐色土を基調としている。本遺構はSK72と重複しているが、ともに植栽痕と推定される。

遺物は19世紀代の陶磁器、土器が少量出土している。

SU75（Ⅲ-48図）

F6グリッドに位置する地下室である。開口部は、1辺90cmを測る正方形を呈す。竪坑壁面はほぼ垂直に立ち上がり、坑底までの深さは160cmを測る。壁面には工具痕が残るものの、全体的には丁寧な整形が施され、平滑に仕上がっている。室部は開口部西側に拡がり、南北105cm、東西160cmを測る長方形を呈している。天井は竪坑からほぼ直角に屈曲し、天井高は西奥壁部で70cmを測る。覆土は暗灰褐色土を基調とし、短期間で埋め戻された様相を呈している。

遺物は18世紀前半の陶磁器、土器がコンテナ2箱出土しているほか、金属製の柄鏡、包丁が出土している。

SU76（Ⅲ-124図）

F5グリッドに位置する地下室である。近代以降の建築基礎、埋設管などによって大きく撹乱され、遺存状態は極めて悪い。開口部は撹乱の影響で残存していない。坑底は南北190cm、東西170cmを測る長方形を呈している。

遺物は、17世紀末の陶磁器、土器がコンテナ2箱出土しているほか、本瓦、金属製品が出土している。出土遺物の多くが二次焼成を受けており、元禄16年の火災による廃絶の可能性が高い。

SK77（Ⅲ-124図）

F5、G5グリッドに位置する遺構である。南側を撹乱に切られ、詳細は不明であるが、方形を呈していたと推定される。坑底には楕円形？のピットが付属している。覆土は灰褐色粘質土の単一層であることから、単独遺構であることが確認され、覆土の様相から厠の下穴である可能性がある。

遺物は19世紀前半の陶磁器、土器、桟瓦などが数十点出土している。

SL78（Ⅲ-131図）

F5グリッドに位置する遺構である。平面形は円形を呈し、直径は90cmを測る。北壁寄りに1段のテラスを有し、坑底は南側に寄り直径60cmの円形を呈す。確認面からの深さは25cmを測る。覆土は灰褐色粘質土の単一層である。それらの状況より、厠の下穴と推定される。

遺物は、坑底より金属製の簪が2点出土している。

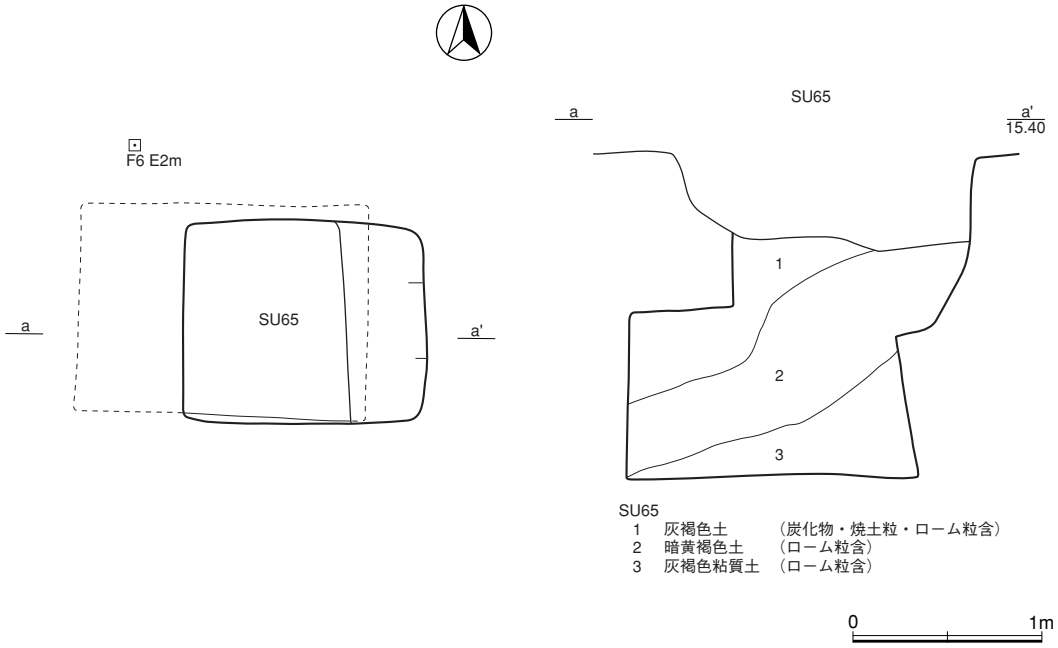
SL79（Ⅲ-137図）

F7グリッドに位置する遺構である。平面形は東西にやや長い円形を呈し、南北70cm、東西75cmを測る。遺構内には桶の痕跡と推定される木質片がわずかに存在し、その規模は直径50cmを測る。覆土は灰褐色粘質土の単一層である。それらの状況より、厠の下穴と推定される。

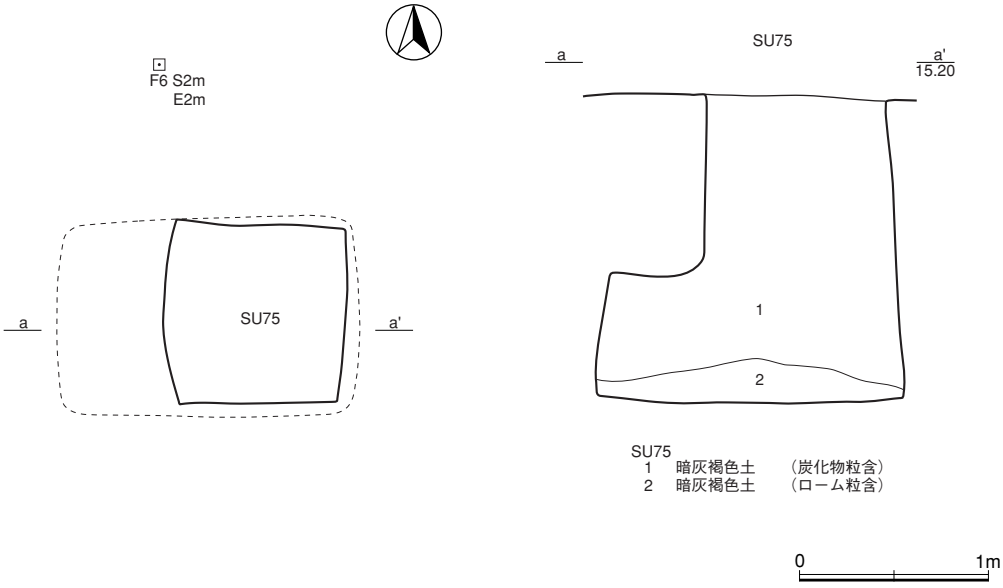
遺物は坑底より金属製の笄が1点出土している。

SL80（Ⅲ-136図）

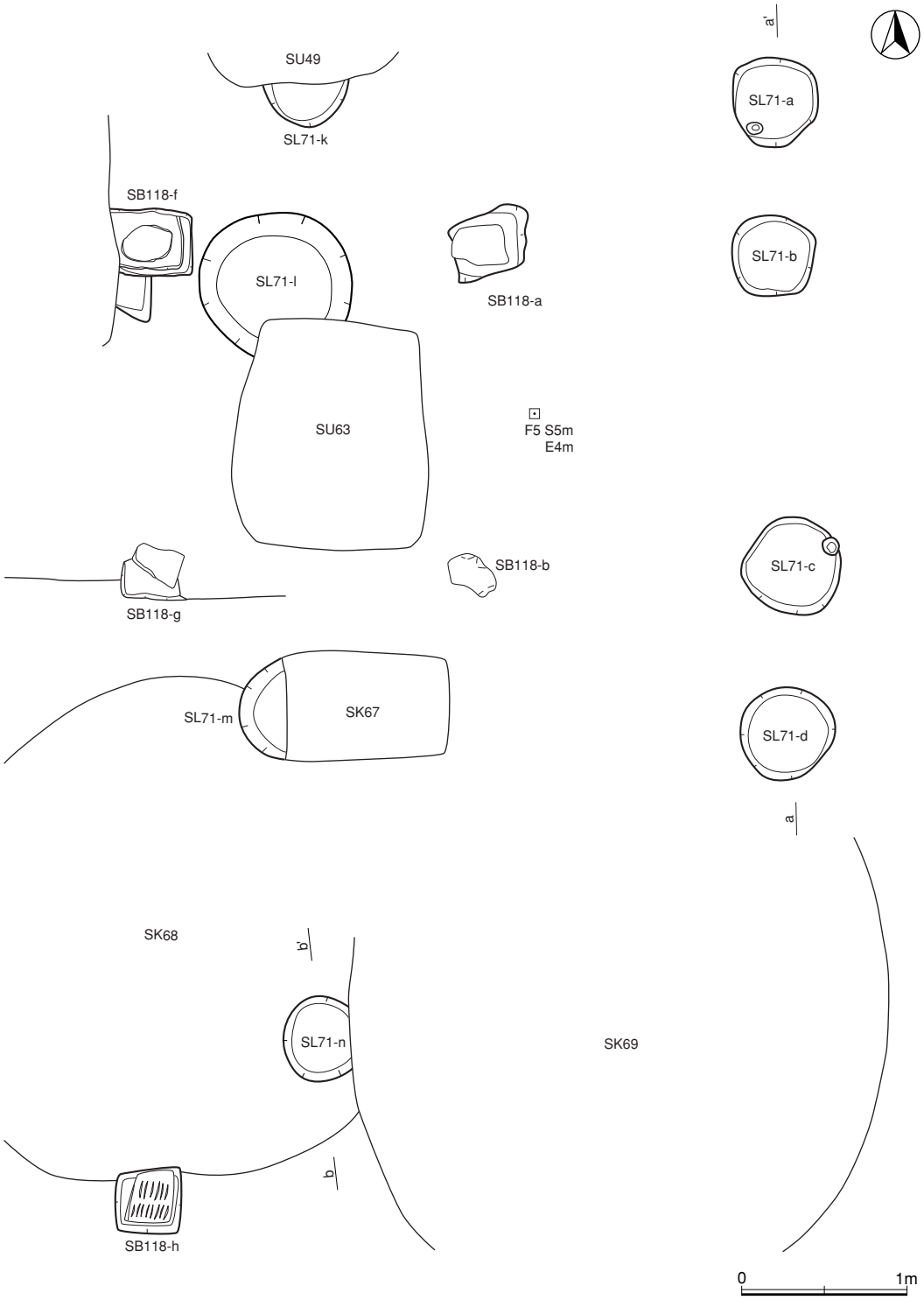
F7グリッドに位置する遺構である。平面形は直径65cmを測る円形を呈する。遺構内には桶枠の痕跡と推定される木質片がわずかに存在し、その規模は直径55cmを測る。覆土は灰褐色粘質



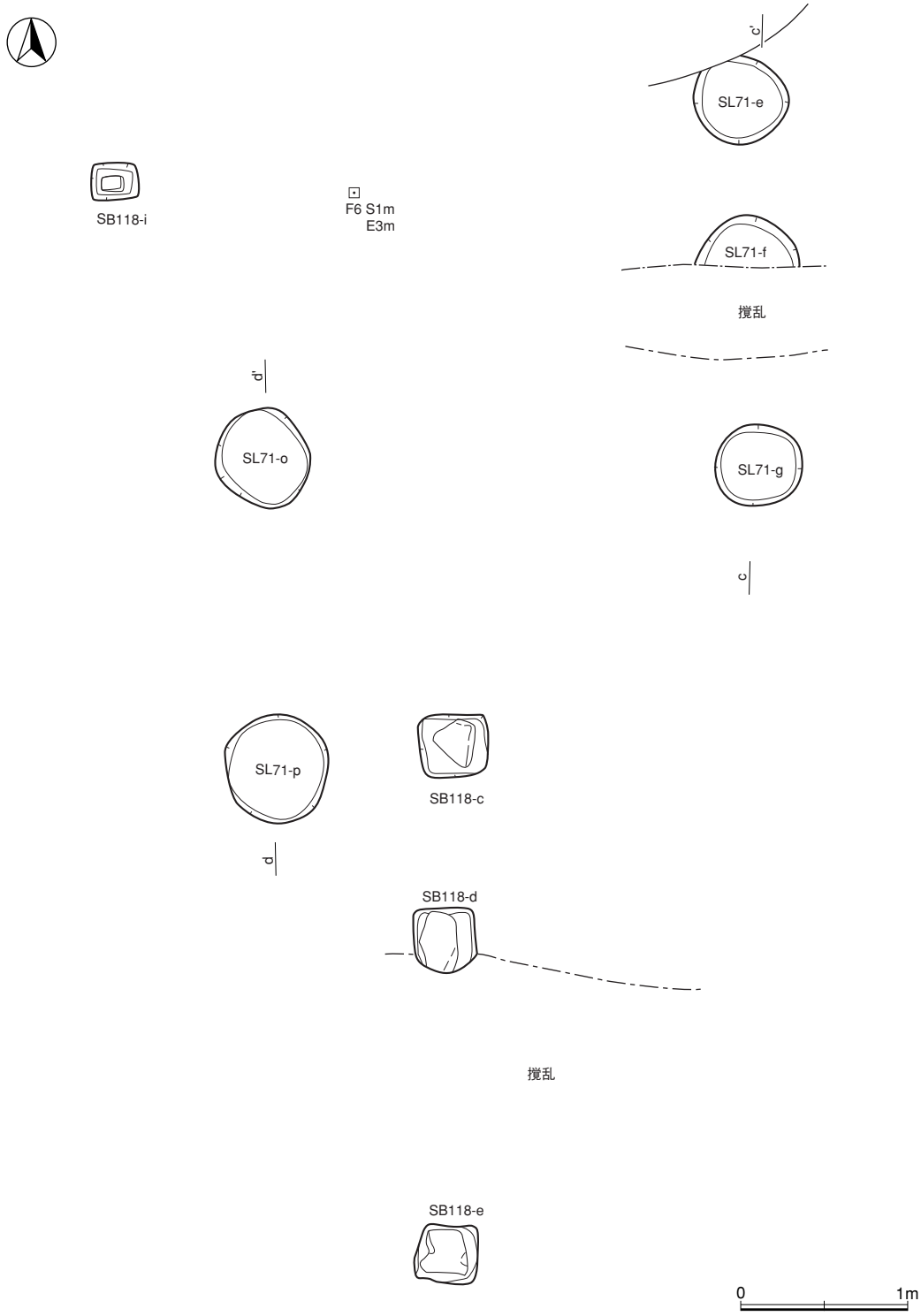
Ⅲ-47図　SU65



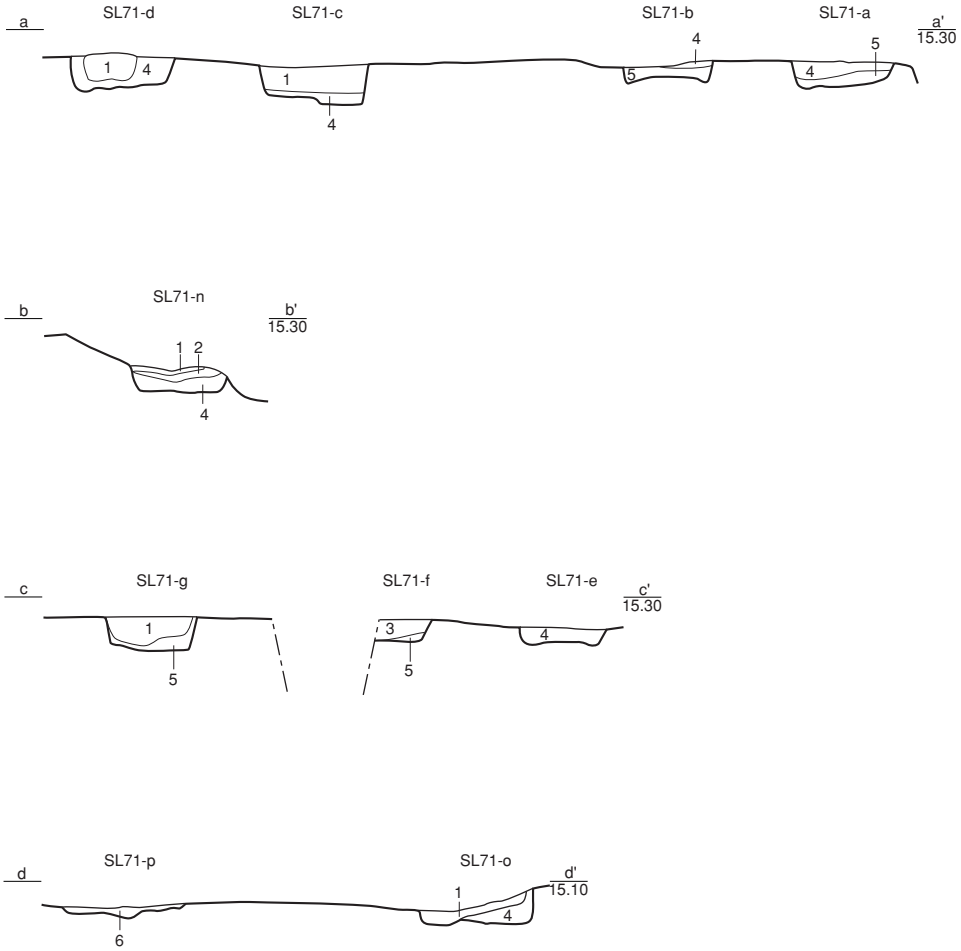
Ⅲ-48図　SU75



Ⅲ-49図　SL71（1）・SB118（1）



Ⅲ-50図　SL71（2）・SB118（2）



SL71
1　焼土層　（炭化物含）
2　白色灰層
3　灰褐色土　（炭化物・焼土含）
4　灰褐色粘質土
5　灰褐色土　（ローム粒含）
6　暗褐色土　（ローム粒含）

0　1m

Ⅲ-51図　SL71（3）

土の単一層である。それらの様相より、厠の下穴と推定される。

遺物は19世紀前半の陶磁器、土器が数点出土したほか、坑底壁際より簪２点、笄１点等の金属製品が出土している。そのことから女性の居住区に帰属する厠と考えられる。本遺構の北側には同類の円形土坑SL281が存在し、２基１対として機能していたと考えられる。

SK81（Ⅲ-52・53図）

B10、C10グリッドに位置する不定形の土坑である。遺構の南半が調査区外のため北半しか調査できなかった。SK130と重複関係にあり、本遺構が新である。形態は２基の円形の遺構が連結するような形状を呈しているが、土層の堆積状態から一度に埋め戻されていることが確認できた。遺存している規模は東西700cm、南北250cm、確認面からの深さは最大160cmを計測する。坑底、壁は凹凸が顕著である。覆土はおおむね茶褐色から暗褐色土を呈するが、全体的に貝、魚骨、鳥骨などの自然遺物をはじめ、陶磁器・土器、桟瓦、釘などが多く包含されており、生活ゴミを逐次廃棄していると想起できる状況であった。

遺物は陶磁器・土器がコンテナ箱で50箱程度出土しており、多くはⅧb期の製品で構成されている。

SK83（Ⅲ-32図）

B9グリッドに位置する円形を呈する土坑である。規模は東西180cm、南北200cm、確認面からの深さは40cmを計測する。壁及び坑底は凹凸はあるものの顕著ではない。覆土は壁際から中央に向かって傾斜を有している。

遺物は陶磁器・土器片と瓦片が10点程度出土している。

SK84（Ⅲ-32図）

B9グリッドに位置する土坑である。遺構の南端を撹乱によって削平されている。平面形は円形に方形の小さい張り出しが付属するような形状を呈している。遺存している規模は東西110cm、南北90cm、確認面からの深さは最大30cmを計測する。坑底・壁は凹凸が著しい。覆土は西から東に傾斜を有し、ローム土を中間層に挟んで、細かい黒褐色土が主体的である。

遺物は瀬戸・美濃産の笠原鉢が２点出土している。

SK85（Ⅲ-32図）

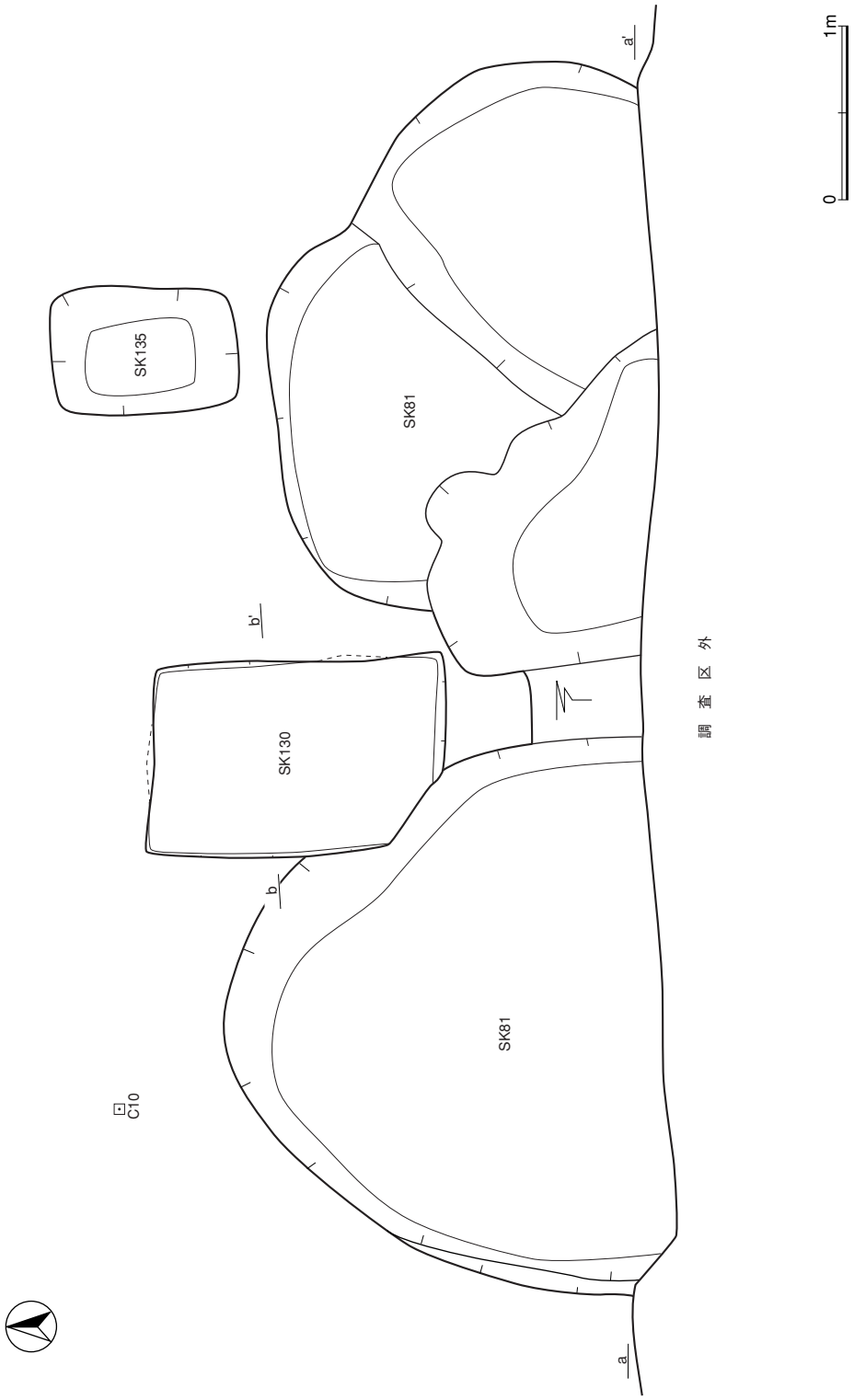
B9グリッドに位置する長方形の土坑である。遺構南側の一部は撹乱によって削平を受けている。規模は東西200cm、南北140cm、確認面からの深さは40cmを計測する。坑底・壁面は平滑に整形されており、壁は坑底から垂直に立ち上がる。覆土は東から西に傾斜を有し、炭化物、遺物などを包含している。

遺物は18世紀後半の陶磁器・土器が十数点出土している。

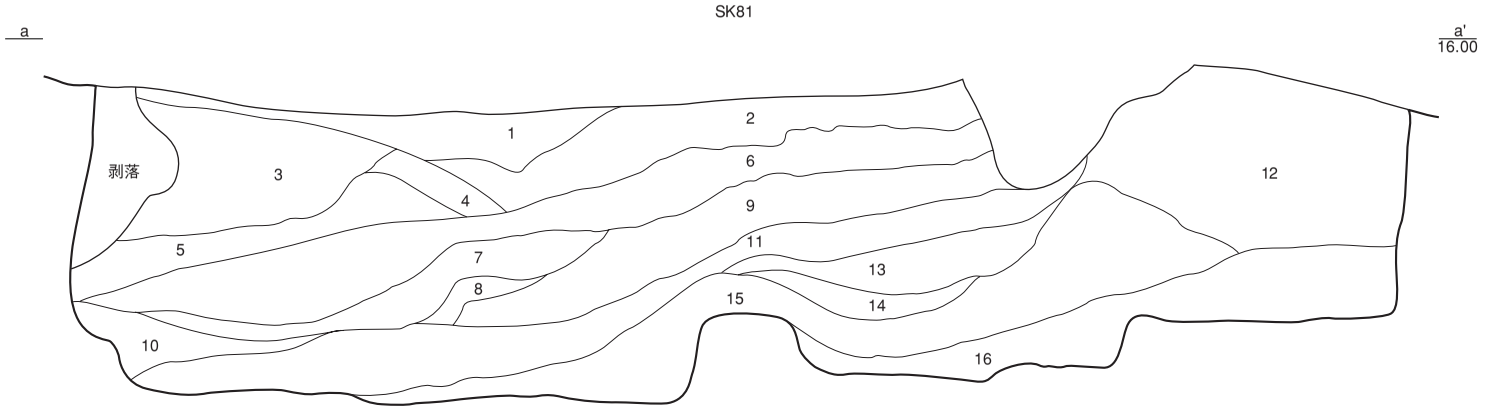
SK90（Ⅲ-54図）

B8グリッドに位置する不整形の土坑である。北側でSK134、東側でSU52と重複しており、新旧はSK134より新で、SU52より旧である。壁や坑底は凹凸が激しく、壁の立ち上がりも緩やかである。確認面での規模は東西210cm、南北240cm、最大深度は40cmを計測する。覆土はロームが多く含まれ、土層の堆積や壁や坑底の状況から木の移植跡の可能性が考えられる。

遺物は17世紀後半～18世紀前半の陶磁器・土器片が十数点出土している。

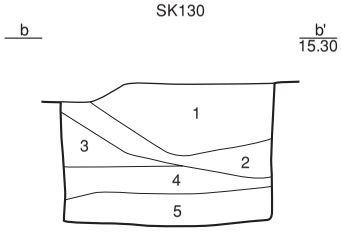


Ⅲ-52図　SK81（1）・SK130（1）・SK135



SK81

1	暗褐色土	（ローム粒・炭化物・小礫少含、しまりやや強）
2	暗褐色土	（炭化物・瓦片・貝少、ローム粒・小礫微含、1層よりやや暗）
3	暗灰褐色土	（炭化物・貝・遺物多含、粘性やや強）
4	茶褐色土	（炭化物・ローム粒微含）
5	暗褐色土	（貝・炭化物・遺物中含、粘性やや強、しまりやや弱）
6	暗褐色土	（炭化物・灰褐色粘土・貝多、円礫少含、5層より暗、粘性強）
7	暗褐色土	（灰褐色粘土・炭化物・貝多含、粘性やや弱）
8	灰褐色粘土	（炭化物・黒色土粒多含、粘性非常に強、しまりやや弱）
9	暗灰褐色土	（灰褐色砂粒多、炭化物・貝中、小円礫微含、粘性やや弱）
10	黄褐色土	（ローム主体、粘性弱、しまりやや弱）
11	暗褐色土	（灰褐色粘土多、炭化物・貝・瓦片中含、粘性強）
12	褐色土	（ローム粒・ロームブロック少含）
13	暗褐色土	（炭化物・貝中、小円礫少含、11層より明）
14	暗灰褐色粘土	（貝多、炭化物・ローム粒少含、粘性非常に強）
15	黒褐色土	（炭化物・貝多含、粘性強）
16	暗褐色土	（ローム粒・ロームブロック少含）

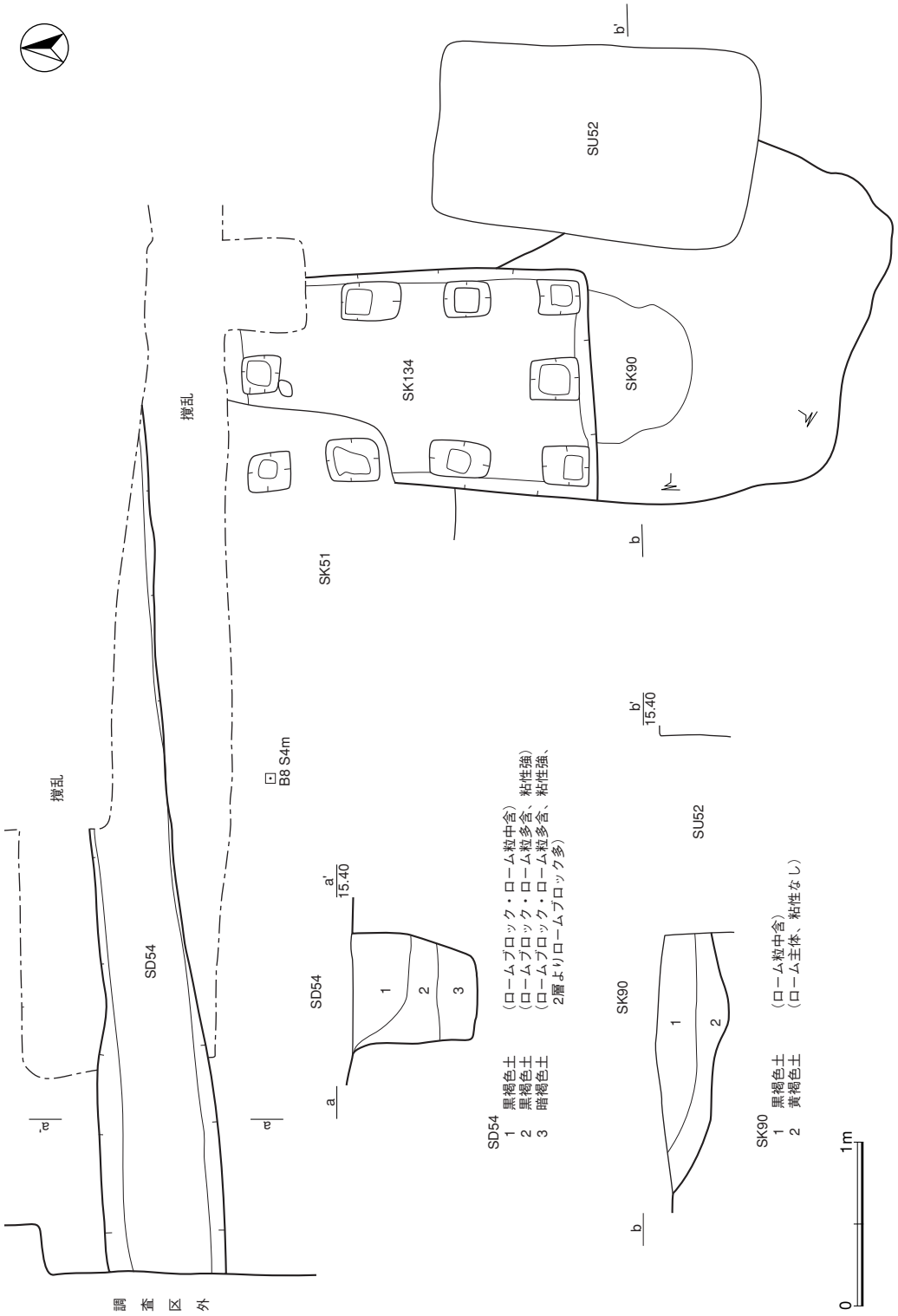


SK130

1	暗褐色土	（ローム粒・円礫中、灰褐色粘土ブロック少含）
2	円礫層	
3	暗褐色土	（ロームブロック少含、しまりやや弱）
4	黒褐色土	（炭化物・茶褐色土ブロック少含、しまりやや弱）
5	褐色土	（ローム粒多、ロームブロック・小円礫少含）

0　1m

Ⅲ-53図　SK81（2）・SK130（2）



Ⅲ-54図　SD54（1）・SK90・SK134

SD92（Ⅲ-125～127図）

E5、F5グリッドを東西に延びる溝状遺構である。西端は撹乱によって破壊され不明である。東端SD62と重複し、その中で収束している。主軸はN-91°-Eと、ほぼ東西方向に延びている。幅は55～85cmと蛇行する壁面の影響を受け不規則に変化している。確認面からの深さは約60cmを測り、壁面は緩やかに拡がり、断面形は逆台形を呈している。覆土はローム粒を含む暗褐色土の単一層である。溝底には約200cm間隔で扁平川原石または切石が配されていることより、本遺構の性格は塀跡と推定される。また、SA155を跨ぎ、SU63に切られていることより、天和2（1682）年以前の地割りに関する塀施設と推定される。

遺物は出土していない。

SD93（Ⅲ-126図）

F5グリッドを南北に延びる溝状遺構である。北端は撹乱のために不明である。SK289より古い。断面形は逆台形を呈し、幅は確認面で70cm、溝底で50cm、確認面からの深さ70cmを測る。主軸はほぼ南北方向を示す。

遺物は出土していない。

SK96（Ⅲ-25図）

D5、E5グリッドに位置する遺構である。植栽痕と推定されるSK162より新しい。平面形は楕円形を呈し、南北長は撹乱のため不明であるが、東西長は270cmを測る。壁は緩やかに立ち上がっており覆土にはローム粒を含む暗褐色土が堆積している。性格は不明である。

遺物は17世紀の遺物が少量出土している。

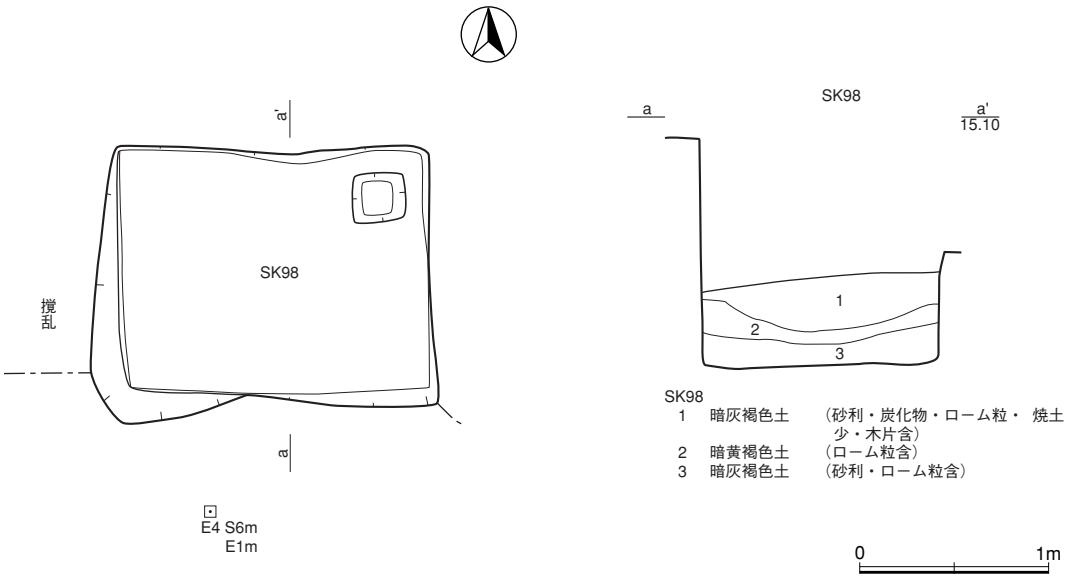
SK98（Ⅲ-55図）

E4グリッドに位置する遺構である。上部は撹乱によってほとんど遺存していない。平面形は長方形を呈し、その規模は南北130cm、東西165cm、確認面からの深さ120cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、丁寧な整形が施されている。各コーナーには意図的に抉られた痕跡が認められるが、関連する痕跡は他になく、その性格は不明である。また、坑底南東コーナーには1辺30cmを測る正方形の浅い掘り込みが認められ、排水関連施設と推定される。

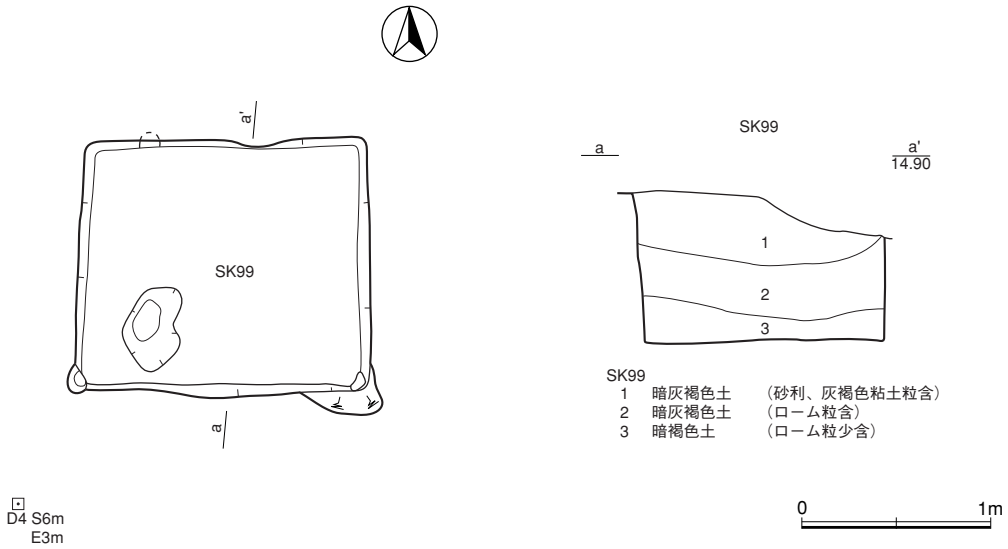
覆土は暗灰褐色土と暗黄褐色土が交互に堆積しているが、そのうち1層とした暗灰褐色土層に、完形、半完形の徳利、火鉢などを含む19世紀前半の陶磁器、土器などが多量に廃棄されていた。暗灰褐色土とその直上に全面的に埋められた暗黄褐色土の組み合わせは、日常的な廃棄土坑で観察されることの多い土層堆積状況である。残念ながら本遺構は、撹乱によって上部の覆土堆積状況を知ることはできなかったが、前述した土層堆積の特徴と暗灰褐色土層内の廃棄状況、遺構規模から、本遺構の性格は芥溜（一次的廃棄場所）と推定される。また、本遺構の西側に位置するSK99も遺構規模形態、覆土堆積状況から同様の施設と推定される。

SK99（Ⅲ-56図）

D4グリッドに位置する方形の土坑である。遺構の四隅は若干外に張り出している。規模は東西150cm、南北140cm、確認面からの深さは80cmを計測する。坑底や壁は凹凸を有するが、平滑な面も存在することからラフに整形されたと考えられる。覆土は3層に分層され、灰褐色粘土が多く含まれている。東に約5m離れて同様の形状、規模、覆土の特徴を有するSK98があり、包含さ



Ⅲ-55図　SK98



Ⅲ-56図　SK99

れている遺物の年代も同じ19世紀代で、これらは同時代に機能していたと推定できる。

遺物は17世紀後半と19世紀の陶磁器・土器類が混在して数十点出土している。

SE100（Ⅲ-57図）

E4グリッドに位置する井戸である。平面形は円形を呈し、南半部に擂鉢状の拡がりを持つ上部構造を有している。井戸掘方の規模は直径約140cmを測るが、若干、東西方向に扁平である。確認面下約50cmで、セクション面に土層の違いによる井戸側の痕跡を確認したが、木質は残存していない。また、確認面より約150cm掘り下げた時点で安全管理上、人力調査を中止した。調査深度までの覆土は単一層で、短期間に埋め戻されたことを物語っている。

覆土中には、焼土、炭化物とともに、被災した陶磁器、土器が含まれ、火災によって廃絶され、その後の瓦礫整理に伴い埋め戻されたものと考えられる。出土遺物の年代観は、17世紀後半に比定されることから、天和2年の火災に対比することができる。よって本遺構は、大聖寺藩邸に帰属する遺構と位置付けられる。

SK101（Ⅲ-141図）

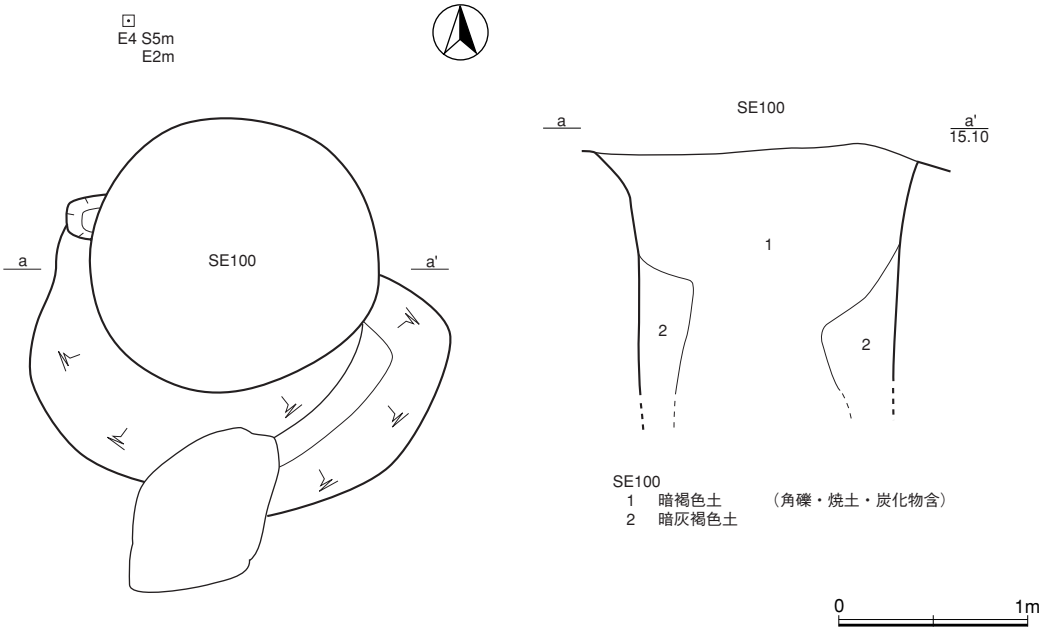
E8グリッドに位置する遺構である。平面形は円形を呈し、規模は直径100cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは90cmを測る。壁面、坑底ともに工具痕を残すものの比較的平滑に整形されている。覆土はロームブロック主体で形成されているが、上部に堆積した2層は焼土粒、炭化材を多量に含有する土層で火災との関連を窺わせる。また、2層と3層の境が不自然な傾斜を呈しており、3層を一旦掘りおこして、埋め戻した可能性も指摘できる。本遺構出土遺物は、この1、2層に集中して検出され、茶臼（Ⅳ-129、130図）、腰白茶壺破片、角金具（Ⅳ-117図24）、座金（Ⅳ-117図25）、鉄製金具（取っ手）（Ⅳ-119図12）、鉄釘（約130点）と、喫茶関連用具とその収納具を連想させる特徴的な様相を示す。また、わずかながら出土した陶磁器の年代観から、天和2年の火災による被災資料と位置付けられる。但し、遺構の性格は不明である。

SK102（Ⅲ-58図）

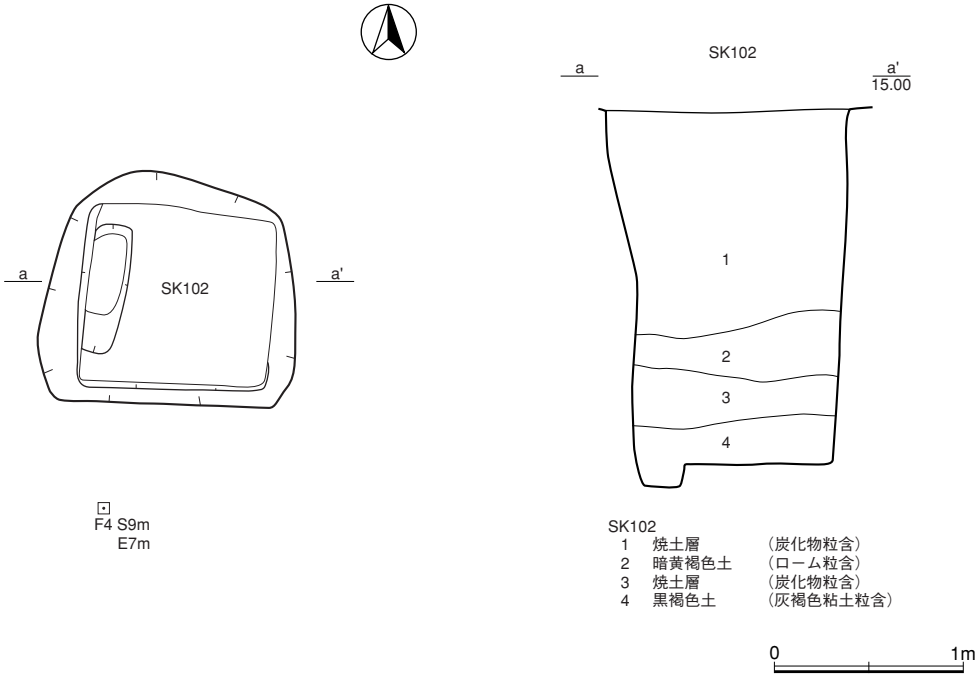
F4グリッドに位置する遺構である。平面形は1辺120～130cmを測る方形を呈している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは190cmを測る。坑底には西壁際に深さ10cmを測る長方形ピットが存在する。覆土の大半は焼土によって埋め戻されているため、火災による廃絶が想定される遺構である。焼土層中からは、17世紀末に比定される陶磁器類が出土していることから、遺構廃絶年代は元禄16年の火災と考えられる。なお、本遺構の南には同火災で廃絶された地下室が南北に列を成していることから、形態的には異なるものの本遺構も地下室群と関連した土地利用に規制されていたことが考えられる。

SK103・SK104（Ⅲ-59図）

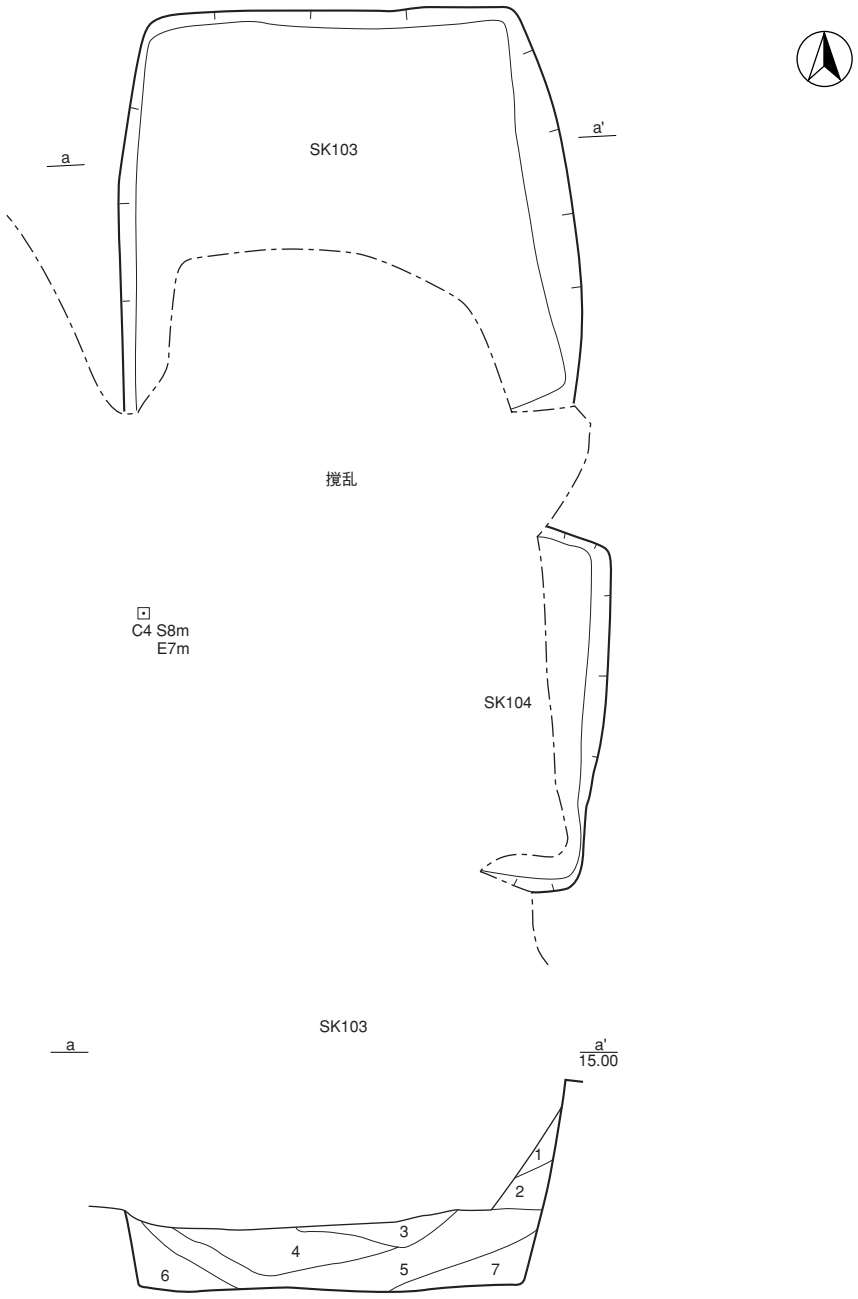
C4グリッドに位置する遺構である。SK103は上部及び南側の一部をSK104は西側の大半を撹乱によって削平され、ともに全体を復元できない。SK103は南側がやや膨らむ台形状を呈し、遺存している規模は、東西210～240cm、南北210cm、確認面からの規模は最大110cmを計測する。坑底や壁は比較的平滑に作られており、壁はフラットな坑底よりやや開いて立ち上がっている。上部が撹乱により削平されているため、天井の有無は不明である。形状からあるいはSU138のように二つの室が連結して両側に広がるタイプの地下室の可能性も考えられる。覆土は灰褐色あるい



Ⅲ-57図　SE100



Ⅲ-58図　SK102



SK103
1　暗灰褐色粘質土（砂利含）
2　暗黄褐色土　（ロームブロック含）
3　暗灰褐色土　（ローム粒含）
4　暗褐色土　（ローム粒少含、縞状に水平堆積）
5　暗褐色土　（ローム・灰褐色粘土ブロック多含）
6　暗褐色土　（ローム・黒色土粒少含）
7　暗褐色土　（ローム・淡褐色粘土粒含）

0　1m

Ⅲ-59図　SK103・SK104

は淡褐色粘土を多く含む層が確認された。

遺物はSK103が17世紀後半～18世紀、SK104が18世紀の陶磁器・土器が十数点ずつ出土している。

SE105（Ⅲ-60図）

C9グリッドに位置する井戸である。平面形は円形で、断面は下方にやや膨らみを有する。調査は安全を図るため確認面から300cm付近で中止した。規模は確認面で径130cm、調査を中止した300cm付近での径は約170cmを計測する。壁面は丁寧に平滑に調整されている。覆土は確認面から290cm付近まで壁土、本瓦などを含む焼土層が充填されており、火災の後始末であろうと推定される。

遺物は出土したほぼ全てが二次的な火熱を受けていた。18世紀前半の陶磁器・土器がコンテナ箱で2箱出土し、遺物群の内容から享保15年あるいは元文3年の火災である可能性が強い。

SK111（Ⅲ-141図）

E8グリッドに位置する遺構である。平面形は長方形を呈すると思われるが、北側を撹乱によって破壊されているため全容は不明である。また、SK101、SP114より古く、SP207より新しい。規模は東西55cm、南北230cm以上、確認面からの深さ60cmを測る。断面形は逆台形を呈し、壁面、坑底ともに比較的平滑に仕上げられている。覆土は、ほぼ水平堆積で、ロームブロックを主体とした褐色土を基調としているが、それに挟まれ砂利層が存在している（5層）。この砂利層はほぼ純粋でしまりも弱い。その様相から、遺構埋没過程に堆積したとは考えにくく、使用形態を示すものと推定される。

本遺構の年代は、出土遺物がなく詳細は不明であるが、天和2年廃絶と推定されるSK101に切られていることにより、それ以前に帰属する遺構である。

SK112（Ⅲ-138図）

E8グリッドに位置する遺構である。東半部を撹乱によって破壊されているため詳細は不明であるが、残存部の平面形は方形を呈し、規模は南北110cm、確認面からの深さ50cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は長方形を呈す。覆土は凸レンズ状の堆積を呈し、坑底直上でほぼ水平堆積を呈している6層（粘土質の灰褐色土）は、本遺構の性格と関連する可能性がある。

遺物は18世紀代の陶磁器、土器が少量出土しており、SA155西側に位置する本遺構は、加賀藩邸に帰属する可能性が高い。

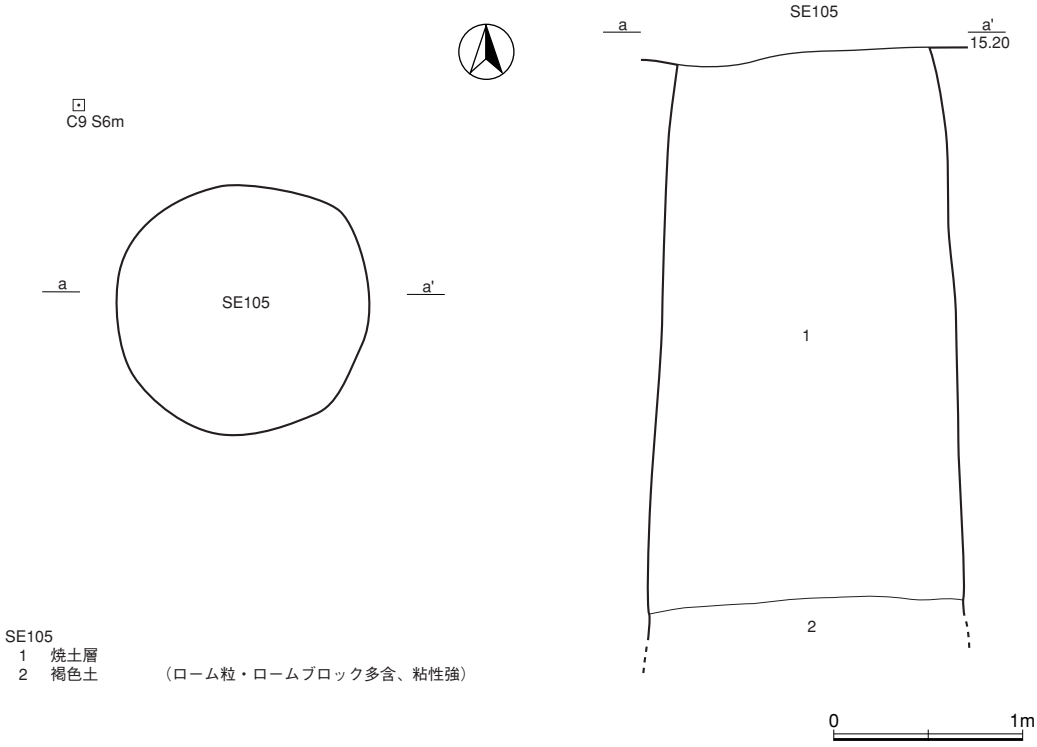
SK113（Ⅲ-138図）

F8グリッドに位置する土坑である。北壁を撹乱によって破壊されている。平面形は長方形を呈し、規模は南北220cm、東西145cm、確認面からの深さ15cmを測る。

遺物は18世紀代の陶磁器、土器が少量出土しており、加賀藩邸に帰属する遺構と考えられる。性格は不明。

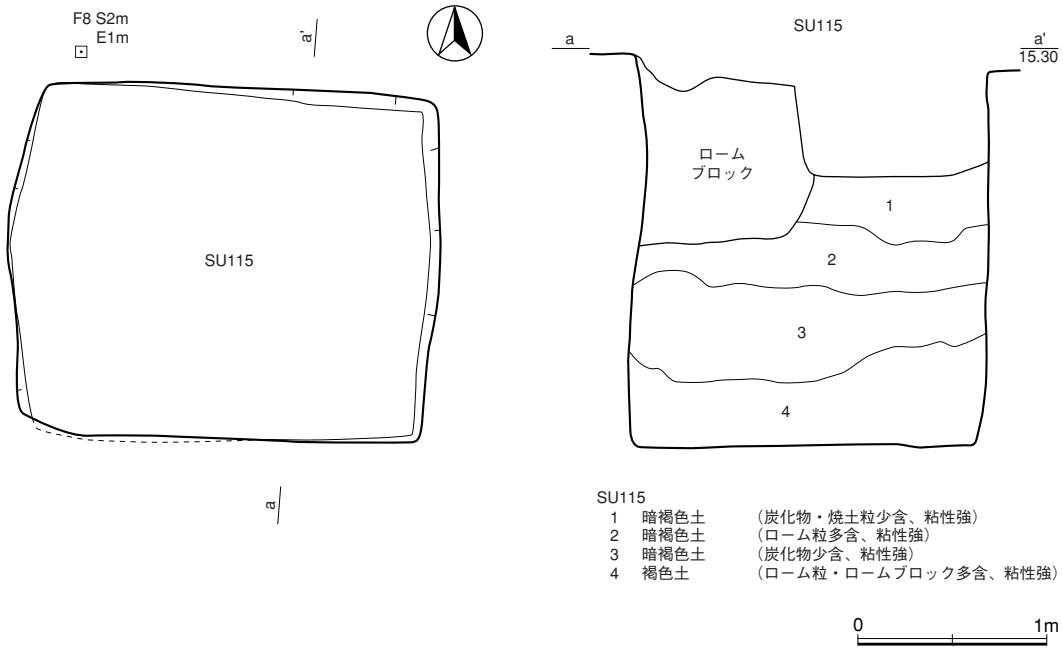
SU115（Ⅲ-61図）

F8グリッドに位置する地下室である。北側をSB70（Ⅱ章参照）によって破壊されているが、SU61のようにロームまで達しておらず、覆土途中でとどまっている。入口部は、SB70による撹乱に加え、天井部の崩落もあり、遺構北東コーナーに設置された以外の詳細は不明である。室部は



SE105
1　焼土層
2　褐色土　　（ローム粒・ロームブロック多含、粘性強）

Ⅲ-60図　SE105



SU115
1　暗褐色土　　（炭化物・焼土粒少含、粘性強）
2　暗褐色土　　（ローム粒多含、粘性強）
3　暗褐色土　　（炭化物少含、粘性強）
4　褐色土　　（ローム粒・ロームブロック多含、粘性強）

Ⅲ-61図　SU115

入口部より直接つながり南東に拡がる。平面形は長方形を呈し、南北180cm、東西200cm、確認面からの深さ210cmを測る。天井部は全て遺構埋没後に陥没した様子が認められ、覆土直上に巨大ロームブロックとして、ほぼそのままの状態で確認されている。その形状から、天井はほぼ水平に掘削されていた様相が看取される。壁面は西壁に工具痕を残すものの、全体としては丁寧に整形されている。それに対して床面は、特に壁際で工具痕による凹凸が顕著に認められる。また、床面、壁面ともに付帯施設は認められない。覆土は、南北方向ではほぼ水平堆積を成している。

遺物は18世紀前～中葉の陶磁器、土器がコンテナ3箱出土しているほか、本瓦、釘などが出土しており、瓦には二次焼成の痕跡が認められる。本遺構は、その位置と出土遺物の年代観から、大聖寺藩邸に帰属する地下室で、その形態から、詰人長屋の庭部分に構築された地下室であることが推定される。

SK116（Ⅲ-62図）

C5グリッドに位置する遺構である。東側が撹乱によって大きく破壊されており、詳細は不明であるが、遺存箇所より推測して南北に長い長方形を呈していたと考えられる。南北長は390cm、確認面からの深さ80cmを測るが、上部も撹乱を受けており、本来はこの倍以上の深さを要していたと推定される。壁はほぼ垂直に立ち上がり、工具痕が顕著に認められる。坑底は全体的には平坦であるが、残存する工具痕のため、随所に凹凸が認められる。壁際には柱穴が並び、方形の浅い掘方内に直径約10cmの掘り込みを有している。西壁の柱穴間隔は北東コーナーから120cm、60cm、55cm、115cmと、コーナーから隣接する柱穴までが約120cm、中央部の3基が約60cmと規則的に配されており、中央の1基を除くと約120cmの等間隔で配されていると考えられる。このように本遺構は、形態と壁柱穴の存在から上屋を有する半地下状の施設と推定される。

遺物は19世紀前～中葉の陶磁器、土器、釘などがコンテナ1箱出土している。本遺構形態は、本郷キャンパス内の調査事例では、19世紀代に類例が認められ、本遺構も矛盾しない。また、遺物年代から大聖寺藩邸に帰属する遺構と考えられる。

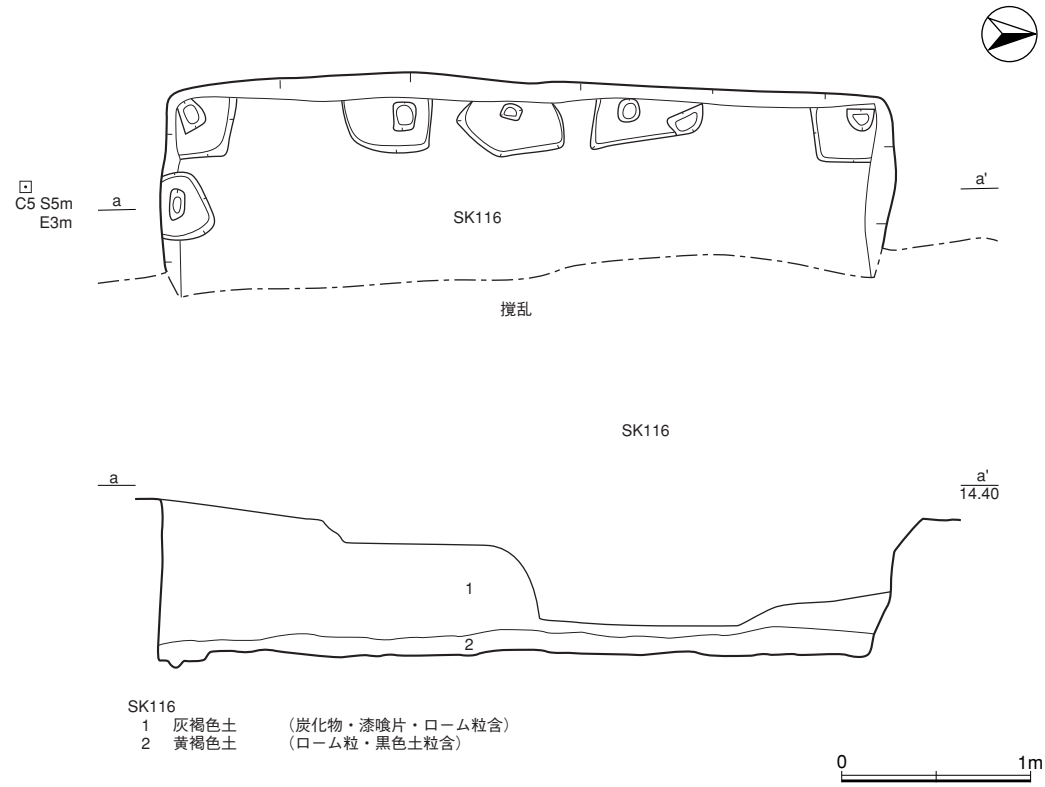
SU117（Ⅲ-63図）

F6グリッドに位置する遺構である。上部は撹乱を受け、開口部の位置、形態の詳細は不明であるが、西側に崩落したロームブロックが存在していることから、東側に開口部を持ち、西側に室部が拡がる形態であったことが推定される。坑底は不整隅丸方形を呈し、南北155cm、東西190cm、確認面からの深さ125cmを測る。また、西壁に認められる天井の痕跡より、奥壁高は55cmであったことが確認される。坑底、壁面ともに工具痕による凹凸が残存している。覆土上層（1～3層）には焼土粒、焼土塊、炭化材が含まれ、火災後の瓦礫整理によって埋め戻されたものと推定される。

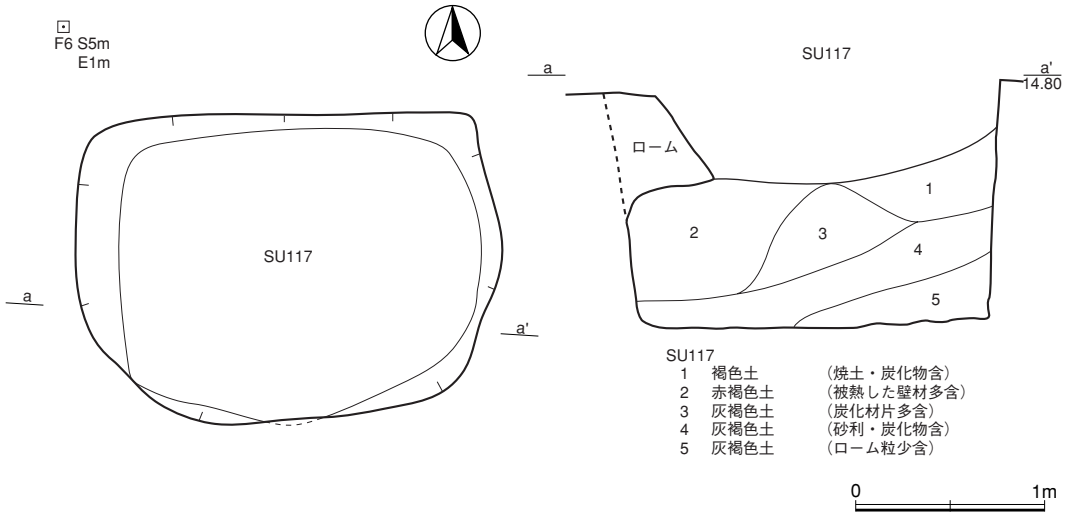
遺物は18世紀前半の陶磁器、土器、釘などがコンテナ1箱出土しており、被熱資料も含まれている。

SB118（Ⅲ-49・50図）

F5、F6グリッドに位置する礎石を伴うピット列である。1辺40～50cmを測る正方形の掘方内に切石が配置されている。遺構規模は東西に190cm（2列）、南北に13.3mを測る。遺構、撹乱の重複によって遺存していないピットも多いが、残存するピットから各ピット間は礎石の真々で平均190cm間隔で配置されていると推定される。これは1間を191cmとした場合、1×7間となり、



Ⅲ-62図　SK116



Ⅲ-63図　SU117

真々制で１間＝６尺３寸（越前間）の基準尺度による建物を復元することができる。本遺構は重複もしくは復元される配置より、SD92より新しく、SK68、SK69より古いことが確認される。よって本遺構の存在期間は17世紀後葉～19世紀以前に位置付けられ、さらに本遺構内に位置する地下室群の存在から、18世紀初頭を下限に絞り込むことができる。

本遺構の礎石配置を復元したとき、１辺６尺３寸の連続する方形区画を復元することができる。そして、各区画のほぼ中央には便漕SL71-m～pの分布を重ね合わせることができる。便漕を伴う１間四方区画が連続する建築遺構は、『御殿下記念館地点』で報告された厩遺構の下部構造と一致することから、天和～元禄年間に機能した大聖寺藩邸の厩遺構と推定される。

遺物は出土していない。

SA120（Ⅲ-124・128・131・136・137・140・142図）

F4～F8グリッドにかけて位置する柱穴列である。平面形は正方形ないし長方形を呈し、規模は１辺30cm、確認面からの深さ50cmを中心とする。幾つかの柱穴では柱痕が認められ、その直径は20cmを測る。覆土には灰褐色粘質土が用いられている。本遺構は、１列の柱穴列で構成されていることから、塀跡と考えられるが、柱穴間の間隔は1.8～2.5mと各々で異なり、一定していない。また、SD62に隣接して構築されていることから、両遺構の関連性が考えられ、排水溝と塀によって藩邸内に区画が設けられたことが読み取れる。

遺物は19世紀前半の陶磁器、土器がコンテナ１箱出土している。

SD121（Ⅲ-131・136・137図）

G5～G7グリッドにかけて南北に延びる溝状遺構である。G6中央付近の撹乱を挟み、北側では幅80～90cm、南側では幅40～45cmと様相が異なっている。但し双方ともに溝底内に多数の杭痕が認められることから、西に隣接するSD216などと同様な板枠を用いた溝であったと推定される。

撹乱南側の溝内には川原石、切石による礎石が配置されている。それらの間隔は真々で北から180cm、90cm、180cm、180cmと続き、６尺ないし３尺間隔で配置されている。この礎石列に対応する遺構は西側にはなく、東側に関しても、追加調査時に確認することはできなかった。また、南側に位置する建物基礎遺構SB228の東側の礎石列（本調査東端部）と本遺構は同一線上に位置し、本遺構最南端の礎石と、SB228最北端の礎石は約18尺を測り、同時期存在、さらに同一建物の可能性も指摘できる。

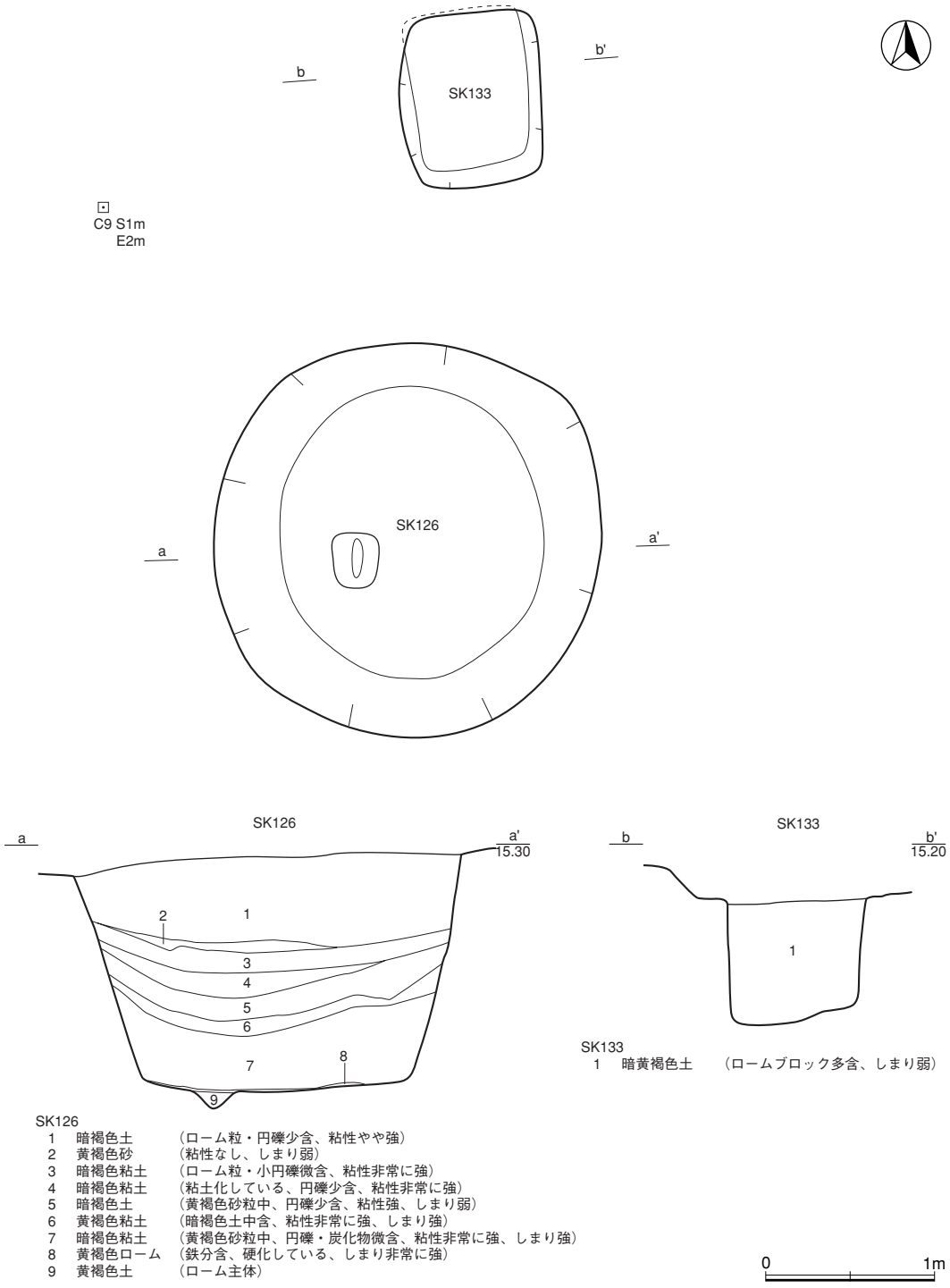
溝底直上より、宝永の火山灰が少量検出されたことより、18世紀前半以降の建物基礎遺構と考えられる。

遺物は18世紀末～19世紀前半の陶磁器、土器がコンテナ１箱出土している。

SA123（Ⅲ-131・136図）

F5、F6グリッドに位置する柱穴列である。平面形は基本的に長方形を呈しているが、形態、規模とも各々の柱穴で異なっている。柱穴間は約4mを測り、SA120とほぼ並行に延びているが、３基しか確認されていないので、性格は不明である。

遺物は出土していない。



SK133
1　暗黄褐色土　（ロームブロック多含、しまり弱）

SK126
1　暗褐色土　（ローム粒・円礫少含、粘性やや強）
2　黄褐色砂　（粘性なし、しまり弱）
3　暗褐色粘土　（ローム粒・小円礫微含、粘性非常に強）
4　暗褐色粘土　（粘土化している、円礫少含、粘性非常に強）
5　暗褐色土　（黄褐色砂粒中、円礫少含、粘性強、しまり弱）
6　黄褐色粘土　（暗褐色土中含、粘性非常に強、しまり強）
7　暗褐色粘土　（黄褐色砂粒中、円礫・炭化物微含、粘性非常に強、しまり強）
8　黄褐色ローム　（鉄分含、硬化している、しまり非常に強）
9　黄褐色土　（ローム主体）

Ⅲ-64図　SK126・SK133

SB124（Ⅲ-131 ・ 136図）

F5～F6にかけて存在する柱穴群である。1辺20～30cmを測る正方形のピットが、数基単位で1つのまとまりを形成して南北に並んでいる。1単位でのピットに重複関係が認められることから、複数回の構築が行われていたと考えられる。各柱穴の規模から、塀跡の可能性も考えられる。

遺物は出土していない。

SK126（Ⅲ-64図）

C9グリッドに位置する円形の土坑である。東壁の一部で接するようにSK175と重複している。新旧は不明である。断面形は上部に開く、深鍋状を呈している。規模は確認面では径230cm、坑底では東西160cm、南北170cm、確認面からの深さは140cmを計測する。壁、坑底は掘削時の工具による凹凸が確認できる。坑底中央やや西よりに小ピットが確認されている。性格は不明である。坑底は鉄分を含む極めて硬化したロームであった。覆土は全体として非常に粘性が強く、中位は黄褐色砂と暗褐色土が交互に堆積している。

遺物は17世紀前半の陶磁器・土器が数点のほか本瓦がコンテナ箱1箱、金属製品が少量出土している。

SE127（Ⅲ-90図）

C8グリッドに位置する円形の井戸である。規模は直径120cmを測る。

遺物は手描きの輸入コバルトで施文された磁器製品など近代の製品が認められるが、それ以降の製品は見られない。年代的には明治初頭に下限を有すると推定できる。また、位置的に東京医学校本館に伴う遺構であろうと推定している。

SK130（Ⅲ-52 ・ 53図）

C10グリッドに位置する長方形の土坑である。遺構の南西でSK81と重複関係にあり。新旧はSK81より旧である。規模は東西110cm、南北170cm、確認面からの深さは最大70cmを計測する。坑底、壁は平滑に整形されており、壁はフラットな坑底から垂直に立ち上がる。覆土は上層に円礫が充填されている層が確認されるが、性格は不明である。

遺物は18～19世紀前半の陶磁器・土器が数十点出土している。

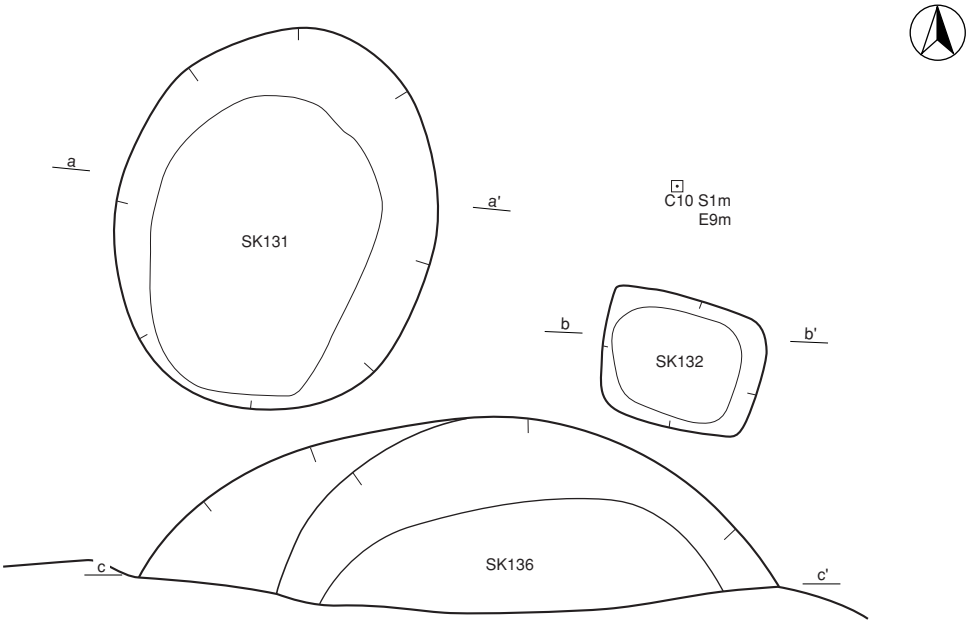
SK131（Ⅲ-65図）

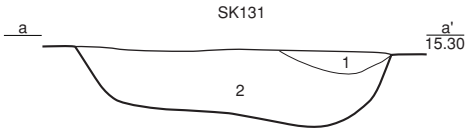
C10グリッドに位置する楕円形の土坑である。主軸は南北方向にあり、規模は東西170cm、南北200cm、確認面からの深さは40cmを計測する。坑底、壁は凹凸が著しく、坑底は東側がやや深く、フラットではない。壁は南側が急勾配で、他方は緩やかに立ち上がる。覆土は2層に分層される。いずれも焼土、漆喰、炭化物などを混入しており、火災や火の使用の後の廃棄であろうと推定できる。

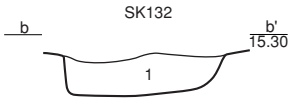
遺物は18世紀後半～19世紀初頭の陶磁器・土器がコンテナ箱1箱のほか金属製品が少量出土している。

SK132（Ⅲ-65図）

C10グリッドに位置する小土坑である。平面形は東西方向に主軸を有する長方形を呈し、規模は東西90cm、南北70cm、確認面からの深さは20cmを計測する。坑底や壁は比較的凹凸は少ない。覆土は単層で、中央付近には柱痕などは確認できなかった。周囲には類似した遺構が確認され

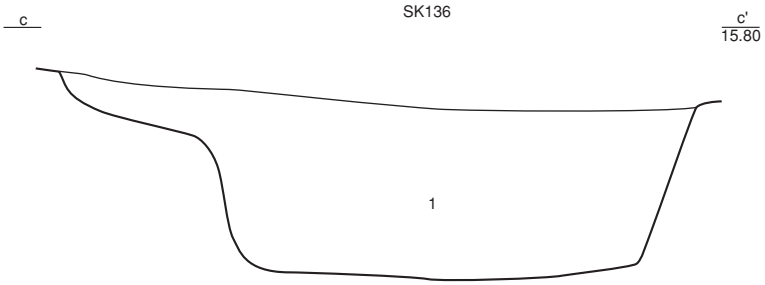






SK131
1　暗褐色土　（ローム粒・焼土粒多、漆喰・炭化物少含、粘性やや弱）
2　暗灰色土　（瓦片・漆喰少、炭化物・小円礫微含、粘性やや強）

SK132
1　暗褐色土　（ローム粒・ロームブロック多含、粘性やや強）



SK136
1　暗黄褐色土　（ロームブロック主体、しまり弱）

0　1m

Ⅲ-65図　SK131・SK132・SK136

ていないことから単独で機能していたものと推定できる。

遺物は出土していない。

SK133（Ⅲ-64図）

C8、C9グリッドに位置する小土坑である。平面形は南北に主軸を有する長方形を呈し、規模は東西60cm、南北80cm、確認面からの深さは50cmを計測する。坑底や壁は凹凸が顕著である。壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がるが、北壁は若干オーバーハングしている。覆土は単層で、中央付近には柱痕などは確認できなかった。周囲には類似した遺構が確認されていないことから単独で機能していたものと推定できる。

遺物は18世紀後半の陶磁器・土器、瓦、釘などがコンテナ箱1箱出土している。

SK134（Ⅲ-54図）

B8グリッドに位置する土坑である。遺構の南側をSK90、北西側をSK51、北側を近代以降の撹乱によって削平を受け、遺存状態は不良である。調査当初SK90を含めて1基と想定していたため、土層の堆積状態を精査できなかった。平面形は南北に主軸を有する長方形を呈し、規模は東西140cm、南北220cm、確認面から坑底までの深さは30cmを計測する。坑底には壁に沿って合計10基のピットが巡っていたと推定されるが、確認できたのは9基である。ピットは方形もしくは長方形を呈し、規模はおおむね1辺30cm、坑底からの深さは30～40cmを計測する。各ピットの中央部には円形の木部が腐食した痕跡が確認でき、柱が立っていたことが推定される。ピットの中心における間隔は長軸の南北で50cm、短軸の東西で60～70cm程度を計測する。坑底、壁は丁寧に調整され、平滑である。壁はフラットな坑底から垂直に立ち上がっている。

遺物は17世紀後半～18世紀前半の陶磁器・土器が数十点と釘が比較的多く出土している。

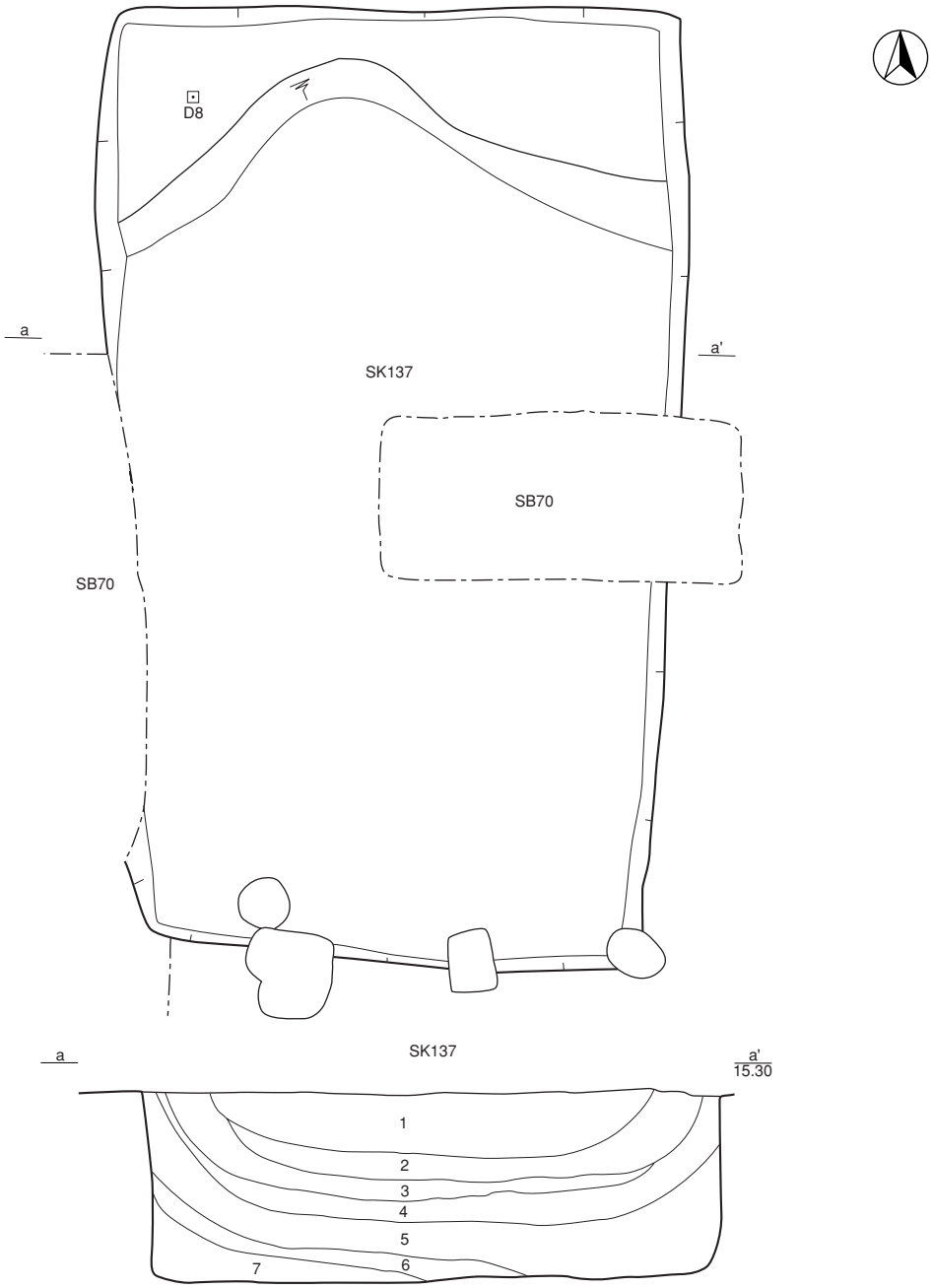
SK136（Ⅲ-65図）

C10グリッドに位置する土坑である。遺構の南側が調査区域外にあり、北側のみ調査を行った。平面形は円形と推定されるが、西側に浅いテラス状の張り出しがあり、西側に膨らんだような形状を呈している。テラス部を含んだ規模は東西330cm、深い部分では260cm、南北100cm、確認面からの深さは90cmを計測する。断面形は逆台形状を呈し、やや丸底状を呈する坑底から壁は開き気味に立ち上がる。壁、坑底は凹凸が顕著に観察された。覆土は単層で、ロームブロックが主体である。規模、覆土、壁や坑底の特徴から移植穴である可能性が考えられる。

遺物は出土していない。

SK137（Ⅲ-66図）

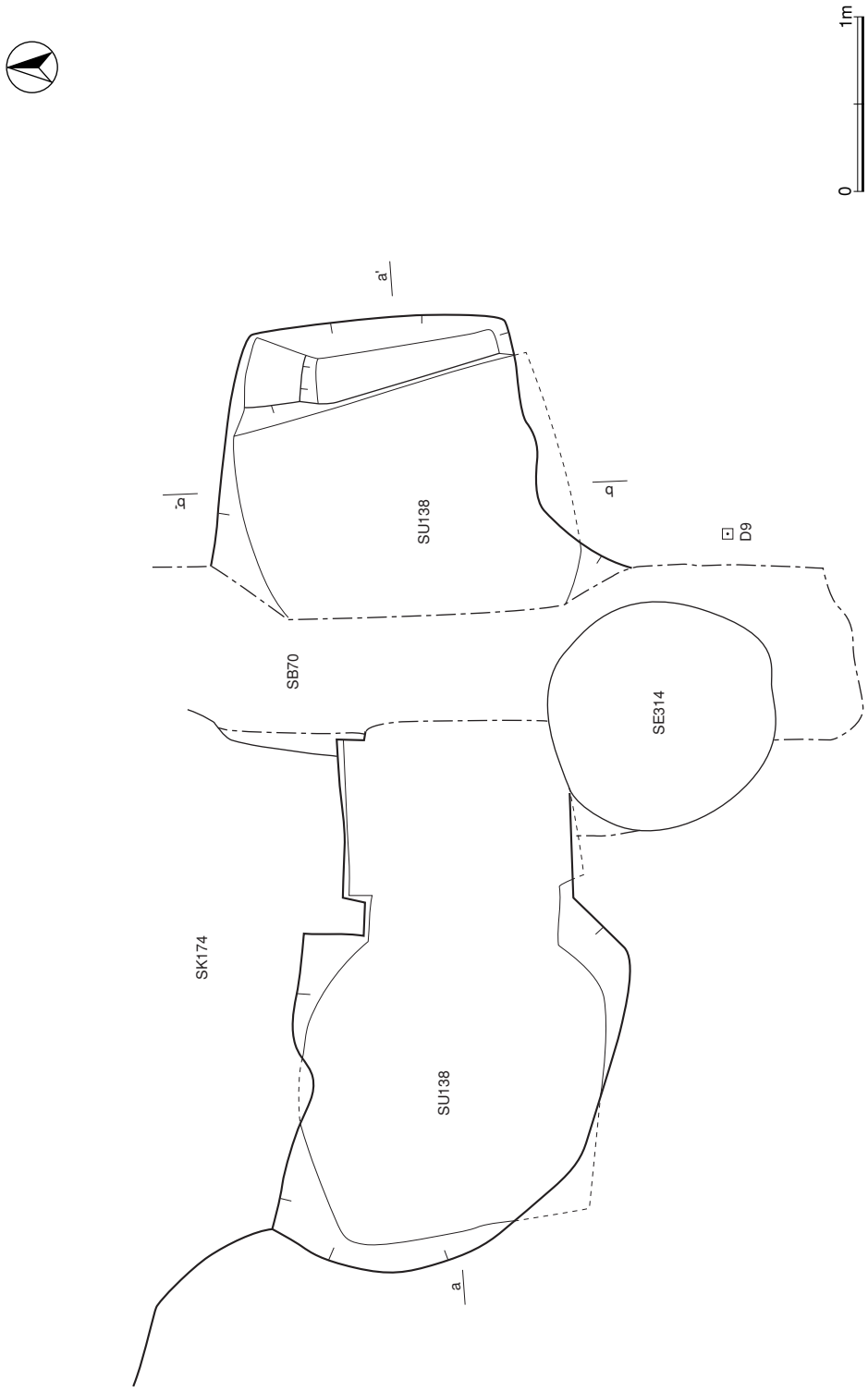
C8、D7、D8グリッドにまたがって位置する土坑である。中央を横断するようにSD54、南でSK269、南西及び中央でSB70、南東でSU300、北東でSK139、北でSK303、北西でSK176と重複関係にある。新旧はSB70、SK269より旧で、その他より新である。平面形は南北に主軸を有する長方形を呈し、規模はやや幅のある北側で東西320cm、南側で280cm、南北520cm、確認面からの深さは最大100cmを計測する。坑底は北側で段を有し、約20cm比高差を持つ。この段の性格は不明である。坑底及び壁は凹凸が顕著で、工具痕が明瞭に残る。壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がるが、立ち上がり際はやや丸味を有する。覆土は7層に分層され、いずれも粘性が強かった。堆積は中央が低いレンズ状を呈するが、いずれも層の立ち上がり方が顕著で、中央から圧力



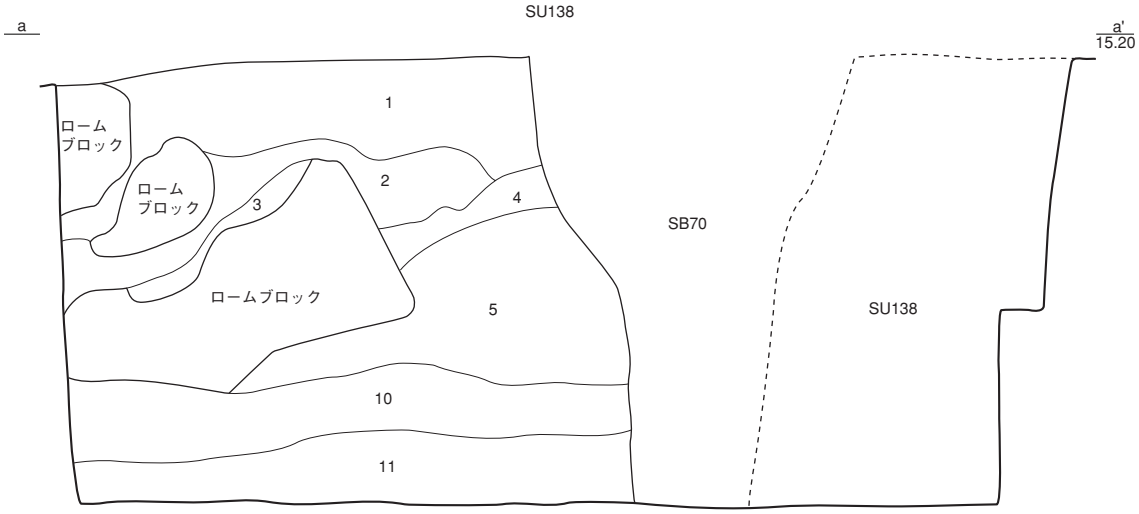
SK137
1　暗褐色土　（円礫中、炭化物・破砕瓦片少含）
2　暗灰褐色土　（炭化物多、小円礫少含、粘性やや強）
3　暗褐色土　（炭化物中、小円礫・漆喰少含）
4　暗灰褐色土　（炭化物多、灰褐色粘土・小円礫少含、粘性やや強）
5　暗褐色土　（ローム粒・小円礫・灰褐色粘土中、炭化物微含）
6　暗灰褐色粘土　（灰褐色砂多含、粘性強）
7　暗灰褐色土　（小円礫中含、粘性強）

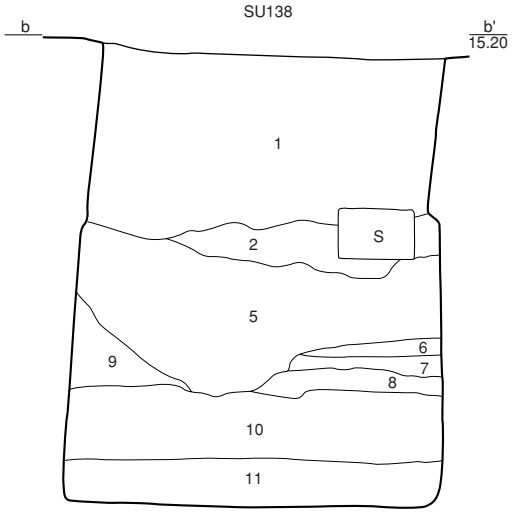
0　1m

Ⅲ-66図　SK137



Ⅲ-67図　SU138（1）・SE314



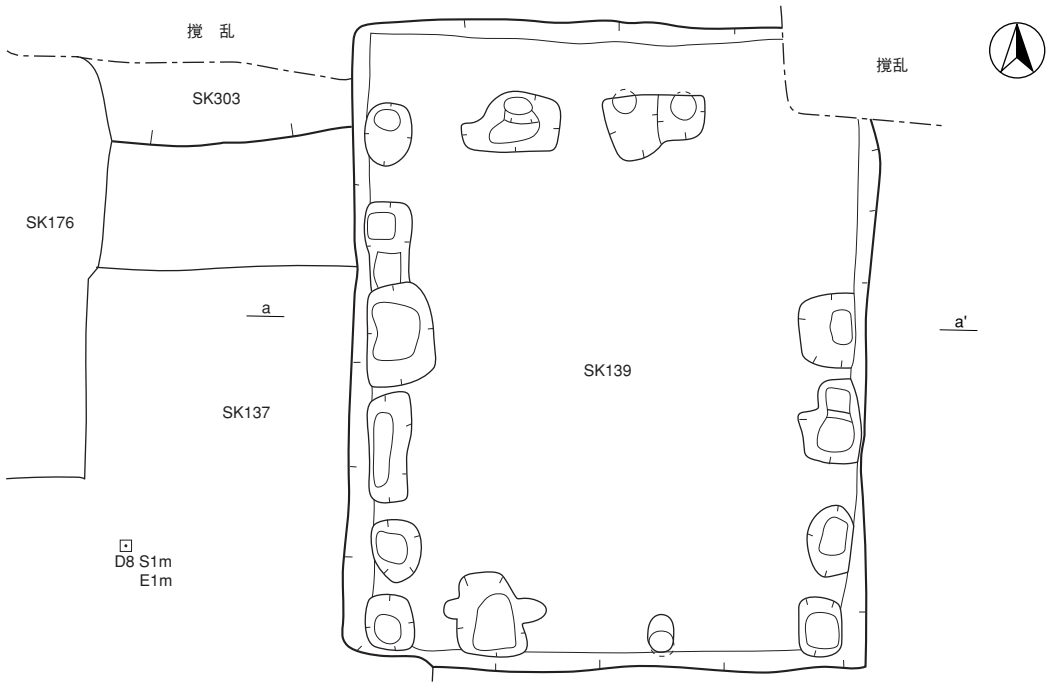


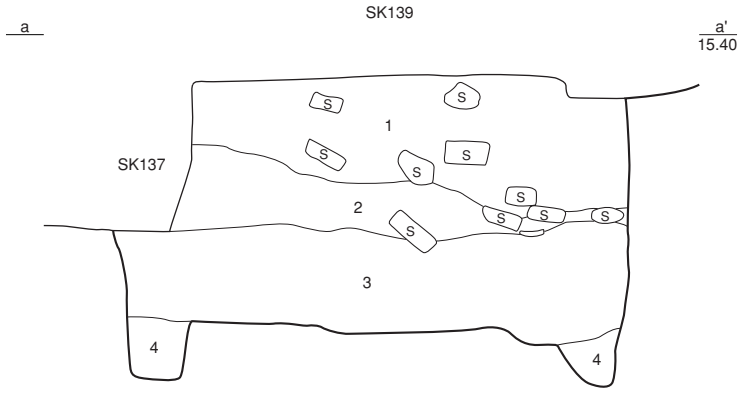
SU138

1	暗褐色土	（小円礫中、ローム粒少、炭化物微含）
2	暗褐色土	（灰褐色粘土多、小円礫少、炭化物微含、粘性・しまりともにやや強）
3	褐色土	（ローム主体、粘性やや強、しまりやや弱）
4	黄褐色土	（ローム土、円礫少含、粘性やや強）
5	暗褐色土	（ローム粒・円礫・小円礫少含、しまりやや強）
6	茶褐色粘土	（粘性非常に強）
7	明茶褐色粘土	（黄褐色砂中含、粘性非常に強）
8	茶褐色粘土	（黄褐色砂多、ロームブロック少含、粘性非常に強）
9	暗褐色粘土	（黄褐色砂多含、粘性非常に強）
10	暗灰褐色粘土	（ローム粒・黄褐色砂少含、粘性強、しまりやや強）
11	褐色土	（ローム粒・黄褐色砂多、ロームブロック中含、粘性・しまりともに強）

0　1m

Ⅲ-68図　SU138（2）





SK139
1　茶褐色土　（焼土・炭化物多、ローム粒・ロームブロック中、切石少含、粘性・しまりともにやや弱）
2　灰褐色土　（焼土粒・炭化材・切石中、ローム粒子・小円礫少含）
3　褐色土　（ローム粒・ロームブロック主体、粘性弱、しまりやや弱）
4　暗褐色土　（ローム粒・ロームブロック主体、粘性・しまりともに弱）

0　1m

Ⅲ-69図　SK139・SK303

を加えられた可能性があると思われる。本遺構は遺構の形状、土層の堆積状況など特徴的であるが、その性格は不明である。

遺物は出土量が多く、陶磁器・土器がコンテナ箱15箱、本瓦、炭化物、漆喰片、釘、鳥骨・魚骨・獣骨などの自然遺物が確認でき、最終的には日常的な生活ゴミを廃棄したと推定できる。陶磁器の年代から18世紀前半の廃絶であると推定できる。

SU138（Ⅲ-67・68図）

C8、D8グリッドに位置する地下室である。中央を南北に貫くようにSB70と、北側でSK174、南側で一部SE314と重複しており、新旧はSB70より旧で、SK174、SE314より新である。地下室は中央にある方形の入口施設から、地下で東西両方向に一室ずつ部屋が設けられている形態を呈する。入口部は一辺120cm、確認面からの深さは240cmを計測する。室部は厚さ20cm程度の壁を隔てて構築され、奥壁に向かって緩やかに広がりを増す短い羽子板状を呈している。室部の入口から170cmほどで奥壁に至る。奥壁は入口からの軸に対して垂直に作られている。室部の天井は崩落しているものの坑底から約160cm付近に作られていたことが看取できた。崩落した天井部と思われるロームブロックの状況から、天井は廃棄時に破却されたと推定された。坑底や壁は平滑に作られており、壁は坑底から垂直に立ち上がっている。覆土は11層に分層されるが、10層を埋めた段階で天井を破却したと推定できる。

遺物は、17世紀後半と18世紀末～19世紀の陶磁器・土器がコンテナ箱で1箱出土している。

SK139（Ⅲ-69図）

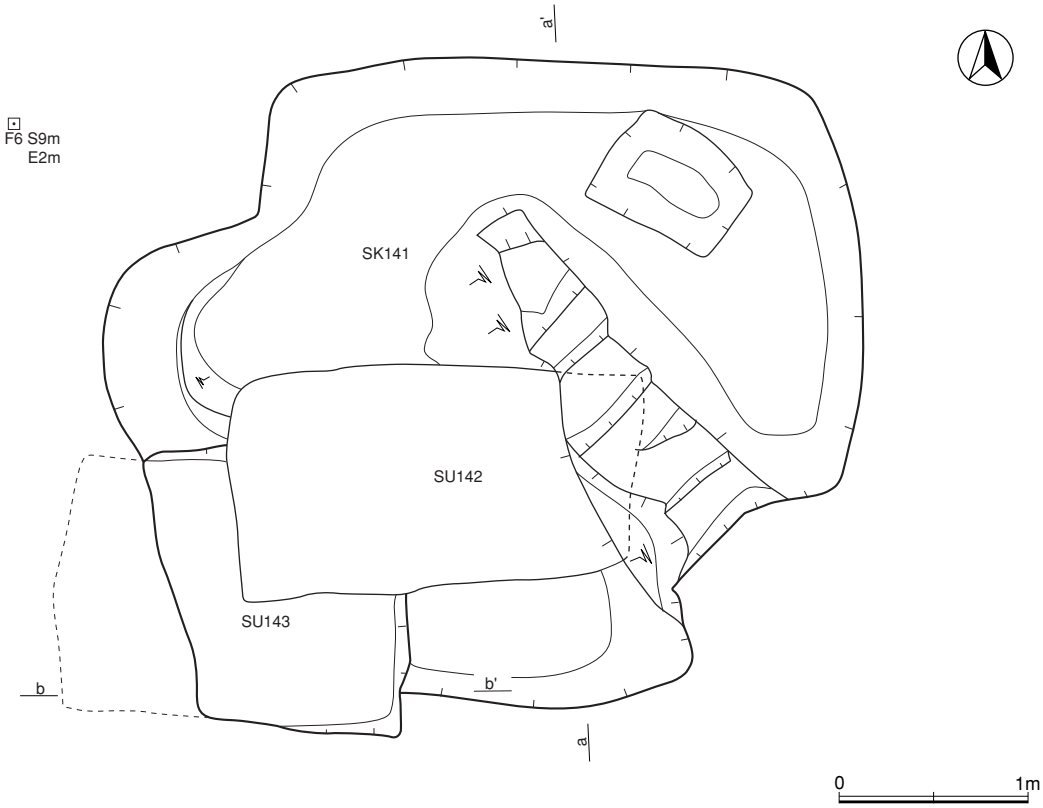
D7、D8グリッドに位置する土坑である。SD54、SK137、SK303と重複しており、新旧はSD54より新で、SK137、SK303より旧である。平面形は南北方向に主軸を有する長方形を呈している。坑底壁際にはピットが十数基巡っているが、北壁のみやや内側を巡っている。規模は東西270cm、南北350cm、確認面から坑底までの深さは最大140cmを計測する。ピットは上屋に関係するものと思われるが、円形、隅丸方形、隅丸長方形などややバリエーションがある。深さはおおむね30～40cm程度である。壁、坑底は平滑に作られており、壁は坑底から垂直に立ち上がっている。覆土は上層に焼土、炭化物を多量に含む層、下層にローム層が確認された。

遺物は陶磁器・土器類を中心に、瓦や砥石、石臼などの石製品、釘、飾り金具などの金属製品などが上層から多く出土しており、その多くが二次的な火熱を受けた痕跡が認められる。また、中層からは二次的火熱を受けた切石が、比較的多く出土している。陶磁器・土器は17世紀末～18世紀初頭の製品で構成され、元禄16年の火災に伴う一括廃棄であろうと推定される。コンテナ箱で10箱程度出土している。

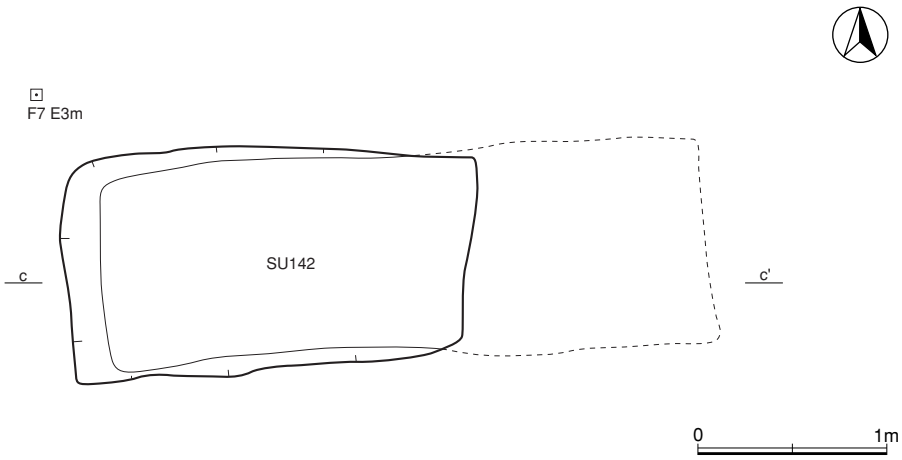
SK141（Ⅲ-70・72図）

F6、F7グリッドに位置する遺構である。重複するSU142、SU143より新しい。平面形は西側に張り出し部を有する隅丸方形を呈し、規模は南北340cm、東西400cm（張り出し部を除くと315cm）、確認面からの深さ最大115cmを測る。遺構東南コーナーは内側2段角を呈しており、その先端から6段のステップを有する作りつけの階段が対角線上に室部へ張り出している。坑底北東コーナーには長方形の浅い落ち込みが存在する。

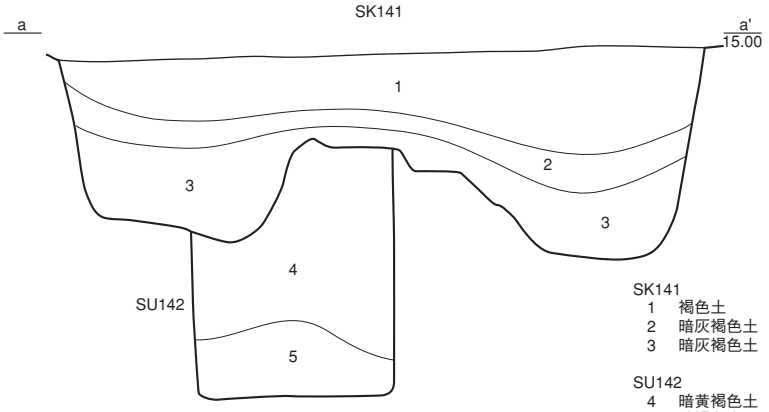
本遺構は階段を有する構造でありながら、確認面からの深さが1m程度であり、壁面には天井崩



Ⅲ-70図　SK141（1）・SU143（1）

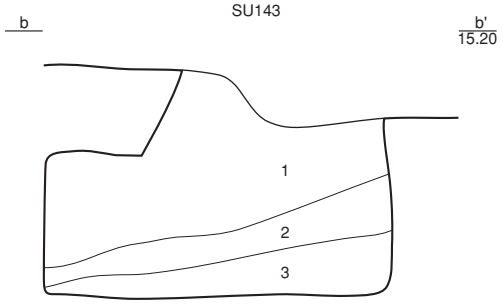


Ⅲ-71図　SU142（1）

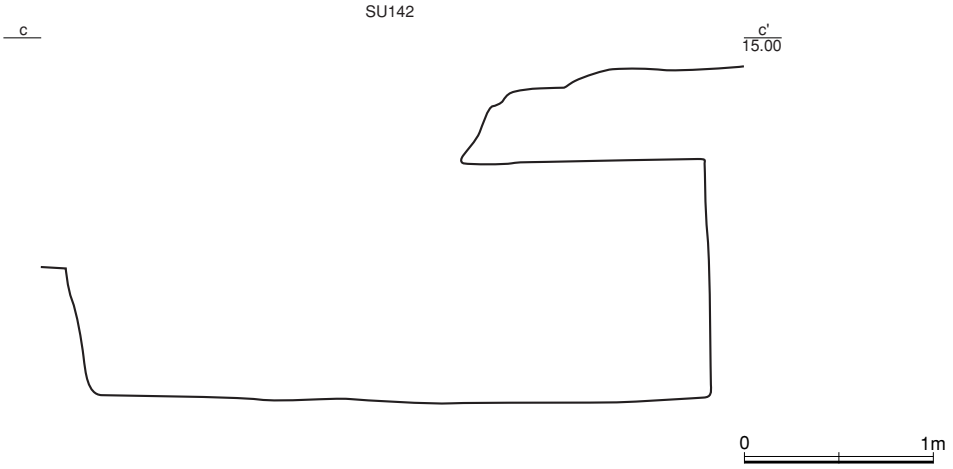


SK141
1　褐色土　（砂利・炭化物・焼土・ローム粒含）
2　暗灰褐色土　（砂利・炭化物・焼土含）
3　暗灰褐色土　（砂利・炭化物・ローム粒含）

SU142
4　暗黄褐色土　（ローム塊含）
5　暗褐色土　（砂利・炭化物含）



SU143
1　暗灰褐色土　（炭化物・ローム粒含）
2　暗褐色土　（ローム粒・灰褐色粘土粒含）
3　暗黄褐色土　（ローム粒・炭化物粒含）



Ⅲ-72図　SK141（2）・SU142（2）・SU143（2）

落の痕跡もない。しかし、本遺構の確認面標高はSD62とほぼ同じであることから、遺構上部が大きく削平を受けたとは考えられず、遺存状態は本来の深さをほぼ反映しているといえる。また、採土坑とは異なり、壁面には比較的丁寧な調整が施されていることから地下空間の利用を目的として構築されたことは明確である。しかし、遺構周囲や坑底に柱穴などの上屋の存在を証明する施設は認められず、遺構の使用形態、用途の詳細は不明である。

遺物はⅤａ期の陶磁器、土器がコンテナ９箱出土しているほか、本瓦、釘、小柄などが出土している。出土資料には二次焼成を受けた遺物が含まれ、覆土中にも焼土が含まれていることから（1、2層）、遺構埋没途中で火災が発生し、その被災遺物が廃棄されたと考えられる。火災年代は遺物の年代観から享保15年、もしくは元文３年の火災に比定される。

SU142（Ⅲ-71・72図）

F7グリッドに位置する地下室である。SK141より古い。そのため開口部の形態、規模の詳細は不明である。室部は東側へ拡がり、南北110cm、東西320cmを測る長方形を呈する。奥壁の天井高は125cmを測り、竪坑部からの奥行は天井残存部でも最大150cmと非常に奥行のある形態を呈している。覆土はロームブロックを含む暗黄褐色土で埋め戻されているが、SK141構築のためにローム土が選択された可能性もある。

遺物は出土していない。

SU143（Ⅲ-70・72図）

F7グリッドに位置する地下室である。SK141より古い。そのため、開口部の規模、形態の詳細は不明であるが、壁面の状態と残存する天井部より東南コーナーに存在したことが認められた。室部は西側へ拡がり、南北140cm、東西180cmを測る長方形を呈する。確認面からの深さは120cm、西奥壁での天井高は75cmを測る。

遺物は享保15年記銘の暦碗（Ⅳ-51図6）を含む18世紀前～中葉の陶磁器、土器、釘などがコンテナ３箱出土している。

SK144（Ⅲ-73図）

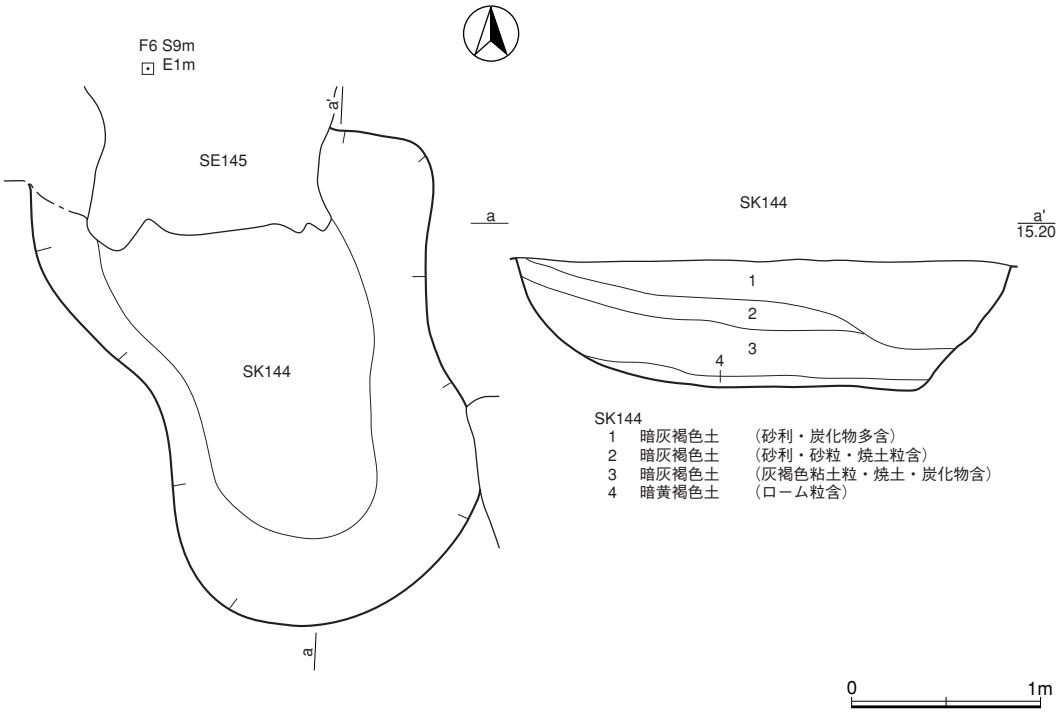
F6、F7グリッドに位置する遺構である。SE145と重複している。平面形は不整楕円形を呈し、南北260cm、東西210cm、確認面からの深さ65cmを測る。覆土は砂利、焼土を含む暗灰褐色土を主体としている。

遺物は18世紀前半の陶磁器、土器がコンテナ２箱出土しているほか、被熱した本瓦が少量出土している。また、自然遺物では哺乳類、鳥類、魚類、貝類が廃棄されているが、特にマダイを主体とした魚類が多量に出土している。

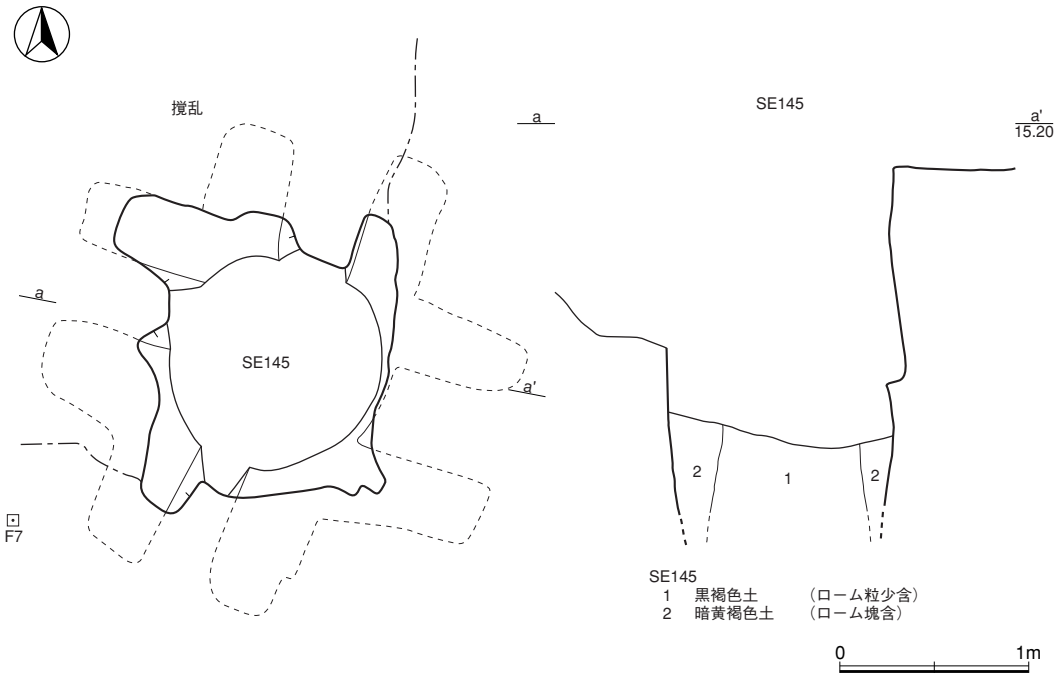
SE145（Ⅲ-74図）

F6グリッドに位置する井戸跡である。掘方の直径は、115cmを測り、その内側に直径約80cmを測る井戸側の痕跡が確認された。また、確認面下150cmに井桁を設置したと考えられる奥行約80cm、高さ1m弱の横坑が掘られている。対になる横坑の奥壁間距離は約250cmを測る。井桁の痕跡は確認されなかったが、横坑の規模より、最大で長さ180cmの木材が設置可能である。

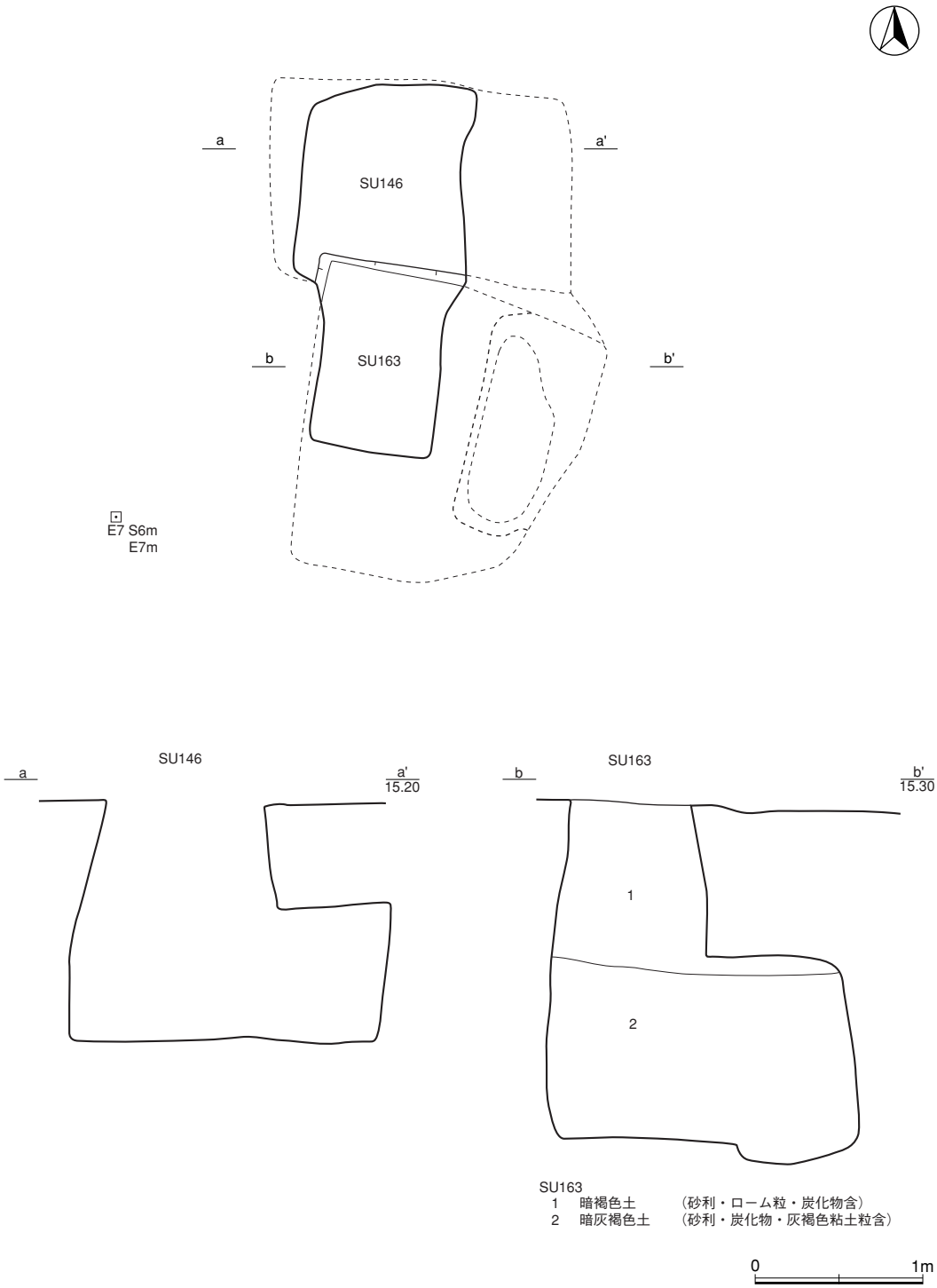
遺物は18世紀～19世紀前半の陶磁器、土器が数十点出土している。



Ⅲ-73図　SK144



Ⅲ-74図　SE145



Ⅲ-75図　SU146・SU163

SU146（Ⅲ-75図）

E7グリッドに位置する地下室である。南側でSU163と重複している。開口部は一部崩落しているものの、南北100cm、東西95cmの長方形を呈していたと推定される。竪坑は天井部まではハの字状に緩やかに拡がり、そこから坑底までは垂直になる。室部は東側に拡がり、南北120cm、東西180cmの長方形を呈する。天井は、竪坑部からほぼ直角に折れ、東奥壁で高さ80cmを測る。壁面、坑底ともに整形は施されているものの、所々工具痕が残存している。

遺物は18世紀前半の陶磁器、土器がコンテナ5箱出土している。

SK147（Ⅲ-76・77図）

E7グリッドに位置する遺構である。平面形は長方形を呈し、南北150cm、東西165cmを測る。壁は垂直に立ち上がり、確認面からの深さは40cmを測る。壁際には両端と中央に方形の柱穴が存在する。木材などの痕跡は認められなかったが、四方に板枠が付設されていたものと推定される。また、坑底南側に浅い掘り込みが存在するが、その用途は不明である。

遺物は19世紀前半の陶磁器、土器が少量出土している。遺構の性格は、覆土が暗灰褐色土を主体とすることから芥溜と考えられ、その年代観から大聖寺藩邸に帰属する遺構と位置づけられる。

SK148（Ⅲ-76・77図）

E7グリッドに位置する遺構である。平面形は長方形を呈し、南北70cm、東西145cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは75cmを測る。

遺物は17世紀後半の陶磁器がわずかに出土している。

SU150（Ⅲ-76・77図）

F7グリッドに位置する地下室である。開口部の平面形は不整長方形を呈し、南北130～135cm、東西185～190cmを測る。室部は西側に拡がり、南北110～160cm、東西240～250cmを測る撥形を呈している。西奥壁における天井高は90cmで、遺構全体の確認面からの深さは150cmを測る。坑底東側には排水施設と推測される不整楕円形の浅い掘り込みが存在するが、本遺構ではその位置が開口部の直下にあたっている。

遺物は18世紀前半の陶磁器、土器がコンテナ2箱出土している。

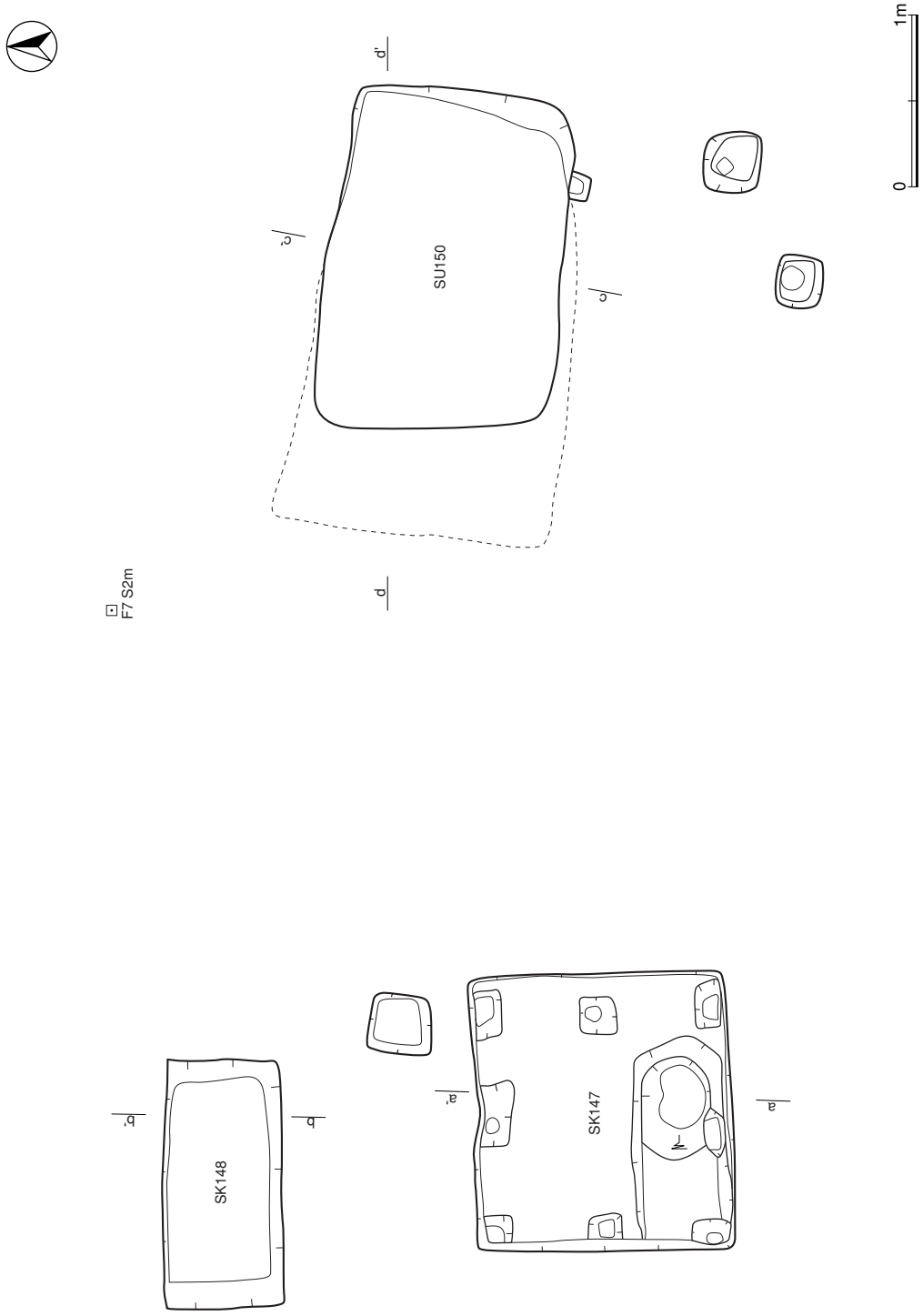
SU151（Ⅲ-78図）

F7グリッドに位置する地下室である。開口部はSB70によって大きく破壊され、原形をとどめていないが、本来は南北140cm、東西110cmを測る長方形を呈していたと推測される。SB70による撹乱はローム層を求めて坑底にまで達し、坑底形態にも影響を与えている。室部は北壁側に拡がり、本来は南北200cm、東西130cmを測る長方形を呈していたと推定される。天井高は竪坑部分で60cmを測り、アーチ状に弧を描き奥壁に達する。壁面、坑底ともに丁寧な調整が施されている。

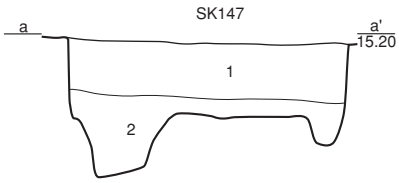
遺物は18世紀前半の陶磁器、土器が数十点出土している。

SK152（Ⅲ-79図）

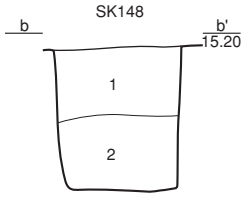
D8、E8、D9、E9グリッドにまたがる大形土坑である。西側でSK290、北側でSU300などと重複し、それらより新しい。平面形は複数の円形遺構が重複しているような雲形状の不整形を呈し、規模は南北最大720cm、東西最大440cm、確認面からの深さは最大290cmを測る。坑底には多



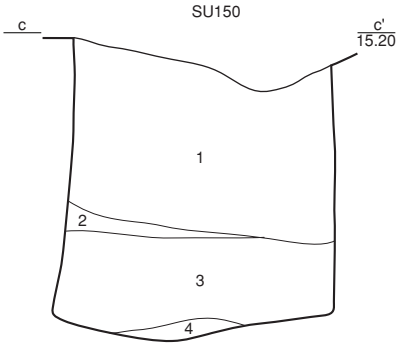
Ⅲ-76図　SK147（1）・SK148（1）・SU150（1）



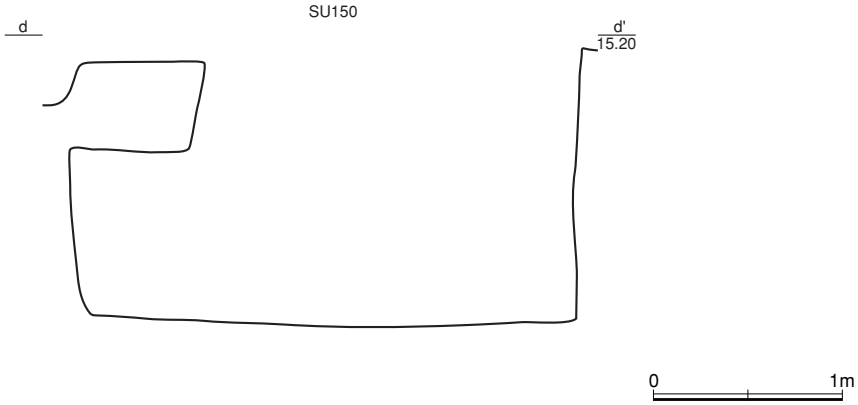
SK147
1　暗灰褐色土　（焼土・炭化物粒含）
2　褐色土　（ローム粒含）



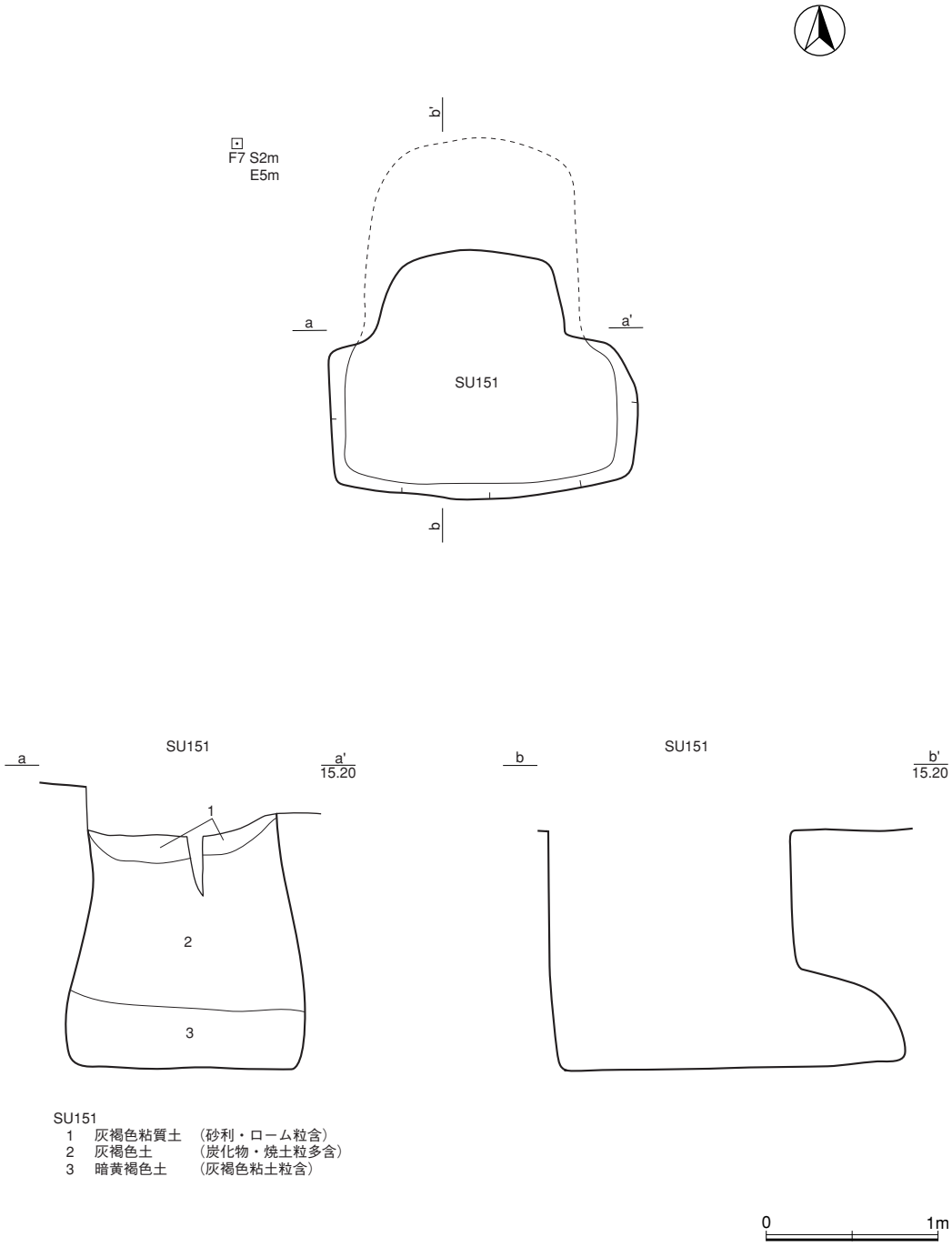
SK148
1　暗褐色土　（砂利多、焼土粒含）
2　褐色土　（ローム粒、砂利・焼土少含）



SU150
1　褐色土　（焼土多含）
2　褐色土　（炭化物多含）
3　暗褐色土　（ローム粒・灰褐色粘土粒含）
4　暗黄褐色土　（ローム粒含）

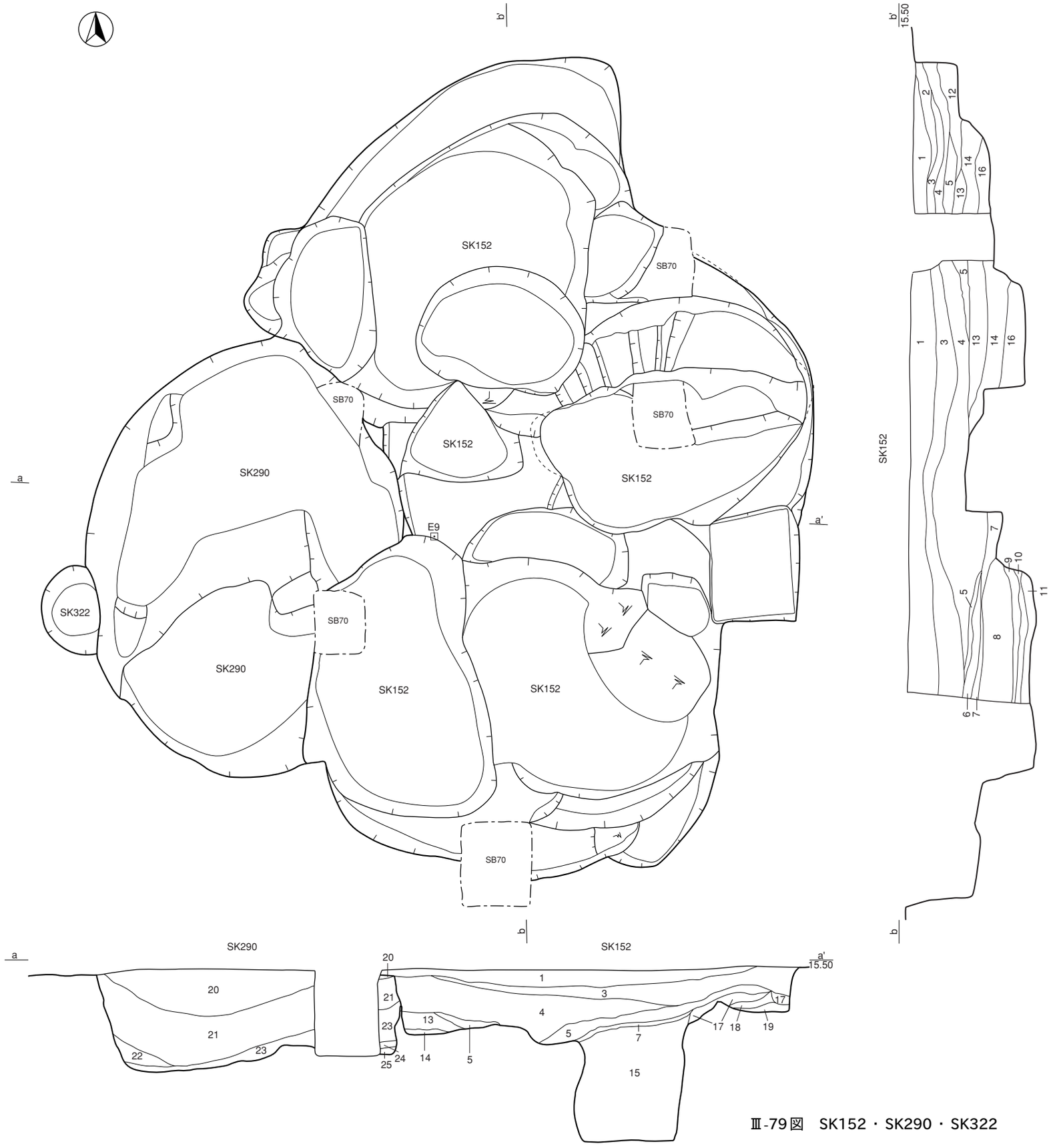


Ⅲ-77図　SK147（2）・SK148（2）・SU150（2）



SU151
1　灰褐色粘質土　（砂利・ローム粒含）
2　灰褐色土　（炭化物・焼土粒多含）
3　暗黄褐色土　（灰褐色粘土粒含）

Ⅲ-78図　SU151



SK152
1 暗褐色土 (小礫多、焼土・炭化物含、粘性弱)
2 褐色土 (ローム粒多、焼土粒微含、粘性やや強)
3 暗褐色土 (ローム粒・焼土粒少含、しまり強)
4 暗黄褐色土 (ローム・ブロック・ローム粒多含)
5 暗褐色土 (ローム・ブロック多含、粘性・しまり強)
6 暗黄褐色土 (ローム・ブロック・ローム粒多含)
7 暗褐色土 (ローム・ブロック少含、粘性強)
8 暗黄褐色土 (ローム・ブロック多、小礫含)
9 黄褐色土 (ローム・ブロック主体、しまり強)
10 暗褐色土 (ローム・ブロック・灰色粘土含、粘性・しまり強)
11 暗黄褐色土 (ローム・ブロック多含)
12 褐色土 (ローム・ブロック主体、粘性強)
13 暗褐色土 (ローム粒・炭化物粒微含、しまりやや強)
14 暗褐色土 (ローム粒多含)
15 暗褐色土 (ローム粒多含、しまり強)
16 暗灰褐色土 (ローム・ブロック極多含、粘性強)
17 褐色土 (白色微砂粒多含、しまりやや強)
18 褐色土 (ローム粒極多含)
19 褐色土 (ローム粒含)

SK290
20 暗褐色土 (ローム粒・焼土粒含、しまり強)
21 暗褐色土 (小石・炭化物・貝殻多含)
22 暗褐色土 (ローム粒含、しまり弱)
23 褐色土 (ローム粒極多、ローム・ブロック多含)
24 暗褐色土 (焼土粒・炭化物粒少含、粘性やや強、しまりやや弱)
25 暗黄褐色土 (粘性やや強)

Ⅲ-79図　SK152・SK290・SK322

数のテラスを有し、一見すると複数の遺構が複雑に重複している様相と見受けられるが、土層観察の結果、遺構の切り合いは一切認められず、単独遺構として認識するに至った。

遺構内のテラスはいずれも壁面、坑底ともに著しい工具痕が残存し、調整痕は認められない。このような様相から、本遺構の性格は採土坑と考えられる。さて、本遺構の掘削過程について複数回の部分掘削によって最終的に雲形状の複雑な平面形態になったことは先にも触れたが、さらに、ひとつの掘削単位に目を向けると、確認面から坑底に達するまでの壁面にも何段かのテラスが存在する。セクション面には顕著に表れていないが、各段の壁面はスプーンで削り取ったように袋状の湾曲を繰り返して坑底に達している。その様相から、土採り行為が一気に下まで掘り進むものではなく、広く浅く摂取し、何回もの行為の結果、最終面まで掘り下がったものと推定される。

本遺構の覆土中からは、コンテナ50箱に及ぶ多量の遺物が検出された。遺物の状態、組成より本遺構埋没過程における日常的な行為としての廃棄と考えられる。この資料は、出土量と年代的なまとまりから、東大編年Ⅵａ期の指標資料のひとつに位置付けることができる。また、自然遺物では哺乳類、鳥類、魚類、貝類などが多量に廃棄されている。

SA155（Ⅲ-80～84・126・129・134図）

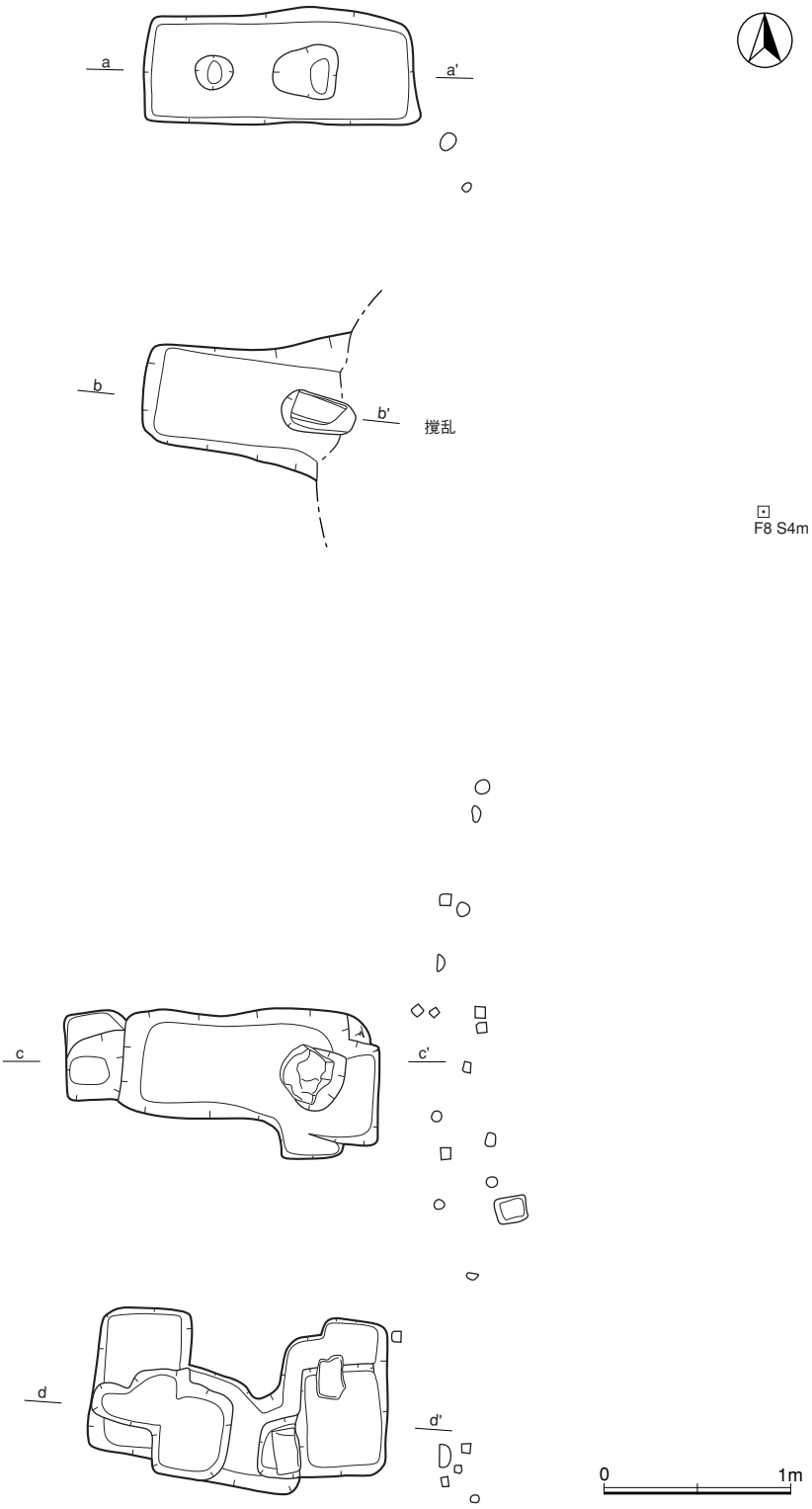
E5～E10グリッドにかけて南北に並ぶ礎石列で塀跡と考えられる。北端は病院建物基礎の撹乱によって、南端は調査区域外に達しておりそれぞれ不明である。本遺構は、SX331、SK332、SK333、SK334、SK336、SK337、SD343、SD344、SU345、SX350より新しく、SK152より古い。個々の平面形は長方形を基本としているが、東西両端部に複数の張り出しを有して複雑な形態を呈すピットも多い。

坑底はほぼ平坦で、東側に礎石を有しているピットが多い。残存している礎石はその規模、形態、設置状況から根石と考えられる。西側にも、浅い落ち込みを有しているピットがあるが、礎石は認められない。一方、覆土の堆積状況は、柱痕が観察されたピットはなく、1層など各ピット全体を埋め戻している土層を有し、壁際に多く認められる4層内側が急斜度で分層されることから、本遺構の礎石は抜き取り行為によって残存していないと判断される。よって各ピット両端の張り出しを伴う不整形態は、礎石抜き取り行為の結果と推測され、4層内側の分層ラインは抜き取り坑の掘り込みラインと考えられる。

本ピット群はほぼ田舎間1間で並び、主軸方位はN-1°-Eで、ほぼ南北方向に延びている。東側にのみ根石が残存することから、西側に対して上屋からの荷重が大きく、そのため規模の大きな礎石を使用していたことが考えられる。

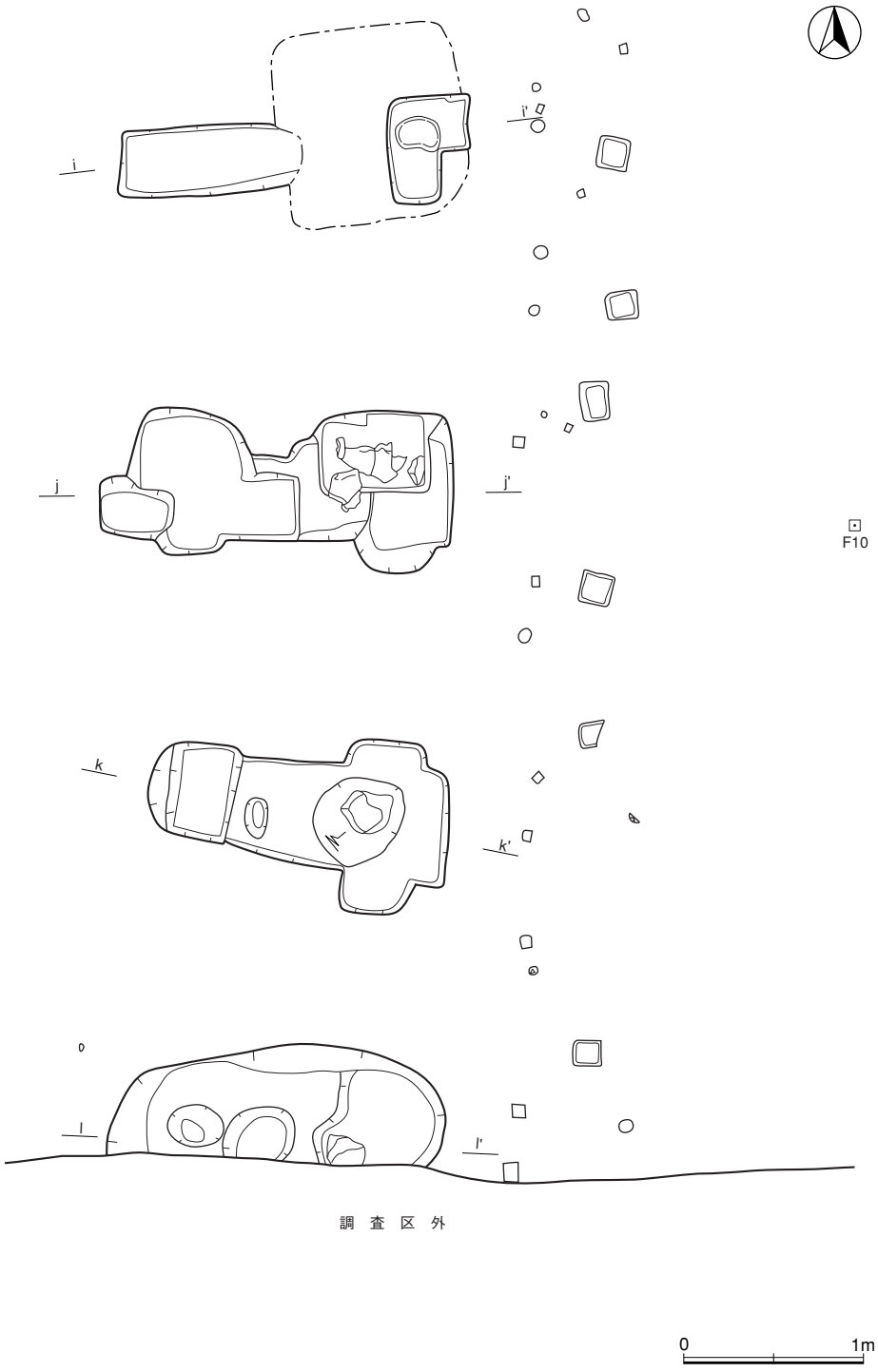
本遺構の形態、礎石の状況は法学部4号館地点で検出された御殿空間と詰人空間の境塀と年代的、構造的に類似することから（東京大学遺跡調査室　1990）、本遺構は東側に塀本体の主柱を西側にそれの控え柱を有する塀跡と考えられる。即ち、東側を表面とする塀である。

本遺構の位置は、病棟地点の調査（平成6～8年）で検出されたSD01（南北に延びる石垣溝）から西へ約168.3mにある（東京大学埋蔵文化財調査室　1999）。SD01はその東側に隣接する道路状遺構と講安寺との関係より、天和3年以降の大聖寺藩邸の東地境に比定される遺構である。天保13（1842）年の大聖寺藩邸藩邸地割り寸法が記載されている『御上屋敷御地面之絵図』によると、加賀藩邸から借地した文政12（1829）年以前の両藩邸屋敷境から東地境までの距離は約93間であ

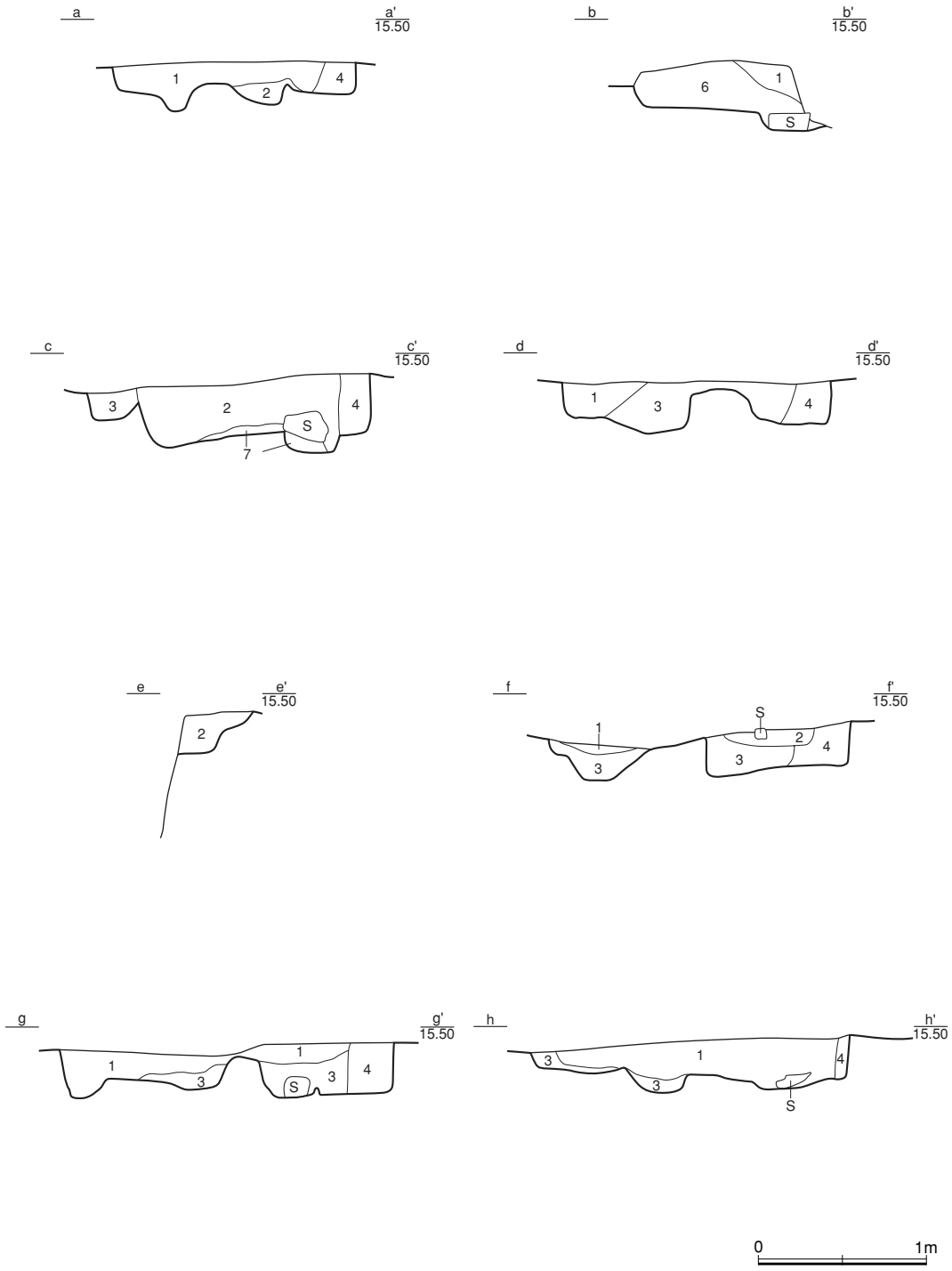


Ⅲ-80図　SA155（1）

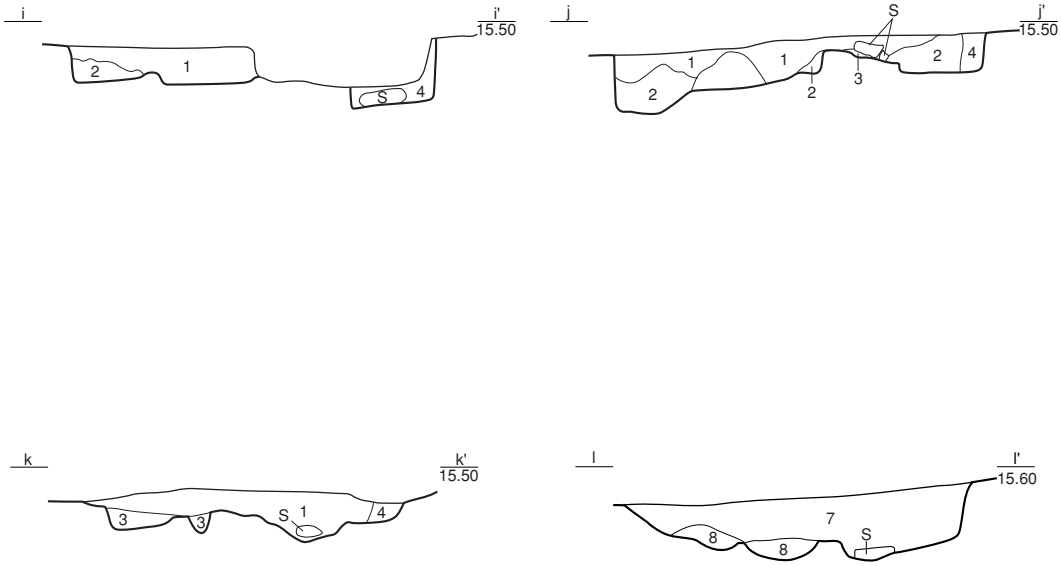
Ⅲ-81図　SA155（2）



Ⅲ-82図　SA155（3）


a
a'
15.50
1
2
4
b
b'
15.50
6
1
S
c
c'
15.50
3
2
S
4
7
d
d'
15.50
1
3
4
e
e'
15.50
2
f
f'
15.50
S
1
2
4
3
3
g
g'
15.50
1
1
3
S
3
4
h
h'
15.50
3
1
4
3
S
0
1m

Ⅲ-83図　SA155（4）



SA155
1　暗褐色土　（焼土粒・ローム粒少含）
2　暗褐色土　（ローム粒含）
3　褐色土　（ローム粒多含）
4　暗褐色土　（焼土粒子多、ローム粒少含）
5　暗黄褐色土　（ロームブロック多含、粘性やや強）
6　暗褐色土　（灰色粘土ブロック多含）
7　暗褐色土　（ローム粒少含、しまりやや強）
8　暗黄褐色土　（ロームブロック含、しまりやや強）

0　1m

Ⅲ-84図　SA155（5）

る。田舎間１間とすると、93間は169mとなり、病棟SD01-本遺構間とほぼ同一距離であることが認められ、本遺構が加賀藩邸と大聖寺藩邸との地境塀に比定されることが確認された。さらに、塀の向きから単なる地境としてではなく、加賀藩邸を取り巻く塀としても性格付けることができる。

本遺構の東側には、１辺約20cmの方形ピットや、方形、半円形の杭跡が南北に並んでいる。この配列には特に規則性は認められず、本遺構との関係は窺わせるものの、性格は不明である。

遺物は17世紀後葉～18世紀前半の陶磁器、土器がコンテナ２箱出土している。

SK156（Ⅲ-129図）

E5グリッドに位置する円形遺構である。平面形は円形を呈し、規模は直径約350cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、坑底中央部が富士山状の高まりをみせる。こうした形態的特徴から、本遺構の性格は植栽痕と考えられる。SA155礎石抜き取り坑との関係では、SA155が新しいが、本来の新旧関係は不明である。

遺物は18世紀後半の陶磁器、土器が十数点出土している。

SK157（Ⅲ-132図）

E6グリッドに位置する遺構である。北半部をSB70によって大きく撹乱されているため、規模、形態の詳細は不明である。覆土下層は灰褐色粘質土が堆積しているが、遺物は含まれていない。

SK158（Ⅲ-26図）

D6グリッドに位置する遺構である。SD45と重複しており、新旧は本遺構が新である。また、遺構の上部及び北部が撹乱によって削平を受けており、遺構の全体を復元できない。遺存している平面形から方形もしくは長方形を呈していたと考えられる。遺構の規模は、東西230cm、南北210cm、確認面からの深さは30cmを計測する。遺構の坑底、壁は比較的凹凸は少ない。壁はフラットな坑底からほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は２層に分層される。

遺物は17世紀後半の陶磁器・土器が数十点出土している。

SK159（Ⅲ-85図）

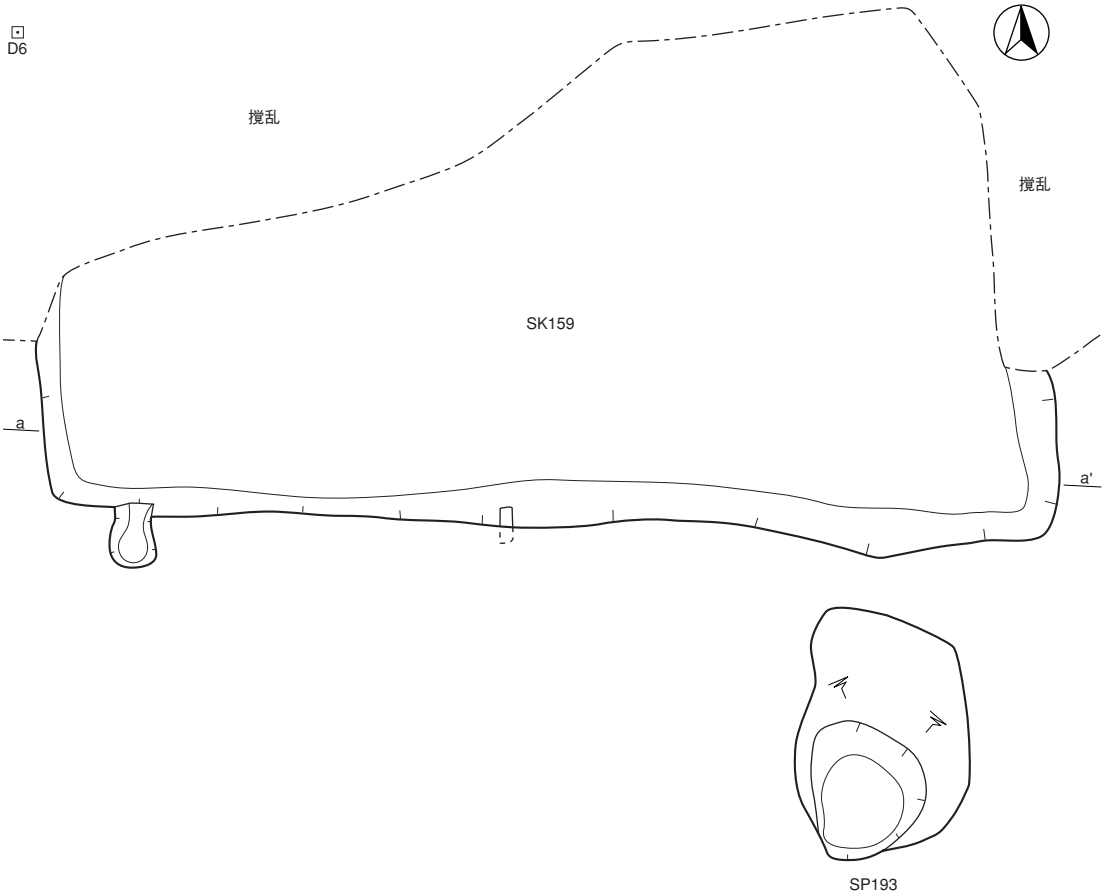
D6グリッドに位置するやや大形の土坑である。撹乱によって遺構の上部、北側の大半が削平されており、全体の復元はできない。遺存している形状から方形もしくは長方形を呈していたと考えられる。規模は東西730cm、南北は遺存部で290cm、確認面からの深さは最大70cmを計測する。遺構の坑底、壁の凹凸はそれほど顕著でない。

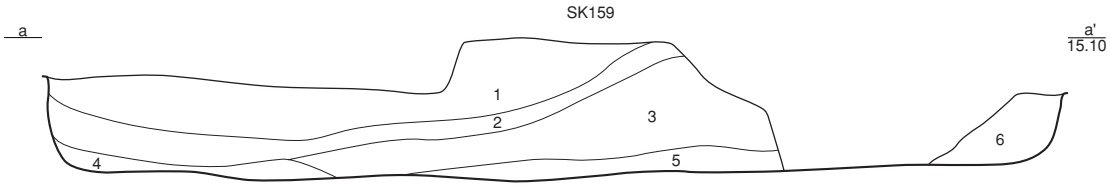
遺物は17世紀後半の陶磁器、土器が十数点出土している。

SK160（Ⅲ-86図）

C5、D5グリッドにまたがって位置する大形の土坑である。SD259と重複しており、新旧は本遺構が新である。また、遺構の上部及び北、南、西側を大きく撹乱により削平され、遺構のプランはわずかに北東コーナーが確認されたにすぎない。遺存している規模は東西700cm、南北310cm、確認面からの深さは70cmを計測する。覆土は灰褐色粘土や焼土を含む層が堆積している。

遺物は17世紀末の陶磁器・土器がコンテナ箱で２箱出土している。また、二次的な火熱を受けている例が多く、陶磁器・土器の年代から元禄16年の火災が遺構の年代的下限となる可能性がある。

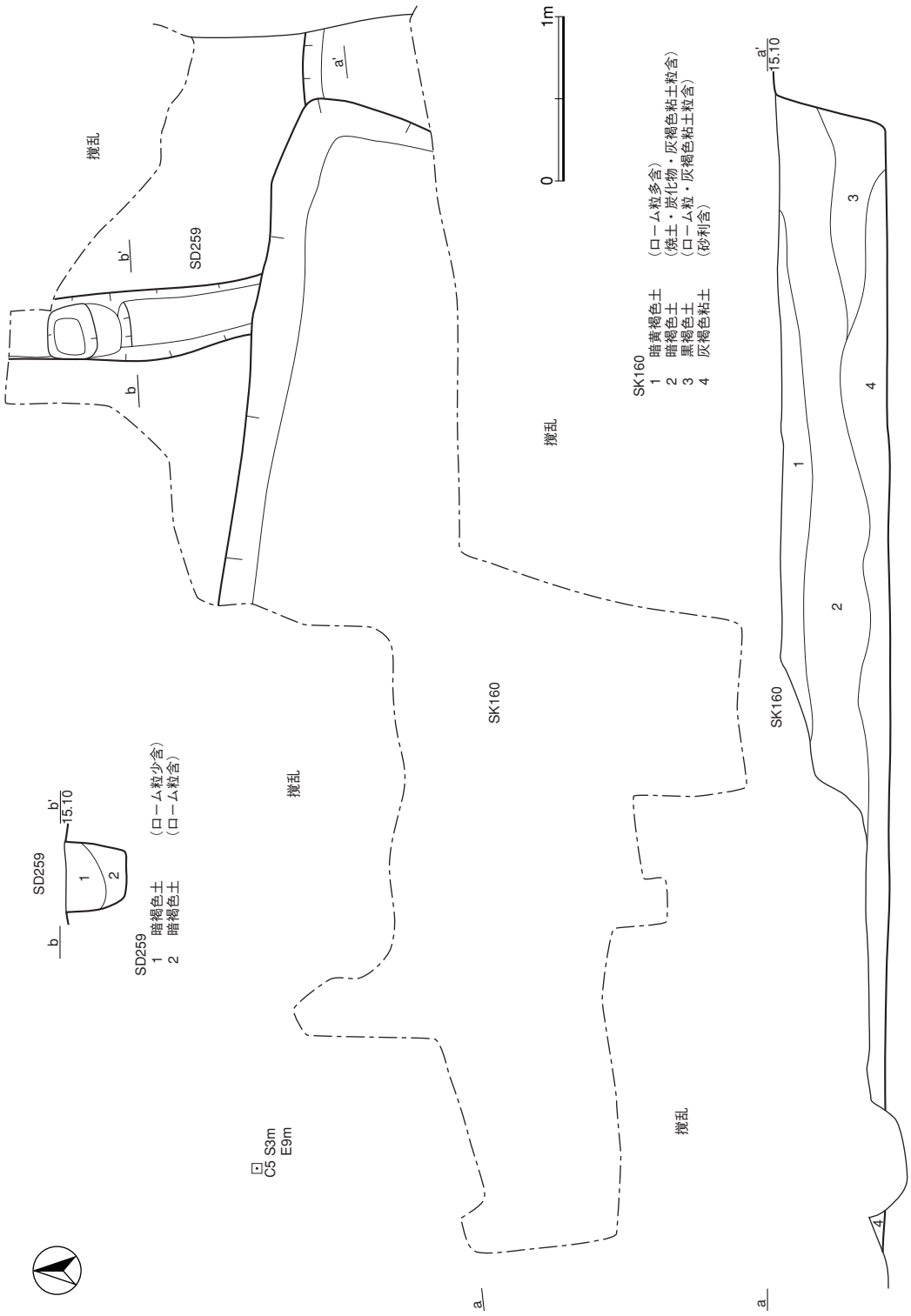




SK159
1　灰褐色粘土
2　黒褐色粘土　（炭化物粒含）
3　暗褐色土　（ローム粒含）
4　暗黄褐色土　（ローム塊含）
5　暗褐色土　（ローム粒・焼土粒含）
6　暗褐色土　（焼土・炭化物粒・砂利含）

0　1m

Ⅲ-85図　SK159・SP193



Ⅲ-86図　SK160・SD259

SD161（Ⅲ-25図）

D5グリッドを南北に延びる溝状遺構である。南側は撹乱によって破壊され、東壁、北側はSD45に切られているため、規模、形態ともに詳細は不明である。主軸方位はN-6°-Wと、SD45とほぼ平行に延びており、SD45に切られてはいるが、同環境下での境溝と推定される。

遺物は出土していない。

SK162（Ⅲ-25図）

D5グリッドに位置する遺構である。SK96と重複し、それに切られている。平面形は不整円形を呈し、中央部分に円形のテラスを有するドーナツ形の遺構である。直径は275cm、確認面からの深さは30cmを測る。中央の円形テラスは直径約170cmで、坑底と10cmの比高差がある。本遺構は形態的特徴から植栽痕と考えられ、SK96よりも古いことから、17世紀代に位置づけることができる。

遺物は出土していない。

SU163（Ⅲ-75図）

E7グリッドに位置する地下室である。SU146と重複している。開口部は北西側にあり、南北115cm、東西75cmの長方形を呈していたと推定される。竪坑は緩やかなハの字状を呈し、室部は東南方向に拡がる。奥壁は凹凸を有しながら弧状を描いており、室部の平面形は1/4の円弧形を呈している。天井高は110cm、確認面から坑底までの深さは200cmを測る。竪坑部の壁面は丁寧な整形が施されているが、奥壁際の天井から壁面にかけては工具痕が顕著である。また、坑底東側には南北130cm、東西60cmの隅丸長方形を呈する浅い掘り込みが存在する。

遺物は18世紀前～中葉の陶磁器、土器がコンテナ2箱出土している。

SK164（Ⅲ-128図）

F5、G5グリッドに位置する遺構である。東側は調査区外に及び、南側は撹乱を受けているため、詳細は不明であるが、平面形は、不整円形を呈すると思われる。坑底中央部には楕円形のテラスが存在し、その形態より、本遺構の性格は植栽痕と考えられる。

遺物は19世紀前半の陶器が少量出土している。

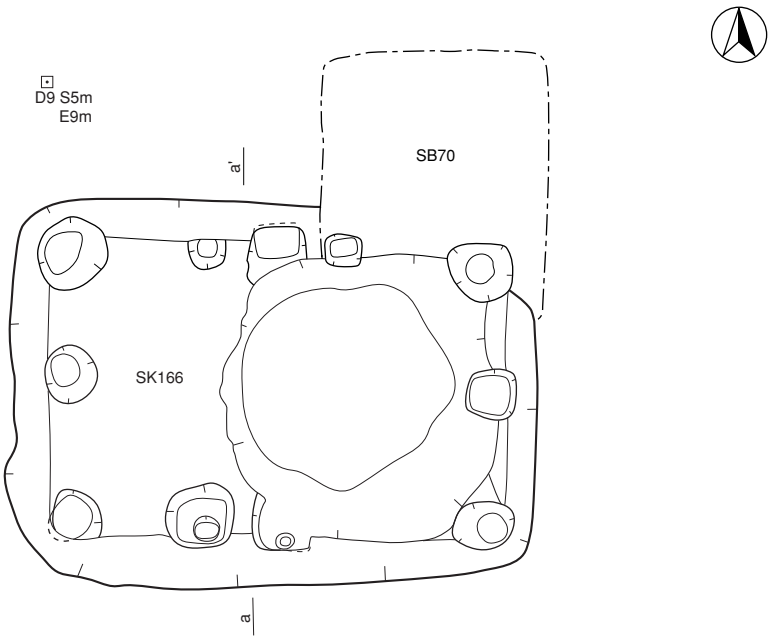
SK165（附図1・2）

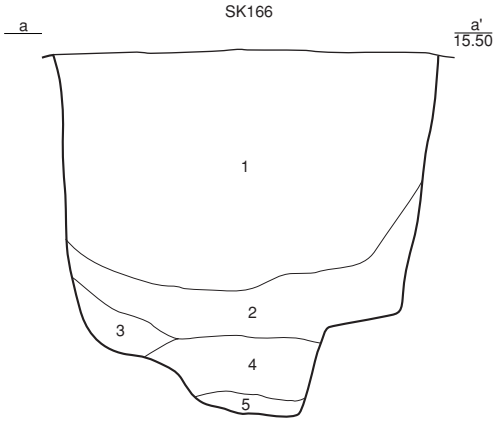
D6グリッドに位置する土坑である。上部を大きく撹乱によって削平されている。平面形は東西方向に主軸を有する隅丸長方形を呈し、規模は東西500cm、南北300cmを計測する。

遺物は18世紀後半の陶磁器・土器が数十点出土している。

SK166（Ⅲ-87図）

D9、E9グリッドに位置する土坑である。SB70、SD169、SK178、SK262、SK315と重複しており、新旧はSB70より旧である他は全ての遺構より新である。平面形は東西方向に主軸を有する長方形を呈する。壁際にはピットが合計11基巡っている。ピットは円形あるいは方形を呈し、おおむね1辺20～30cm、深さ20cmを計測する。また、土坑の東半は坑底が円形に大きく落ち込んでいることが確認された。規模は東西280cm、南北210cm、確認面から中段のフラット面までの深さは約150cm、東側の落ち込みまでの深さは180cmを計測する。壁は東側落ち込み部分を除き、平滑で丁寧に調整されているのに対し、坑底は凹凸が激しい。覆土は5層に分層されるが、

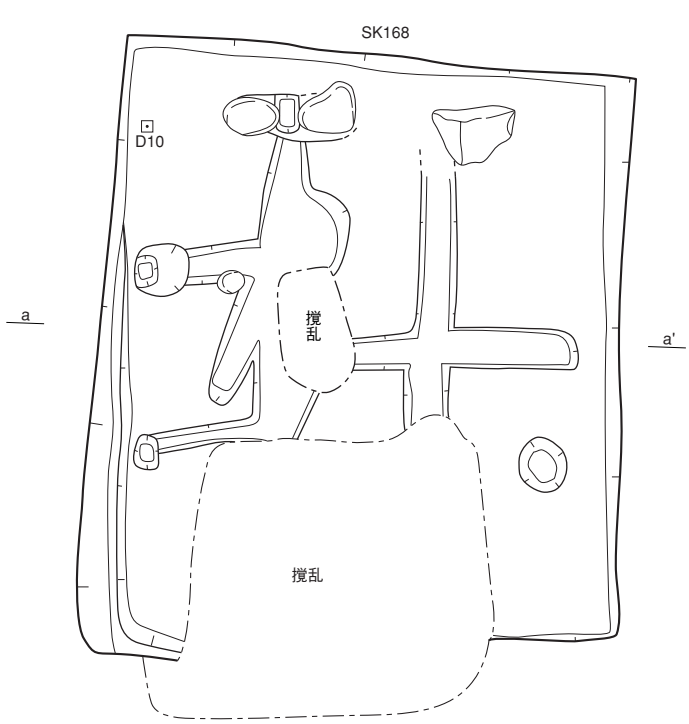


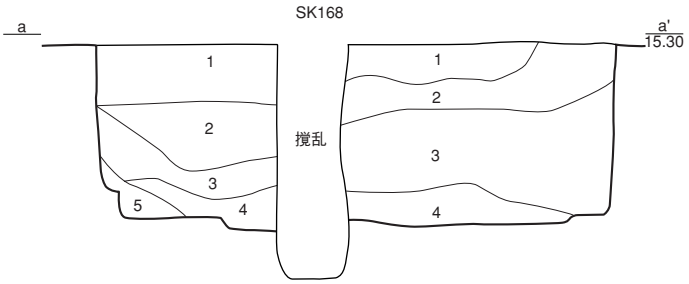


SK166
1　暗灰褐色土　（瓦片・漆喰多、炭化物・貝中、小円礫少含）
2　暗褐色土　（ローム粒・小円礫少、炭化物微含）
3　黄褐色土　（ローム粒・ロームブロック主体、粘性・しまりともにやや強）
4　暗褐色土　（ローム粒・ロームブロック微含、2層より暗、粘性やや強）
5　黄褐色土　（ローム主体、粘性弱）

0　1m

Ⅲ-87図　SK166





SK168
1　暗褐色土　（ローム粒少含、しまりやや強）
2　暗褐色土　（ローム粒・小円礫中、炭化物少含、粘性強）
3　茶褐色土　（ローム粒・小円礫少含、粘性やや強）
4　褐色土　（ローム粒・ロームブロック多含、粘性・しまりともに強）
5　灰褐色土　（ロームブロック少含、粘性非常に強、しまり強）

0　1m

Ⅲ-88図　SK168

最上層には瓦、漆喰、炭化物などが含まれている。

遺物は比較的多く出土している。Ⅷc期の陶磁器・土器がコンテナ箱で16箱のほか桟瓦・海鼠瓦などの瓦類、金属製品などが出土している。

SK167（Ⅲ-145図）

D9グリッドに位置するほぼ円形を呈する土坑である。坑底中央は盛り上がっており、深い部分はドーナツ状を呈する。規模は径260cm、確認面からの深さは最大40cmを計測する。中央はそれより20cm程度盛り上がっている。壁や坑底は凹凸が著しく、工具痕が確認できた。覆土は上層の黒褐色土、下層のロームブロックを多く含んだ層で構成される。規模、形態、土層の状況などから本遺構は木の移植穴であろうと推定される。

遺物は17世紀～19世紀の陶磁器・土器が20点程度出土するが、ガラス瓶などが含まれており、下限は近代まで下るであろうと推定できる。

SK168（Ⅲ-88図）

C9、D9、C10、D10グリッドに位置する土坑である。SK249、SK250、SK268と重複しており、新旧はそのいずれよりも新である。また、南壁付近を大きく撹乱によって削平されている。平面形はやや変形した方形で、規模は東西280cm、南北300～330cm、確認面から坑底までの深さは90cmを計測する。坑底には10cm程度の浅い溝状の落ち込みが数条確認されているが、性格は不明である。壁や坑底は平滑に整形されている。

遺物は18世紀後半の陶磁器・土器がコンテナ箱2箱出土している。

SD169（Ⅲ-145～147図）

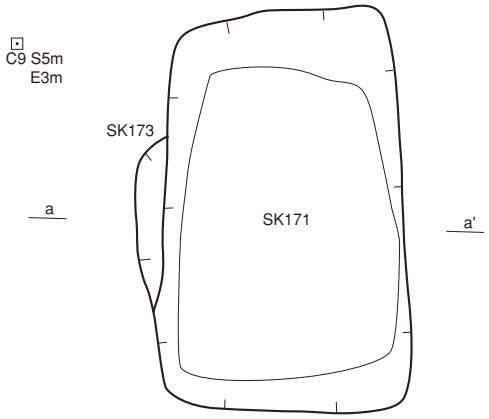
D9、D10グリッドに位置する溝状遺構である。南からSK177、SK240、SK170、SK167、SK262、SK166、SK315、SK152と重複しており、新旧はSK152、166、167より旧で、SK170、177、262、315より新である。ほぼ南北方向に主軸を有し、規模は確認された長さ16.8m、幅70cm、確認面からの深さは70cmを計測する。壁や溝底は平滑に整形されており、壁はフラットな溝底よりほぼ垂直に立ち上がる。SK166とSK167の間付近の溝底には1辺約20cmの方形の平石が主軸にあわせて設置されていた。あるいは柱の基礎石とも推定されるが、この他には確認されていない。覆土は2層に分層される。溝の規模、主軸方位などからSD180、SD308、SD344などとの関連性も考えられる。

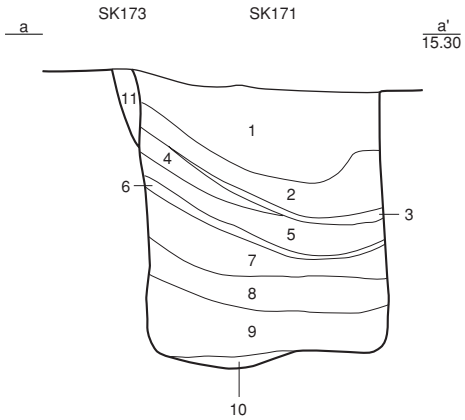
遺物は17世紀後半～19世紀の陶磁器・土器が数十点出土している。

SK170（Ⅲ-147図）

D9～10、E9～10グリッドにまたがって位置する円形の土坑である。SK169、SK232、SP233、SK236、SK262と重複しており、新旧関係はSK169より旧である他は、全てより新である。規模は東西380cm、南北390cm、確認面からの深さは最大100cmを計測する。壁や坑底は凹凸が激しく、また、中央部付近の坑底は不定方向に延びる小穴が集中している。壁は坑底からやや開きながら立ち上がっている。覆土は5層に分層されるが、ローム粒、ロームブロックが多く混入する土で構成される。形態、壁、坑底の状況、覆土の堆積状況などから樹木の植栽痕であろうと推定される。また、その規模から大きな木であると推定できる。

遺物は17世紀後半の陶磁器・土器が微量出土している。あるいは埋土に混入していたものか？



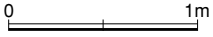


SK171

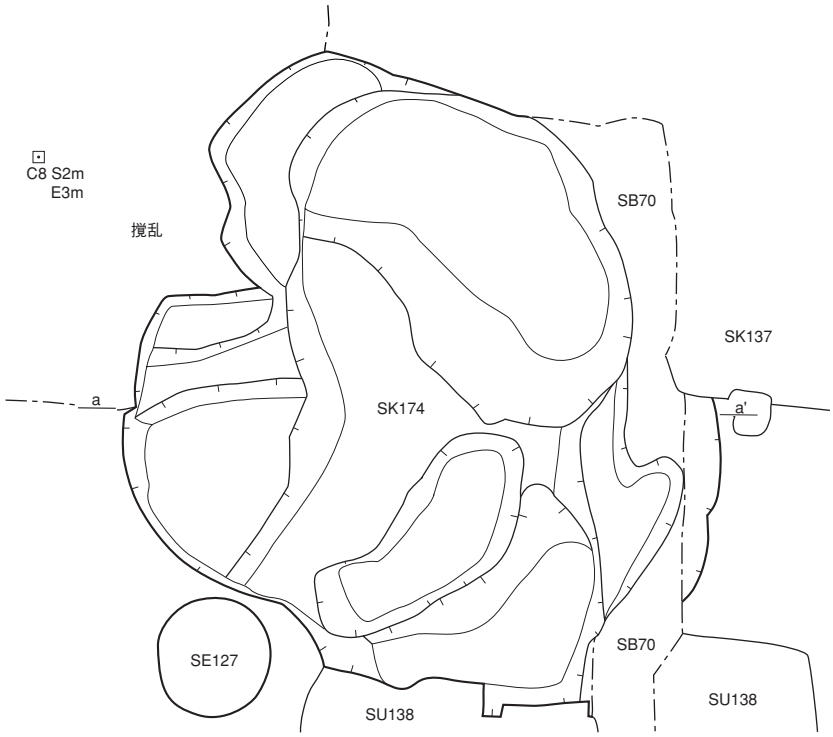
1	暗褐色土	（円礫・小円礫多含）
2	暗褐色土	（ローム粒・ロームブロック中含）
3	黄褐色粘土	（粘性非常に強）
4	暗褐色土	（黄褐色砂・小円礫中含、粘性・しまりともにやや弱）
5	暗褐色土	（炭化物微含、粘性・しまりともに強）
6	黄褐色粘土	（粘性非常に強）
7	暗褐色土	（黄褐色砂・円礫・小円礫中、炭化物少含、粘性・しまりともに強）
8	暗褐色土	（炭化物微含、粘性・しまりともに非常に強）
9	暗褐色土	（粘性・しまりともに非常に強）
10	黄褐色土	（ローム主体、粘性・しまりともに強）

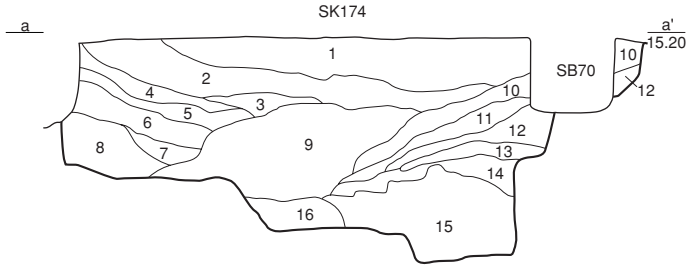
SK173

11	暗褐色土	（ロームブロック少含）



Ⅲ-89図　SK171・SK173



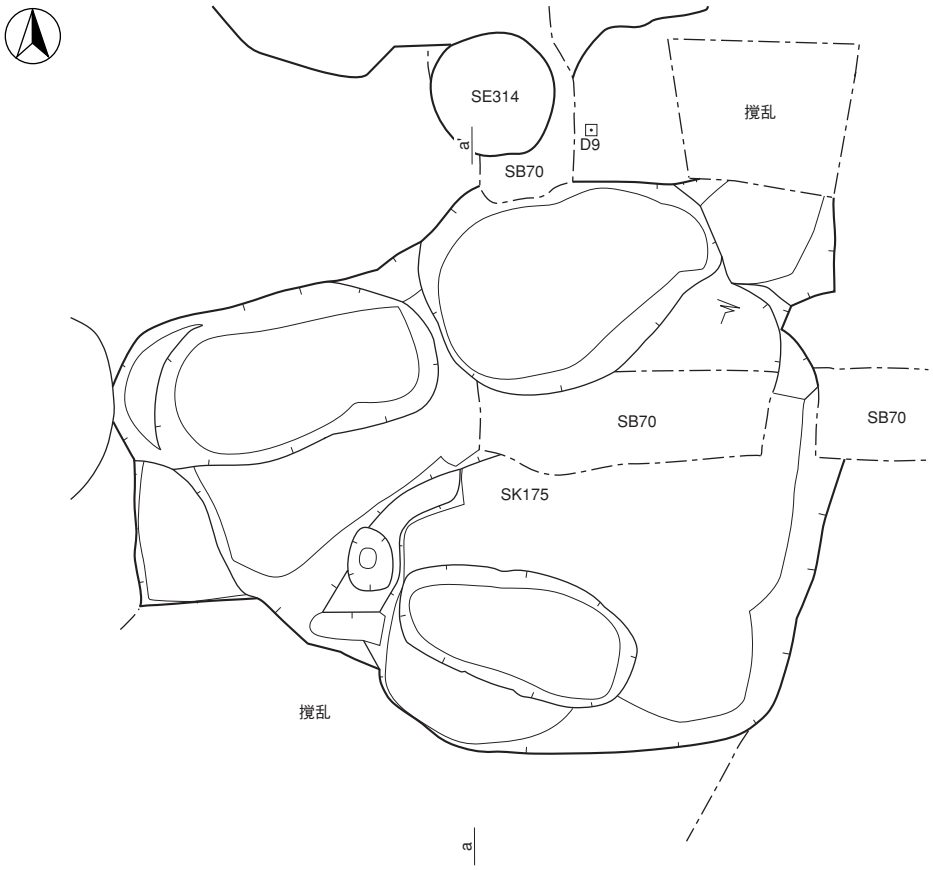


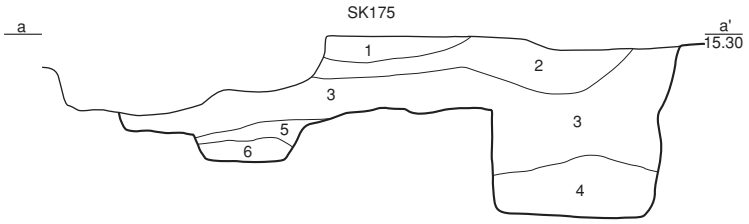
SK174

1	暗褐色土	（円礫・小円礫中、灰褐色砂少含）
2	暗褐色土	（小円礫多含、1層より明）
3	黒褐色土	（炭化物少含、粘性やや強）
4	暗灰褐色土	（灰褐色砂多、小円礫微含、粘性弱）
5	黒褐色土	（小円礫少含、粘性強、しまりやや強）
6	暗褐色土	（小円礫多、黒色粘土微含、粘性、しまりともにやや強）
7	黒褐色土	（木製品多、小円礫微含、粘性強）
8	暗褐色土	（円礫・小円礫中、灰褐色粘土少、瓦片微含、粘性非常に強）
9	黒色土	（木製品多含、粘性強、しまりやや強）
10	褐色土	（ローム粒多、ロームブロック少含）
11	茶褐色土	（ローム粒少、小円礫微含、粘性、しまりともにやや強）
12	褐色土	（ローム主体）
13	茶褐色土	（小円礫少、瓦片微含）
14	明褐色土	（小円礫微含、ローム主体）
15	黄褐色土	（ロームの崩落土と思われる）
16	暗灰褐色土	（15層の土が変質したと推定される、粘性、しまりともにやや強）

0　2m

Ⅲ-90図　SK174・SE127





SK175
1　褐色土　（ローム粒多、黄褐色粘土・灰褐色粘土・小円礫少含）
2　暗褐色土　（小円礫多、炭化物・瓦片中含）
3　褐色土　（ロームブロック・ローム粒多含、しまりやや強）
4　暗褐色土　（円礫・小円礫・ローム粒中含、粘性やや強）
5　暗褐色土　（ローム粒中含、粘性やや強）
6　黄褐色土　（ローム主体、粘性弱）

0　2m

Ⅲ-91図　SK175

SK171 ・ SK173（Ⅲ-89図）

C9グリッドに位置する土坑である。SK171の西壁でSK173と重複しており、新旧はSK173より新である。SK171の規模は東西140cm、南北210cm、確認面からの深さは150cmを計測する。壁は坑底から垂直に立ち上がるが、坑底は起伏が著しい。覆土は細かく分層され、特に3層以下は粘性の強い暗褐色から黄褐色土で構成されている。

遺物は17世紀後半の陶磁器・土器が数十点出土している。

SK173はそのほとんどをSK171に削平され、全体の状況は復元できない。遺物は出土していない。

SK174（Ⅲ-90図）

C8グリッドに位置する不定形の土坑である。SD54、SB70、SU138、SK238と重複しており、新旧はSD70、SK238より旧で、SD54、SU138より新である。全体の形状は複数の遺構が密に切り合っているような形状を呈するが、土層の堆積状況から埋没時は同時期であろうと推定できた。規模は東西620cm、南北680cm、深さは最大240cmを計測する。遺構は北西から南東に向かって深さを増しており、壁、坑底とも凹凸が顕著に認められる。覆土は10～15層までのロームを主体とする褐色土とそれ以外の遺物を多く含む暗褐色土とに大別できる。暗褐色土、特に遺構中央部9層を中心に陶磁器・土器、自然遺物、漆器椀、ほうき、羽子板などの多くの木製品と種子などが出土した。本遺構は形態、土層の堆積状態などから土取のために掘削され、日常廃棄土坑として利用されたものと推定できる。

遺物は前述した木製品の他にⅥa期の陶磁器・土器がコンテナ箱14箱、桟瓦、釘、イヌ・ネコなどの動物骨など多く出土した。

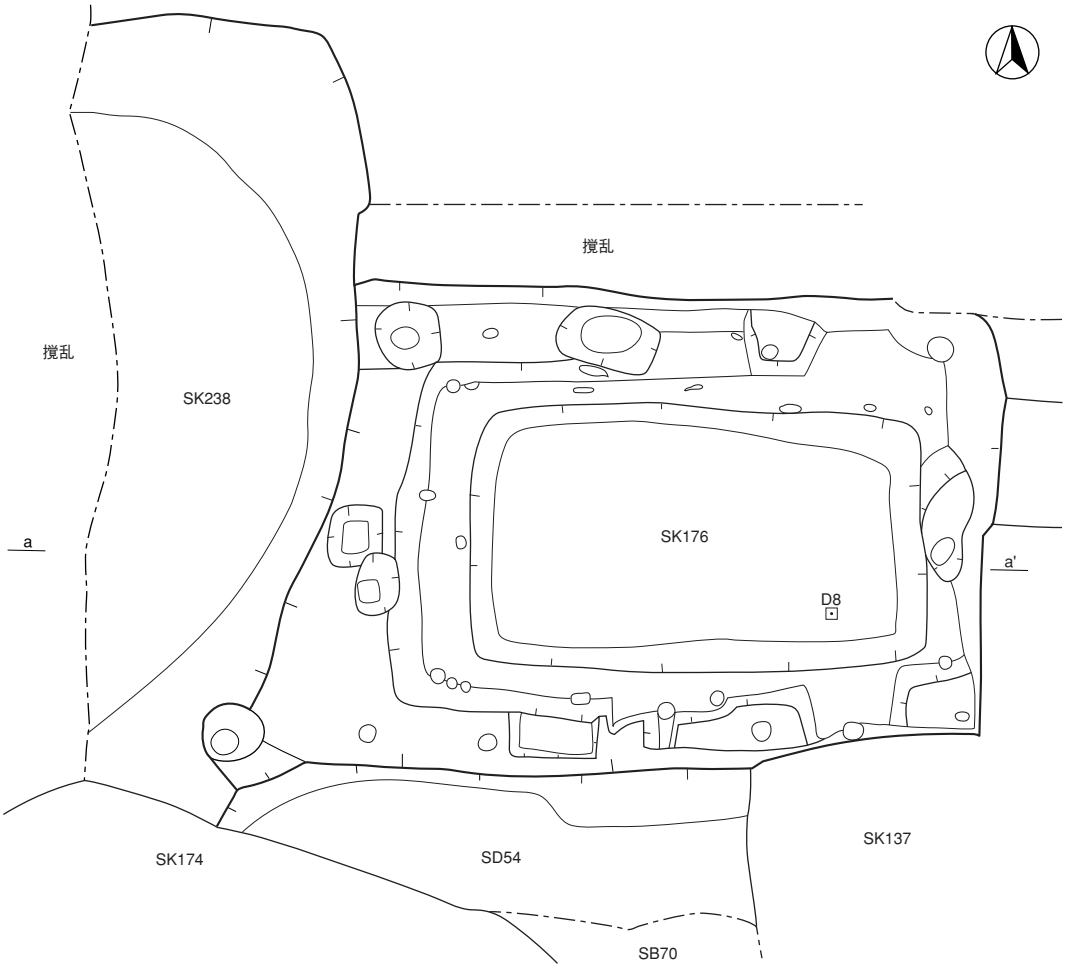
SK175（Ⅲ-91図）

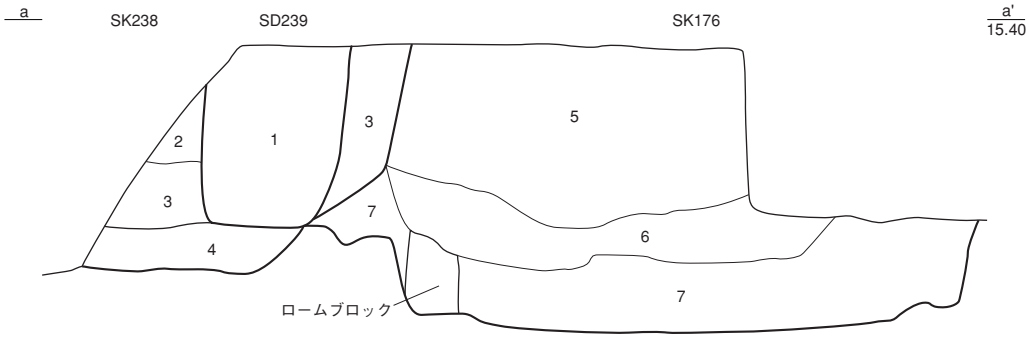
C9、D9グリッドにまたがって位置する土坑である。SB70、SK126、SK320と重複しており、新旧はSB70より旧で、SK320より新である。SK126との新旧は不明である。また、南側を撹乱によって大きく削平されており、全体の遺存度は不良である。平面形は不整形で、SK174同様異なる遺構が複数重複するような形状を呈するが、土層の堆積状況から埋没時は同時期であろうと推定できた。規模は東西780cm、南北600cm、確認面からの深さは最大180cmを計測する。遺構は北あるいは南側に部分的に深い場所があり、底部はかなりの凹凸を有する。また、壁も工具による凹凸が著しい。覆土は6層に分層される。形状や覆土の堆積状況から土取穴と推定される。

遺物は18世紀後半の陶磁器・土器がコンテナ箱4箱出土したほか桟瓦などが出土している。

SK176（Ⅲ-92図）

C7、C8、D7、D8グリッドにまたがって位置する土坑である。SD54、SK137、SK238、SD239と重複しており、新旧はSK137、SD238、SD239より旧で、SD54より新である。遺構の平面形は東西に長軸を有する長方形を呈し、規模は遺存している南壁付近で東西420cm、南北260cm、確認面からの深さは最大150cmを計測する。遺構は三重の入れ子状に内側が階段状に深くなっており、最内側の規模は東西240cm、南北140cmである。その上、内段の外側には小ピットが不規則に確認されているが、性格は不明である。外側の規模は東西300cm、南北190cmである。その外側壁際にピットが10基程度巡っている。これらピットの機能・用途は復元できな





SD239
1　暗褐色土　（ローム粒・ロームブロック中、炭化物少含）

SK238
2　黒褐色土　（ロームブロック多、小円礫微含）
3　褐色土　（ローム粒子・ロームブロック多含、粘性弱）
4　黄褐色土　（ローム主体、粘性弱）

SK176
5　褐色土　（ローム粒・ロームブロック多、小円礫少、黄褐色粘土微含）
6　暗褐色土　（ローム粒・ロームブロック・灰褐色粘土中、黒色土粒子・小円礫微含）
7　褐色土　（ローム粒・ロームブロック多含、粘性弱）

0　1m

Ⅲ-92図　SD54（2）・SK176・SK238・SD239

かったが、土留めのためとも推定できる。覆土の堆積は大きく３層に分層されるが、構造を推定できるような土層の堆積状態は確認できなかった。

遺物は確認当初にSD239と同一遺構として考え調査したため、両遺構の遺物が混在してしまった経緯があり、併わせて掲載した。17世紀末の陶磁器・土器がコンテナ箱２箱出土ほか金属製品が少量出土している。

SK181（Ⅲ-141図）

F8グリッドに位置する遺構である。平面形は直径約100～120cmを測る不整円形を呈する。覆土は単層でローム粒、ロームブロックを含む暗褐色土で構成されている。構築年代、性格ともに不明である。

遺物は出土していない。

SK182（Ⅲ-152図）

F9グリッドに位置する遺構である。平面形は１辺約180cmを測る隅丸三角形を呈する。覆土はローム粒、ロームブロックを多量に含む暗褐色土の単層である。構築年代、性格ともに不明である。

遺物は19世紀前半の陶磁器、土器が少量出土している。

SK183（Ⅲ-141図）

E8グリッドに位置する遺構である。平面形は隅丸方形を呈し、規模は東西65cm、南北55cm、確認面からの深さ25cmを測る。覆土は２層からなるが、その堆積状況より、２層内側に木桶などの埋設施設があったことが推定される。但し木質などその痕跡は確認されていない。１層は粘性の強い灰褐色土が堆積していることから、本遺構の性格は厠の下穴の可能性が高い。

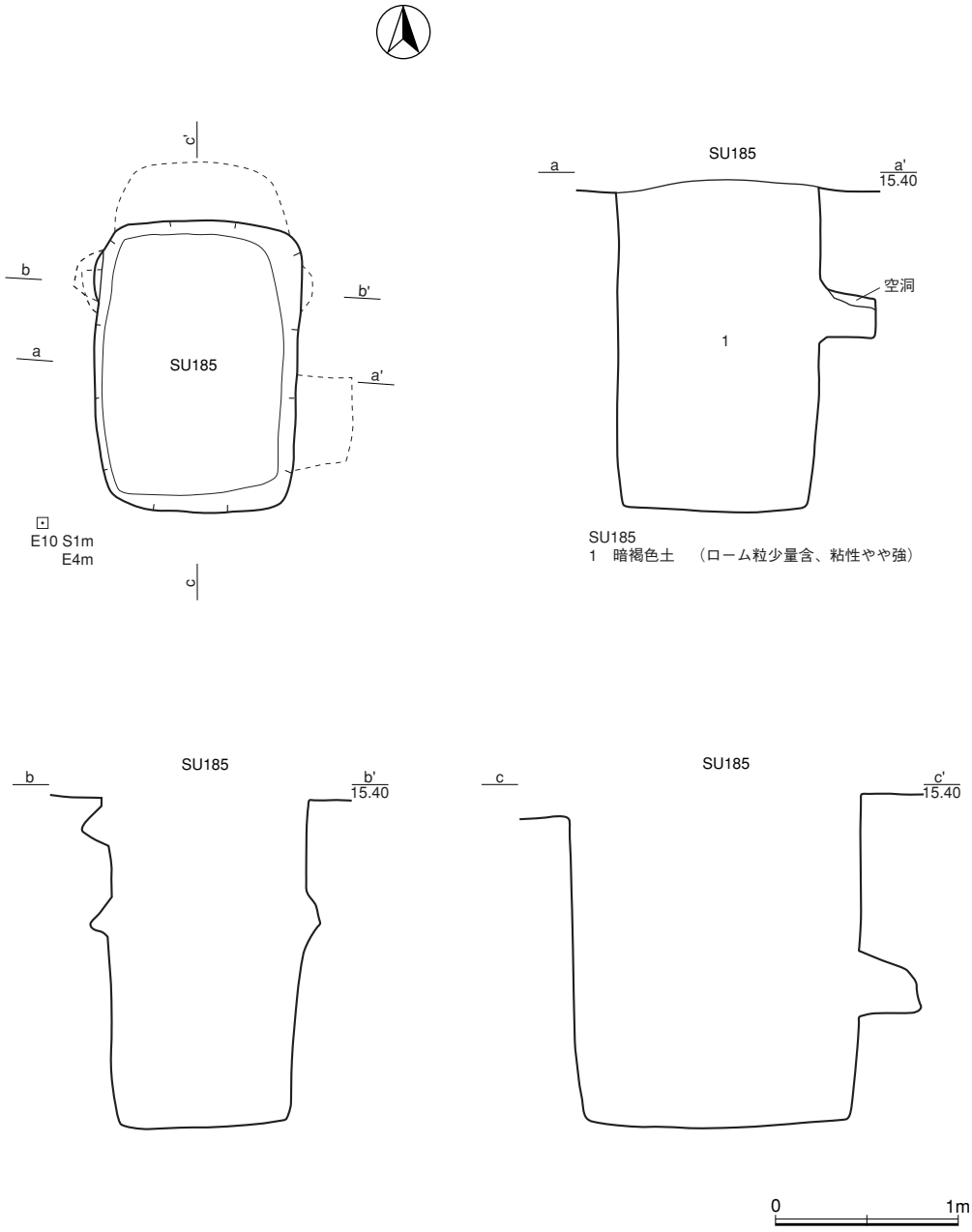
遺物は出土していない。

SK184（Ⅲ-138図）

E8グリッドに位置する遺構である。平面形は長方形を呈し、規模は南北190cm、東西110cm、確認面からの深さ170cmを測る。重複するSP217、SK218より新しい。壁面、坑底ともに工具痕を残しながらも平滑に調整されている。覆土は３層からなりほぼ水平に堆積している。特に最下層の３層はほぼ純粋な粘土層で、堆積後の乾燥による収縮で縦方向の亀裂が何条も認められた。また１層は焼土粒を多量に含み、少量出土した陶磁器もほとんどが被熱していた。陶磁器の年代観から天和２年の火災に比定される。本遺構はSA155のライン上に存在するが、先述した出土遺物の年代観から天和２年以前の廃絶が想定され、大聖寺藩邸に帰属する遺構である。但し性格は不明である。

SU185（Ⅲ-93図）

E9、E10グリッドに位置する遺構である。SX340、SD343、SX350より新しい。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は南北160cm、東西110cm、確認面からの深さ180cmを測る。壁面、坑底ともに若干の工具痕を残すものの、ほぼ平滑に仕上げられている。北壁には坑底上55cmの位置に幅95cm、高さ35cm、奥行き35cmの、東壁南側には坑底上95cmの位置に幅50cm、高さ30cm、奥行き30cmの棚状施設がそれぞれ設けられており、さらに東西両壁の北壁コーナー際に昇降用の足掛け穴が穿たれている。覆土は単層で廃絶後一気に埋め戻されたことを物語っているが、


c'
b
b'
a
SU185
a'
E10 S1m
E4m
c
SU185
a
a'
15.40
空洞
1
SU185
1　暗褐色土　（ローム粒少量含、粘性やや強）
SU185
b
b'
15.40
SU185
c
c'
15.40
0
1m

Ⅲ-93図　SU185

出土遺物の年代幅は17世紀後～19世紀前半と広く、覆土に伴う二次廃棄の可能性が高い。遺物の下限年代から本遺構の廃絶年代は19世紀前半に位置付けられ、大聖寺藩邸に帰属する遺構と推定される。

SK186（Ⅲ-98図）

F9グリッドに位置する遺構である。平面形は円形を呈し、直径160cmを測る。その規模、形態より植栽痕と考えられ、覆土中より銅板転写の染付端反碗（Ⅳ-68図1）が出土したことより、旧東京医学校本館（SB70）に関連する遺構と推定される。

SB187（Ⅲ-141図）

F8グリッドに位置するピット列である。平面形は1辺約20cmを測る方形を呈している。ピット間の距離は180cmを測り、何らかの建築遺構とは推定されるが、詳細は不明である。また、本遺構周辺には同規模の方形もしくは円形のピットが複数基散在しているが、ピット間距離、方角に規則性を読み取ることはできない。

遺物は出土していない。

SD191（Ⅲ-133図）

C6、D6グリッドを東西に延びる溝状遺構である。幅70～80cm、確認面からの深さ20cmを測る。覆土は暗黄褐色土を呈す。主軸方位はN-87°-Wとほぼ東西方向を示す。本遺構の周辺には南北方向のSD192、東西方向のSD196などが存在し、関連性が窺えるがその性格は不明である。

遺物は出土していない。

SD192（Ⅲ-133図）

D6、D7グリッドを南北に延びる溝状遺構である。幅70～90cm、確認面からの深さ最大70cmを測る。主軸方位はN-1°-Eとほぼ南北方向を示す。本遺構の周辺には東西方向のSD191、SD196など類似した形態の溝が存在し、関連性を窺わせるが、性格は不明である。

遺物は出土していない。

SK194（Ⅲ-133図）

D6、D7グリッドに位置する遺構である。北側は撹乱によって破壊され、東側はSD192と重複し、それより古いため、形態、規模ともに詳細は不明である。覆土は暗黄褐色土の単層で短期間に埋め戻された結果と推測される。

遺物は出土していない。

SD195（Ⅲ-133図）

C7、D7グリッドにかけて東西に延びる溝状遺構である。西側は撹乱によって破壊され、全長は明かではない。また、東端は直交するSD192内で収束している。幅は30～45cmと西に向けて徐々に拡がりをみせている。主軸方位は東端付近でやや蛇行するもののN-90°-Eと東西方向を示している。溝底西寄りにピットが2基存在しているが、柱痕などの痕跡は確認されていない。

遺物は出土していない。

SD196（Ⅲ-133図）

C7、D7グリッドにかけて東西に延びる溝状遺構である。東西両端は撹乱によって破壊されているため、全長は不明である。幅は60～70cmを測り、主軸方位は、N-90°-Eである。c-c’の土層

断面から本遺構は３層を覆土とする溝状遺構を切って構築されとことが判る。覆土は暗黄褐色土の単層で、水路として使用された痕跡は窺えない。また木枠、石組などの付帯施設の痕跡もなく、素掘り溝として機能していたと考えられるがその性格は不明である。

遺物は陶磁器、土器が数点出土しているにすぎない。

SD197（Ⅲ-133図）

C7、D7グリッドにかけて東西に延びる溝状遺構である。西端は撹乱によって破壊されており全長は不明である。幅は東端で45cmを測り、西に向かい徐々に拡がりをみせ、確認範囲西端では65cmを測るに至る。主軸方位は西端付近でやや蛇行するもののN-92°-Eと、おおむね東西方向を示している。溝底からは７基のピットが検出されているが、東端の小ピットを除いても、各ピット間は真々で125～186cmと不定間隔に配されている。また各ピットには、柱痕、礎石などの痕跡は認められなかった。

本遺構は溝底にピットを有し、東端付近で蛇行し先細りになる点でSD195と形態的共通点を指摘することができる。両遺構のピット配置には対称性はなく、各々の遺構単位で完結した構造物の可能性が高く、遺構の性格は掘立柱による塀跡の可能性が高い。

遺物はわずかに釘、銭が出土しているにすぎない。。

SK198（Ⅲ-94図）

D7グリッドに位置する遺構である。南半部を大きく撹乱によって破壊され、形態、規模は不明である。残存部では、坑底、壁面ともに凹凸が著しく、調整は施されていない。

覆土中より18世紀前半の陶磁器、土器が数十点出土していることから、SA155西側に位置する本遺構は加賀藩邸に帰属する遺構と位置付けられ、坑底、壁面の状態より採土坑と推定される。なお、出土遺物の一部には被熱した痕跡が認められる。

SK199（Ⅲ-133図）

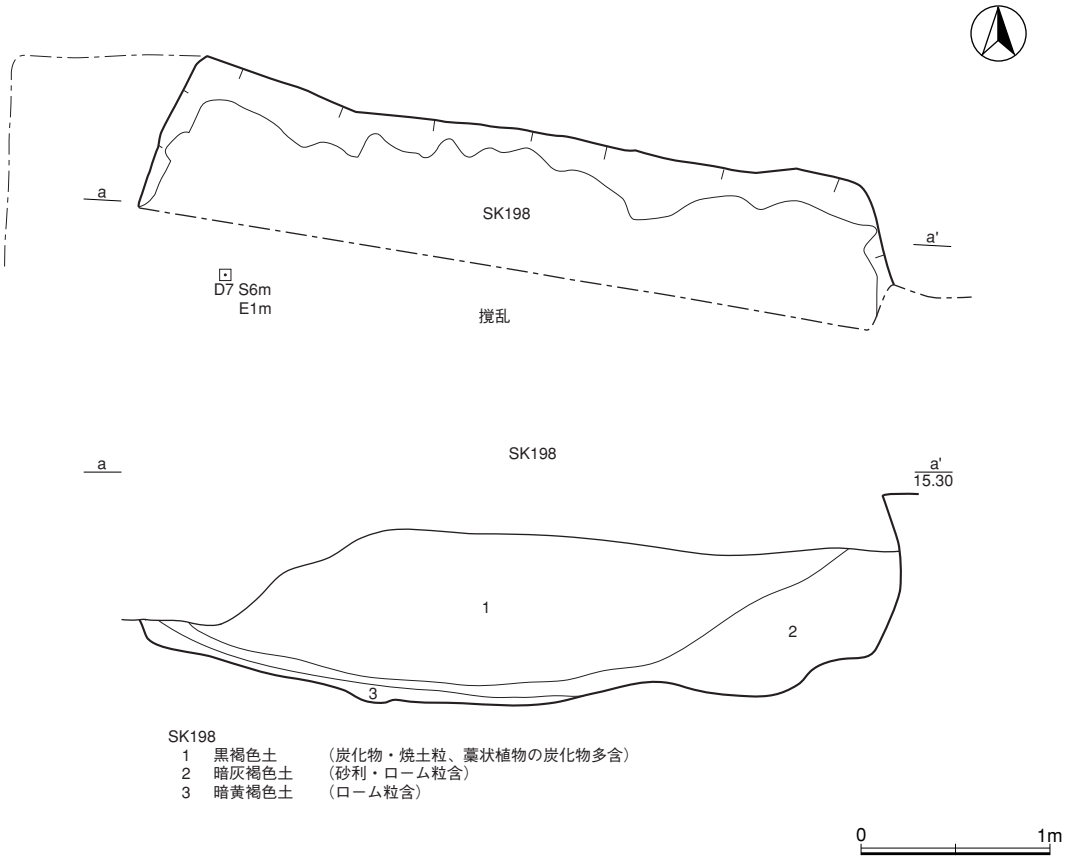
D7グリッドに位置する遺構である。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸214cm、短軸202cm、確認面からの深さ約10cmを測る。坑底中央部には幅約30cmで断面皿状の浅い溝が巡り、その内側は坑底より約5cm高く盛り上がっている。その形状から、本遺構の性格は植栽痕と考えられる。

遺物は出土していない。

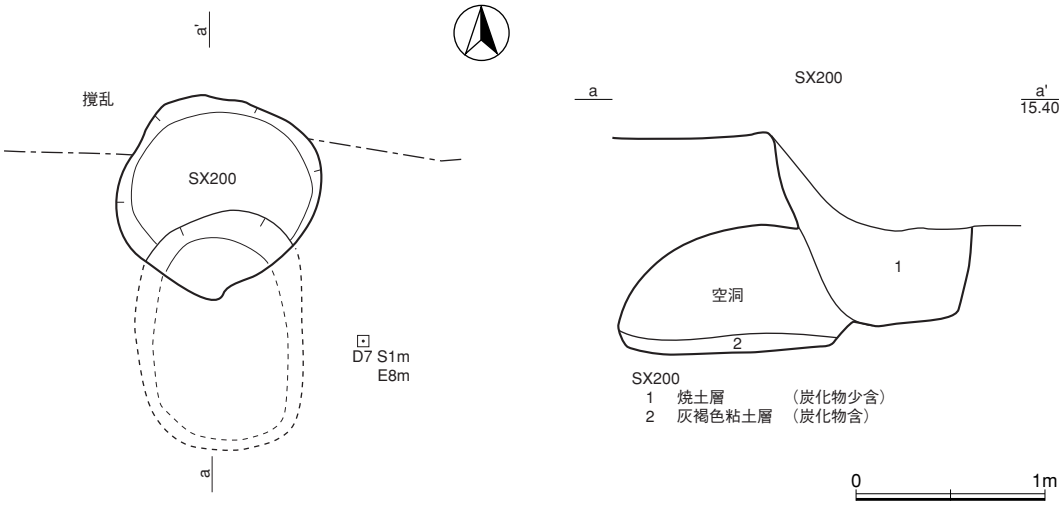
SX200（Ⅲ-95図）

D6、D7グリッドに位置する遺構である。確認面での平面形は円形を呈し、直径は100cmを測る。この円形土坑は断面逆台形で、桶状を呈しているが、坑底南側にはそれより一段低い横坑が存在する。横坑は小判形の平面形を呈し、規模は長軸125cm、短軸90cmを測り、横坑を含んだ全長は190cmを測る。天井はドーム状を呈し、奥壁に向かいアーチを描いている。最大高は70cmを測る。覆土は縦坑部に焼土層が堆積し、横坑部はほとんどが空洞で坑底直上に灰褐色粘土層が薄く堆積しているにすぎない。その影響のためか、坑底のローム層は黄白色に変色し、水性ローム状の様相を呈している。

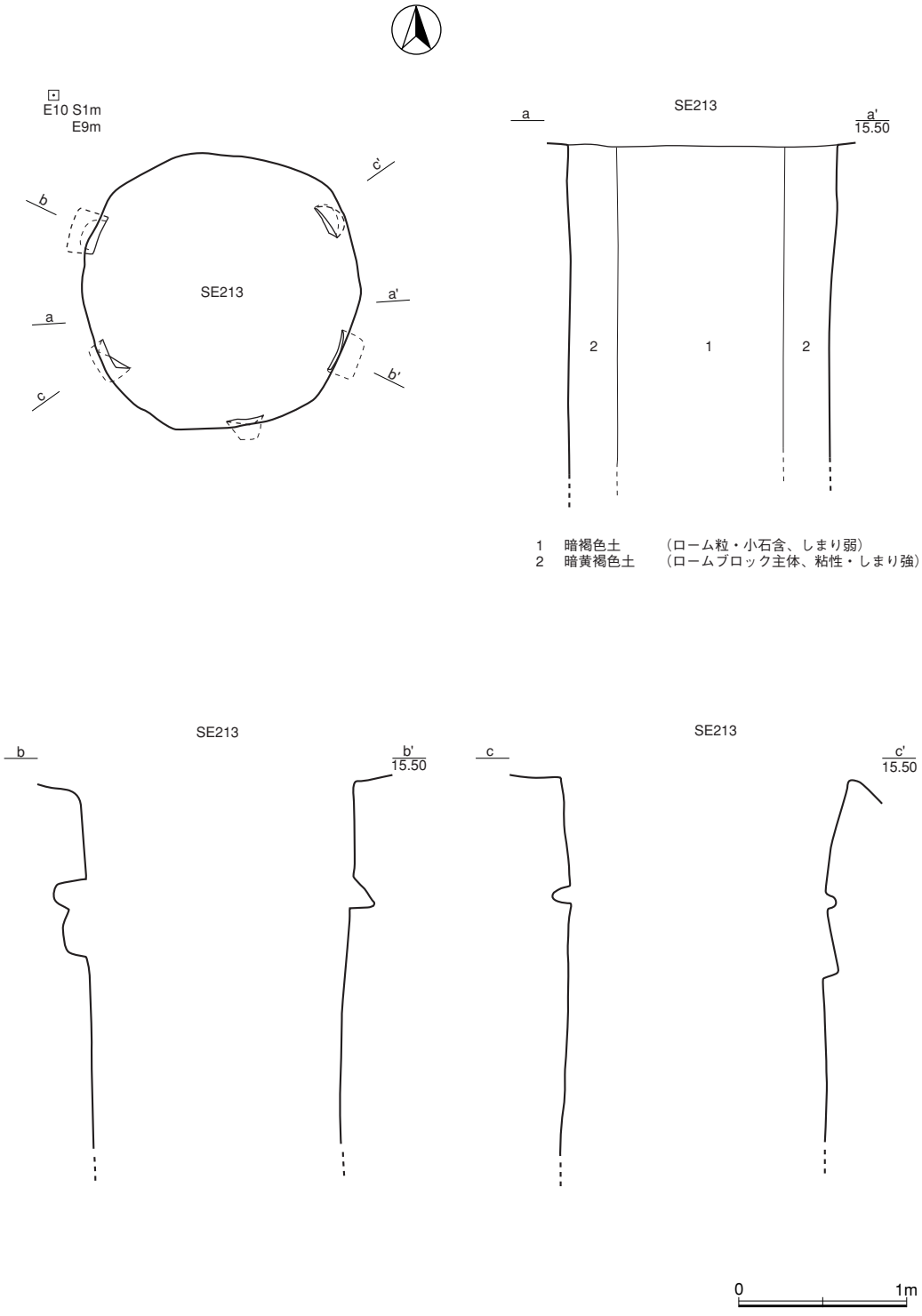
本遺構から遺物の出土はなく、廃絶年代、性格などの手がかりになるものはほとんどないが、本郷キャンパス弥生地区で行った農学部図書館地点で類似した遺構が報告されている（東京大学埋蔵文化財調査室　2004）。農学部図書館地点は江戸時代水戸藩中屋敷に位置する。検出されたSK10



Ⅲ-94図　SK198



Ⅲ-95図　SX200


E10 S1m
E9m
SE213
a
a'
b
b'
c
c'
SE213
a
a'
15.50
2
1
2
1　暗褐色土　（ローム粒・小石含、しまり弱）
2　暗黄褐色土　（ロームブロック主体、粘性・しまり強）
SE213
b
b'
15.50
SE213
c
c'
15.50
0
1m

Ⅲ-96図　SE213

は、室部のオーバーハングと坑底が１段下がっている点で、本遺構と共通しており、また、本遺構の焼土層、SK10の被熱遺物と、ともに火との関連性を有していたことも推定される。SK10に関し、報告では金属生産との関係を示唆している。本遺構は絵図面との対比により、18世紀後半～19世紀前葉まで御作事所が存在した場所にあたるため、鍛冶などの生産遺構の可能性が高い。

SU211（Ⅲ-39・40図）

F7グリッドに位置する遺構である。南半部はSU61と重複し遺存していないが、平面形は長方形もしくは方形を呈すると推定される。また、北側ではSD54を切っている。規模は残存する東西で130cm、確認面からの深さ190cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がっているが、坑底上約50cmの高さに幅約20cmのテラスが設けられ、テラス上の各コーナーにはピットが存在する。また東壁には間口50cm、高さ40cm、奥行き20cmの施設が設けられている。この施設の存在から板枠が付設されていたとも考えがたく、ピット、テラスともに機能は不明である。

遺物は18世紀後半の陶磁器、土器がコンテナ２箱出土しているほか、釘が出土している。

SD212（Ⅲ-139図）

F8グリッドに位置する遺構である。西壁は撹乱によって破壊され、遺存状態は悪い。主軸方位はN-8°-Eを示す。本遺構はSD62の狭小部以南に位置しているが、それよりも古い遺構である。覆土はロームブロックを多く含む暗褐色土が版築状に堆積しており、建築関連遺構の可能性もある。

遺物は19世紀前半の陶磁器、土器がコンテナ１箱出土している。

SE213（Ⅲ-96図）

E10、F10グリッドに位置する井戸跡である。平面形は不整円形を呈し、規模は直径160～170cmを測る。断面観察の結果、直径100cmの井戸側が確認された。掘方には確認面下約60cmに、５基の小坑が壁面に穿たれていた。エレベーション図b、c各ラインを通るピットが向き合う位置関係にあり、井戸側に関する何らかの補助施設と推定される。

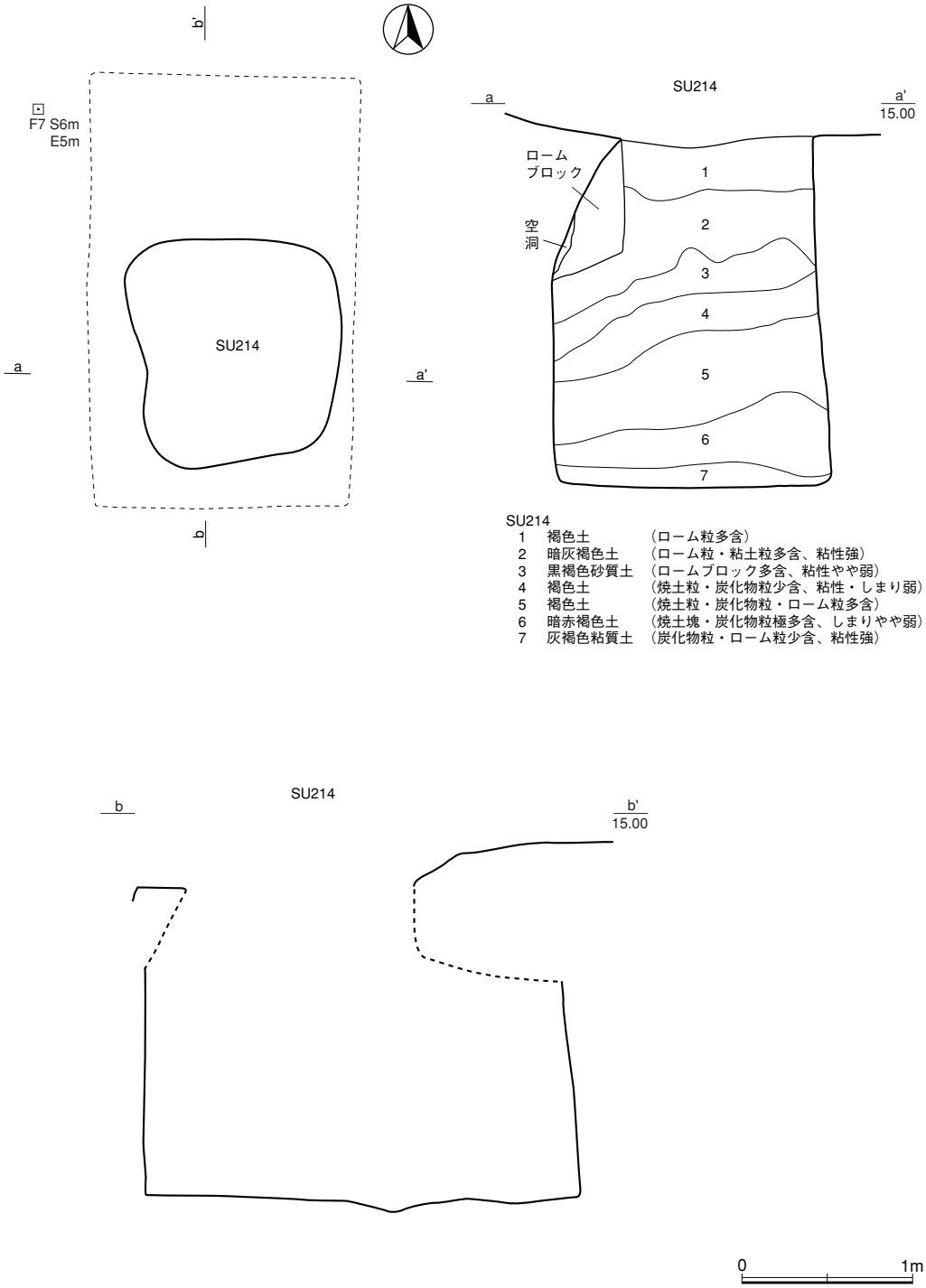
井戸側内の覆土は単一層で、短期間に埋め戻されたことが予想されるが、多量の漆喰片が含まれていた。なお、遺構周辺に方形のピットが数基存在するが、本遺構との関係は不明である。

遺物は19世紀前半の陶磁器、土器が数十点、釘が少量出土している。

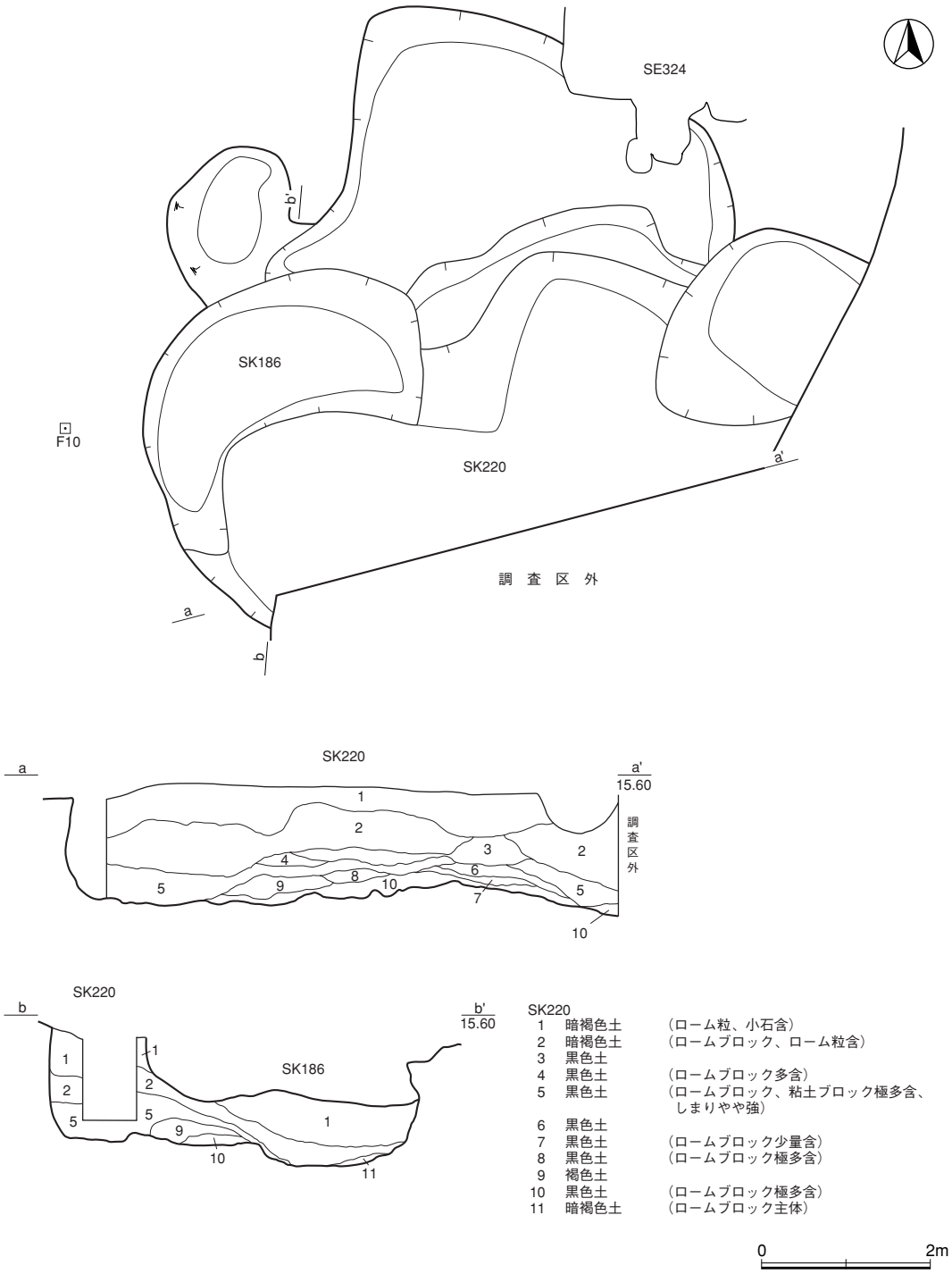
SU214（Ⅲ-97図）

F7グリッドに位置する地下室である。開口部の平面形は天井崩落のため、原形を留めていない。室部は東壁を除く３方向に拡がり、南北254cm、東西150～160cmを測る長方形を呈する。確認面から坑底までの深さは210cmを測り、主室は開口部北側に拡がっている。天井高は、120～134cmと各壁によって若干のバラツキを有す。壁面、坑底ともに比較的丁寧な調整が施されている。また、坑底には排水施設と考えられる方形の浅い掘り込みが、北壁付近に２基、中央付近に１基存在している。

覆土は、基本的に東側からの埋め戻しによって形成されているが、特に、６層は焼土粒、炭化物粒を極めて多く含んでおり、火災後の瓦礫処理と考えることができる。遺物は17世紀末の陶磁器、土器、本瓦がコンテナ３箱出土しているが、その大半は６層からの出土であり、その年代観より元禄16年の火災が想定される。


b'
F7 S6m
E5m
SU214
a
b
SU214
a
a'
15.00
ローム
ブロック
空
洞
1
2
3
4
5
6
7
SU214
1　褐色土　（ローム粒多含）
2　暗灰褐色土　（ローム粒・粘土粒多含、粘性強）
3　黒褐色砂質土　（ロームブロック多含、粘性やや弱）
4　褐色土　（焼土粒・炭化物粒少含、粘性・しまり弱）
5　褐色土　（焼土粒・炭化物粒・ローム粒多含）
6　暗赤褐色土　（焼土塊・炭化物粒極多含、しまりやや弱）
7　灰褐色粘質土　（炭化物粒・ローム粒少含、粘性強）
SU214
b
b'
15.00
0
1m

Ⅲ-97図　SU214



SK220		
1	暗褐色土	（ローム粒、小石含）
2	暗褐色土	（ロームブロック、ローム粒含）
3	黒色土	
4	黒色土	（ロームブロック多含）
5	黒色土	（ロームブロック、粘土ブロック極多含、しまりやや強）
6	黒色土	
7	黒色土	（ロームブロック少量含）
8	黒色土	（ロームブロック極多含）
9	褐色土	
10	黒色土	（ロームブロック極多含）
11	暗褐色土	（ロームブロック主体）

Ⅲ-98図　SK186・SK220

SK215（Ⅲ-137図）

F7グリッドに位置する遺構である。平面形は、調査区域境、撹乱によって破壊され不詳である。周辺のSD54、SD216と関連する可能性もある。

遺物は陶磁器が数点出土したにすぎない。

SD216（Ⅲ-136・137図）

F6、F7グリッドにかけて南北に延びる溝状遺構である。北側は撹乱に、南側はSD54によって破壊されているため、全長は不明であるが、SD54の南側とSD253の北側で確認されていないことより、南北長は確認されている範囲とほぼ同等であろう。幅は東西両壁が蛇行しており、55～105cmと一律ではない。確認面からの深さは約20cmと浅く、溝底には多数の杭跡が存在する。壁が蛇行していることと杭跡の存在から板枠が存在した可能性も考えられる。

また、遺構内にはSL79、SL80、SL281と3基の厠の下穴が存在するが、本遺構との関係は不明である。遺物も陶磁器、土器が少量しか出土していないが、その下限年代から、本遺構は19世紀代に廃絶された可能性が高い。

SK218（Ⅲ-138図）

E8グリッドに位置する遺構である。撹乱、SB70、SK184に切られ、規模、形態は不明である。覆土は、小礫、ローム粒を多量に含む褐色土が堆積している。SK184に切られていることから17世紀代に廃絶された遺構であるが、その性格は不明である。

遺物は出土していない。

SK219（Ⅲ-139図）

F8グリッドに位置する遺構である。平面形は不整形を呈するが、SD212と重複しているため、規模は不明である。覆土は2層に分けられるが、ともにロームを主体とする層序でしまりが極めて強い。性格、廃絶年代は不明である。

遺物は18世紀代の陶磁器、土器が十数点出土しているにすぎない。

SK220（Ⅲ-98図）

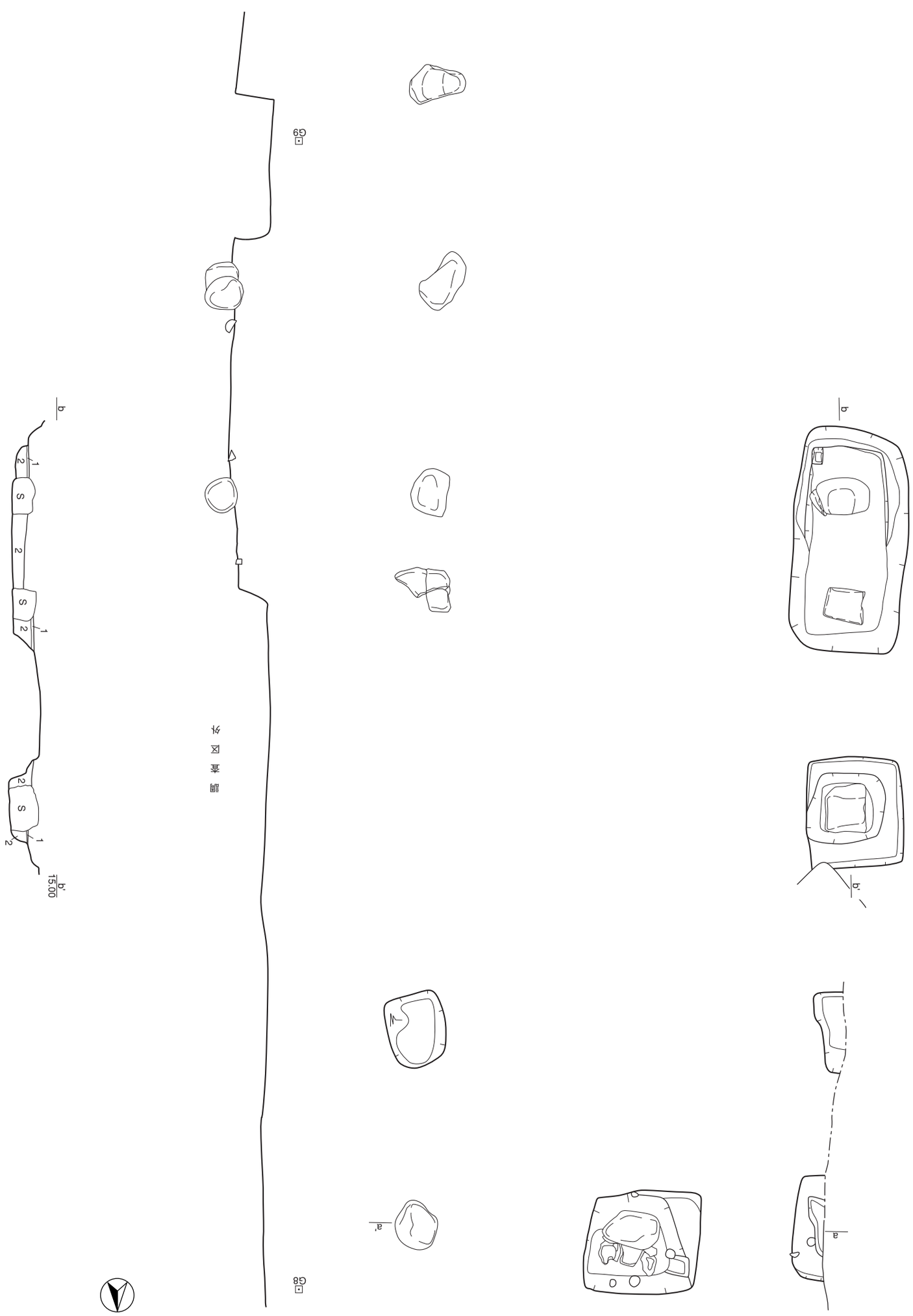
F9、F10グリッドに位置する遺構である。SD62、SK186より古い。確認面での平面形は不整形を呈する。南半部は調査区域外に及ぶため規模は不明である。坑底は東西方向で断面袋状にややオーバーハングする円形の掘り込みを有し、それを繋ぐように中央部がだらだらと階段状に下がっている。壁面、坑底とも工具痕が顕著である。覆土の観察から切り合い関係も認められなかったことより、本遺構の性格は採土坑と考えられる。また、覆土はロームブロックを含む黒色土が主体を成している。

遺物は19世紀前半の陶磁器、土器がコンテナ1箱出土している。

SD221（Ⅲ-140図）

F8グリッドに位置する東西に延びる溝状遺構で、東側でSD348に接続する。SD62、SA120、SP227より古い。規模は幅60cm、確認面からの深さ15cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、溝底は平坦である。断面観察により、本遺構には板枠が存在したことが確認され、4層が廃絶後に堆積した覆土に該当する。但し、杭跡などの板材固定施設は確認されなかった。

遺物は18世紀の陶磁器、土器が少量出土しており、そのなかには被熱の痕跡が認められる資料



1　暗褐色土　（ローム粒、小礫多含、しまり強）
2　暗黄褐色土　（ローム主体、しまり強）

Ⅲ-99図　SB228

も含まれている。

SL223（Ⅲ-152図）

E9、F9グリッドに位置する遺構である。平面形は長方形を呈し、南北90cm、東西70～75cm、確認面からの深さ10cmを測る。遺構内には1段のテラスを有する円形の掘り込みが存在し、その立ち上がりが遺構確認面まで達していることより、桶枠などの施設の存在が推定される。この円形施設の規模は確認面で直径55cm、坑底で直径35cmを測る。円形施設内には多量の焼土が堆積していることから、火災による廃絶が想定される。本遺構の性格は隣接するSL224との関連から、厠の下穴と考えられる。

遺物は出土していない。

SL224（Ⅲ-152図）

F9グリッドに位置する遺構である。平面形は円形を呈し、壁面に1段テラスを有している。規模は確認面で直径55cm、坑底で直径30cmを測る。覆土は2層に分けられ、上層は焼土粒、炭化物を多量に含み、下層は粘性が強い暗灰褐色土が堆積している。遺構形態と2層の状況から本遺構の性格は厠の下穴と考えられる。よって、2層は遺構使用時の堆積、1層は廃絶後の堆積と考えられ、火災によって廃絶されたことが推定される。

このように本遺構は形態、廃絶要因が、中心距離で180cm北側に隣接するSL223と類似しており、両遺構は同時に機能していたことが考えられる。

遺物は出土していない。

SK225（Ⅲ-139図）

F8グリッドに位置する遺構である。平面形は不整長方形を呈し、東壁と南壁に小穴が穿たれている。規模は長軸185cm、短軸80cm、確認面からの深さ110cmを測る。本遺構は、覆土中より鉄板を曲げて造られた鉄管が出土していること、遺構主軸がN-42°-Eと他の遺構と大きくずれていることから、近代以降の遺構と考えられる。

遺物は19世紀前半～近代の陶磁器、土器が数十点出土している。

SD226（Ⅲ-142図）

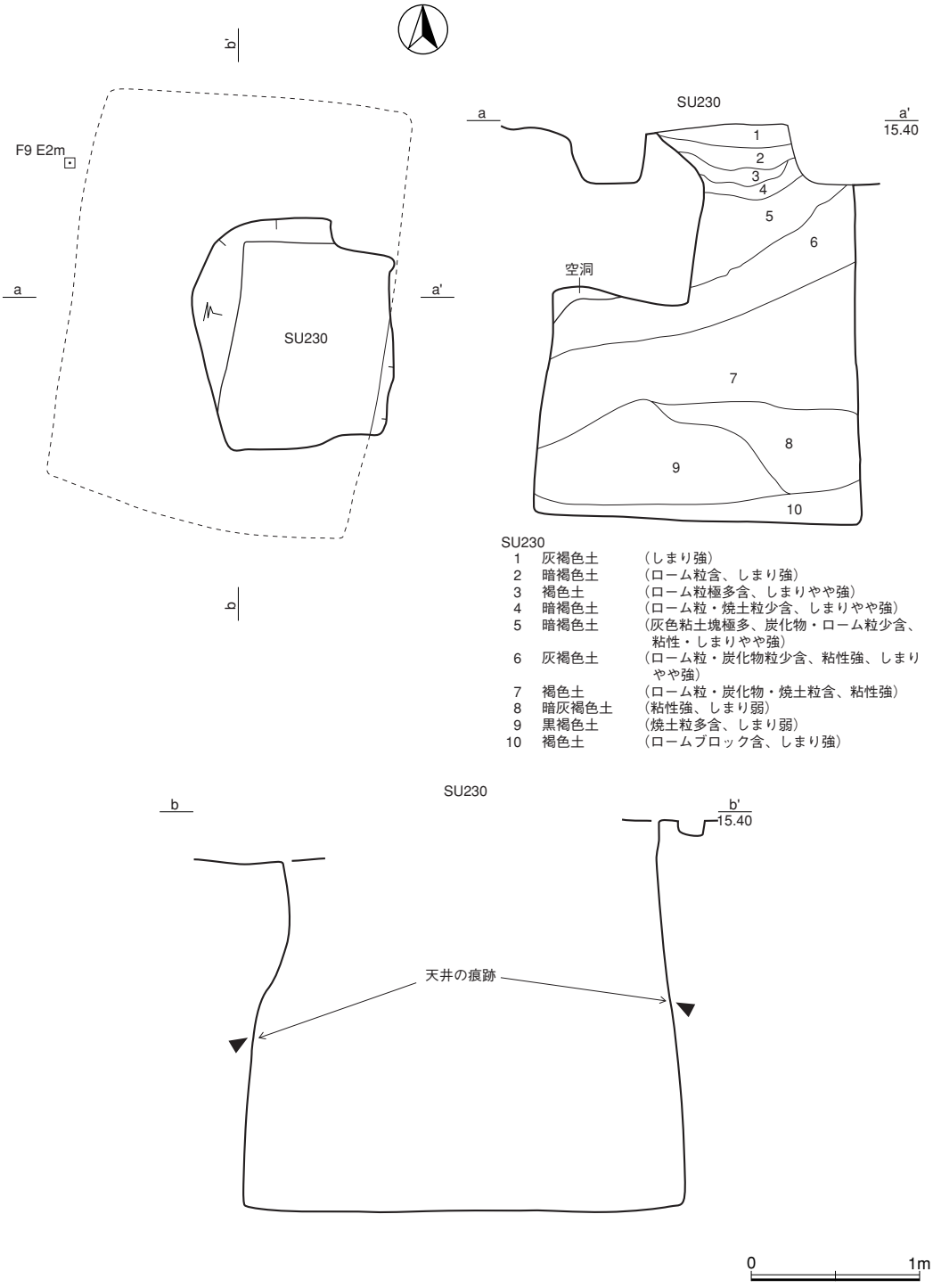
F8グリッドに位置し、東西に延びる溝状遺構である。西側をSD62に、東側でSD348と重複しているため、全長は不明である。幅は150cmを測る。南北両壁とも緩やかに蛇行しており、南壁には奥行き約50cmのテラスが付随している。そのテラスから溝底へ続く壁面ラインを中心に杭跡が密集している。また、約30cm北側の溝底にも杭跡が密集しており、両者はほぼ並行に東西方向に延びている。その様相はSD62西壁付近と類似しており、本遺構も板枠を有した溝の可能性が高い。

本遺構の廃絶年代は出土遺物の年代観より19世紀である。

SP227（Ⅲ-140図）

F8グリッドに位置するピットである。平面形は楕円形を呈し、規模は南北45cm、東西30cm、確認面からの深さ90cmを測る。1辺約20cmの柱痕が観察されるが、周辺部に類似形態のピットが存在しないため、その性格は不明である。

遺物は19世紀前半の陶磁器、土器が十数点出土している。


b'
F9 E2m
a
a'
SU230
b
SU230
a
a'
15.40
1
2
3
4
5
6
空洞
7
8
9
10
SU230
1　灰褐色土　（しまり強）
2　暗褐色土　（ローム粒含、しまり強）
3　褐色土　（ローム粒極多含、しまりやや強）
4　暗褐色土　（ローム粒・焼土粒少含、しまりやや強）
5　暗褐色土　（灰色粘土塊極多、炭化物・ローム粒少含、粘性・しまりやや強）
6　灰褐色土　（ローム粒・炭化物粒少含、粘性強、しまりやや強）
7　褐色土　（ローム粒・炭化物・焼土粒含、粘性強）
8　暗灰褐色土　（粘性強、しまり弱）
9　黒褐色土　（焼土粒多含、しまり弱）
10　褐色土　（ロームブロック含、しまり強）
SU230
b
b'
15.40
天井の痕跡
0
1m

Ⅲ-100図　SU230

SB228（Ⅲ-99図）

F8、G8グリッドにかけて拡がる礎石建物跡である。SD62、SU61、SU211より古い。礎石は抜かれているところもあるが、真々で1間6尺（180cm）で配置されている。建物規模は、東側が調査区域外へ拡がり、南側が複数の遺構と重複しているため、全容は把握できないが、現況で東西3間以上、南北5.5間以上と想定される。主軸方位はN-0.5°-Wを示している。

西側の南北列は1辺70～100cmの方形掘方を有し、そのなかに角礫ないし川原石が設置されている。北端東西列で検出された1基の礎石のみ栗石が確認されている。礎石はしまりの強いローム主体土と小礫を多量に含む暗褐色土によって固定されている。また、西列の北から4基目の礎石掘方のみ、南北195cm、東西100cmの長方形の掘方内に2基の礎石が真々3尺で配置されている。一方、東側の礎石列は顕著な掘方が無く、基本的には地表面に扁平川原石を利用した礎石が置かれている状況である。この二つのあり方から、掘方を有する礎石は建物外形、有さない礎石は建物内部の柄柱の礎石に該当するものと考えられる。そして、セクションa-a’ラインで確認されるように、掘方を有する礎石と有さない礎石には、礎石表面に高低差が存在することから、掘方を有する礎石は、根石の可能性がある。

本遺構の年代観は、SU211に切られ、さらに礎石配置からSU279にも切られていると考えられることから、18世紀前半代に廃絶された可能性が高い。

遺物は出土していない。

SU230（Ⅲ-100図）

F8、F9グリッドに位置する地下室である。重複するSD62より古い。開口部は、東西90cm、南北110cmの長方形を呈し、若干ハの字状に拡がりながら室部へ移行する。室部は東壁を除く3方向に拡がり、床面の規模は東西180cm、南北230～254cmを測る長方形を呈している。確認面から床面までの深さは230cm、室部の天井高は100～130cmを測る。壁面、床面ともに丁寧な調整が施されている。また、東壁床面付近で隣接するSU279の室部と重複し、壁面が一部貫通している。

本遺構からはコンテナ7箱に及ぶ多量の遺物が出土しているが、そのほとんどは7層上部と5層下部の2ヶ所に集中し、遺構埋め戻しに関連し、二度の廃棄行為が行われていたことが確認された。5層出土遺物にはⅣ-70図5、Ⅳ-71図6、7、Ⅳ-74図31、32などが、7層出土遺物にはⅣ-72図10、Ⅳ-73図16、28、29などがあるが、出土遺物に年代差は認められない。一部の遺物には被熱した痕跡が認められることより、享保15年もしくは元文3年の火災による廃棄資料を含む1730～40年代の廃棄の可能性が高い。

SK238（Ⅲ-92図）

C7、C8グリッドに位置する土坑である。遺構の西半を撹乱によって大きく削平されており、遺構の全体は復元できない。SD54、SK174、SK176、SD239と重複しており、新旧はその全てより新である。遺存している規模は東西150cm、南北430cm、確認面からの深さは最大120cmを計測する。壁や坑底は凹凸が顕著に認められた。覆土は3層に分層できるが、全てがロームブロックが主体かまたは多く含まれる層である。これらの特徴から本遺構は植木の移植痕である可能性が考えられる。

遺物は陶磁器・土器が微量出土している。

SD239（Ⅲ-92図）

C7グリッドに位置する南北に主軸を有する溝状の遺構である。確認時にSK176と同一遺構であると考え、調査を行ったため平面形を押さえることができなかった。遺構の深さは最大100cmを計測する。

遺物は上記の理由によりSK176と併記して掲載した。

SK242（Ⅲ-143図）

D10グリッドに位置する土坑である。遺構の南半が調査区域外で、全体は復元できない。遺存している形状は半円形である。規模は東西200cm、南北60cm、確認面からの深さは最大90cmを計測する。壁、坑底は一部凹凸が確認されるもののおおむね平滑であり、やや中心が深くなる坑底から壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は3層に分層されるが、いずれもロームブロックが多く混入する。

遺物は18世紀の陶磁器が2点出土しているのみである。

SK245・SK246・SK247・SK261（Ⅲ-145図）

D9、D10グリッドに位置する切り合いを有する遺構群である。これら遺構群の相互の関係は確認し得なかったが、遺構の形状、規模はほぼ同様であり、類似した性格を示す可能性はあろう。切り合い関係は新しいものからSK246→SK261→SK245、SK246→SK247である。各遺構は重複部分が浅く、規模がほぼ推定できる。推定される規模はSK245が東西170cm、南北150cm、深さ20cm、SK261は東西130cm、南北120cm、深さ20cm、SK246が長軸140cm、短軸100cm、深さ20cm、SK247が長軸120cm、短軸90cm、深さ40cmを計測する。遺構の断面形は丸底状を呈し、坑底、壁の凹凸は少ない。覆土はいずれも単層でSK245はローム主体の黄褐色土、SK261が褐色土、SK246がローム粒子・ブロックを多く含む褐色土、SK247が褐色土を呈している。

遺物はいずれの遺構からも出土していない。

SK249（Ⅲ-144図）

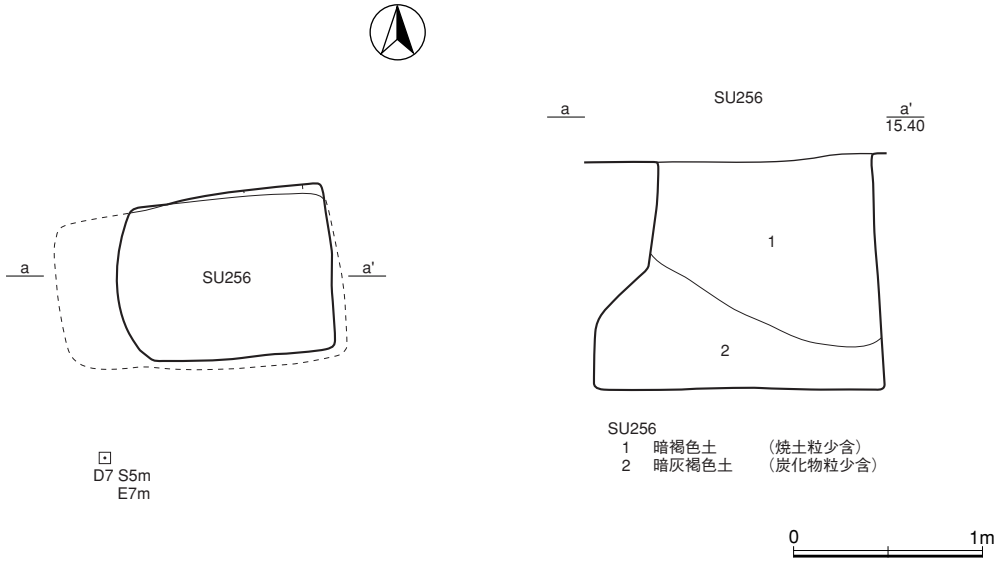
D10グリッドに位置する遺構である。SK168、SK268と重複しており、遺構の西半はSK168に大きく削平されており、全体を復元できない。新旧はSK168より旧で、SK268より新である。遺存している東半は南北壁際に溝状の施設を有する。遺存している規模は東西140cm、南北90cm、確認面からの深さは坑底で60cm、溝底で80cmを計測する。溝には腐食した木部が明瞭に観察され、遺構の両壁には杭または板が巡らされていたことが確認された。

遺物は18世紀の陶磁器・土器が数点出土したのみである。

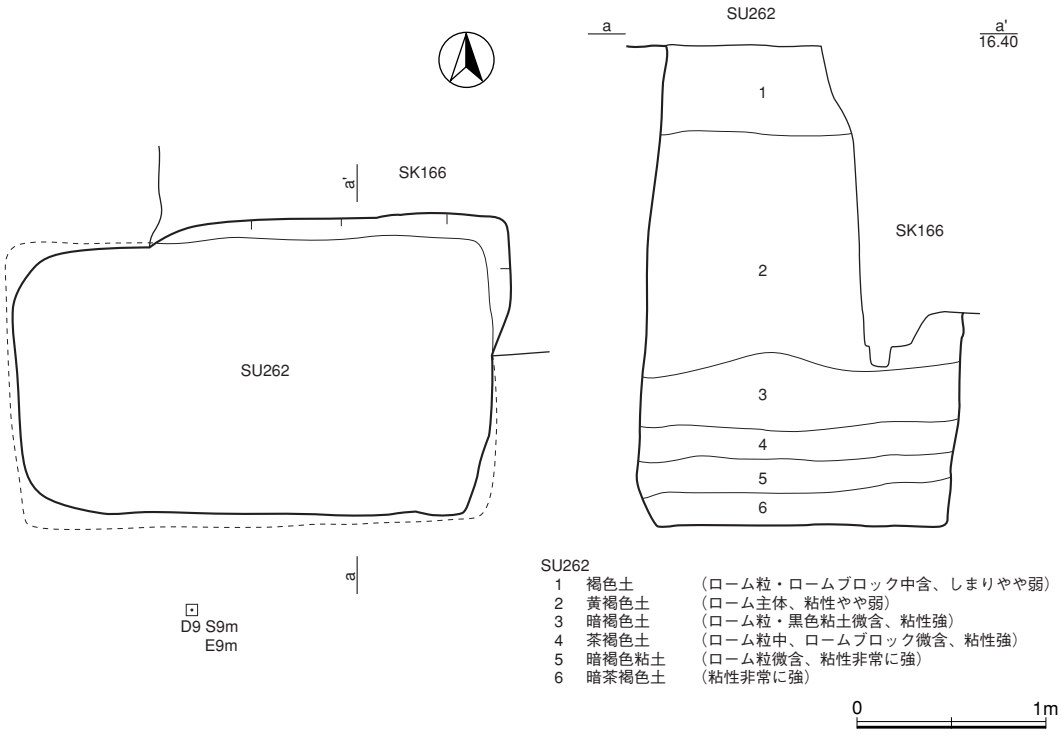
SK251（Ⅲ-125図）

E5グリッドに位置する遺構である。北半部を撹乱によって破壊されているため、詳細は不明であるが、遺存状況から方形を呈していたと考えられる。覆土には焼土粒が含まれているが、出土遺物には二次焼成を受けた痕跡がほとんど認められないことから、火災を契機にした廃絶とは考えられない。

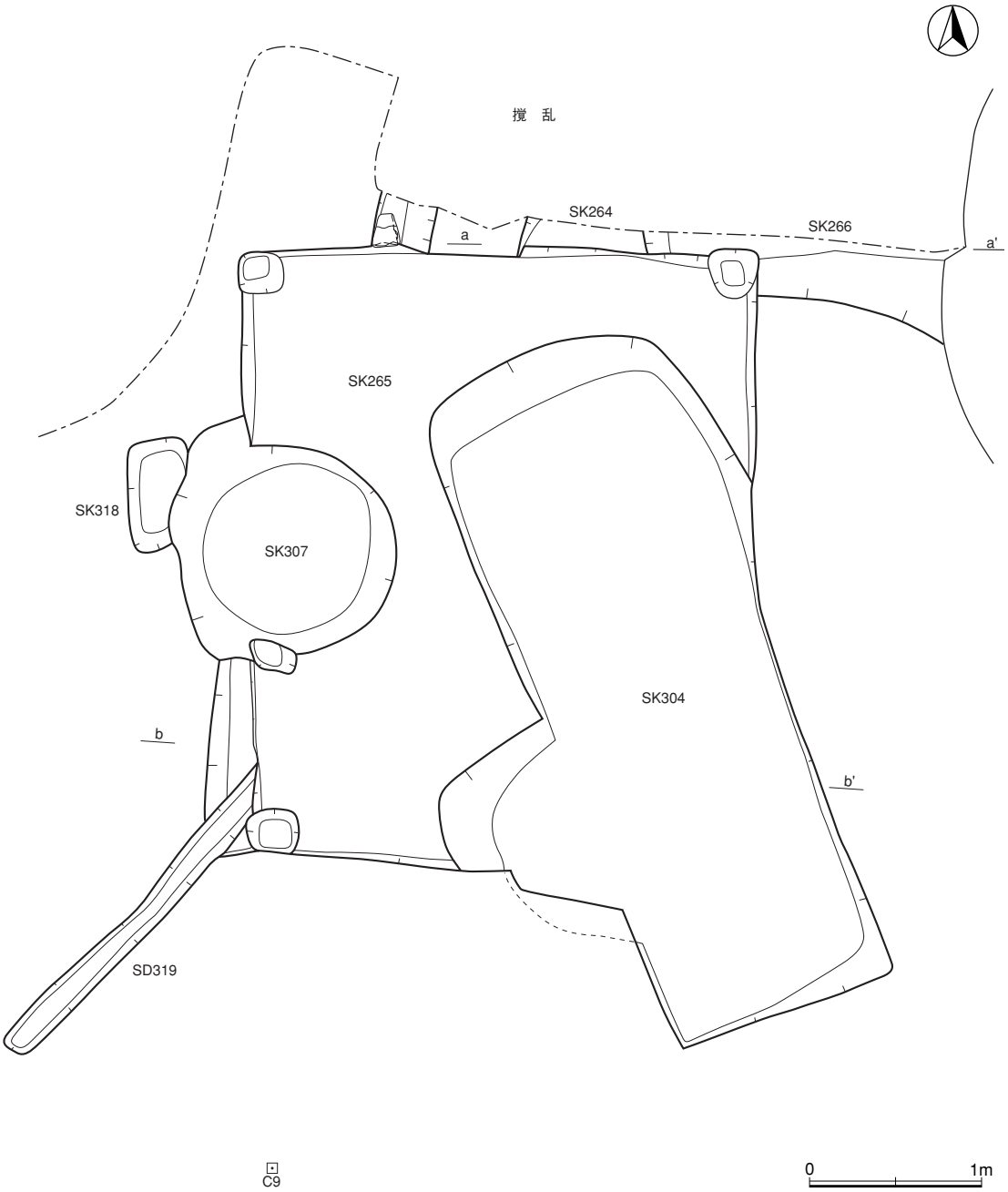
遺物は18世紀前半の陶器、土器が少量出土しているにすぎない。



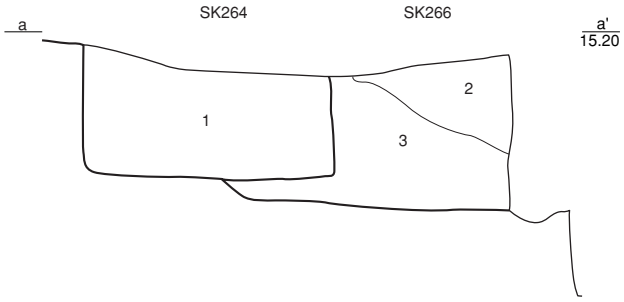
Ⅲ-101図　SU256



Ⅲ-102図　SU262

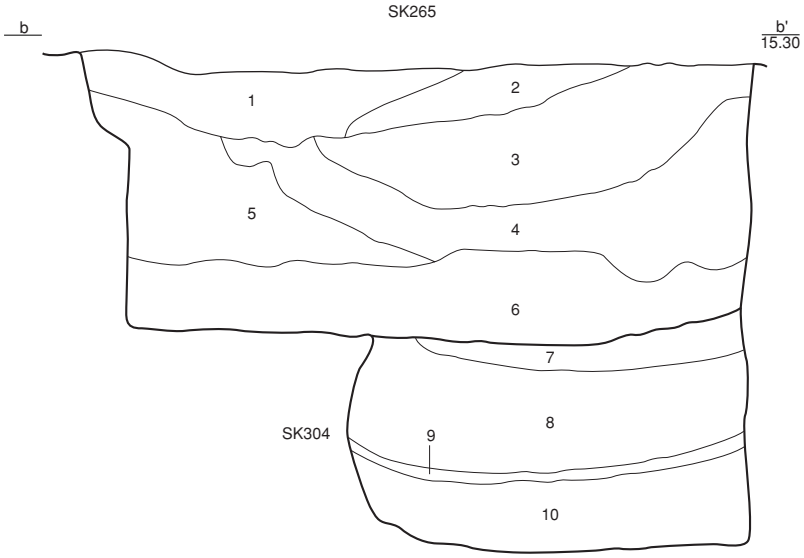


Ⅲ-103図　SK264（1）・265（1）・266（1）・304（1）・307・318・SD319



SK264
1　暗褐色土　（ローム粒・ロームブロック多、小円礫中含、しまりやや弱）

SK266
2　暗褐色土　（円礫・小円礫多、ローム粒・ロームブロック微含、粘性やや弱、しまり強）
3　褐色土　（ローム粒・ロームブロック多含）



SK265
1　暗灰色土　（ローム粒・ロームブロック・炭化物・小円礫少、灰褐色粘土微含、粘性やや弱、しまりやや強）
2　褐色土　（ローム粒・ロームブロック多含、粘性やや弱、しまりやや強）
3　茶褐色土　（ロームブロック・ローム粒多、炭化物少含）
4　暗褐色土　（ローム粒・ロームブロック中、小円礫・炭化物少含、粘性やや強）
5　暗褐色土　（ローム粒・ロームブロック少含）
6　暗灰褐色土　（ローム粒・ロームブロック・灰褐色粘土少含、粘性・しまりともにやや強）

SK304
7　暗灰褐色土　（ローム粒少、炭化物微含、粘性強、しまりやや強）
8　黄褐色土　（黒色土粒中、炭化物微含、粘性強、しまりやや強）
9　灰白色粘土　（粘性非常に強）
10　暗灰色粘土　（ロームブロック少含、粘性非常に強）

0　1m

Ⅲ-104図　SK264（2）・265（2）・266（2）・304（2）

SK252（Ⅲ-129図）

E5グリッドに位置する遺構である。平面形は直径130cmを測る円形を呈し、坑底はほぼ平坦で壁は垂直に立ち上がっている。覆土はローム主体の暗黄褐色土の単層で形成されており、短期間で埋め戻されたことを物語っている。遺構形態と覆土の様相から植栽痕の可能性が指摘できるが、遺物の出土はなく年代は不明である。

SD253（Ⅲ-132・134～136図）

D6～F6グリッドにかけて東西に延びる溝状遺構である。主軸方位はN-85°-Eを示し、SD54とは約10mの距離をおいて平行に、またSD45とは直交方向に延びている。幅は60～70cmを測り、断面形は逆台形を呈している。SD45、SD54よりは小規模であるが、形態及び主軸方位に共通性が認められることから、同年代に存続した地境遺構と推定される。

遺物は出土していない。

SK255（Ⅲ-134図）

E6グリッドに位置する遺構である。平面形は不整円形を呈し、南北250cm、東西220cm、確認面からの深さ50cmを測る。本遺構周辺には同規模の円形土坑（SK254、SK288）が存在する。それらは坑底中央に円形のテラスを有していることから植栽痕と推定される。本遺構の坑底からは円形テラスは確認されなかったが、ロームブロックを主体とする覆土の様相から植栽痕と推定され、この周辺がある段階で植樹帯を形成していた可能性が高い。

ただし、いずれの遺構も出土遺物はなく、年代は特定できない。

SU256（Ⅲ-101図）

D7グリッドに位置する地下室である。開口部の平面形は長方形を呈し、南北90cm、東西110cmを測る。竪坑はほぼ垂直に立ち上がり、西壁下方でオーバーハングして室部へ移行する。室部の平面形は長方形を呈し、南北90cm、東西150cm、確認面からの深さ125cmを測る。西奥壁における天井高は35cmと低く、天井は傾斜を持って竪坑へつながる。

遺物の出土はなく、年代は不明である。

SK257（Ⅲ-24図）

D4グリッドに位置する遺構である。北半部が撹乱を受け、詳細は不明である。覆土の堆積状況が意図的な傾斜を呈しており、根株の周りに土を入れた結果とも推測される。

遺物は出土していない。

SD259（Ⅲ-86・122図）

D4、D5グリッドにかけて南北に延びる溝状遺構である。撹乱や遺構との重複のため、遺存状況は極めて悪い。溝幅は40～45cmを測り、断面形は逆台形を呈する。残存部において溝底よりピットが1基検出されているが、列を成すものかは不明である。本遺構の主軸方位はN-6°-Wを示し、ほぼSD45と平行することから、同段階の遺構と考えられる。

遺物は出土していない。

SU262（Ⅲ-102図）

D9、E9グリッドに位置する遺構である。SK166、SK167、SD169、SK170と重複しており、新旧はその全てより旧である。平面形は東西に主軸を有する長方形を呈し、壁はフラットな坑底か

らほぼ垂直に立ち上がる。規模は東西250cm、南北160cm、確認面からの深さは最大250cmを計測する。坑底及び壁はラフに整形されており、工具痕が明瞭に確認された。覆土は坑底から確認面まで6層に分層されるが、いずれもほぼ水平に堆積していた。3層以下の層では粘性が強い土が充填されていた。

遺物は貝、魚骨、鳥骨、獣骨など自然遺物が多く出土したほか、17世紀末～18世紀初頭の陶磁器が20点程度出土している。

SK263（Ⅲ-143図）

D10グリッドに位置する土坑である。南半が調査区域外のため全体の復元はできないが、約1m隔てて南にある調査区には本遺構が確認できなかったことから、両調査区のベルトの中で完結する規模であるといえる。平面は隅丸のコーナーが1ヶ所確認できているのみである。遺存している規模は東西250cm、南北最大70cm、確認面からの深さは70cmを計測する。壁は確認面からやや角度を有して下がり、壁面の凹凸が激しい。覆土は2層に分層される。

遺物は出土していない。

SK264（Ⅲ-103・104図）

C8グリッドに位置する遺構である。SU265、SK266と重複しており、新旧はSU265より旧で、SK266より新である。SU265に南側、撹乱に北側を大きく削平されており、全体の状態は不明である。遺存している規模は東西130cm、南北15cm、確認面からの深さは70cmを計測する。坑底、壁は平滑に整形されており、フラットな坑底から壁は垂直に立ち上がる。覆土は単層で、ローム粒子、ロームブロックを多く含む暗褐色土を呈する。

遺物は19世紀の陶磁器・土器が出土している。

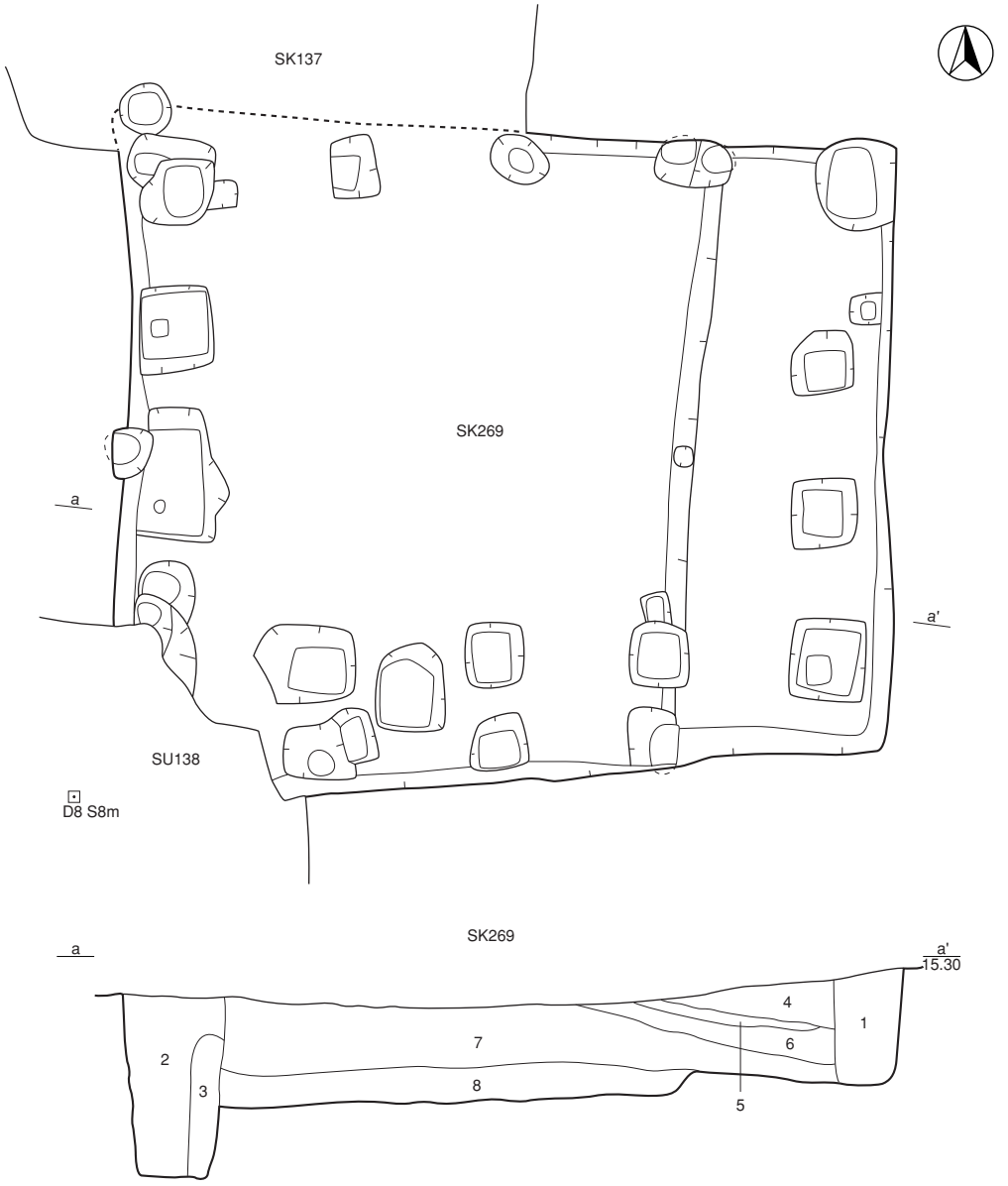
SK265（Ⅲ-103・104図）

B8、C8グリッドに位置する地下室である。SK264、SK266、SK304、SK307、SK319と重複しており、新旧はこれら全てより新である。平面形は方形を呈しており、規模は東西300cm、南北360cm、確認面からの深さは140cmを計測する。遺構のコーナーには一辺30cm、深さ30～50cmのピットが確認され、柱の痕跡が確認できた。上屋の柱か？。壁や坑底は比較的ラフに整形されており、工具痕が明瞭に確認できた部分もあった。工具は幅15cm程度の平刃の工具であった。壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がる。坑底ではSK304との重複部分が貼り床風に硬化されていた。覆土は6層に分層されるが、おおむねロームを多く含む層である。

遺物は比較的多く確認された。調査開始当初、下にあったSK304と区別できなかったため遺物を分けて取り上げることができなかったが、出土状況から多くは本遺構の出土であろうと思われる。18世紀末～19世紀初頭の陶磁器・土器がコンテナ箱で9箱のほか釘、桟瓦などが出土している。

SK268（Ⅲ-144図）

D9、D10グリッドに位置する円形の土坑である。SK168、SK179、SD180、SP231、SK249、SK250と重複しており、その全てより旧である。規模は東西290cm、南北280cm、確認面からの深さは80cmを計測する。壁、坑底は凹凸が激しく、工具の痕跡も確認された。壁は坑底からやや角度を持って立ち上がる。覆土は、3層に分層されるが、入れ子状の5、6層とその周囲を取り巻くロームブロックを多く含む黒褐色土で構成される。他事例からこもに巻いた植木を移植した

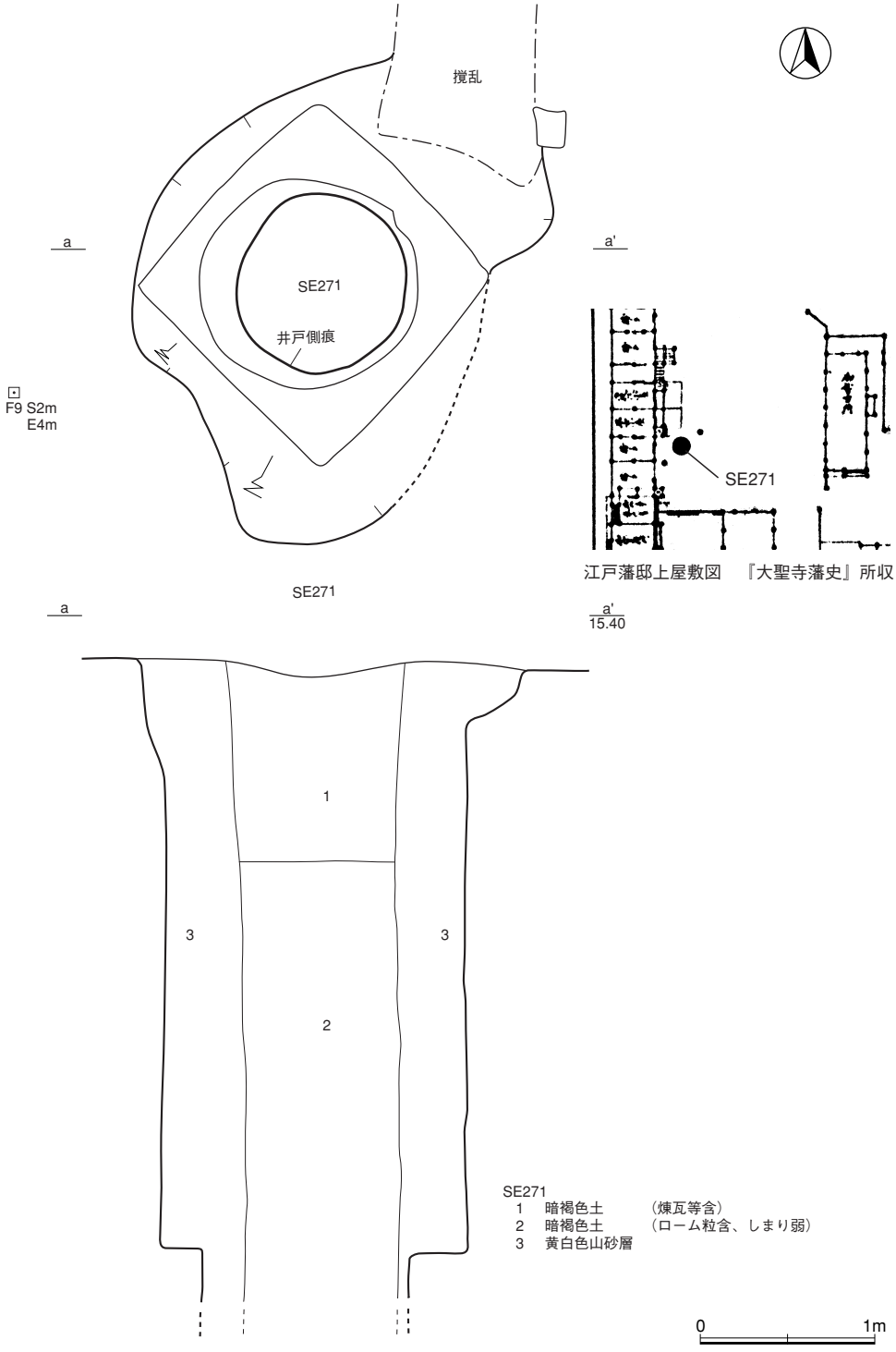


SK269

1	暗褐色土	（ローム粒中、ロームブロック・瓦片・小円礫少含）
2	暗灰褐色土	（灰褐色粘土多、ローム粒中、小円礫・炭化物微含、しまり強）
3	暗褐色土	（木の腐食層と思われる）
4	暗灰褐色砂	（小円礫少含、しまり強）
5	黒色土	
6	灰褐色粘土	（炭化物粒微含、粘性やや強、しまり強）
7	暗褐色土	（ロームブロック・ローム粒少、炭化物粒微含）
8	暗灰褐色土	（小円礫・炭化物中、ローム粒少含、粘性・しまりともにやや強）

0　1m

Ⅲ-105図　SK269


撹乱
a
a'
SE271
井戸側痕
F9 S2m
E4m
SE271
江戸藩邸上屋敷図　『大聖寺藩史』所収
SE271
a
a'
15.40
1
2
3
3
SE271
1　暗褐色土　（煉瓦等含）
2　暗褐色土　（ローム粒含、しまり弱）
3　黄白色山砂層
0
1m

Ⅲ-106図　SE271

跡であろうと推定される。また、規模、坑底や壁の状況からも植木の移植痕であろうと思われる。

遺物は出土していない。

SK269（Ⅲ-105図）

D8グリッドに位置する方形の土坑である。SK137、SU138、SU300、SK320と重複しており、新旧はその全てより新である。平面形は方形を呈し、壁周囲には1辺30cm程度の方形のピットが巡っている。また、本遺構は造り替えを行ったと考えられ、当初、東半に南北にある比高差10cm程度の段差より内側を壁にした円形のピットを伴う長方形の土坑があり、何らかの理由により、東側に拡張し、方形のピットを伴うものに作り替え、遺構の廃絶まで機能していたと考えられる。この拡張の際に東側には拡張したが、南側は若干内側に縮小している。理由は不明である。当初規模は東西300cm、南北350cm、拡張後の規模は東西400cm、南北約320cm、確認面からの深さは60cmを計測する。ピットは柱痕の木の腐食層を伴っており、土留めの柱として機能していたものと推定できる。壁や坑底はやや凹凸はあるものの顕著ではない。覆土はピットの内側寄りに確認された柱痕とそれより壁際に垂直に立ち上がる土層（1層）が遺構掘削時当初のものであり、その内側に廃絶時のものが確認された。拡張時坑底の一部である8層は貼り床状に硬化していた。

遺物は18世紀後半～19世紀前半の陶磁器・土器がコンテナ箱2箱出土している。

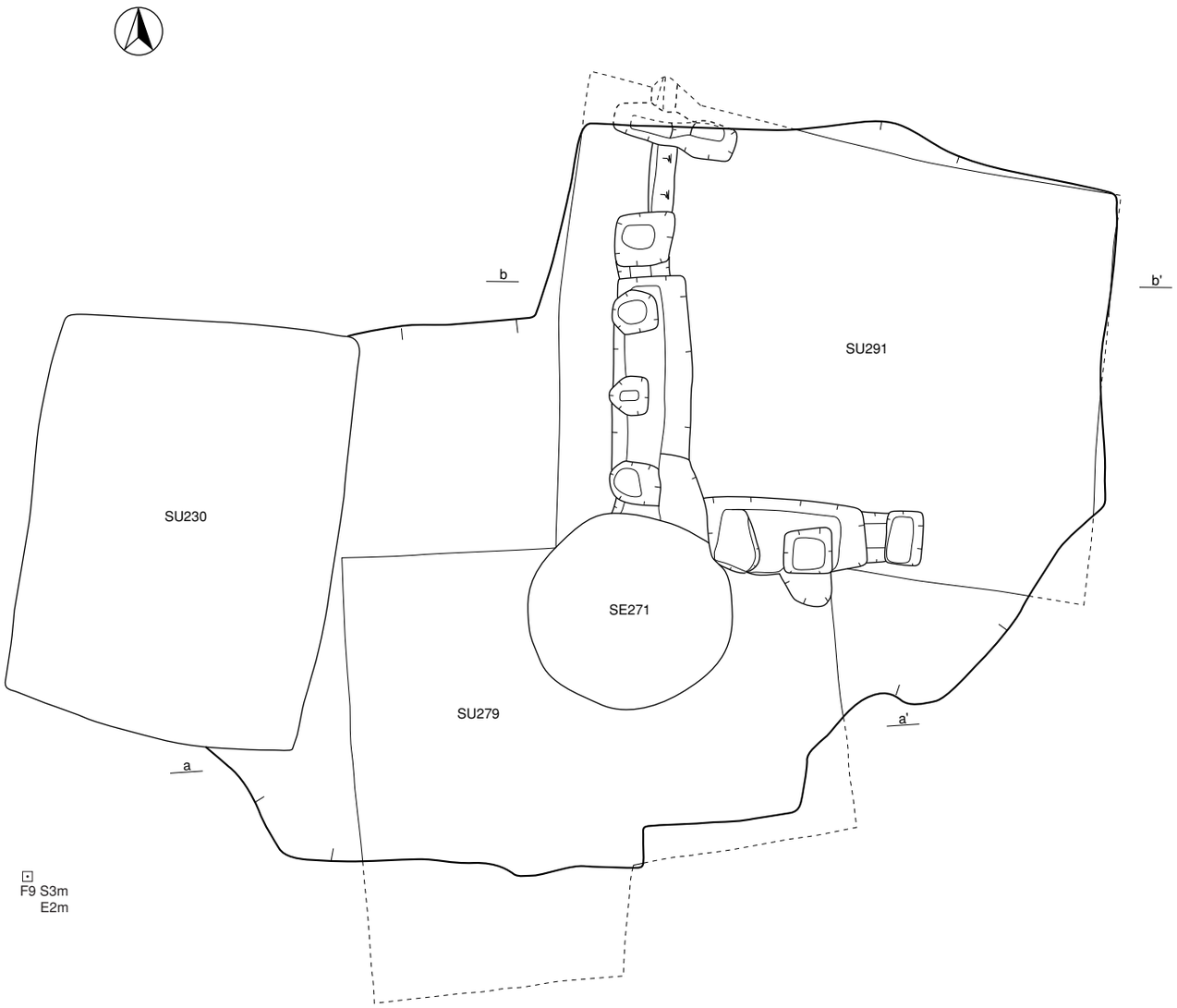
SE271（Ⅲ-106図）

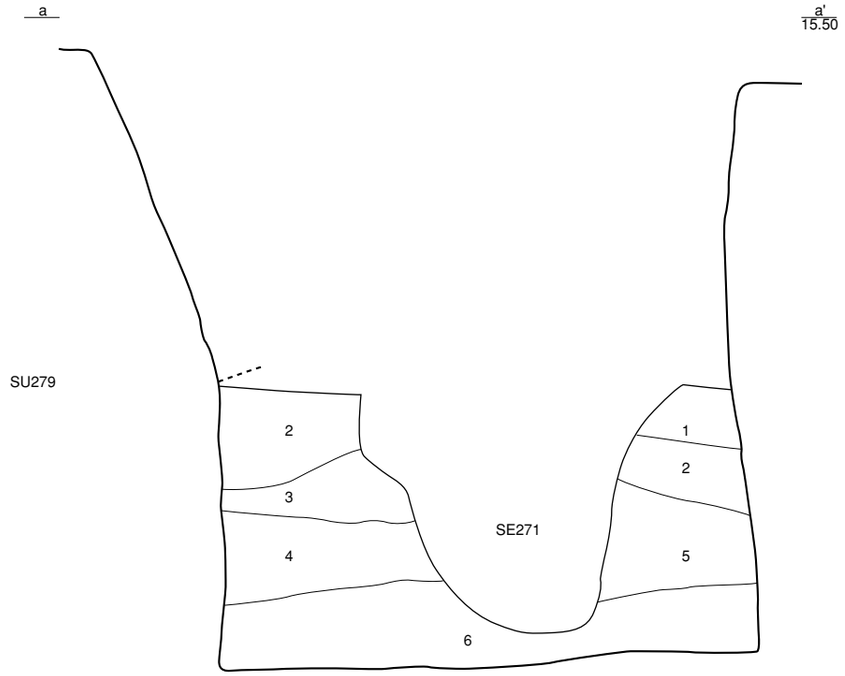
F9グリッドに位置する井戸跡である。SU279、SU291を切って構築されている。掘方の平面形は、1辺150cmを測る正方形を呈するが、確認面下340cmで直径120cmの円形に変化する。また確認面より井戸側の痕跡が認められており、その直径は90cmを測る。

本遺構は、重複する2基の地下室を切って構築されていることから、壁面は一部を除き、確認面下340cmに位置する地下室の床面に至るまで、その覆土で形成されている。そのため、掘方と井戸側間の埋め土には山留めのために黄褐色山砂土が密に充填されている。また壁面としてのSU279覆土を観察すると、天井のローム層が陥没し、その窪地を埋め戻した状態が観察されることから、本遺構は、SU279天井陥没埋め立て後に構築されたことが明らかである。先に触れたように掘方の形状は、確認面下340cmで方形から、一回り小さい円形へと変化している。井戸の掘方形状には上部構造として、方形枠を有する事例も多いが、本例のように3m以上掘り込んで変化する例は希で、その変換点が地下室の床面レベルと一致していることより、本来ならば円形で掘り進むものを地下室との重複による山留め対策として方形を形成したことが推定される。痕跡を確認することはできなかったが、掘方壁面には山留めのために板枠などの山留め防止施設が設置されていたことも予想される。

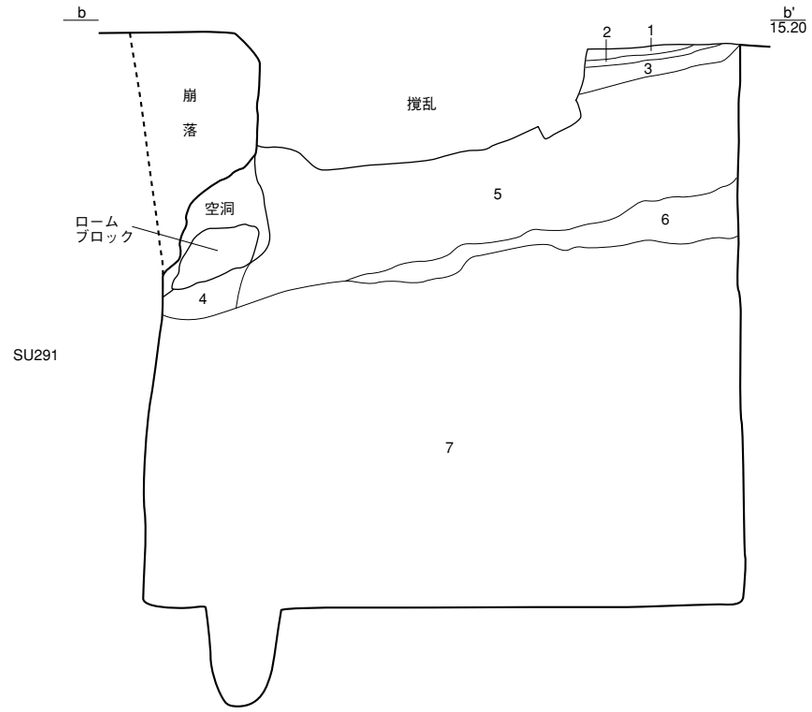
遺物は19世紀の陶磁器、土器、桟瓦がコンテナ11箱出土しているが、Ⅷd期のメルクマールである木型打ち込みによる染付皿（Ⅳ-78図4）の存在から、幕末まで機能していたことが認められる。また、1層上部からは、煉瓦片も検出され明治期まで開口していたことも推定される。

西側に隣接する石組溝SD62は、先述したように南北方向に直線的に延びる溝が本遺構部分において、それを取り囲むように迂回している。ともに出土遺物から、幕末まで機能していたことが確認されることから、本遺構の排水施設として共存していた可能性が高い。また、本遺構の主軸方位はN-45°-Eと、17世紀中葉の遺構を除き、周辺の遺構がほぼ東西南北を示しているのに対し、独





SU279
1　暗褐色土　（ローム粒多含、粘性やや強）
2　褐色土　（焼土粒少含、粘性強）
3　暗黄褐色土　（ローム主体、粘性・しまり強）
4　暗褐色土　（焼土粒多含、粘性強）
5　暗褐色土　（炭化物少含、粘性強、しまりやや強）
6　暗褐色土　（小石・炭化物含、粘性極強）



SU291
1　暗褐色土　（ローム粒少含、しまりやや強）
2　灰褐色粘土層　（粘性やや強）
3　褐色砂質層　（山砂主体、ローム粒含、粘性弱、しまり強）
4　暗褐色土　（ローム粒多含、しまり弱）
5　ロームの埋土　（粘性・しまりやや強い）
6　暗褐色土　（ロームブロック・ローム粒多、焼土粒含、粘性やや強、しまりやや弱）
7　ロームの埋土　（粘性・しまりやや強）

0　1m

Ⅲ-107図　SU279・SU291

特の主軸方位のもとに構築されている。大聖寺藩邸域に帰属する病院内他地点の調査を合わせても、この主軸方位に規制された遺構は見受けられない。一方、大聖寺藩邸内の建物配置が描かれた唯一の絵図として、文化年間の藩邸内を描いたとされる「江戸藩邸上屋敷図」がある。この絵図と検出遺構との対比は、中央診療棟地点報告書にてH23-3、I20-1という２基の井戸や、富山藩邸との地境にあたる2、6、10号組石によって行われており（東京大学遺跡調査室　1990）、絵図面と調査区の位置関係を知る手掛かりになっている。その成果に加賀藩邸との地境に対比されるSA155を加え、本地点と絵図面を対比すると、本遺構所在部分には、南北に延びる長屋の東側に描かれた１基の井戸を確認することができる。この井戸は円形の黒丸の左右に小さな黒点が付随して描かれている。I20-1の成果でその黒点は上屋施設に伴う２本の主柱位置を示していることが明らかになっている。この主柱に対比される黒点を結んだ、即ち棟のラインは絵図に描かれた加賀藩邸との地境ラインに対し、50°の傾きを示している。SA155と本遺構との主軸方位の開きは44°を示し、絵図面の描写誤差を考慮すれば、両者の関係はほぼ一致すると考えられる。

本遺構からは上屋関連施設は確認されなかったが、年代及び主軸方位の類似性より絵図面の井戸に対比されるものと考える。

SU279（Ⅲ-107図）

F8、F9グリッドに位置する地下室である。SD62、SE271、SU291より古い。SU230とは、オーバーハングした室部の一部で切り合っているため、新旧は不明である。

開口部の平面形は既に天井部が崩落していたことから不明であるが、壁面の観察から南東コーナーに開口部を有し、北、西部に室部が拡がる形態であったことが推察される。床面の平面形は北に向かって逆Ｌ字状を呈しており、東西300cm、南北270cm、確認面からの深さ350cmを測る。床面から天井までの高さは、壁面に認められる痕跡より西壁で160cmを測る。

重複するSE271の調査途中で、降雨によりSE271の壁面を形成している本遺構覆土の大半が崩落したため、遺構上部の土層観察を行うことができなかったが、３層は天井部の崩落土と考えられ、遺構の埋没途中に天井の崩落が発生し、そのため窪地となった上部を引き続き埋め戻したものと推定される。

遺物は大皿、揃いの染付皿、青花皿などを含む17世紀末～18世紀前半の陶磁器、土器がコンテナ９箱出土しており、一部に被熱した痕跡が認められることより、享保15年もしくは元文３年の火災で廃棄された資料と位置付けられる。

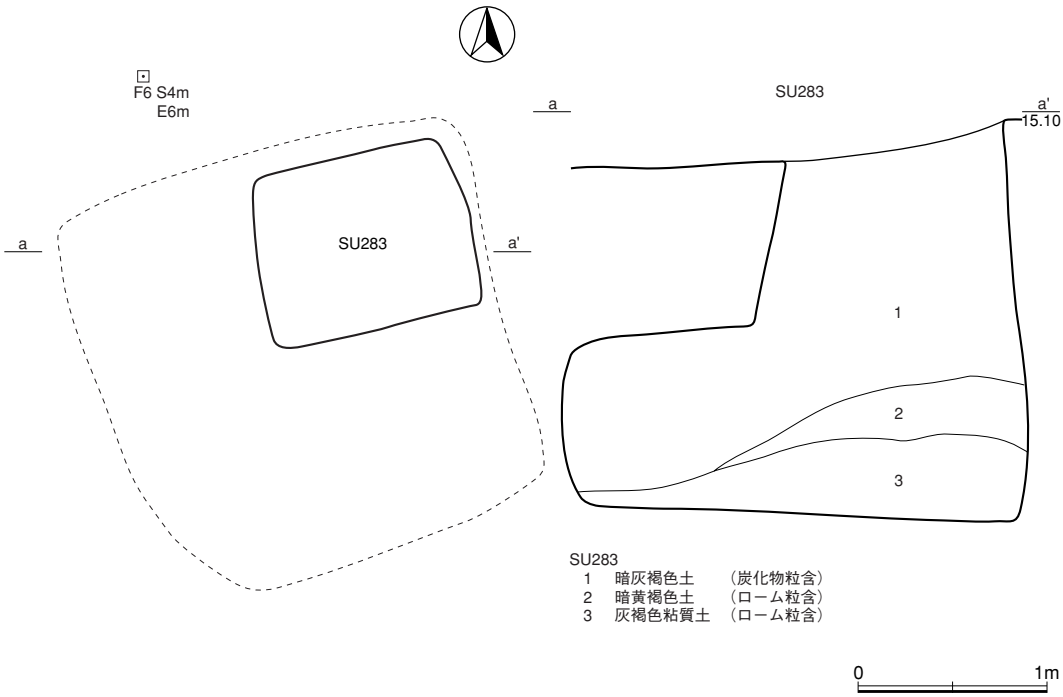
SU280（Ⅲ-150・151図）

E10グリッドに位置する地下室である。調査区南端にあり、そのほとんどは調査区外に拡がっている。開口部の平面形は長方形を呈すると推定されるが、確認面下約70cmで南壁西半分から西壁にかけてオーバーハングが始まり、さらに確認面下約150cmまで掘り下げたが、1mのピンポールが完全に刺さり切ることから、調査の続行を断念する。

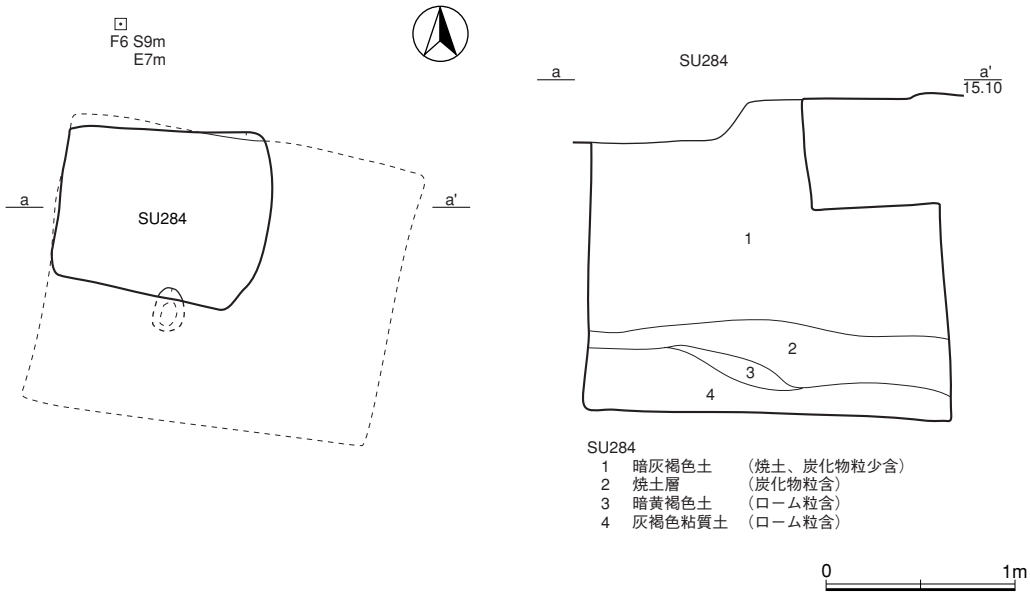
遺物は18世紀中葉～後半の陶磁器、土器がコンテナ２箱出土している。

SK282（Ⅲ-124図）

G5グリッドに位置する遺構である。西側を除く三方を撹乱によって破壊され、わずかに壁、坑底が認められる程度で、遺存状況は極めて悪く、詳細は不明である。



Ⅲ-108図　SU283



Ⅲ-109図　SU284

遺物は19世紀の陶磁器、土器がコンテナ１箱出土している。

SU283（Ⅲ-108図）

F6グリッドに位置する地下室である。SD62より古い。開口部は室部北東コーナーにあり、南北90cm、東西115cmを測る長方形を呈している。竪坑はハの字状に緩やかに開き、確認面下110cmで南壁、西壁側がオーバーハングし、天井部へと移行する。坑底は１辺215～225cmを測る不整方形を呈し、確認面からの深さは210cmを測る。天井高は西奥壁で90cm、竪坑からの奥行きは100cmを測り、竪坑部へはほぼ水平に移行する。なお開口部北壁には地震痕とみられるローム層の亀裂が縦方向に走っている。亀裂には遺構製作時の工具による削平痕跡が認められなかったことより、遺構廃絶後の地震による影響と考えられる。

遺物は土器類を中心にコンテナ１箱程度出土している。被熱した遺物も多く認められ、火災による廃棄と位置付けられる。その年代観から元禄16年の火災の可能性が高い。

SU284（Ⅲ-109図）

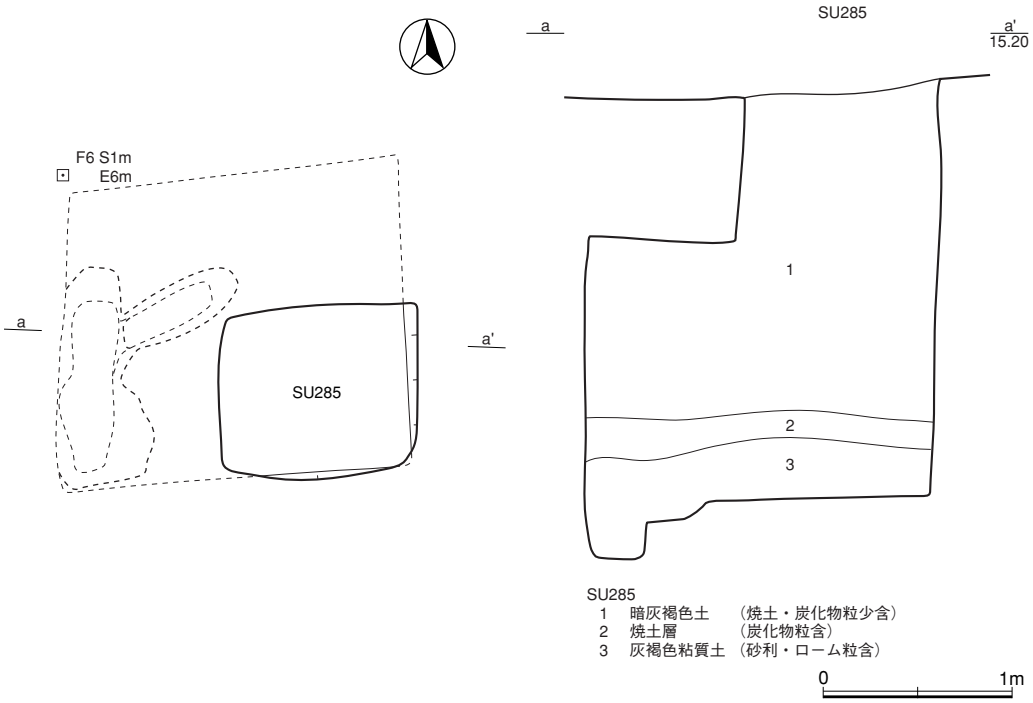
F6、F7グリッドに位置する地下室である。SD62より古い。開口部は室部北西コーナーにあり、南北90cm、東西110cmを測る長方形を呈している。竪坑はほぼ垂直に立ち上がり、確認面下60cmにて、東壁、南壁がオーバーハングし、天井部へ移行する。室部坑底は南北150cm、東西180cmを測る長方形を呈し、確認面からの深さは170cmを測る。天井高は東奥壁で120cm、竪坑からの奥行きは70cmを測り、竪坑部へはほぼ水平に移行する。また全ての角がほぼ直角に整形され、壁面、坑底ともに丁寧な整形が施されている。また、坑底のほぼ中央で、開口部南壁直下に小ピットが一基認められた。昇降施設の可能性もあるだろう。SU283とも共通するが、覆土最下層は灰褐色粘質土が、その直上に暗黄褐色土が堆積している。本遺構ではさらにその上に焼土層が10～30cm堆積しており、廃絶後の埋め戻し過程において火災に遭遇したことを物語っている。

遺物は、17世紀末の陶磁器、土器がコンテナ１箱出土したが、その多くに被熱した痕跡が認められ、火災時の瓦礫整理によって廃棄されたものと位置付けられる。出土遺物の年代観から元禄16年の火災に比定することができる。

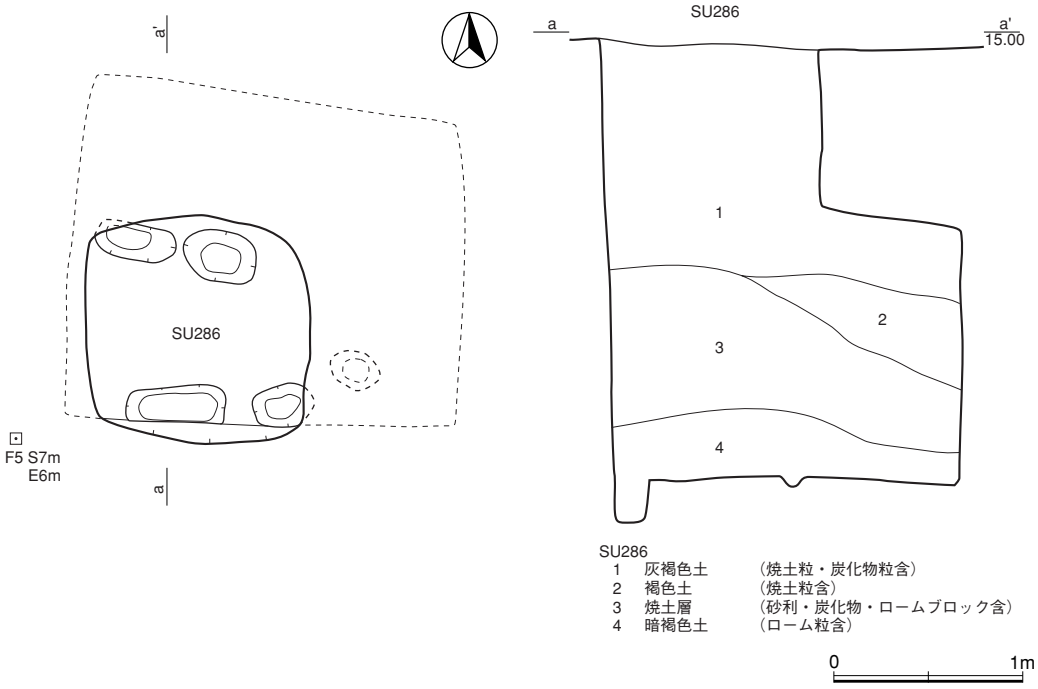
SU285（Ⅲ-110図）

F6グリッドに位置する地下室である。SD62より古い。開口部は室部東南コーナーにあり、南北90cm、東西105cmを測る長方形を呈している。竪坑はほぼ垂直に立ち上がり、確認面下90cmで北壁、西壁がオーバーハングし、天井部へ移行する。室部は南北160cm、東西180cmを測る長方形を呈し、確認面からの深さは220cmを測る。西奥壁における天井高は140cm、竪坑からの奥行きは80cmを測り、天井部はほぼ水平に作出されている。また、西壁南半部では、天井部付近から坑底にかけて壁面をえぐり取ったような著しい工具痕が存在する。その奥行きは壁中央部で約20cmに達し、坑底においても不整形の浅い掘り込みとなって存在しているが、その性格は不明である。覆土はほぼ水平に堆積しているが、焼土層（２層）堆積後に一気に埋め戻された様相を示す。この堆積状況はSU284と類似しており、両遺構の廃絶時期、埋没要因に共通性が推測される。

遺物は17世紀末の陶磁器、土器がコンテナ２箱出土したが、その多くが被熱しており、その年代観から、元禄16年の火災前に廃絶され、埋没の過程で火災の瓦礫処理が行われたと推測できる。



Ⅲ-110図　SU285



Ⅲ-111図　SU286

SU286（Ⅲ-111図）

F5グリッドに位置する地下室である。SD62より古い。開口部は室部南西コーナーに位置し、1辺120cmを測る正方形を呈している。竪坑はほぼ垂直に立ち上がり、確認面下80cmで東壁と北壁がオーバーハングし、天井部へ移行する。室部は南北160～180cm、東西210cmを測る台形を呈しており、確認面からの深さは230cmを測る。北奥壁における天井高は135cm、竪坑からの奥行きは70cmを測る。天井部は奥壁から竪坑に向けて緩やかに傾斜して上がっている。竪坑部直下の床面からその南北壁面に沿って4基のピットが検出された。各々のピットの深さは床面から5～20cmと浅いが、その配置から昇降施設、もしくは天井補強施設に関連するものと推定される。坑底は中央のピット付近を頂点に、そこから南北各壁面に向かってごく緩やかに下がっている。特に北壁際ではそれ以外の場所と比較して工具痕が目立ち、その凹凸は東西壁面下部にまで及んでいる。性格は不明であるが、その痕跡の様相から地下室完成後に掘削行為が行われたと考えられる。覆土の基本的な堆積状況は、坑底直上から間層を挟んで下層に焼土層（3層）、上層に灰褐色土層（1層）が堆積している点でSU284、SU285と類似している。さらに本遺構の焼土層は開口部から奥壁に向かい85～35cmと非常に厚く堆積しており、それに比例して出土遺物量も多い。

遺物は17世紀末の陶磁器、土器がコンテナ3箱出土したが、その多くは被熱していることから、元禄16年の火災に伴う廃棄行為と考えられる。なお、遺構の廃絶時期に関しては焼土層下に間層（4層）が存在することから、火災以前であろう。

SK289（Ⅲ-126図）

E5、F5グリッドに位置する遺構である。SD93より新しく、SK66より古い。そのため詳細な形態は不明であるが、西側に張り出しを有する長方形を呈していたと考えられる。坑底は南側に1段テラスを有し、北側の坑底との比高差は10cmを測る。坑底は1辺約1mの方形を呈している。各コーナー付近には北壁側に各2ヶ所、南壁側に各1ヶ所杭痕が存在し、それに囲まれるように長方形土坑が付設されている。長方形土坑の坑底は緩やかに西へ下がり西壁から張り出しているが、その先はSK66との重複のため不明である。また西壁との交差付近より、南北両壁には壁に沿って溝状の落ち込みが付設されている。板枠が付設された遺構と推定されるが、詳細は不明である。また、本遺構形態に類似する遺構として、SK77を見いだすことはできるが、杭痕の有無、覆土の差などの相違点も含まれ、現段階で確証を得るものではない。

遺物は出土していない。

SK290（Ⅲ-79図）

D8、D9グリッドに位置する遺構である。SK152より古い。平面形は、不整楕円形を呈し、長軸740cm、短軸530cm、確認面からの深さ166cmを測る。坑底は南側で1段テラスを有するが、断面観察において、切り合いは認められなかった。また、坑底、壁面ともに著しい工具痕が認められる。このように形態的様相から本遺構は採土坑と考えられる。

遺物は18世紀中葉（東大編年Ⅴb期）の陶磁器、土器、本瓦、桟瓦、釘、煙管などが、コンテナ22箱と大量に出土しているが、特に21層に集中していた。また、遺構中央部最上層より大量の焼塩壺が検出されている。出土遺物の年代観から、重複するSK152とは近接した時期の遺構廃絶であったことが窺え、18世紀中葉における本遺構周辺の土地利用は、一定期間低（未）利用地になっ

ていたことが推定される。また、自然遺物ではイヌ、ネコの哺乳類のほか、カモ類を中心とする鳥類、マダイを主体とする魚類などが廃棄されており、焼塩壺の廃棄と合わせて、遺構埋没過程において宴会に関する廃棄行為が行われたことが認められられる。

SU291（Ⅲ-107図）

F8、F9に位置する地下室である。SU279より新しく、SE271より古い。開口部はSE271の重複や天井部の崩落などにより、詳細は不明であるが、壁面の観察より、1辺約110cmの入口が北東部コーナーに存在し、南西部に拡がる室部を有していたことが推定される。床面は平行四辺形を呈し、東西330cm、南北250cm、確認面からの深さは320cm、天井高190cmを測る。床面には、西壁と南壁西部際にL字状の布堀を伴うピット列が存在し、西壁際で5基、南壁際で3基が確認された。このピット列が入口部と対称位置で且つSU279との重複部分に配されていることから、天井部と壁面の補強を目的とした付属施設と推定される。本遺構の覆土はほぼロームを主体とした土で埋め戻されており、特に7層の状態から短期間で埋め戻されたことが想定される。そのため遺構体積と反比例して遺物の出土量は極めて少なく、17世紀末～18世紀前半の陶磁器、土器がコンテナ1箱出土したにすぎない。

SK292（Ⅲ-153図）

F10グリッドに位置する遺構である。南側は調査区域外に達するため、北半分のみを調査した。平面形は直径95cmの円形を呈すると考えられる。遺構中心部にはさらに直径約50cmの掘り込みを有し2段構えの坑底を築いている。断面の観察から中心の掘り込みを境に層序が分かれ、内側の円形部分が確認面まで立ち上がっていることから、本来この中心の掘り込みに桶枠などの円形施設が埋設されていたことが推定される。また、円形施設内は、焼土を主体とした覆土（1層）で形成されており、本遺構が火災を契機に廃絶されたこと、廃絶時の円形施設内は開口していたことが窺われる。また、本遺構と同様に中心部に掘り込みを有する遺構にSL224があり、その関連遺構SK223がある。これらの遺構はその特徴から厠の下穴と推定しているが、同一直線状に位置する本遺構も、一連の関連性があることを指摘したい。

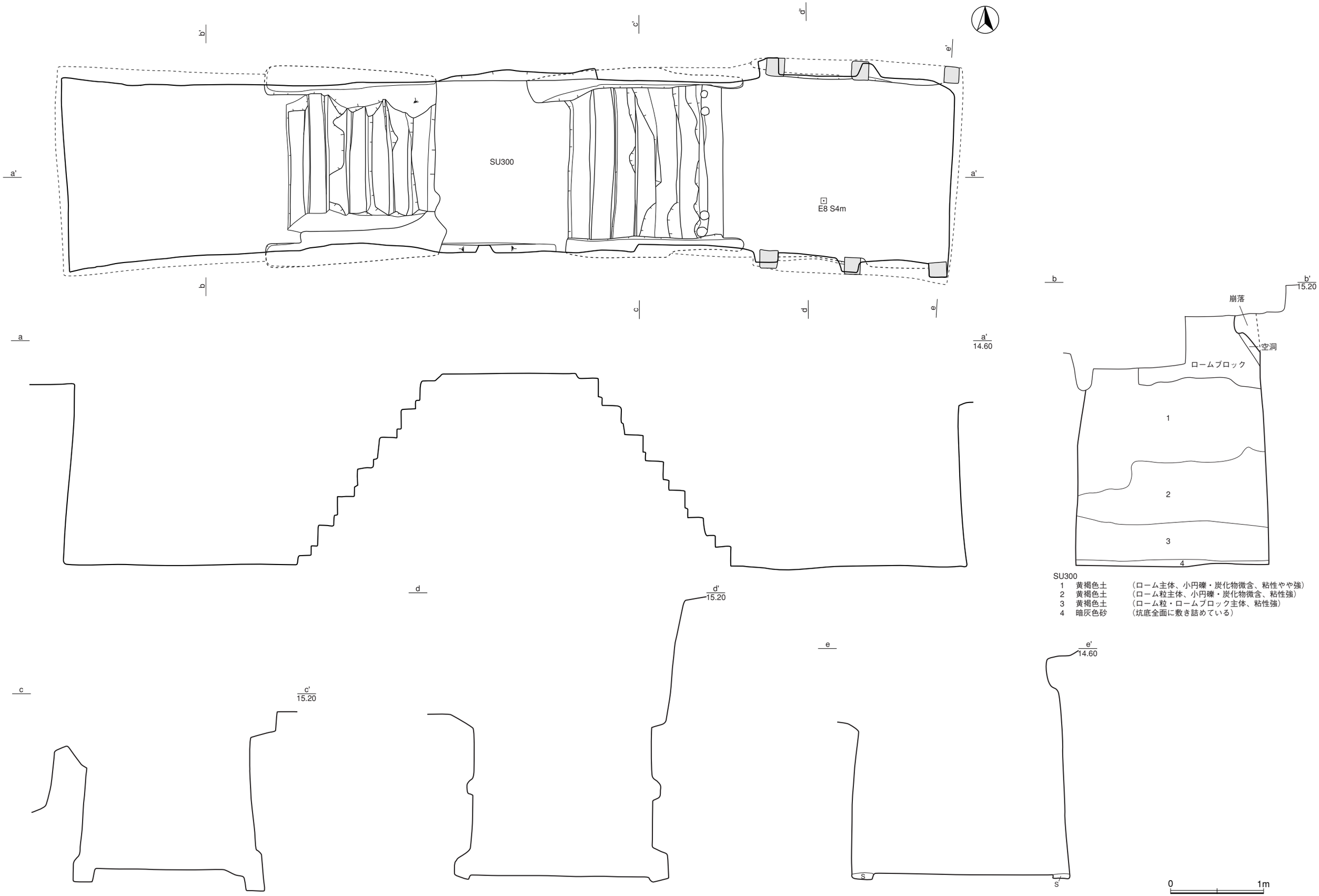
遺物は出土していない。

SU300（Ⅲ-112図）

D8グリッドに位置する地下室である。SK137、SK152より古い。本遺構の全体的な平面形は長方形を呈するが、遺構中央部に設けられたテラス（踊り場）、そこから東西両側に降りる階段、階段から通じる室部の3要素から構成されている。遺構全体の規模は、東西970cm、南北235cm、確認面からの深さ295cmを測る。また、遺構南北壁上には確認面下約30cmの位置に、奥行き30～50cmのテラスが築かれている。中央踊り場はこのテラスから、140cm下に位置し、南北170cm、東西140cmの長方形を呈する。床面、壁面ともに丁寧な整形が施されている。踊り場の東西両サイドには、階段がある。

西側の階段は7段のステップを有し、各ステップの付け根には奥行き約5cm、高さ約10cmの小段が付随している。またステップの両側約30cmはテラス部から室部床面までスロープ状に削り取られている。この削り込みは両壁面にも及び、床面も掘り込まれている。

一方、東側の階段も7段のステップを有し、西側の階段同様ステップ付け根に小段を両壁際に壁



SU300

1	黄褐色土	（ローム主体、小円礫・炭化物微含、粘性やや強）
2	黄褐色土	（ローム粒主体、小円礫・炭化物微含、粘性強）
3	黄褐色土	（ローム粒・ロームブロック主体、粘性強）
4	暗灰色砂	（坑底全面に敷き詰めている）

Ⅲ-112図　SU300

面、床面を掘り込んだスロープを有している。さらに最下段のステップ奥両端に２基の杭痕が認められる。

西側の室部は、入口部で幅200cm、奥壁で幅225cm、奥行き245cmを測る撥形を呈する。壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。断面図（b-b’）の１層上に巨大なロームブロックが存在していることから、本来は天井を有していたことが窺え、その範囲は壁面の痕跡から、b-b’ライン付近までと考えられる。

東側の室部は、幅180cm、奥行き250cmを測る長方形を呈する。両側壁には幅20～30cmの溝状施設が階段脇、奥壁際、その中間と縦方向に３筋、また床面際、天井際、そしてその中間と横方向に３筋と、全体では田の字状に掘り込まれている。縦方向の掘り込みと床面際の掘り込みとの交点６ヶ所には、１辺15～20cmの切石が水平に設置されている。その状態から切石は礎石と考えられ、壁面に掘り込まれた溝状施設は、柱（溝の形状から角材と推定される）を組み込むための施設であることが推定される。室部壁際に柱穴もしくは礎石を有する地下室の事例は多く、本調査地点においてもSK139、SK176、SK269などが存在するが、本遺構のように壁を掘り込む例はSU313（Ⅲ-114図）とSU58（Ⅲ-37図）の入口付近に認められるのみである。それ故に本遺構において柱と梁の構成が確認されたことの意義は大きい。

ところで、室部に認められた溝状施設は、先述した階段の両脇にも存在している。室部における見解から、階段両脇の施設に関しても、柱が組み込まれていたことが推定される。そして各ステップに認められた小段の存在から、ステップの補強を図るためにステップの表面を板材で保護し、その板材を両脇の溝状施設に組み込まれた柱に固定したことが推定される。

覆土は、ロームを主体とした黄褐色土で廃絶後一気に埋め戻された様相を呈している。そのため、遺物は17世紀中葉～18世紀前半の陶磁器、土器がわずかに出土したにすぎず、本遺構の廃絶年代を知る手がかりは乏しい。

一方、床面直上には、暗灰褐色を呈する砂層が存在している。この砂層は、覆土の主体をなすローム土とは様相を異にすること、室内全体にわたり、均一に堆積していることから、使用時の様相を反映しているものと推定される。

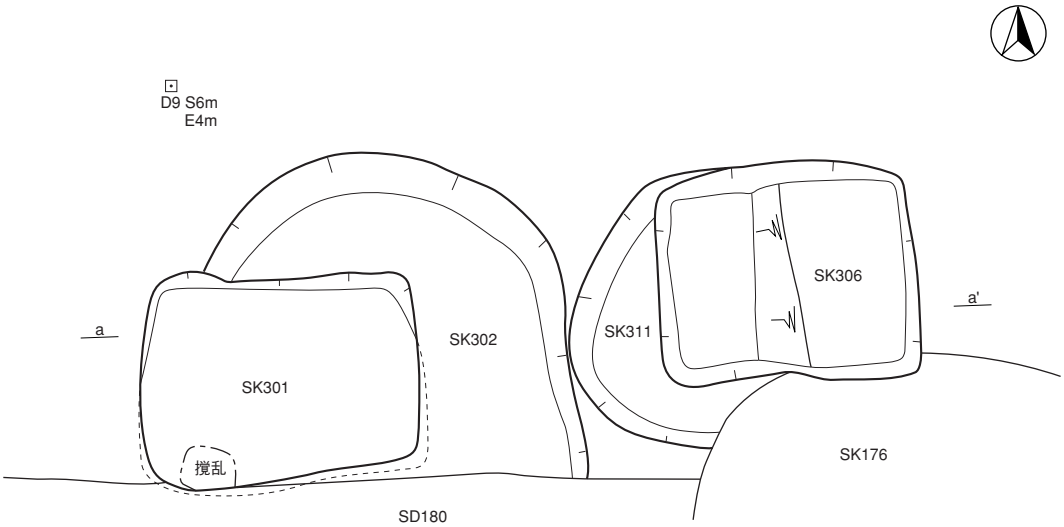
SK301（Ⅲ-113図）

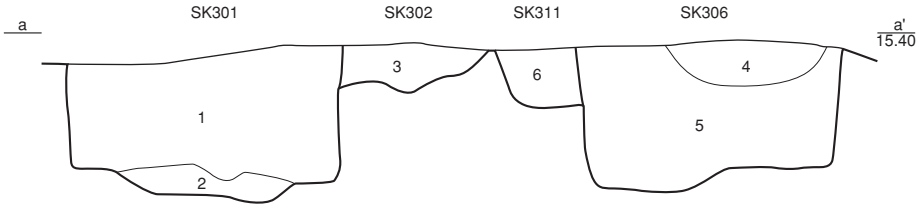
D9グリッドに位置する遺構である。SK302と重複関係にあり、新旧はSK302より新である。平面形は東西に主軸を持つ隅丸長方形を呈し、規模は東西150cm、南北110cm、確認面からの深さは80cmを計測する。壁や坑底は凹凸があり、壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は２層に分層される。

遺物は調査当初SK302と同一の遺構と判断して開始したため、SK302と分類できなかった。両遺構併せて17世紀後半～18世紀の陶磁器・土器が数点出土したのみである。

SK302（Ⅲ-113図）

D9グリッドに位置する浅い土坑である。SK301、SD180と重複関係にあり、新旧はそのどちらよりも旧である。平面形は南側をSD180に切られているため不明であるが、遺存部分では半円形を呈する。遺存している規模は東西190cm、南北170cm、深さが30cmを計測する。坑底は激しく凹凸を有し、壁との境界も不明瞭である。覆土はロームを含む褐色土単層である。遺構の形





SK301
1　褐色土　（ローム粒・ロームブロック中含）
2　黄褐色土　（ローム主体 、粘性・しまりともにやや強）

SK302
3　褐色土　（1層とほぼ同様）

SK306
4　暗褐色土　（ローム粒・焼土粒・炭化物多、瓦片・ロームブロック少含）
5　暗褐色土　（ローム粒多、ロームブロック少含）

SK311
6　褐色土　（ローム粒・ロームブロック多含、しまりやや強）

0　1m

Ⅲ-113図　SK301・SK302・SK306・SK311

状、壁・坑底の調整の特徴、覆土の状況などから本遺構は植木の移植痕であろうと推定される。

遺物は調査当初SK301と同一の遺構と判断して開始したため、SK301と分類できなかった。両遺構併せて17世紀後半～18世紀の陶磁器・土器が数点出土したのみである。

SK304（Ⅲ-103・104図）

C8グリッドに位置する土坑である。SK265と重複しており、新旧は本遺構が旧である。平面形は長方形であるが、西側に半円形の大きな張り出しを持つ。上部の構造はSK265によって切られているため不明であるが、重複していない南側の状況から張り出し部は天井を有するものの、他部分は開口していたものと推定される。遺構の主軸は南北より30°ほど西に振れている。この主軸方向は東大構内遺跡の遺構にはあまり見られない方位である。規模は長軸410cm、短軸130～160cm、張り出し部の奥行きは80cm、確認面からの深さは260cmを計測する。壁や坑底は凹凸が激しく、工具痕が明瞭に観察された。工具は約15cm程度の方形平刃であった。壁は坑底より垂直に立ち上がっている。覆土はいずれも粘性の非常に強い土で、SK265の坑底にあたる部分は硬化していた。

遺物は調査当初SK265と同一の遺構と判断して開始したため、本遺構と分類できなかった。両遺構併せて18世紀末～19世紀初頭の陶磁器・土器がコンテナ箱で9箱のほか釘、桟瓦などが出土している。

SK306（Ⅲ-113図）

D9グリッドに位置する土坑である。SK167、SK311と重複しており、新旧はSK167より旧で、SK311より新である。遺構の平面形は東西に主軸を有する長方形を呈し、規模は東西140cm、南北110cm、確認面からの深さは最大80cmを計測する。坑底は西半のレヴェルがやや低くなっている。壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は2層に分層される。

遺物は17世紀末～18世紀初頭の陶磁器・土器が20点ほど出土している。

SK307（Ⅲ-103図）

B8、C8グリッドに位置する円形の土坑である。SK265、SK318と重複しており、新旧は両者より旧である。規模は直径120cm、確認面からの深さは230cmを計測する。壁、坑底は凹凸が顕著で、丸形平刃の工具痕が明瞭に確認できた。覆土はローム粒子・ブロックを多く含む褐色土の単層である。

遺物は出土していない。

SD308（Ⅲ-148・150図）

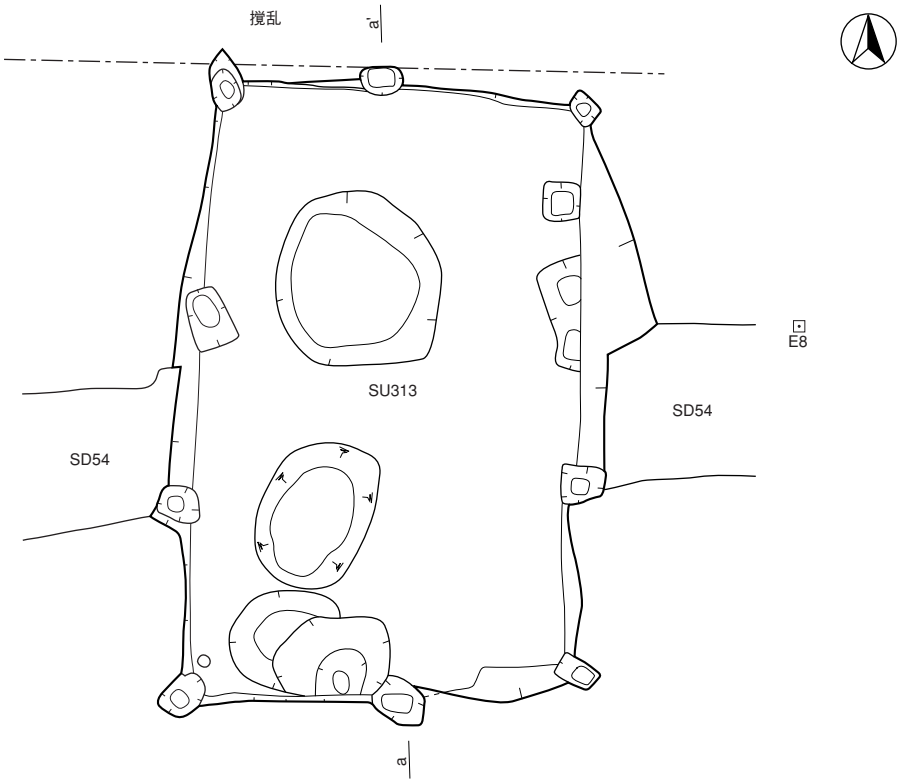
E9～E10グリッドにかけて南北に延びる溝状遺構である。北端はSK152と重複し、南端は調査区外に至るため、その全容は不明である。溝幅は約50cmを測り、その主軸はSA155と平行である。坑底からは2基のピットが確認されていたが、性格は不明である。

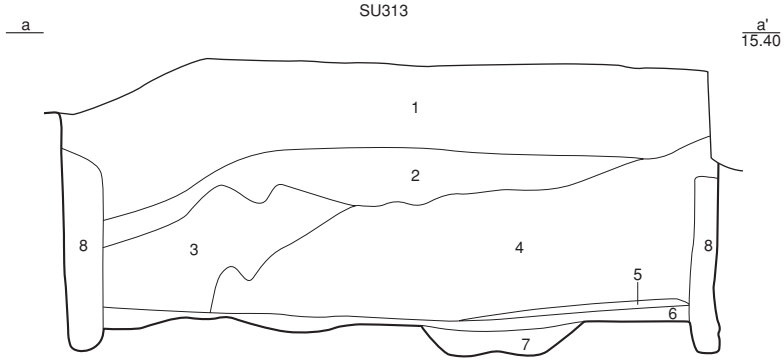
遺物は出土していない。

SK309（Ⅲ-150図）

E10グリッドに位置する土坑である。南側でSU280と重複しているため、形態、規模は不明である。覆土はローム粒、ロームブロックを多量に含有する黒褐色土である。

遺物は出土していない。

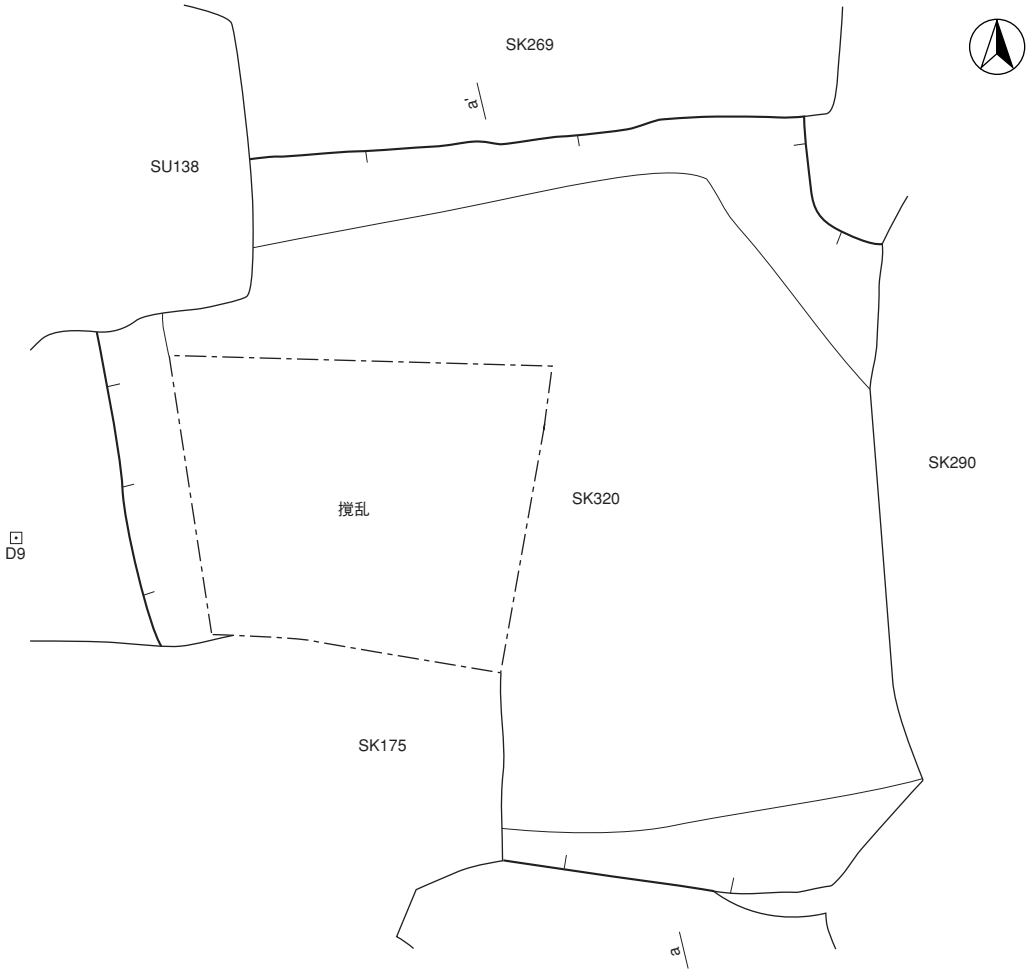


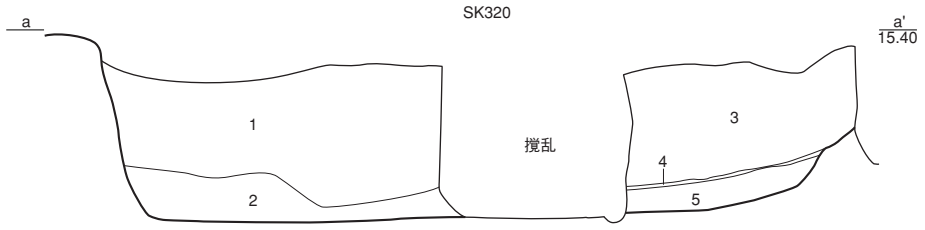


SU313
1　茶褐色土　（ローム粒多、ロームブロック中、焼土粒・小円礫少、炭化物微含）
2　黒褐色土　（焼土粒・瓦片多、炭化物少含、粘性・しまりともにやや弱）
3　黄褐色土　（ローム粒・ロームブロック多、小円礫・炭化物少含）
4　暗褐色土　（焼漆喰・炭化物・大角礫多、小円礫少含、粘性・しまりともにやや弱）
5　炭化材層
6　茶褐色土　（ローム粒・ロームブロック中含、しまりやや強）
7　黄褐色土　（ローム主体、粘性・しまりともに強）
8　茶褐色土　（ロームブロック・灰褐色粘土多含、柱痕と推定される、粘性やや強、しまりやや弱）

0　1m

Ⅲ-114図　SU313





SK320
1　黒褐色土　（ローム粒・ロームブロック多含）
2　黒褐色土　（ローム粒・ロームブロック微含）
3　黄褐色土　（ロームブロック・ローム粒主体、しまりやや強）
4　黒褐色土
5　黄褐色土　（ロームブロック主体、しまりやや強）

0　1m

Ⅲ-115図　SK320

SU313（Ⅲ-114図）

D7、D8グリッドに位置する土坑である。SD54と重複しており、新旧は本遺構が新である。平面形は南北に主軸を持つ長方形で、壁際にはやや外側に張り出して1辺10～20cmのピットが計11基巡っている。ピットには杭状の木が腐食した痕跡が明瞭に観察され、壁際には杭とそれに支えられた板がある構造であろうと判断された。坑底は粗掘りの後貼り床状のタタキが施されていた。しまりの非常に強い7層はそれにあたる。坑底は粗掘りの凹凸を有するが、壁は丁寧に平滑に調整されている。規模は東西220cm、南北330cm、確認面からの深さは貼り床面までが130cm、最大で150cmを計測する。覆土は全体に焼土が多く認められ、この中から焼けた陶磁器・瓦、炭化物、焼け漆喰などが出土しており、火災の後始末であろうと推定された。本遺構から約5m西には構造の類似するSK139があるが、この覆土も焼土が多く含まれており、また、遺物も二次的な火熱を受けていることなどの共通点が多く認められる。年代的にも双方とも17世紀末に該当し、SK139の41（Ⅳ-48図）と本遺構の10（Ⅳ-91図）のような同類の小形鍋の存在などから同じ火災であると判断された。これらの遺構は同時期に機能し、元禄16年の火災によって廃絶されたものと推定できる。

遺物は焼土に混じって多く出土した。陶磁器・土器がコンテナ箱3箱のほか、焼けた本瓦、鎹などの鉄製品や器種不明の銅製品などが多く出土した。

SK320（Ⅲ-115図）

D8、D9グリッドに位置する土坑である。SU138、SK175、SK269、SK290、SK322と重複関係にあり、新旧はその全てより旧である。また、遺構の中央を近代以降の撹乱によって削平されている。平面形はおそらく方形もしくは長方形を呈していたと推定される。遺存している規模は東西400cm、南北400cm、確認面からの深さは最大80cmを計測する。遺構の壁や坑底は凹凸が確認できる。覆土はローム土と黄褐色土で構成される。

遺物は18世紀の陶磁器・土器が10点程度出土している。

SB321（Ⅲ-152図）

E9、F9グリッドに位置する柱穴列である。直径20～24cmを測る円形のピットが225cm間隔で2基存在する。覆土はともに焼土ブロックを含む暗褐色土である。ピット列は、N-93°-Eと、ほぼ東西方向を示しているが、周辺に関連遺構は認められず、性格は不明である。

遺物は出土していない。

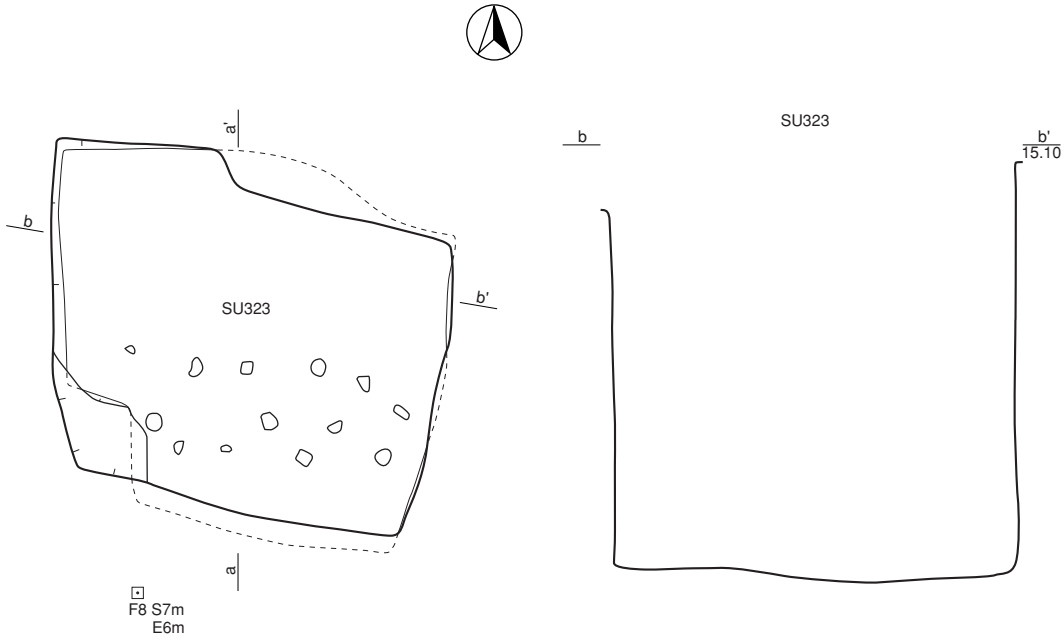
SK322（Ⅲ-79図）

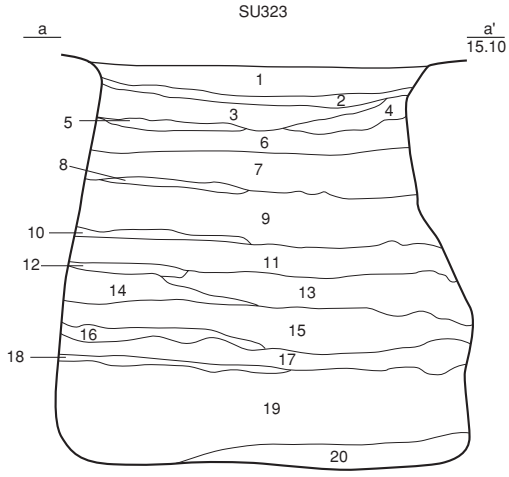
D9グリッドに位置する遺構である。SK290より古い。平面形は楕円形を呈すると思われ、残存する長軸は75cmを測る。覆土はローム粒を含むしまりの弱い暗褐色土を呈しており、坑底直上には多数の破砕礫が存在した。その様相から礎石の掘方の可能性も考えられるが、周辺に関連遺構は認められない。

遺物は陶器、土器がわずかに出土したにすぎない。

SU323（Ⅲ-116図）

F8グリッドに位置する地下室である。SD62より古い。遺構北西部に入口を有し、壁面の遺存状態から、東西90cm、南北120cmを測る長方形を呈していたものと推定される。入口部の主軸



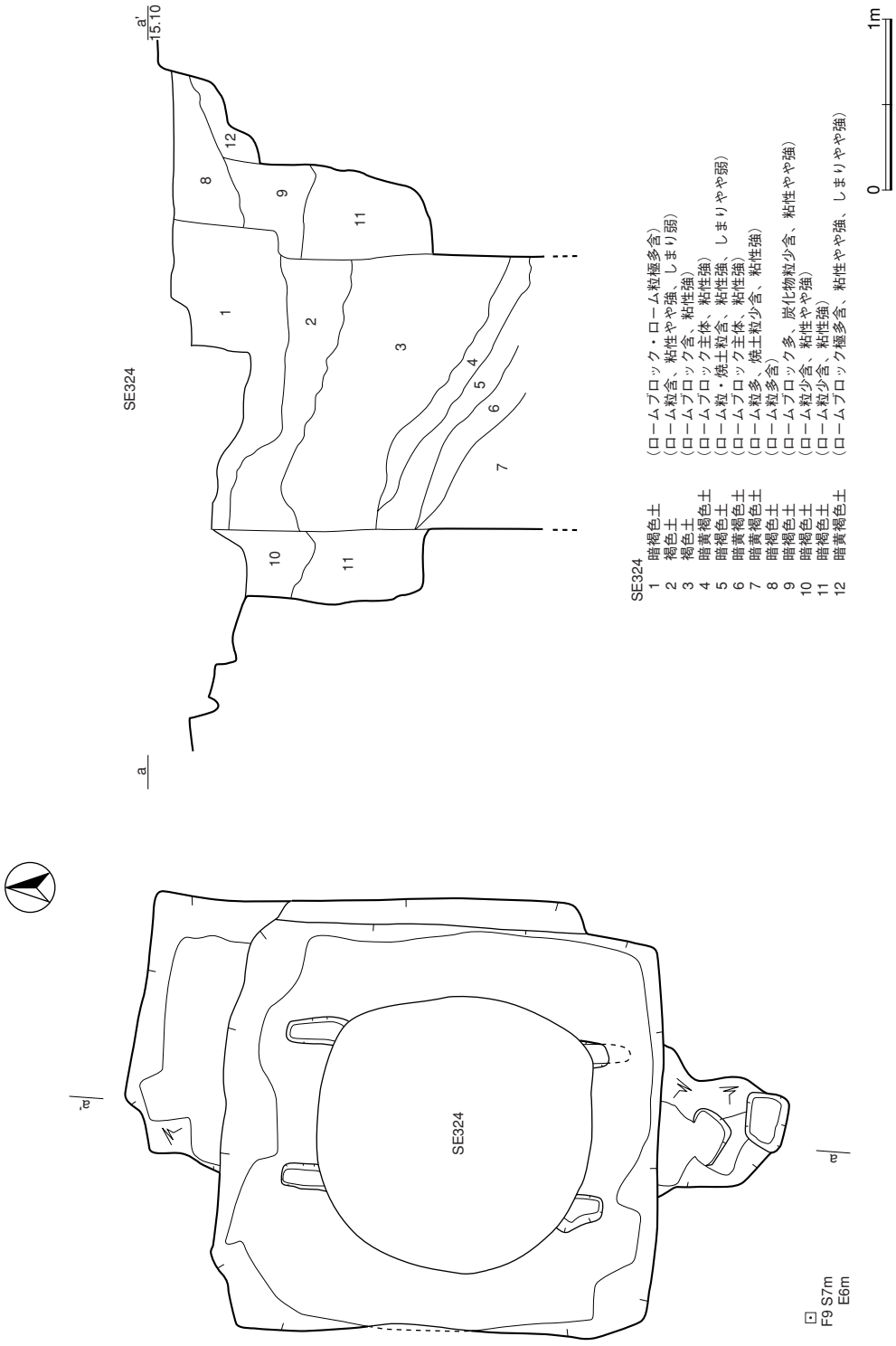


SU323

1	暗黄褐色土	（黒色土含、しまり強）
2	砂利層	（山砂含）
3	ローム	
4	褐色土	（ロームブロック多含）
5	砂利層	
6	暗褐色土	（ローム粒、焼土粒・炭化物粒少含）
7	ローム	
8	砂利層	
9	ローム	
10	砂利層	
11	ローム	
12	砂利層	
13	ローム	
14	暗褐色砂質土	（下部に砂利多含）
15	ローム	
16	砂利層	
17	ローム	
18	砂利層	
19	ローム	
20	褐色土	（ローム粒多、焼土粒・炭化物粒少含、粘性やや強）

0　1m

Ⅲ-116図　SU323


a
a'
15.10
SE324
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
SE324
1 暗褐色土 （ローム ブロック・ローム粒極多含）
2 褐色土 （ローム粒含、粘性やや強、しまり弱）
3 褐色土 （ローム ブロック含、粘性強）
4 暗黄褐色土 （ローム ブロック主体、粘性強）
5 暗褐色土 （ローム粒・焼土粒含、粘性強、しまりやや弱）
6 暗黄褐色土 （ローム ブロック主体、粘性強）
7 暗黄褐色土 （ローム粒多、焼土粒少含、粘性強）
8 暗褐色土 （ローム粒多含）
9 暗褐色土 （ローム ブロック多、炭化物粒少含、粘性やや強）
10 暗褐色土 （ローム粒少含、粘性やや強）
11 暗褐色土 （ローム粒少含、粘性強）
12 暗黄褐色土 （ローム ブロック極多含、粘性やや強、しまりやや強）
0
1m
SE324
F9 S7m
E6m

Ⅲ-117図　SE324

はほぼ南北方向を示す。入口部を除く室部は、南北170cm、東西140cmを測る長方形を呈し、確認面から床面までの深さは220cmを測る。また室部は入口部に対しN-12°-Eと異なる主軸を示し、軸の異なる２つの長方形が重なった状態の平面形を呈してる。

本遺構の天井は既に崩落して存在しなかった。ロームと砂利を交互に用い版築状に埋め戻している。その様相から、あらかじめ天井部を全て落とし、遺構全体が開口した状態に仕立てた後、埋め戻し行為が行われたと判断できるとともに、建築物など地面への負荷が生じる土地利用が遺構埋め戻し後に予定されたことを物語っている。さらにそれは砂利層が覆土南半にしか認められてないこととも関わっているものと推定される。

床面南側には多数の杭痕が存在するが、それらは約60cm幅で南壁と平行に分布している。その北端は覆土の砂利層の範囲とほぼ一致するが、それ以外の痕跡を認めることができなかったので詳細は不明である。

遺物は覆土の性質上非常に少ない。

SE324（Ⅲ-117図）

F9グリッドに位置する井戸跡で、SD62より古い。遺構形態は２段構造になっており、上部は1辺240～250cm、確認面からの深さ160cmを測る正方形の掘方を呈す。その方形テラスから直径160cmを測る円形の掘方に移行する。方形掘方の南北両壁面には上屋建物関連と考えられる張り出し状施設が付置されている。またテラスには円形掘方に隣接して南北に各々２ヶ所、同規模の長方形の浅い掘り込みが設けられている。この掘り込みは南北各々が向かい合い、平行を呈している。その様相から井戸側を固定する施設と推定される。

本遺構からは、コンテナ３箱の遺物が出土しているが、出土遺物の年代は18世紀前半と19世紀前半に大別することができる。その理由として掘方覆土と井戸側内覆土含有遺物の差と推定することができ、SD62建設に伴って本遺構を廃絶し、SE271へ移設したことが考えられる。

SB325（Ⅲ-154図）

F9グリッドに位置する礎石を伴う柱穴列で、２基確認されている。ともに切石を礎石に用いており、東側の柱穴では切石が３段に積まれている。また断面には柱痕も観察され、幅18cmを測る。２基間の距離は真々で150cmを測り、主軸はN-93°-Eと東西方向からやや南へずれている。

遺物は出土していない。

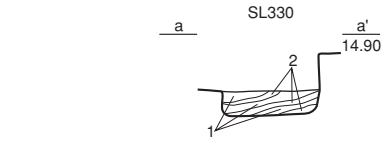
SL330（Ⅲ-118図）

F9グリッドに位置する遺構である。SK220より古い。平面形は直径50cmを測る円形を呈し、確認面からの深さは32cmを測る。覆土は山砂を含む黒褐色土と暗灰褐色粘質土が交互に薄く堆積している。木質などの痕跡は確認されなかったが、形態と覆土の様相から厠の下穴と考えられる。

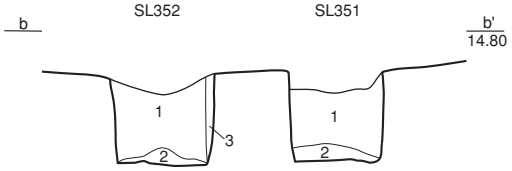
遺物は出土していない。

SX331（Ⅲ-148図）

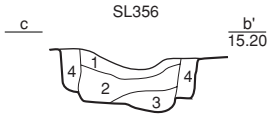
E9グリッドに位置する遺構である。本遺構はSU345を除く、重複する全ての遺構より古い。そのため遺存状況はきわめて悪く、規模、形態ともに不明である。また確認面からの深さも15～20cmと浅く、出土遺物も存在しない。年代はSA155に切られているので、17世紀代の遺構と推定される。



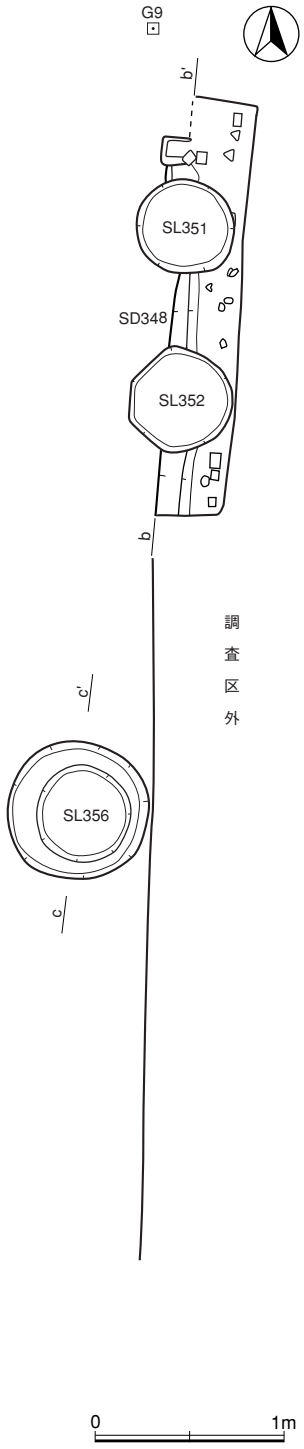
SL330
1　暗灰褐色土　（粘性やや強）
2　黒褐色土　（山砂含、粘性やや強）



SL351・SL352
1　灰褐色土　（漆喰多含、粘性・しまりともに弱、砂質）
2　黄褐色土　（ロームブロック主体、しまり強）
3　褐色土　（ローム粒微含、粘性やや強）



SL356
1　黒褐色土　（焼土粒極多含）
2　灰褐色土　（粘性・しまりともにやや強）
3　褐色土　（山砂粒含、粘性やや強、しまり強）
4　暗黄褐色土　（ローム主体、しまり強）



Ⅲ-118図　SL330・SL351・SL352・SL356

SK332（Ⅲ-148・149図）

E9グリッドに位置する遺構である。SA155より古く、SK334より新しい。平面形は楕円形を呈し、南北134cm、東西114cm、確認面からの深さ130cmを測る。断面形は逆台形を呈し、覆土下層には黒褐色土、上層にはロームブロックを多量に含む暗黄褐色土によって埋め戻されている。年代はSA155より古いので17世紀代と推定され、性格は不明である。

遺物は出土していない。

SK333（Ⅲ-148・149図）

E9グリッドに位置する遺構である。SA155以外の全ての遺構より新しい。平面形は直径約170cmを測る円形を呈し、確認面からの深さは20cmを測る。覆土はローム粒、黒色粒を多量に含む褐色土の単層である。

遺物は出土していない。

SK334（Ⅲ-148・149図）

E9グリッドに位置する遺構である。SA155、SK332、SK333より古く、SX331より新しい。平面形は楕円形を呈し、南北145cm、東西176cm、確認面からの深さ40cmを測る。覆土は下層に暗褐色土、上層にロームブロックを多量に含む褐色土で埋め戻されている。年代はSA155に切られているので17世紀代と推定され、性格は不明である。

遺物は出土していない。

SK335（Ⅲ-148・149図）

E9グリッドに位置する遺構である。SK331より新しく、SK333より古い。平面形は楕円形を呈し、南北85cm、東西70cm、確認面からの深さ23cmを測る。覆土は暗褐色土の単層で埋め戻されている。年代はSK333に切られているので17世紀代と推定され、性格は不明である。

遺物は出土していない。

SK336（Ⅲ-148・149図）

E9に位置する遺構である。SA155、SK152、SK333より古く、SX331より新しい。平面形は楕円形を呈し、南北240cm、東西220cm、確認面からの深さ72cmを測る。覆土はロームブロック主体層によって埋め戻されている。形態と覆土の特徴から植栽痕の可能性が考えられる。また年代はSA155より古いので、17世紀代と推定される。

遺物は出土していない。

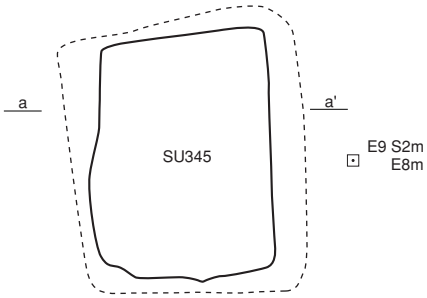
SK337（Ⅲ-153図）

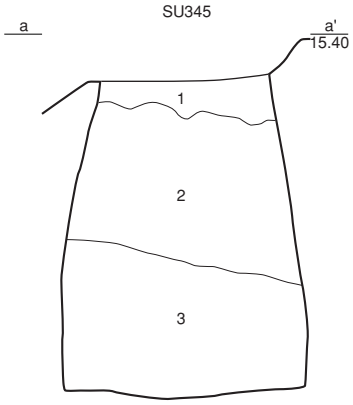
E10グリッドに位置する遺構である。SA155より古く、また南半部は1次調査区外へ至るため、形態、規模ともに詳細は不明である。覆土下層（4層）には、ロームブロック主体層が堆積していることから、植栽痕の可能性も考えられる。遺構年代はSA155より古いことから、17世紀代と推定される。

遺物は出土していない。

SK339（Ⅲ-154図）

F9グリッドに位置する遺構である。平面形は1辺55cmを測る正方形を呈し、確認面からの深さは20cmを測る。覆土はローム粒を多量に含み、しまりの弱い暗褐色土の単層である。性格は





SU345
1　褐色土　（ロームブロック極多含、しまり強）
2　暗黄褐色土　（ロームブロック主体、粘性やや強、しまり強）
3　褐色土　（小石含、粘性やや強、しまりやや弱）

0　1m

Ⅲ-119図　SU345

不明である。

SX340（Ⅲ-150 ・ 151図）

E10グリッドに位置する遺構である。平面形は不整長方形を呈するが、重複するSU185、SK275、SD308より古いため、平面規模は不明である。確認面からの深さは15cmを測り、ロームブロック主体の黄褐色土で埋め戻されている。性格、年代ともに不明である。

遺物は出土していない。

SK341（Ⅲ-137図）

F7、G7グリッドに位置する遺構である。重複するSB70、SD216より古く、詳細は不明であるが、東西60cm、南北80cm以上を測る長方形土坑である。性格は不明であるが、廃絶時期は広東碗を含む出土遺物の年代観から18世紀末以降と考えられる。

SD343（Ⅲ-150 ・ 151図）

E9、E10グリッドに位置する遺構である。SU185、SD308、SD344、SX350と重複し、そのなかでは、最も古い遺構である。平面形は長方形を呈し、長辺344cm、短辺47～55cm、確認面からの深さ107cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、覆土下半部はローム粒ないしロームブロック主体の暗黄褐色土で埋め戻されている（4、5層）。主軸はN-54°-Wと大きく西へ傾くが、本遺構と平行または直行する遺構はSD53、SD319の2遺構と極めて少なく、いずれも調査区南半（8ライン以南）に分布している。ただしこれらの遺構間に関連性は認められない。

遺物は出土していない。

SD344（Ⅲ-150 ・ 151図）

E10グリッドに位置する溝状遺構である。SA155より古く、SD343、SX350より新しい。幅は42～45cmを測る。覆土はローム粒を多量に含む褐色土で埋め戻されている。主軸はほぼ真北を示し、周辺のSD169、SD308と平行に延びている。

遺物は出土していない。

SU345（Ⅲ-119図）

E9グリッドに位置する地下室である。SA155、SX331より古い。開口部の平面形は長方形を呈し、南北160cm、東西110cmを測る。断面形は台形を呈し、4辺とも坑底に向かって緩やかに拡がっている。確認面からの深さは230cmを測る。坑底は、南北130～150cm、東西115～125cmを測る不整長方形を呈し、坑底中央には顕著な工具痕を伴う浅い掘り込みが認められ、排水関連施設と推定される。覆土はロームブロックを多量に含む褐色土～暗褐色土で埋め戻されており、その様相から短期間で埋め戻されたと推定される。本遺構の年代は、SA155に切られ、そのライン上に存在することから、天和2年以前の大聖寺藩邸に帰属する遺構と推定される。

遺物は出土していない。

SL346（Ⅲ-142図）

G8グリッドに位置する遺構である。直径50cmを測る円形土坑である。SD348より新しい。覆土は白色粒を含む灰褐色土の単層である。本遺構の性格は遺構形態、覆土の様相から厠の下穴と推定される。また、南側に近接するSL347も同様に厠の下穴と推定され、その配置から、2基1対で機能していたと考えられる。

遺物は出土していない。

SL347（Ⅲ-142図）

G8グリッドに位置する遺構である。直径50cmを測る円形土坑である。SD348より新しい。覆土は白色粒を含む灰褐色土の単層である。坑底より簪2点が出土している。本遺構の性格は形態、覆土の様相から厠の下穴と推定される。先述したようにSL346とセットになって機能していたことが考えられるが、本遺構出土遺物の特徴より女性居住区に帰属する遺構であることが推定される。

簪のほか、覆土中より、19世紀前半の陶磁器が少量出土している。

SD348（Ⅲ-140・142図）

G8～G9グリッドにかけて南北に延びる溝状遺構である。SB228、SL346、SL347、SL351、SL352より古く、SK349、SK299より新しい。溝の全長と東側の立ち上がりは撹乱及び調査区域外に達するため不明である。溝は西壁から幅約30cmのテラスを有し溝底に移行する。遺構内には多数の杭痕が認められるが、特に壁際に集中している。その様相は近接するSD226などに類似しており、板壁を有した溝の可能性が考えられる。

遺物は出土していない。

SK349（Ⅲ-142図）

F8グリッドに位置する遺構である。SD348、SK299より古い。そのため遺存状態は悪いが、円形を呈する土坑と考えられる。覆土は黒褐色土の単層である。

遺物は出土していない。

SX350（Ⅲ-150・151図）

E9、E10グリッドに位置する遺構である。重複するSA155、SU185、SK334、SD344より古く、SD343より新しい。平面形は不整形を呈し、南北最大370cm、東西最大248cm、確認面からの深さ30cmを測る。覆土は壁際にロームブロックを主体とする暗黄褐色土、中央部にローム粒、ロームブロックを極めて多量に含む黒褐色土がレンズ状に堆積している。廃絶年代はSA155に切られ、そのライン上に位置することから、天和2年以前の可能性が考えられる。

遺物は出土していない。

SL351（Ⅲ-118図）

F9、G9グリッドに位置する遺構である。SD348より新しい。平面形は直径50cmを測る円形を呈し、確認面からの深さは50cmを測る。覆土は坑底直上にロームブロック主体の黄褐色土が薄く堆積しているが（2層）、ほとんどが漆喰状の白色物質を多量に含む灰褐色砂質土で形成されている。その様相から本遺構の機能は厠の下穴と推定される。

遺物は出土していない。

SL352（Ⅲ-118図）

F9、G9グリッドに位置する遺構である。SD348より新しい。平面形は直径50cmを測る円形を呈し、確認面からの深さは50cmを測る。覆土はSL351と共通するが、壁際にわずかながら木質の痕跡が確認された。また1層（白色物質を含む灰褐色土）の特徴は、SL346、SL347とも共通している。これらの特徴から本遺構も厠の下穴と推定される。

遺物は19世紀の陶磁器、土器が十数点出土している。

これら４基の厠遺構（SL346、SL347、SL351、SL352）は、同一軸線上に位置し、各々２基間の距離は真々で90cmを測り、その中心に２基の境となる壁の存在を考えると、桶の中心から境までの距離が45cmとなり、１区画はその倍の90cm幅となる。またSL347からSL351間の距離は真々で226cmを測り、厠の１区画幅を90cmとした場合、区画間の距離は186cmとなり、ほぼ１間間隔で厠が分布していたことが想定される。

これら厠遺構と同一軸上にSD348が存在するが、厠遺構は江戸期の盛土整地面、SD348はローム面と構築面が異なっており、相互の関連性はない。

SK353（Ⅲ-154図）

F9グリッドに位置する遺構である。SD62の直下に存在し、またSE324に切られ、東壁は遺存していない。平面形は長方形を呈し、主軸はN-92°-Eとほぼ東西方向を示す。覆土はロームブロックをごく多量含む暗褐色土の単層である。

遺物は出土していない。

SK354（Ⅲ-154図）

F9グリッドに位置する遺構である。SK353より古い。平面形は楕円形を呈し、長軸75cm、短軸45cm、確認面からの深さ24cmを測る。覆土はローム粒を多量に含む暗褐色土の単層である。

遺物は出土していない。

SL356（Ⅲ-118図）

F9グリッドに位置する遺構である。平面形は直径73cmを測る円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面下約20cmで幅３～７cmを測るテラスがドーナツ状に巡る。坑底は直径45cmの円形を呈し、凹凸が認められる。木質は確認されなかったが、坑底の円周ライン上が、垂直に分層されるため桶枠などの施設が存在していたものと考えられる。その内側の覆土には粘性が強い灰褐色土が堆積していることと、遺構の形態より、本遺構の性格は厠の下穴と考えられる。覆土最上層（１層）には多量の焼土粒が含まれていることから火災によって廃絶されたと考えられる。また、焼土層中から17世紀後葉～18世紀初頭の被災陶磁器が数点出土している。

SK357（Ⅲ-154図）

F9グリッドに位置する遺構である。SU291、SE324より古い。そのため正確な規模は不明であるが、平面形は楕円形を呈している。確認面からの深さは最大40cmを測る。壁は比較的緩やかに立ち上がり、坑底は凹凸が著しい。植栽痕の可能性がある。

遺物は出土していない。

SX359（Ⅲ-154図）

F9グリッドに位置する遺構である。重複するSU279、SE324より古く、南北両壁は不明である。東西幅は95cmを測る。覆土は暗黄褐色土から暗褐色土で形成されているが、全体的にしまりが強い点で共通する。

出土遺物はなく年代、性格ともに不明である。

SK361（Ⅲ-155図）

H1グリッドに位置する遺構である。SK363、SK364より古く、SK362より新しい。また、西側は撹乱による破壊を受けており、遺存状態は悪い。そのため平面形は不整形を呈しているが、詳

細は不明である。覆土は炭化材を含む灰褐色土で、多量の自然遺物とカワラケが廃棄されていた。出土した陶磁器・土器類の年代は17世紀中～後葉である。

SK362（Ⅲ-155図）

H1グリッドに位置する遺構である。重複する全ての遺構の中で一番古い遺構で、遺構北側は調査区域外に達している。そのため詳細な遺構形態は不明である。覆土はローム粒を含む黒褐色土で形成されている。本遺構の構造は、南端部の楕円形ピットとそれに続く溝状施設の組み合わせと、周辺遺構との新旧関係による年代観から、ピットを伴う溝状遺構と推定される。

遺物は17世紀の陶磁器、土器がわずかに出土している。

SK363（Ⅲ-155図）

H1グリッドに位置する遺構である。SK364より古く、SK361より新しい。また北半部は調査区域外に達している。平面形は楕円形を呈すると思われるが、詳細は不明である。覆土は黒褐色土で形成されているが、上層から貝類が多量に出土しているほか、人工遺物は出土していない。

SK364（Ⅲ-155図）

H1グリッドに位置する遺構である。重複する遺構のなかで一番新しい遺構である。遺構の大部分が調査区外に及んでいるため、形態、規模ともに不明である。覆土は多量の焼土ブロックを含む赤褐色土で埋め戻されており、火災後の後始末によるものと考えられる。

ごく少量ではあるが、被熱した18世紀前半代の陶磁器類が出土しており、その年代観から享保15年、もしくは元文3年の火災と考えられる。

SP365（Ⅲ-155図）

H1グリッドに位置する遺構である。SD366、SK376と重複している。平面形は長方形を呈し、その規模は南北125cm、東西50～55cmを測る。坑底は中央部にテラスを有し、南北各々が1段低くなっている。南側の坑底壁際から根石と考えられる2点の破砕礫が検出されたことと遺構形態より、南北2ヶ所に礎石を持つ塀の礎石穴であると推定される。さらに北側の坑底の規模が南側より大きいことから、北側に主柱を有する塀と判断できる。

遺物は18世紀の陶磁器、土器が数点出土したにすぎない。

SD366（Ⅲ-155図）

H1、H2グリッドに位置する溝状遺構である。東西方向に延びているが、東は調査区域外、西は撹乱によって破壊され、全長は不明である。また、重複するSP365、SP367より古い。幅は約130cmを測り、南側に幅50～70cmのテラスを有している。溝底との比高差は35cmを測る。

遺物はほとんど含まれていない。

本遺構の東延長上には、中央診療棟地点で検出された2号組石が存在する（東京大学遺跡調査室1990）。2号組石は、天和3年以降の大聖寺藩邸、富山藩邸の屋敷境をなす石組溝で、絵図面による大聖寺藩邸の外枠は2号組石とSA155の延長上の交点に求められる。先述したように2号組石の延長線上に位置する本遺構は、両藩邸の地境溝の可能性がある。

SU368（Ⅲ-156図）

H2グリッドに位置する地下室である。平面形は入口が方形、坑底が東西に主軸を有する長方形を呈する。規模は入口で1辺120cm、坑底で東西220cm、南北150cm、確認面からの深さは

300cmを計測する。入口は坑底の南側中央に作られており、確認面より下約150cm付近から東、北、西方向に室部が張り出している。室部の天井は坑底より120cmほどの高さにある。坑底、壁は丁寧に平滑に調整されていた。覆土は焼土、炭化物なども多く確認されており、火災の際に廃棄された可能性もある。

遺物の多くは二次的な火熱を受けており、17世紀末～18世紀初頭の陶磁器・土器がコンテナ箱で2箱出土している。

SU370（Ⅲ-157図）

H3グリッドに位置する地下室である。調査は緊急的に行ったこと、危険を伴うために遺構の入口部のみで取りやめたこと、遺構の東側は調査区域外になることなどにより遺構全体の復元はできなかった。平面形は方形もしくは長方形を呈し、遺存している入口の規模は東西70cm、南北110cmを計測する。壁は比較的平滑に調整されていた。

遺物は17世紀末の陶磁器・土器がコンテナ箱1箱出土している。

SK376（Ⅲ-155図）

H1グリッドに位置する遺構である。平面形は楕円形を呈すると考えられるが、西側でSK361と重複しているため、規模は不明である。確認面からの深さは65cmを測る。覆土はロームを含む黒褐色土を基調としているが、ほぼ水平堆積を呈する1～3層と4層との境が急傾斜を成していることから、内部施設の痕跡か、遺構の重複の可能性が考えられる。

遺物は出土していない。

SK377（Ⅲ-155図）

H2グリッドに位置する遺構である。西側を撹乱によって破壊されているため、形態、規模は不明である。周辺には玉砂利による整地層が拡がっており、本遺構はその整地層下、自然堆積層から確認された。断面形は逆台形を呈し、ロームを含む黒褐色土を基調としている。

遺物は出土していない。

SD378（Ⅲ-158・159図）

H4グリッドに位置する溝状遺構である。溝底内両壁際を中心に多数の杭痕が認められる。G～Hラインにかけて存在する同形態の溝との関わりが考えられる。

遺物は出土していない。

SL379（Ⅲ-158図）

H4グリッドに位置する遺構である。平面形は直径70cmを測る円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、ローム粒、炭化物を含む粘性の強い暗褐色粘質土を覆土に持つ。本遺構は形態と覆土の特徴から厠の下穴と考えられる。

遺物は出土していない。

SK380・SK381（Ⅲ-159図）

SK380はG4、H4グリッドに、SK381はG5グリッドに位置している。遺構上部を土管溝によって、西側を撹乱によって破壊されているため、遺存状況は極めて悪く、両遺構の新旧関係も不明である。

SK380からは陶磁器、土器、桟瓦、金属製品がコンテナ7箱、SK381からは陶磁器、土器、金

属製品などがコンテナ３箱と、ともに19世紀に比定される遺物が出土しているが、混在している可能性がある。

SU382（Ⅲ-160図）

G7グリッドに位置する遺構である。上部及び中央部をSB70によって破壊されており、遺存状況は悪い。覆土もSB70の掘方の影響を受け、壁際にしか残存していないが、焼土塊、炭化材が多量に含まれていたことから、火災後の瓦礫整理に伴い埋め戻されたと考えられる。また、わずかに残存する壁面が袋状に緩やかに拡がっていることから、本遺構は地下室と位置付けられる。床面は、南北270cm、東西220cmを測る隅丸長方形を呈する。標高は11.50m（T.P.）である。周辺の遺構確認面標高が約15mなので、少なくとも350cm以上の深さを有した地下室といえる。火災年代は、出土遺物の年代観より、享保15年ないし元文３年の火災の可能性が高い。

SU383（Ⅲ-160図）

G6、G7グリッドに位置する遺構である。撹乱によって遺存状況は極めて悪く、坑底の一部が確認されたのみである。推定される坑底形態は長方形を呈し、規模は南北240cm、東西210cmを測る。また坑底の標高は12.15m（T.P.）で、周辺の遺構確認面標高より約3mの深度を有していたと考えられ、地下室と判断される。残存する覆土には多量の焼土、炭化材が含まれ、出土遺物の年代観より、隣接するSU382と同様に、享保15年もしくは元文３年の火災に伴う瓦礫整理によって埋め戻されたことが推定される。

SK384（Ⅲ-166図）

D10、E10グリッドに位置する遺構である。遺構北側は撹乱に破壊され、東側は調査区域外に達するため、形態、規模ともに不明である。坑底形態は北壁から西壁へはほぼ直角に折れ、西壁から南壁にかけては弧状を呈していることから、蒲鉾形の平面形態を呈していたと推測できる。坑底の標高は14.05m（T.P.）で、周辺の遺構確認面との標高差から深さ約1mの遺構であったと推定されるが、性格は不明である。残存する覆土はロームブロック主体土である。

遺物は出土していない。

SK386（Ⅲ-166図）

D10グリッドに位置する遺構である。遺構本体のほとんどが調査区域外であるため詳細は不明である。ローム粒を多量に含む暗褐色土を覆土に持つ。

遺物は出土していない。

SU387（Ⅲ-165・166図）

D10グリッドに位置する地下室である。SK389より新しい。平面形は長方形を呈し、南北155cm、東西155cmを測り、主軸方位はN-3°-Wとほぼ真北を示す。坑底は開口部東壁でオーバーハングしており、1辺150cmを測る正方形を呈し、確認面からの深さは160～165cmを測る。西壁の南北各コーナーには柱を設置したと思われる掘り込みが認められる。覆土は、やや灰色を帯びた暗褐色土が堆積している。

遺物は18世紀末～19世紀初頭の陶磁器、土器がコンテナ１箱出土している。遺構形態より廃絶から廃棄までにタイムラグが存在することが推定されるが、いずれにしろ加賀藩邸に帰属する遺構である。

SK388（Ⅲ-165図）

C10、D10グリッドに位置する遺構である。南側を撹乱に破壊され、東西両側も他遺構と重複しているため、全体的な遺構形態と規模は不明である。残存範囲内での形態は、西側の円形部と東側の長方形部に大別され、円形部は外壁から1段のテラスを経て、中央部分に250×180cmを測る楕円形の掘り込みが存在する。この掘り込み中央部には90×75cmを測る楕円形の凸体部分を伴っており、その形態から、西側円形部分は植栽痕と考えられる。一方、東側長方形部分は、北から南へ下がる幅25cmのスロープ状施設が付設されている。土砂及び樹木の搬入出との関連が窺われる。覆土はロームブロック主体である。

遺物は19世紀前半の陶磁器、土器が数十点出土している。

SK389（Ⅲ-165図）

D10グリッドに位置する遺構である。SU387、SK388より古い。平面形は直径230cmを測る円形を呈する。覆土はロームブロックを含む暗褐色土で、遺構形態から植栽痕と推定される。

遺物は19世紀前半の陶磁器が数十点出土しているほか、被熱した瓦が出土している。

SK390（Ⅲ-165図）

D10グリッドに位置する遺構である。遺構北半部は調査区域外に及んでいるため不明であるが、平面形は直径150cmを測る不整円形と推定される。覆土はローム粒を含む暗褐色土で、植栽痕と推定される。

遺物は出土していない。

SK391（Ⅲ-165図）

C10グリッドに位置する遺構である。遺構北半部は調査区域外に及び、また南壁の一部はSK388より古い。平面形は円形を呈すると思われるが、規模は不明である。覆土はロームブロックを多量に含む褐色土で、植栽痕と推定される。

遺物は17世紀末～18世紀前半と19世紀前半の陶磁器、土器が数点出土したにすぎない。

SK392（Ⅲ-165図）

C10グリッドに位置する遺構である。西壁は調査区域外に及び、東壁はSK388と重複している。また南側は1987年に調査した共同溝建設地点（東京大学遺跡調査室　1990）にかかり、位置関係よりV46-2と同一遺構と判断することができ、南北290cm、東西210cmを測る長方形を呈していることが確認された。また、確認面からの深さは100～110cmを測る。覆土はローム粒、炭化材、動物遺存体を多量に含む暗褐色土を呈し、遺物はⅧc期の陶磁器、土器が多量に廃棄されていた（コンテナ11箱分）。また、簪・笄類が11点（金属製3点、ガラス製6点、骨格製2点）が出土している。出土遺物の年代観より、本遺構は大聖寺藩邸に帰属する廃棄遺構と位置付けられる。

SK393（Ⅲ-165図）

C10グリッドに位置する遺構である。遺構西半部は調査区域外に及び南東部はSK392に切られているため、形態、規模の詳細は不明である。

遺物は19世紀中葉の陶磁器、土器が少量出土しており、その年代観から大聖寺藩邸に帰属する遺構と考えられるが、性格は不明である。

SK394（Ⅲ-162図）

G8グリッドに位置する土坑である。平面形は東西に主軸を有する長方形を呈し、規模は東西220cm、南北60cm、確認面からの深さは30cmを計測する。東側に切石が配置されているが、性格は不明である。壁、坑底は凹凸を有し、壁は坑底からやや開きながら立ち上がっている。

遺物は19世紀前～中葉の陶磁器・土器がコンテナ箱1箱出土している。

SK397（Ⅲ-162図）

G8、G9グリッドに位置する土坑である。SU399、SK400、SK402と重複しており、新旧はSU399より新で、SK400、SK402より旧である。平面形は南北に主軸を有する短冊状を呈し、遺存している規模は東西140cm、南北370cm、確認面からの深さは30cmを計測する。壁は坑底よりやや開いて立ち上がる。

遺物は19世紀前半の陶磁器・土器がコンテナ箱2箱出土している。

SU399（Ⅲ-162・163図）

G9グリッドに位置する地下室である。SK397、SK402と重複しており、新旧はその両者よりも新である。また、遺構の東側が調査区域外であることと崩落危険のために遺構東部及び下部の調査を中止したため、遺構の全体は復元できない。遺存している西側では平面形隅丸（長）方形を呈する。規模は東西130cm、南北420cmを計測し、確認面から深さ80cmまで調査を行った。壁は比較的平滑に調整されていた。

遺物は19世紀前半の陶磁器・土器がコンテナ箱1箱出土している。

SK402（Ⅲ-163図）

G9グリッドに位置する土坑である。SK397、SU399、SK400、SK401と重複しており、新旧はSU399、SK400より旧であり、その他は不明である。平面形は方形を呈し、規模は東西240cm、南北220cm、確認面からの深さは40cmを計測する。壁、坑底は比較的丁寧に整形されており、壁は坑底よりほぼ垂直に立ち上がる。

遺物は18世紀末～19世紀初頭の陶磁器・土器がコンテナ箱2箱出土している。

SK406（Ⅲ-163図）

G9グリッドに位置する遺構である。SB405と重複するが、切り合いが浅く新旧は不明である。また、東側が調査区域外で、撹乱によって中央、東側が削平されているため遺構の全体は復元できなかった。遺構は北壁、中央、南壁に東西に延びる溝状の付属施設を有している。遺存している規模は東西140cm、南北190cm、確認面からの深さは10cmを計測する。

遺物は19世紀前～中葉の陶磁器・土器がコンテナ箱1箱出土している。

SL408（Ⅲ-163図）

G9グリッドに位置する遺構である。SD409と重複しており、本遺構が新である。東側の一部を撹乱によって削平されている。平面形は円形を呈しており、遺存している規模は東西60cm、南北60cm、確認面からの深さは13cmを計測する。遺構の壁、坑底は平滑に整形されており、壁は坑底よりほぼ垂直に立ち上がる。坑底はやや白化及び硬化した部分が確認された。遺構の構造、規模、SL412との並び等からSL412と一連の便所遺構であろうと推定される。

遺物は出土していない。

SD409（Ⅲ-163図）

G9、G10グリッドに位置する溝状遺構である。幅は45～55cmを測り、ほぼ南北方向に延びる。溝底には多数の杭痕が存在するが、比較的壁際に集中する傾向が看取されることより、側壁に用いられた板枠留めと推定される。直交するSD410、SD418との関連が想定される。また、本遺構北側で同一ライン上に存在するSD348につながり、一連の区画を形成しているものと考えられる。

遺物は出土していない。

SD410（Ⅲ-164図）

G10グリッドに位置する溝状遺構である。幅は45～55cmを測り、ほぼ東西方向に延びる。東西両端は他遺構と重複しているが、西端に関してはSD409と接続する可能性が高い。本遺構には杭痕は認められない。

遺物は出土していない。

SK411（Ⅲ-164図）

G9、G10グリッドに位置する遺構である。遺構東半部は調査区域外に及び詳細は不明であるが、直径約130cmを測る円形土坑と推定される。

遺物は19世紀前半の陶磁器、土器がコンテナ1箱出土している。

SL412（Ⅲ-163図）

G9グリッドに位置する遺構である。直径65cmを測る円形土坑で、厠の下穴と考えられる。北側に隣接するSL408との間隔は内々で90cmを測り、2基1単位として機能していた可能性を指摘できる。

遺物は出土していない。

SK413（Ⅲ-164図）

G10グリッドに位置する遺構である。平面形は1辺65cmを測る隅丸方形を呈する。

遺物は18世紀前半の陶磁器が少量出土しているが、性格は不明である。

SB414（Ⅲ-164図）

G10グリッドに位置する礎石建物跡である。5基の礎石が確認されている。そのうち礎石単体が3基、根石を伴うものが2基である。根石を伴う掘方は、長方形の平面形を呈しており、遺構内に2基の礎石を配置していたことが、残存する礎石、根石の分布から推定される。このような長方形土坑に複数の礎石を配置する構造はSB228と共通する。また、G9グリッドのSB405は本遺構と関連する可能性が高い。

遺物は出土していない。

SK415（Ⅲ-164図）

G10グリッドに位置する遺構である。SB414と重複しているが、新旧関係は不明。壁は極めて緩やかに傾斜しSB414との重複部分まで至り、明確な坑底は確認できなかった。

遺物は19世紀中葉の陶磁器、土器がコンテナ1箱出土しているほか、桟瓦が出土している。

SL416（Ⅲ-164図）

G10グリッドに位置する遺構である。SB414と重複しているが新旧は不明である。直径50cmを測る円形土坑で、その様相から厠の下穴の可能性がある。遺物は出土していない。

SD418（Ⅲ-164図）

F10、G10グリッドに位置する溝状遺構で、ほぼ東西方向に延びている。幅は60cmを測り、溝底には多数の杭痕が認められる。本遺構は、SD409と直交し、規模、付帯施設などの共通点から共存していたものと考える。

遺物は出土していない。

SU419（Ⅲ-161図）

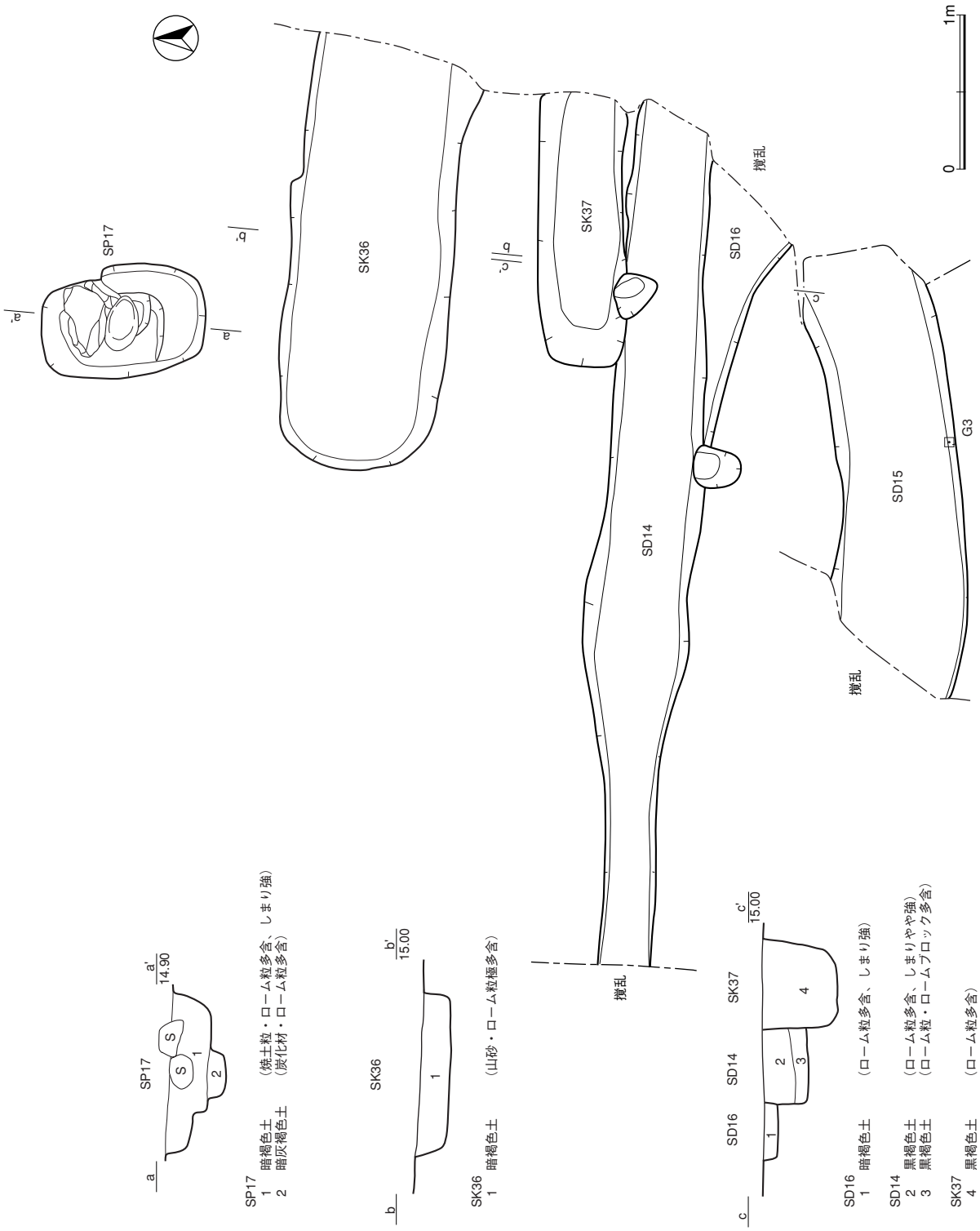
G7グリッドに位置する遺構である。遺構東半部は調査区域外に達するため詳細は不明である。規模は南北345cm、東西150cm以上を測り、その形状から長方形を呈していることが予想される。また、坑底はかなり深く、安全上の理由により途中で調査を断念した。その深さから、おそらく地下室と考えられる。

遺物は18世紀末～19世紀前半の陶磁器、土器がコンテナ1箱出土している。

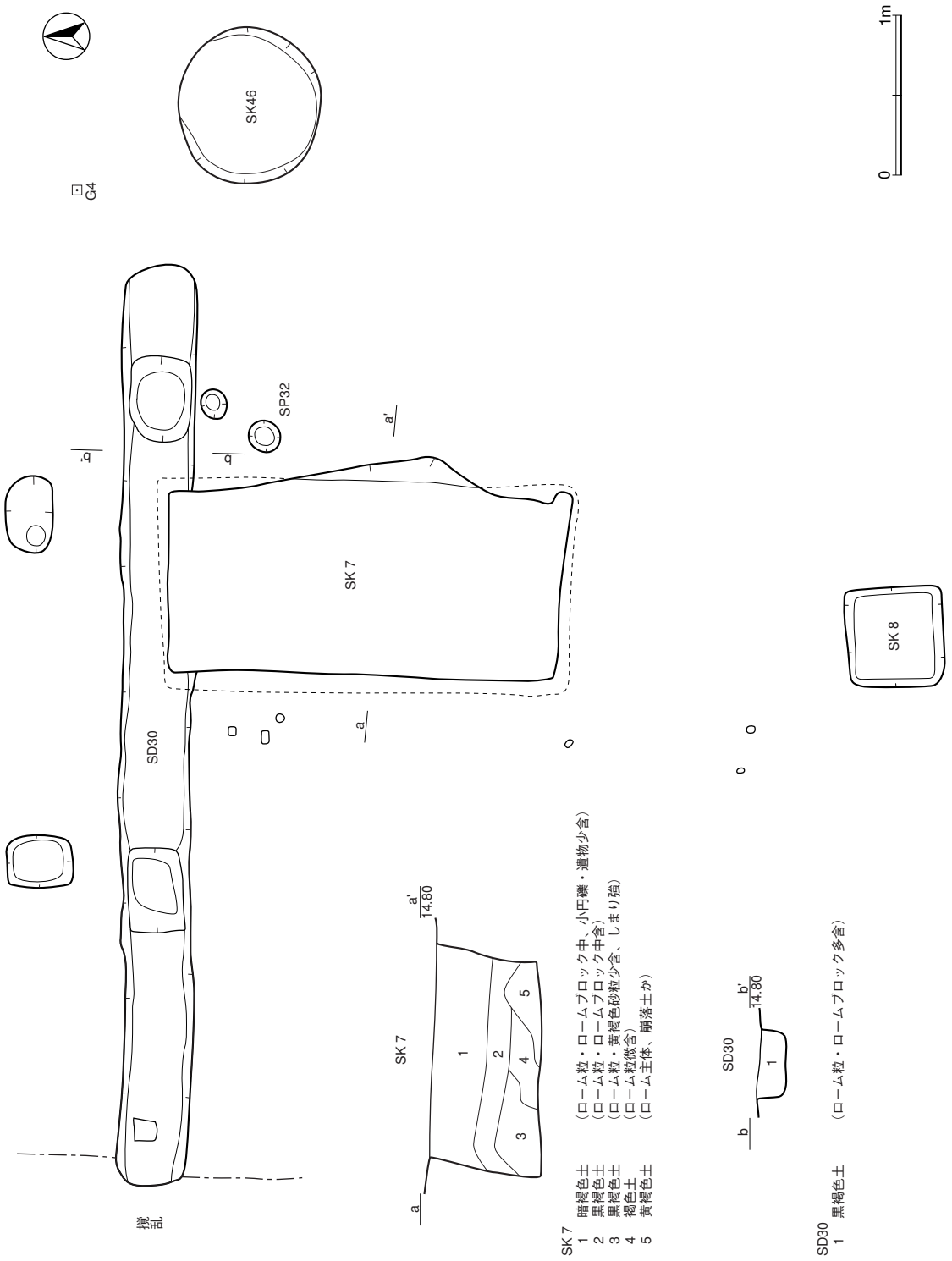
SU420（Ⅲ-161図）

G7、G8グリッドに位置する地下室である。重複するSU419より古い。開口部は、遺構北西部に存在したが、天井の崩落によって一部分しか残存していない。その痕跡から、南北90cm、東西110cmの長方形を呈していたことが推定される。坑底は東壁、南壁がオーバーハングし、南北120cm、東西210cmを測る長方形を呈す。東壁面に残存する天井崩落の痕跡から、天井高は60cmと低く、蒲鉾形の壁面形状を呈している。西壁には坑底上約10cmにテラスが作出されている。

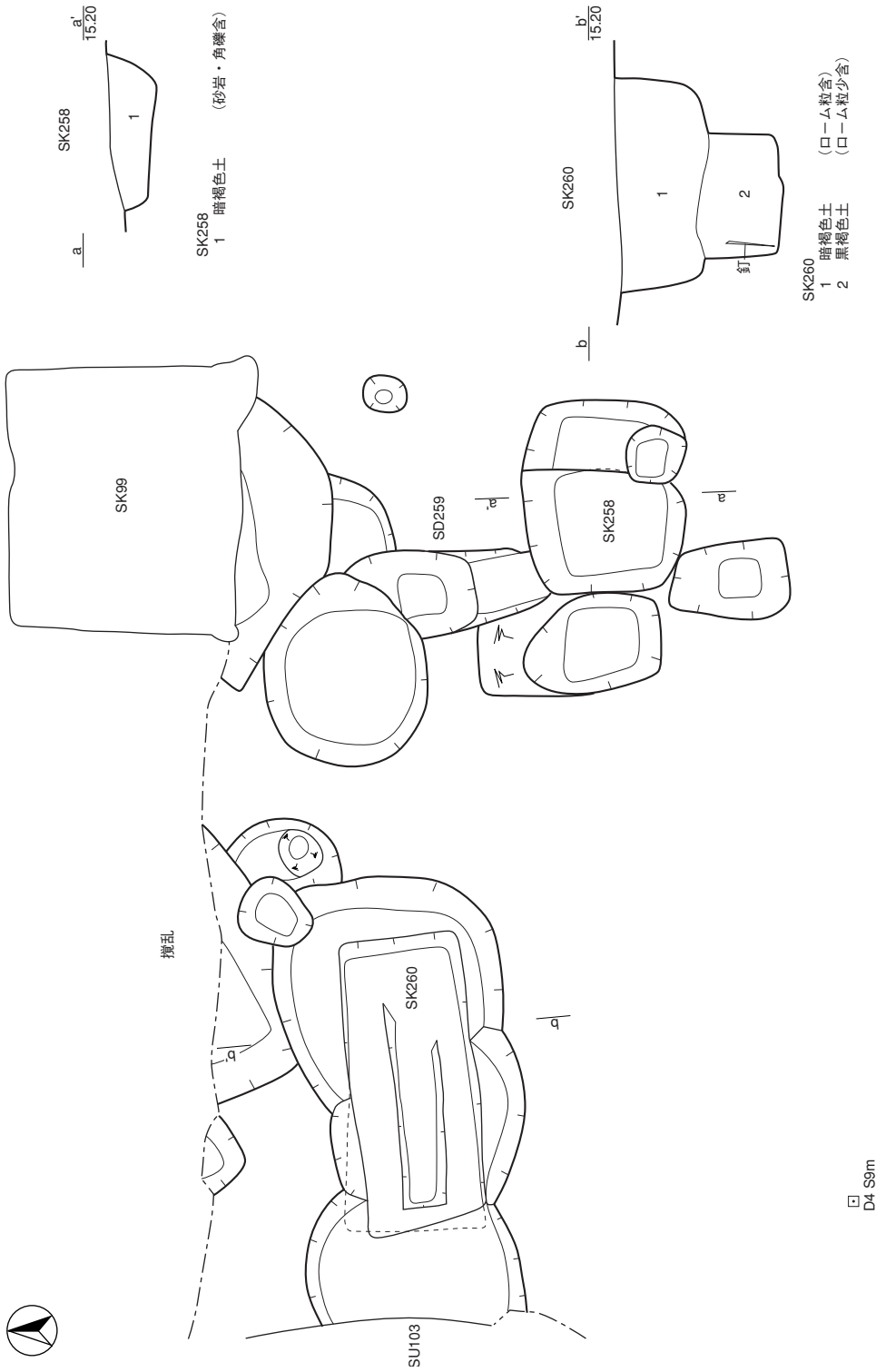
遺物は18世紀前半の陶磁器が数点出土したにすぎない。



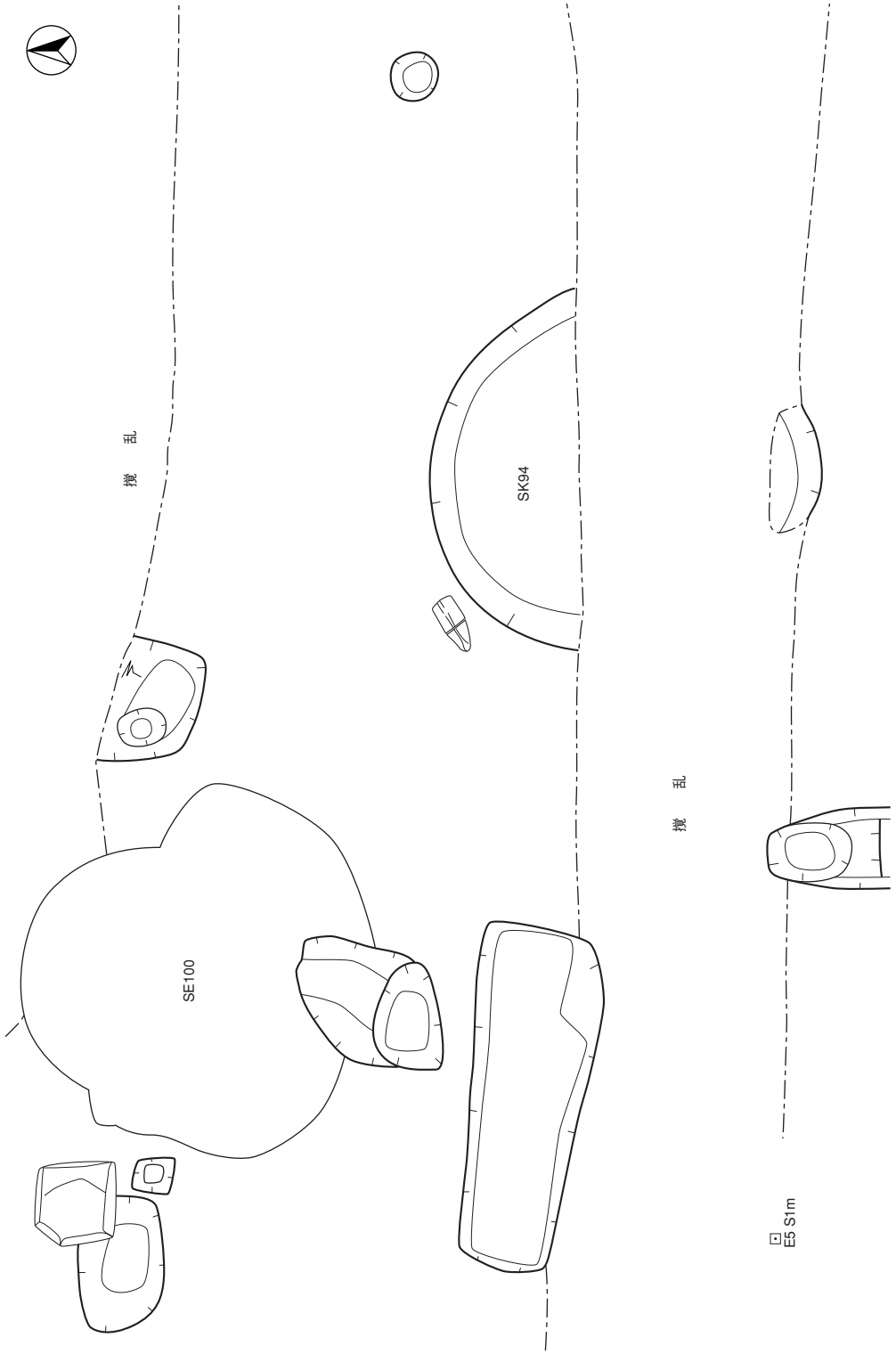
Ⅲ-120図　F2・F3・G2・G3Grid



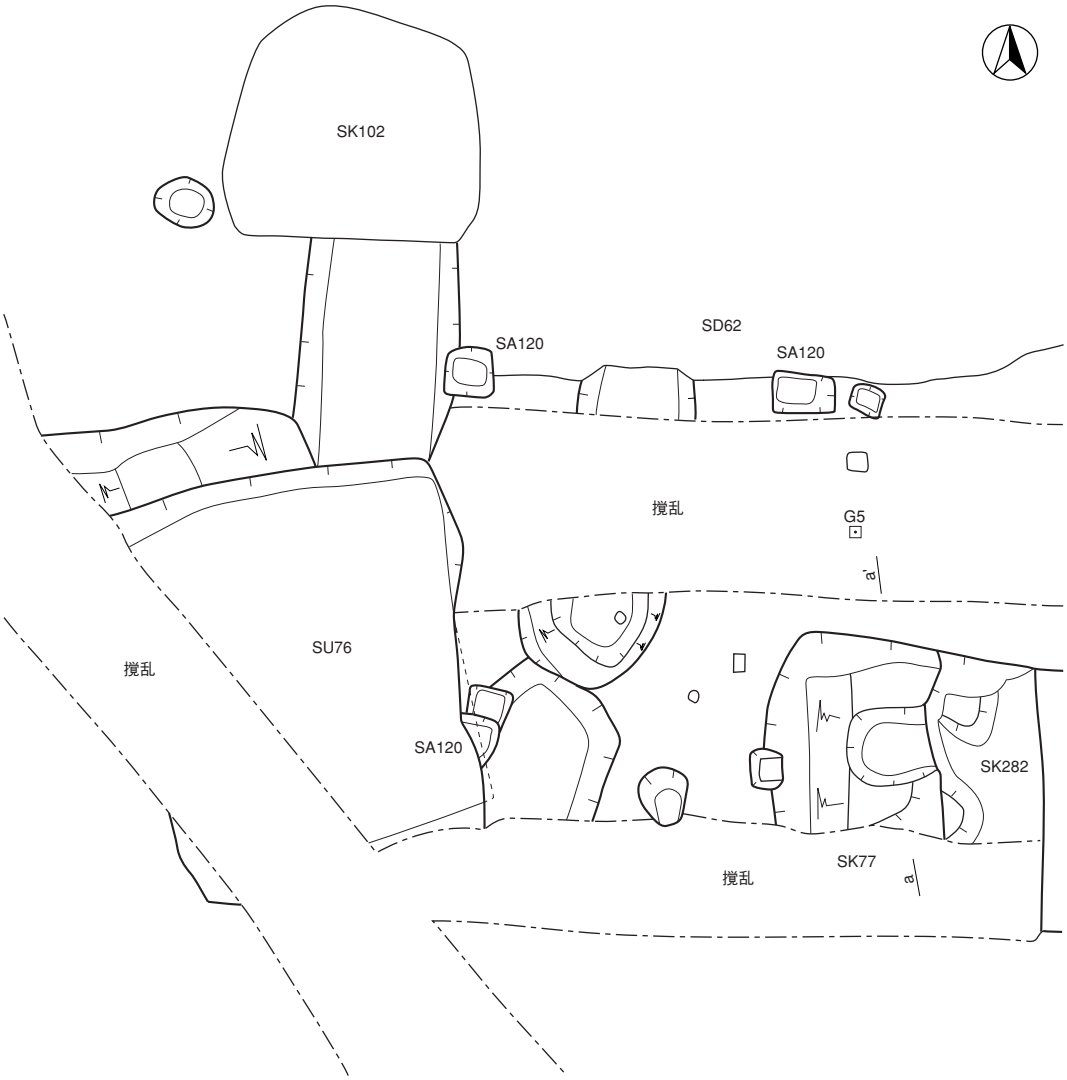
Ⅲ-121図　F3・F4・G3・G4Grid

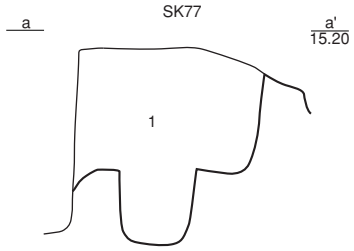


Ⅲ-122図　C4・C5・D4・D5Grid



Ⅲ-123図　E4・E5Grid

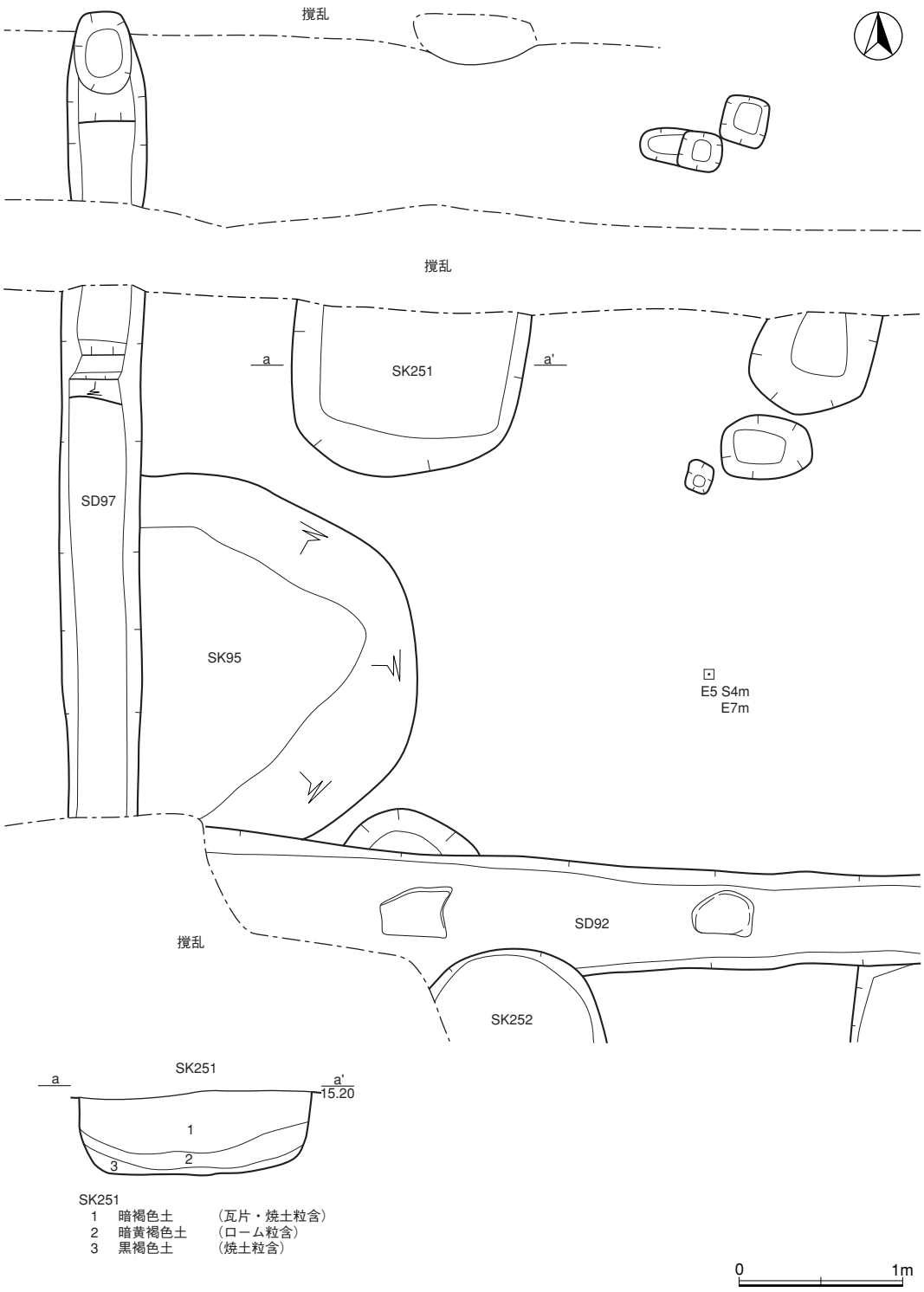




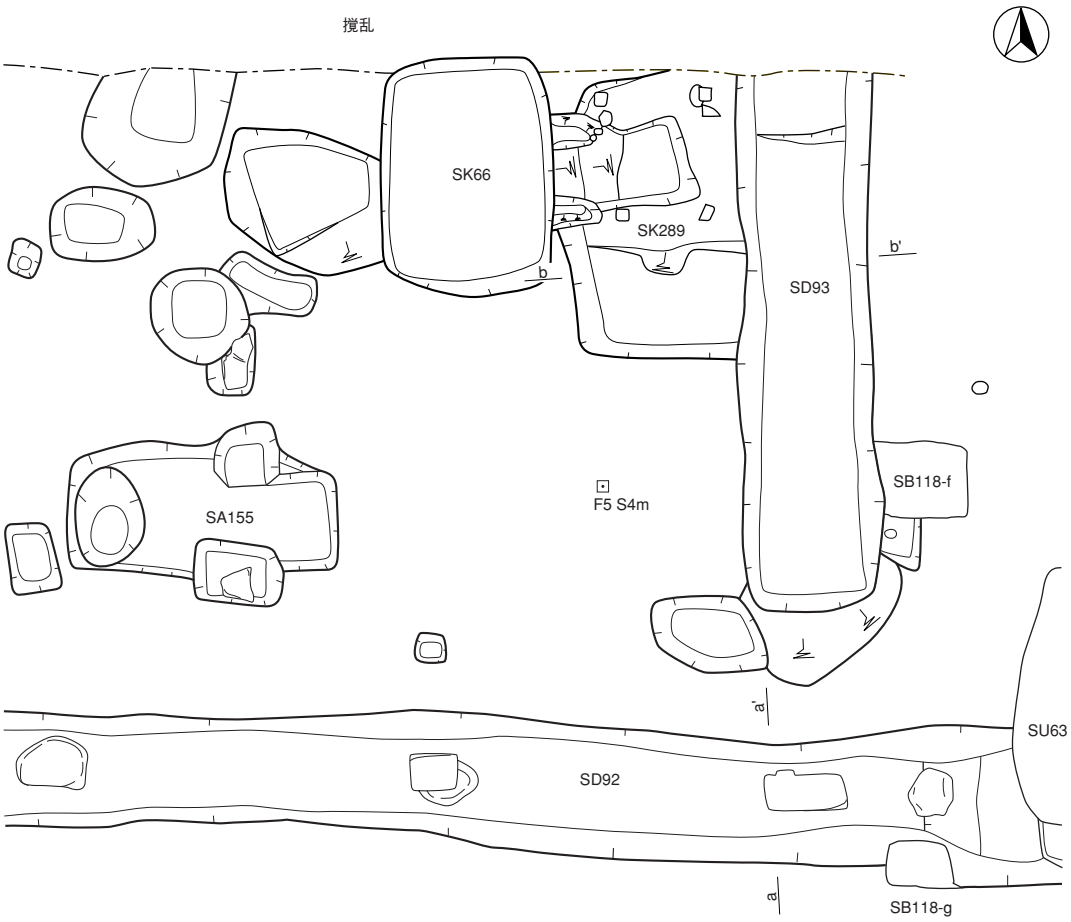
SK77
1　灰褐色粘質土　（瓦片・ローム粒・漆喰片含）

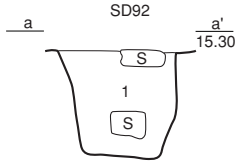
0　1m

Ⅲ-124図　F4・F5・G4・G5Grid

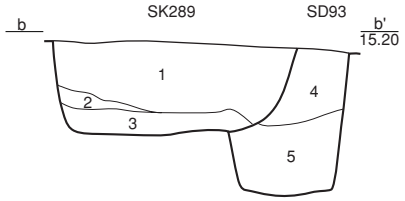


Ⅲ-125図　E5Grid





SD92
1　暗褐色土　（ローム粒含）

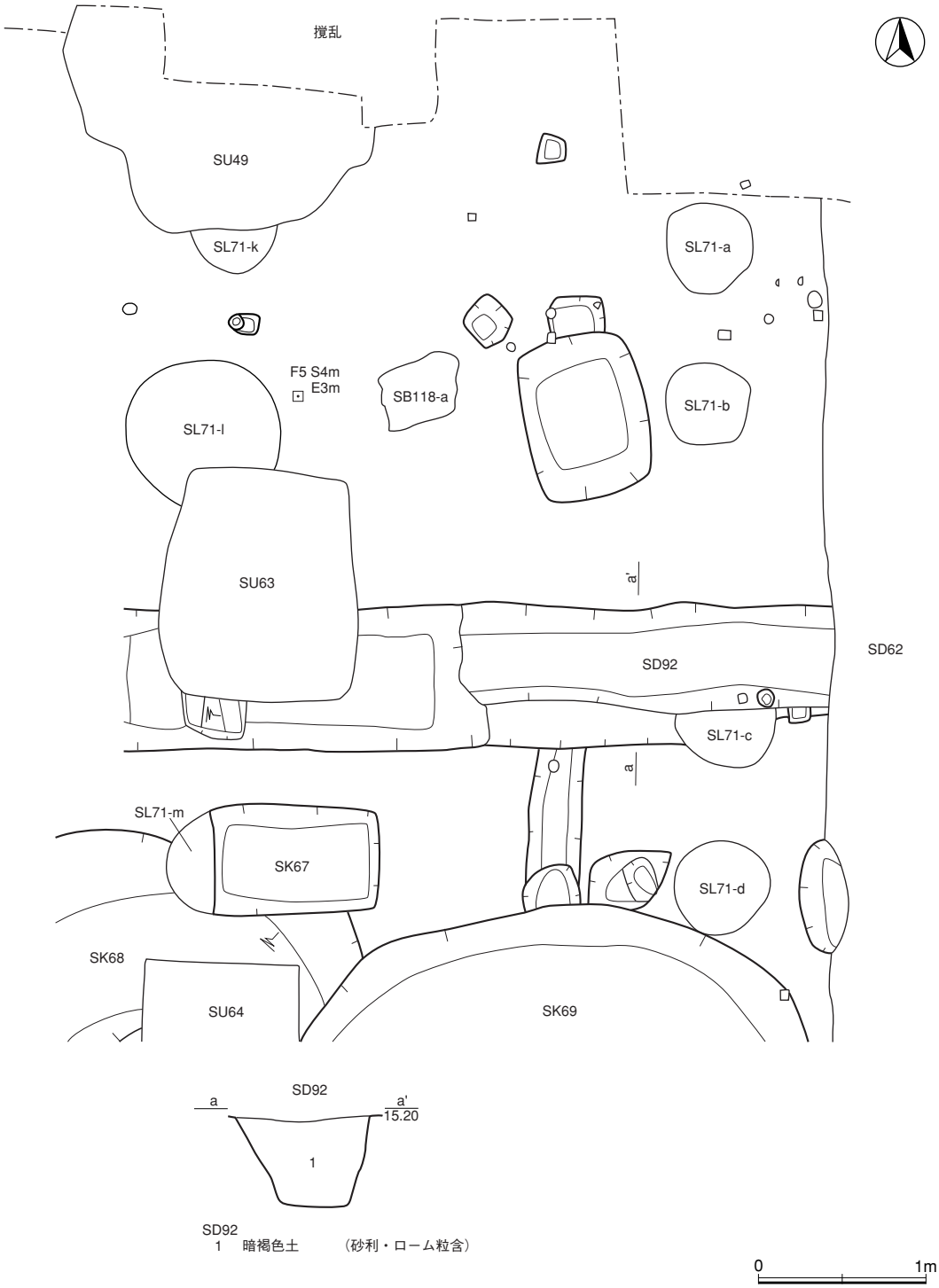


SK289
1　暗黄褐色土　（ローム粒・黒色土粒少含）
2　黒褐色土　（ローム粒少含）
3　暗褐色土　（ローム粒含）

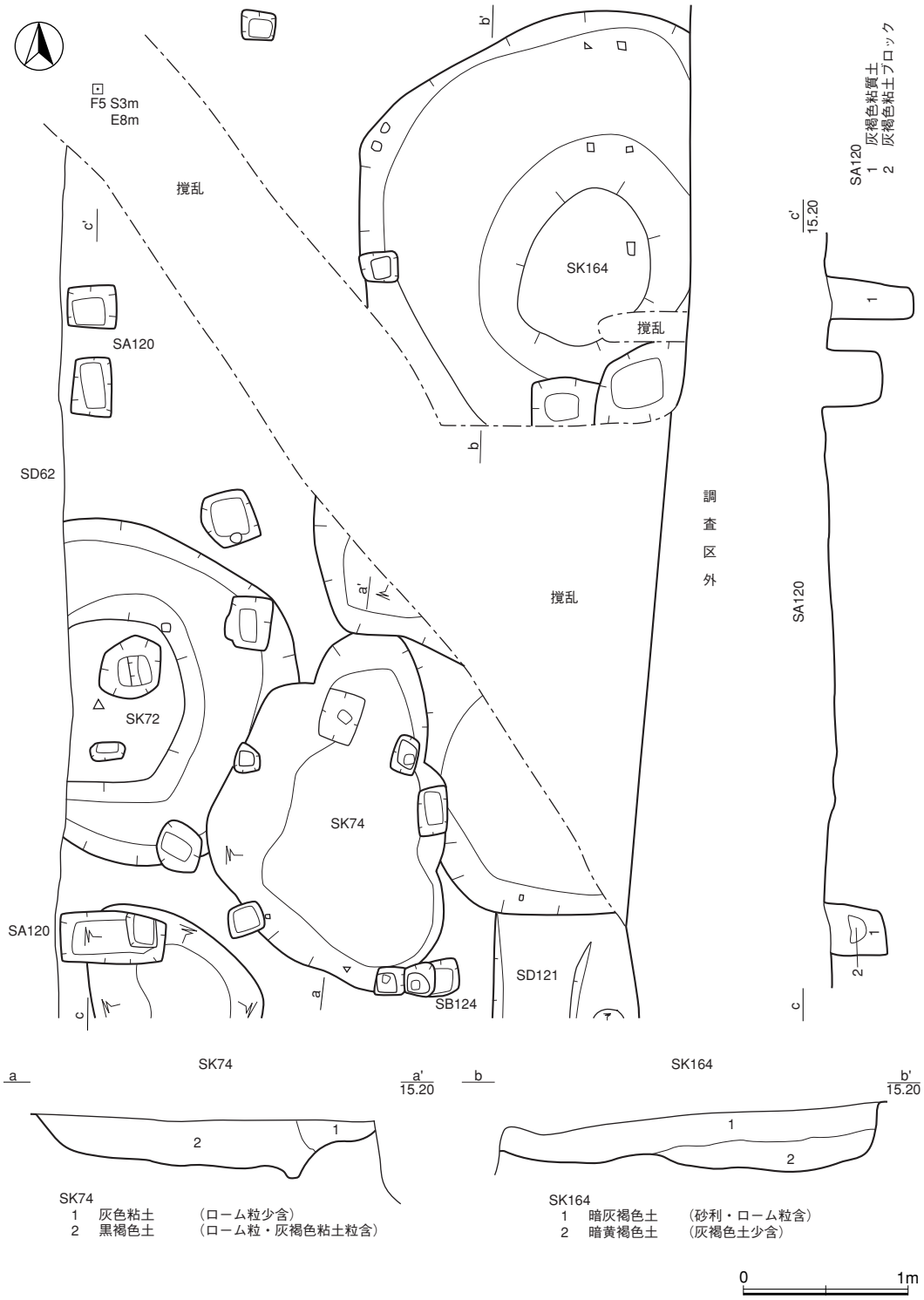
SD93
4　暗褐色土　（ローム粒・黒色粒含）
5　暗黒褐色土　（ローム・黒色土塊含）

0　1m

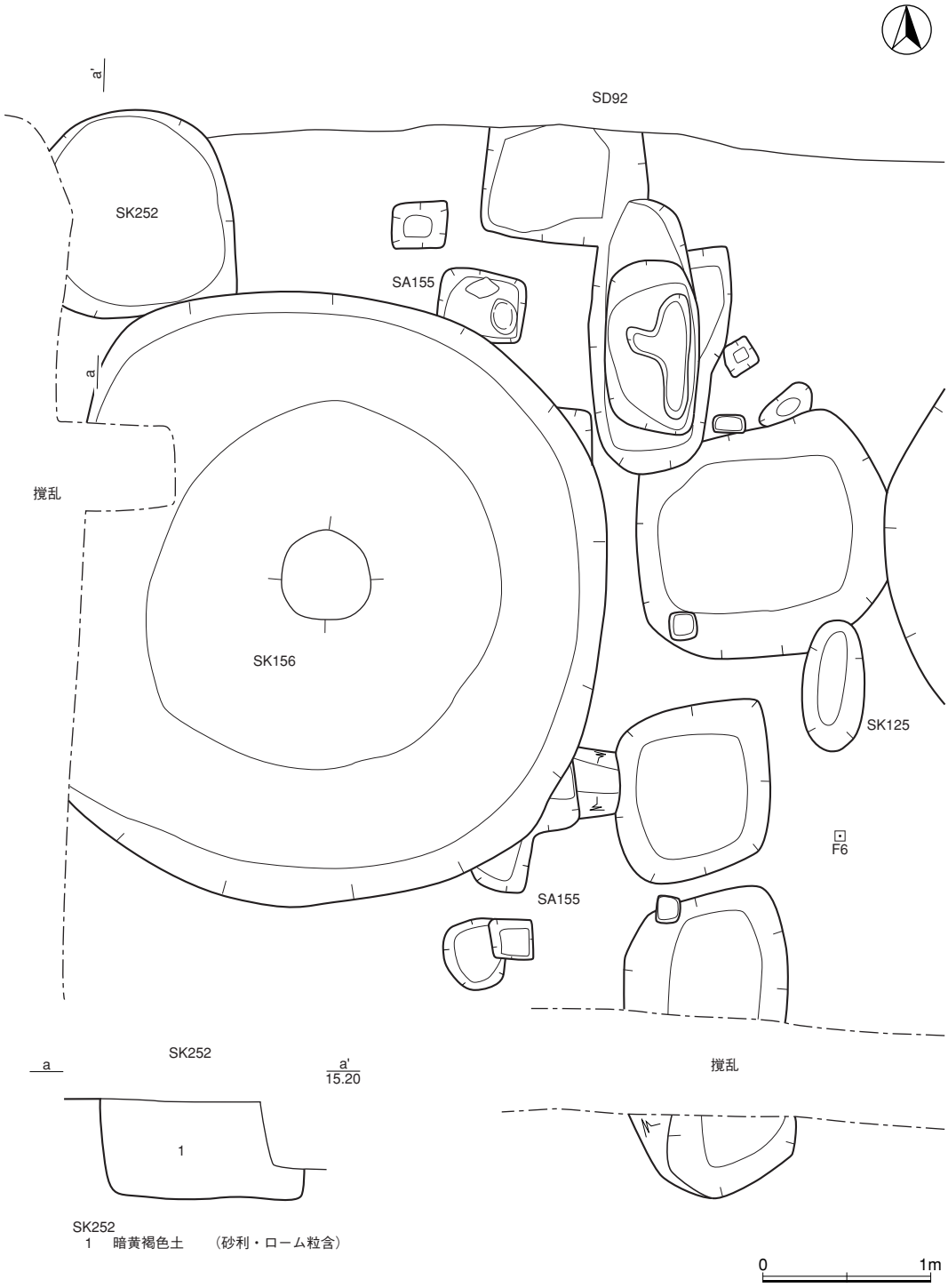
Ⅲ-126図　E4・E5Grid



Ⅲ-127図　F5Grid

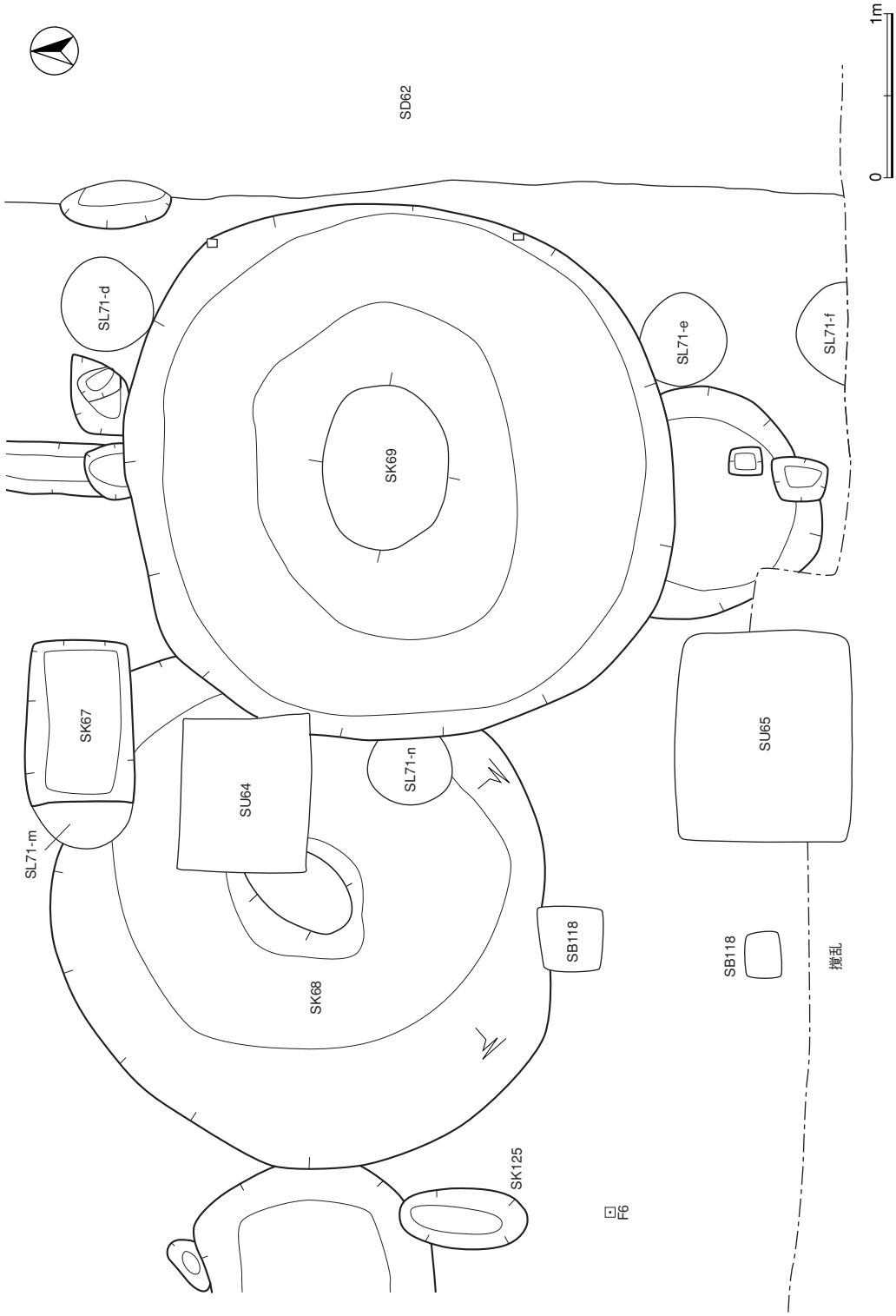


Ⅲ-128図　F5・F6・G5・G6Grid

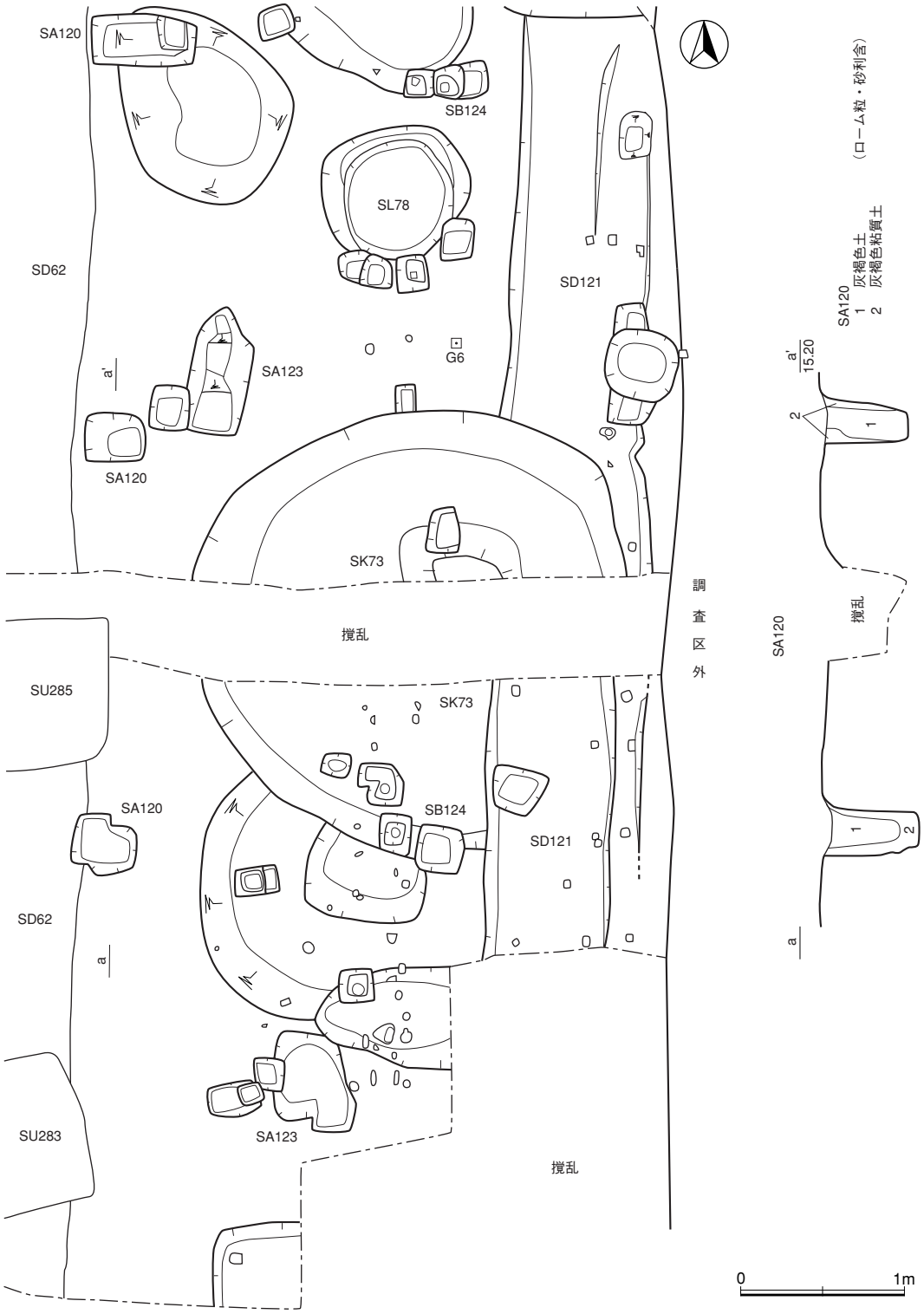


SK252
1　暗黄褐色土　（砂利・ローム粒含）

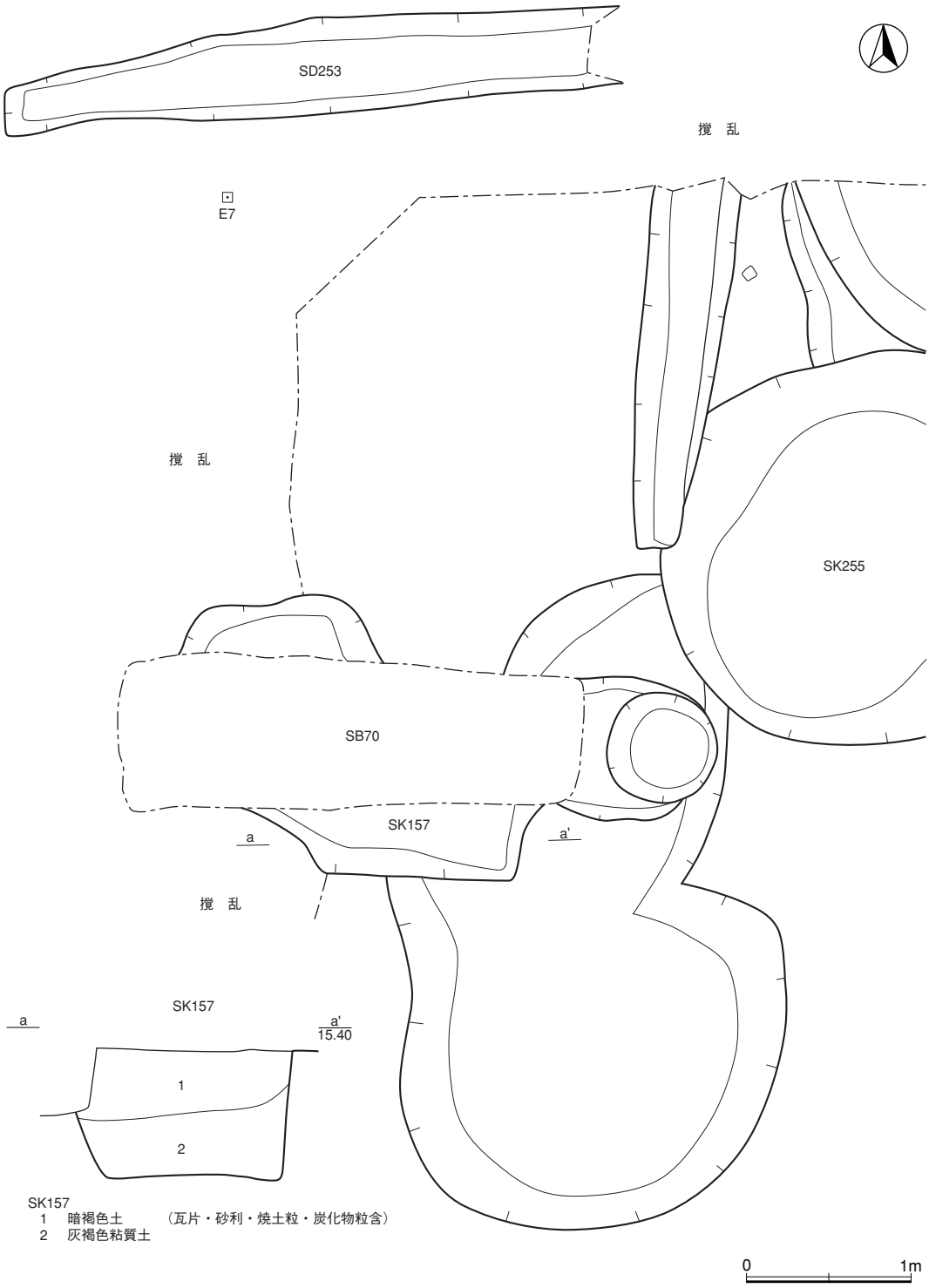
Ⅲ-129図　E5・E6・F5・F6Grid（1）



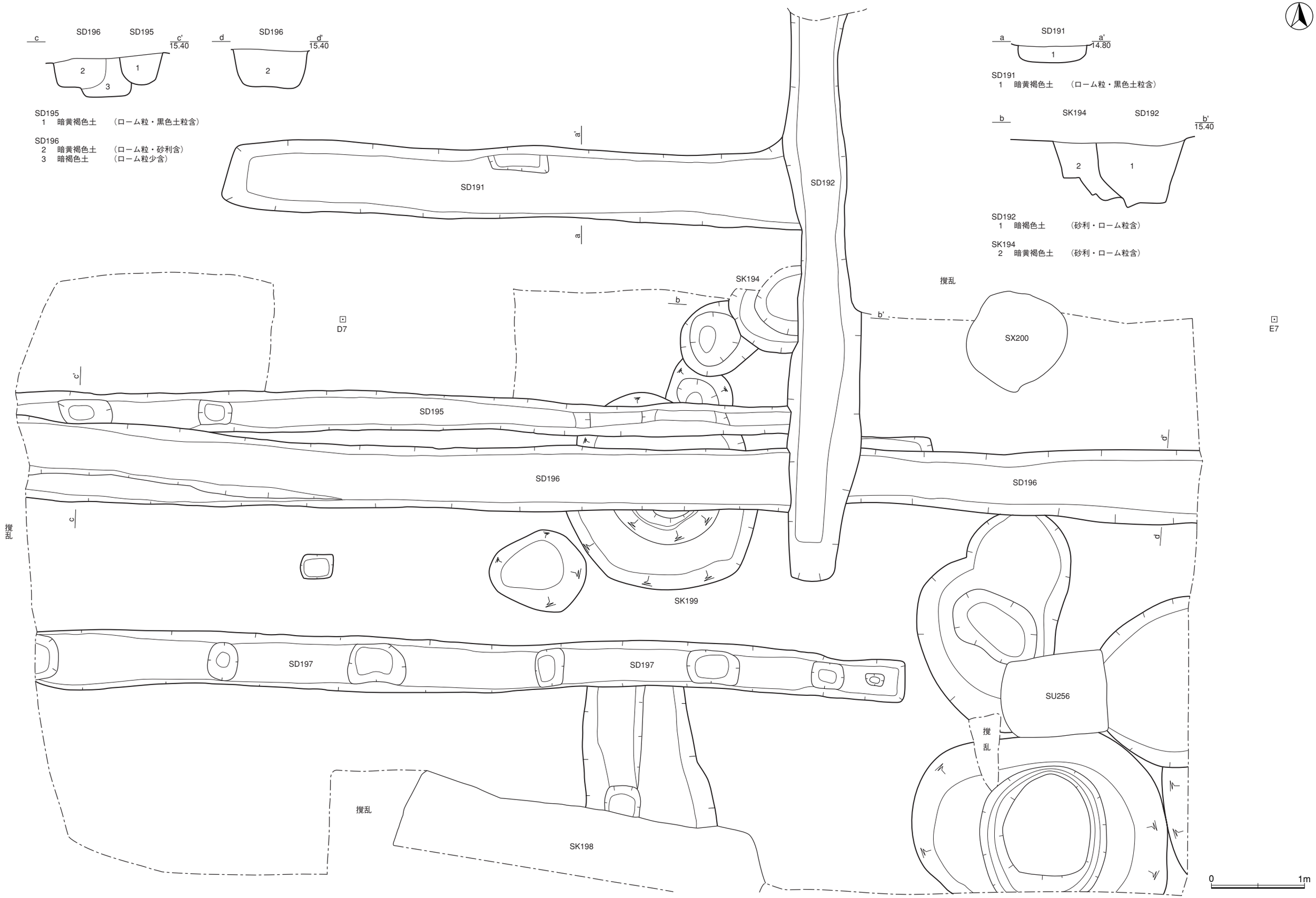
Ⅲ-130図　E5・E6・F5・F6Grid（2）



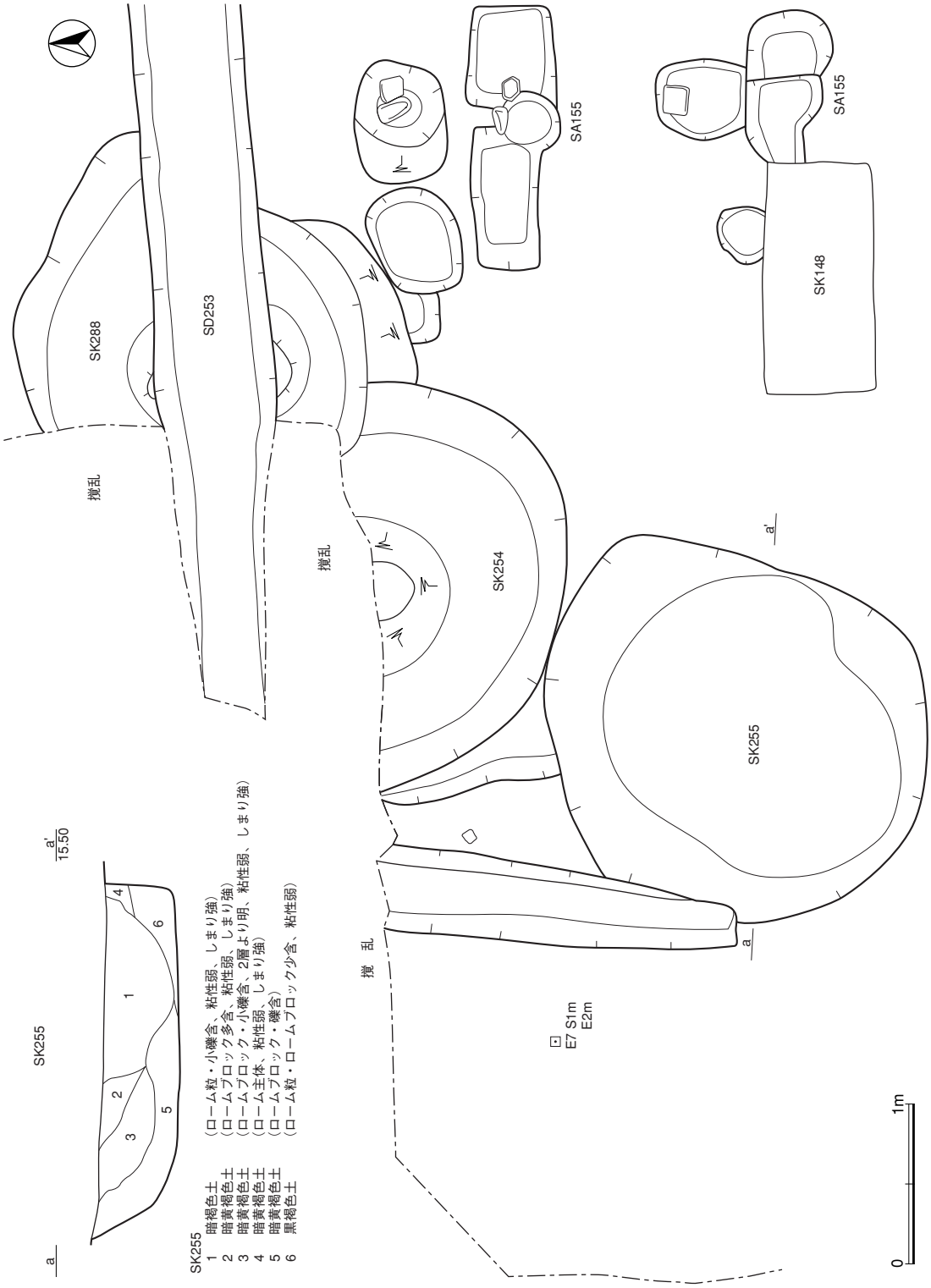
Ⅲ-131図　F5・F6・G5・G6Grid



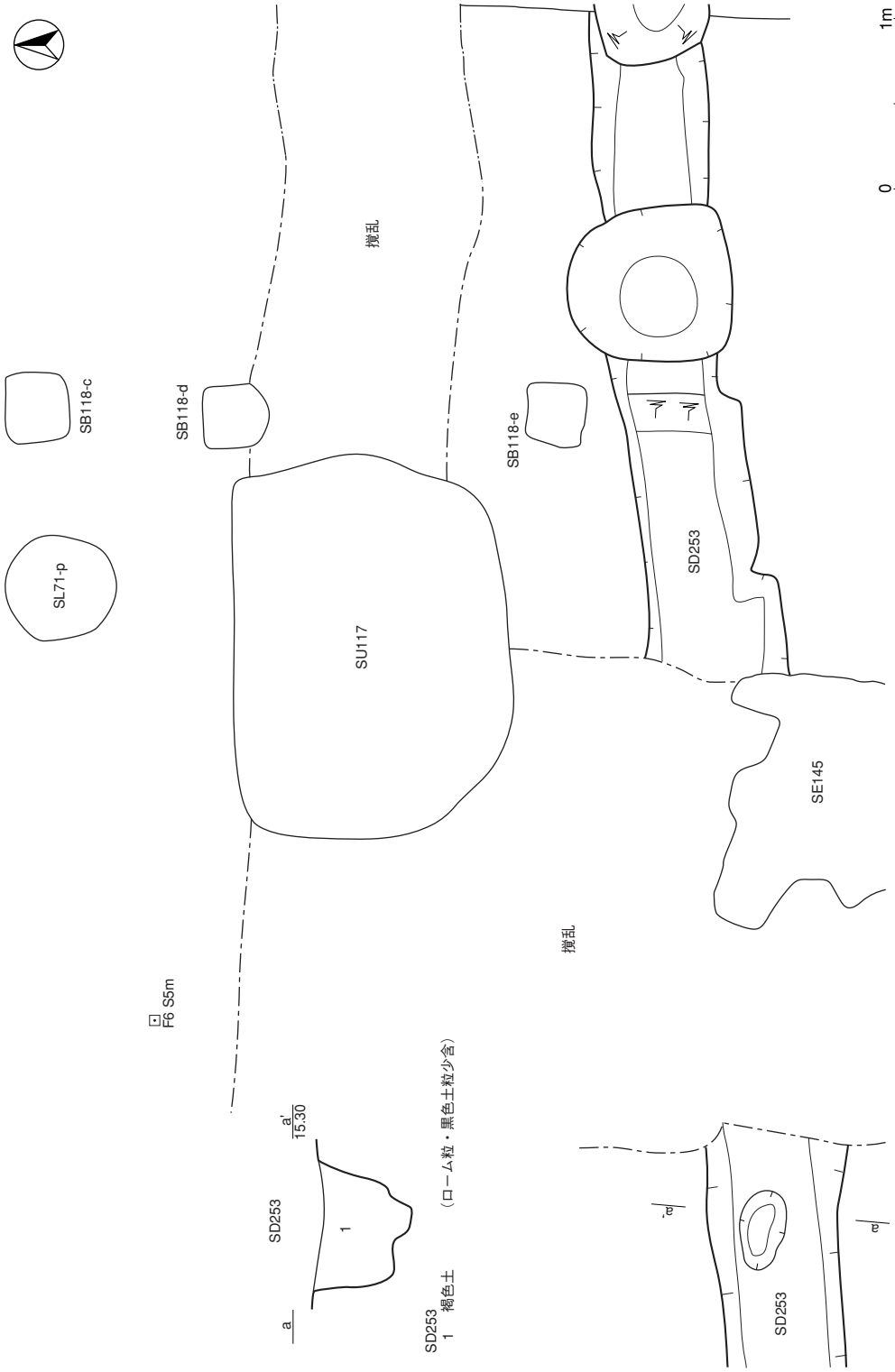
Ⅲ-132図　D6・D7・E6・E7Grid



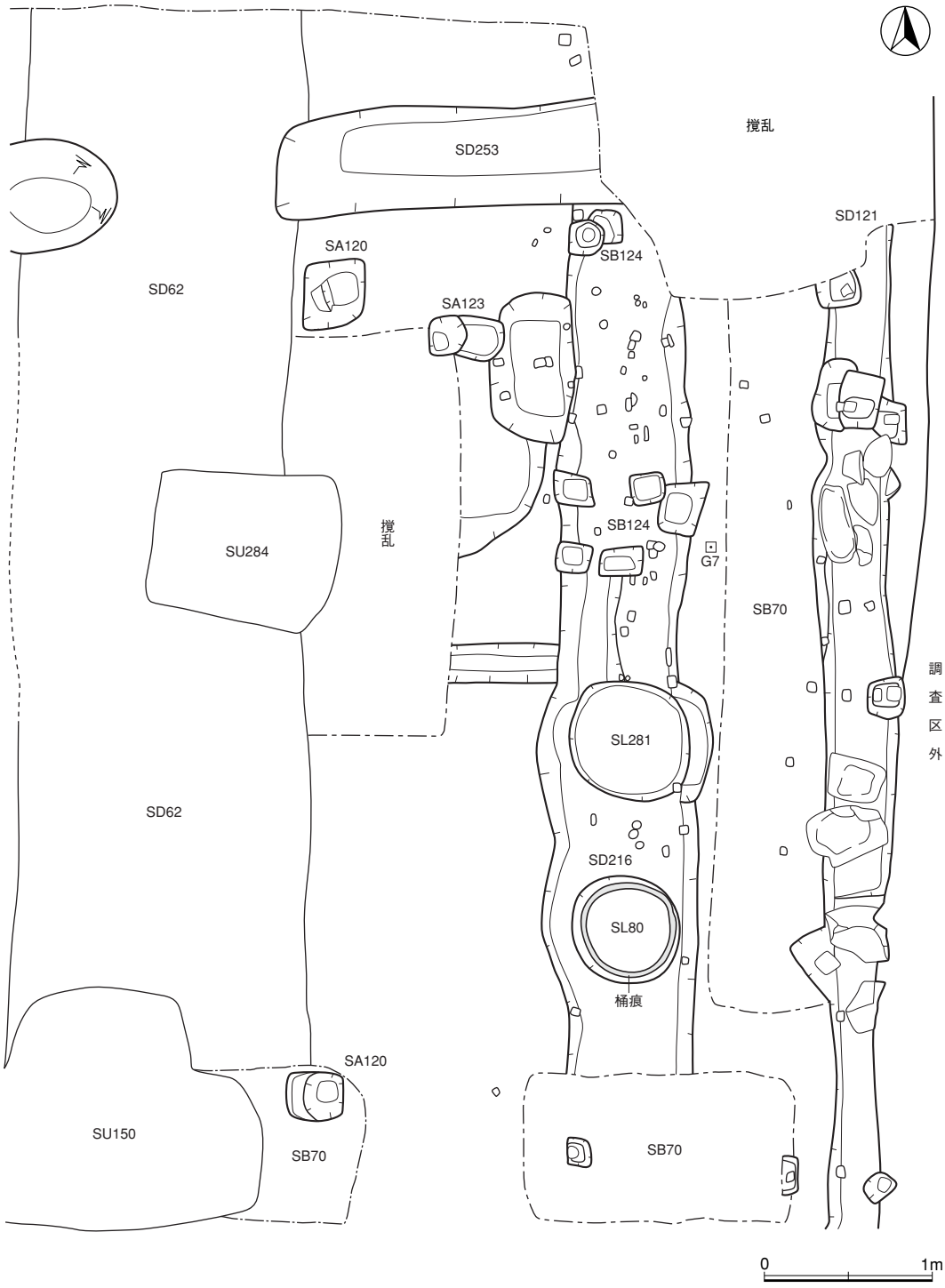
Ⅲ-133図　C6・C7・D6・D7Grid



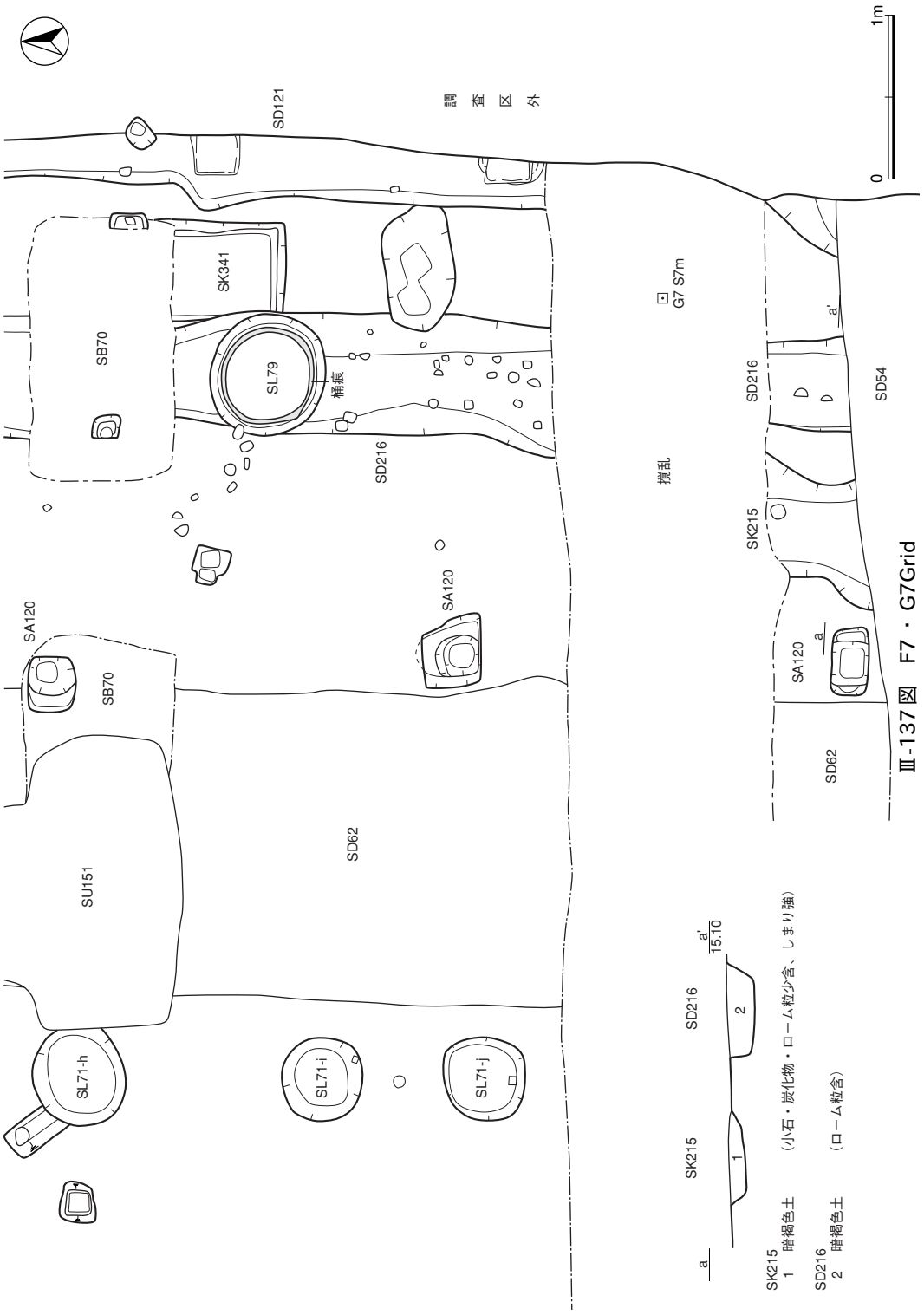
Ⅲ-134図　E6・E7Grid



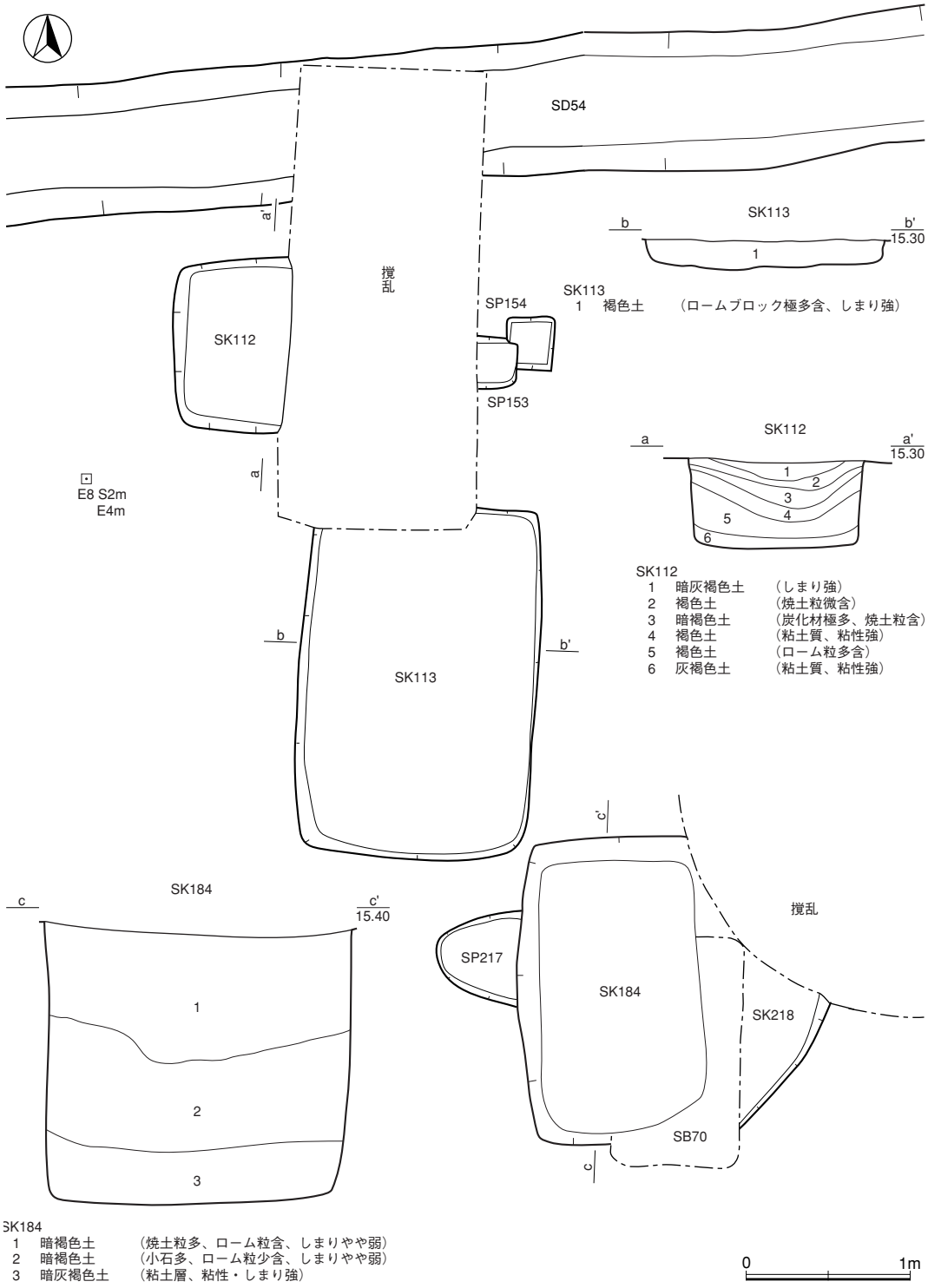
Ⅲ-135図　F6Grid



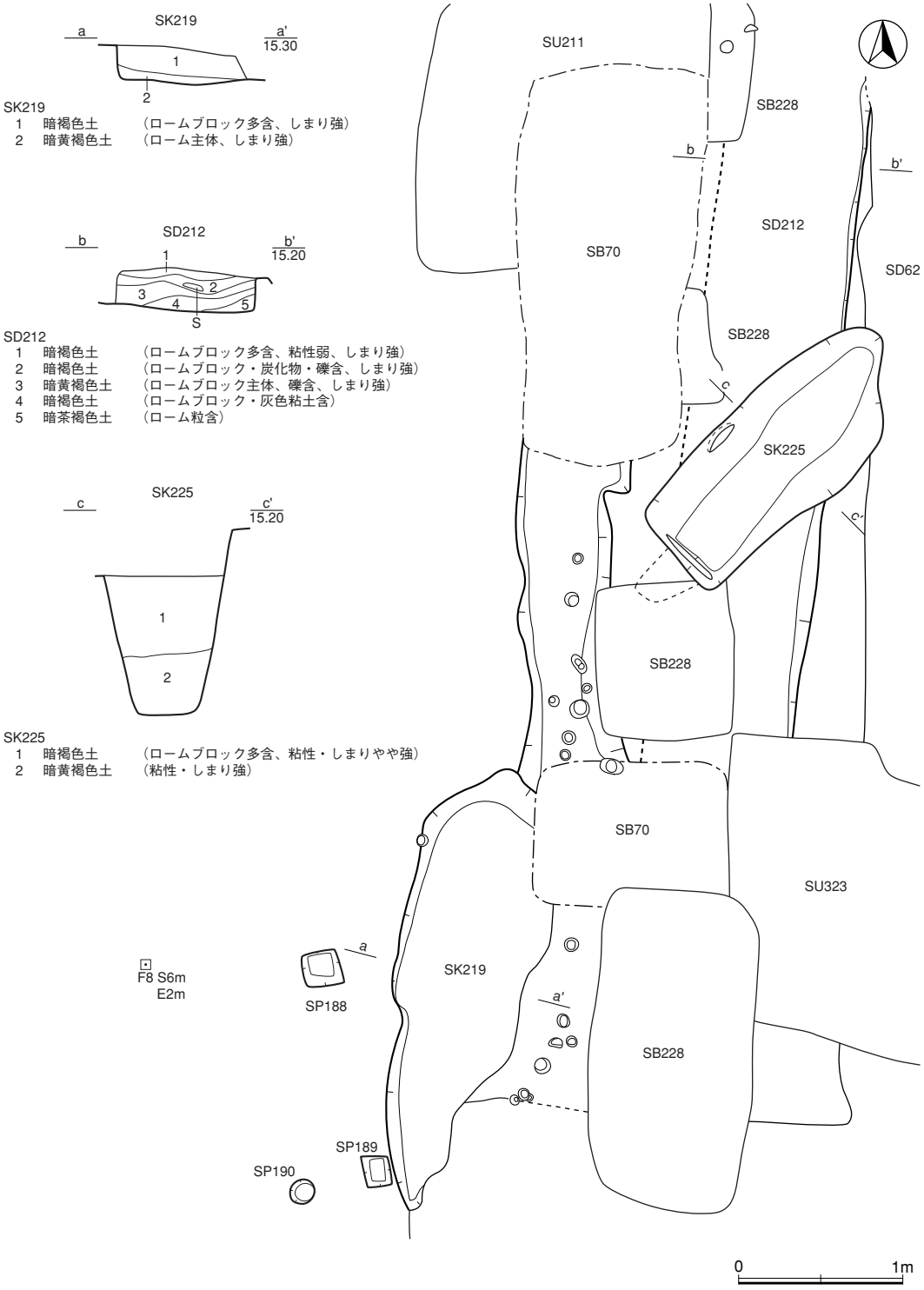
Ⅲ-136図　F6・F7・G6・G7Grid



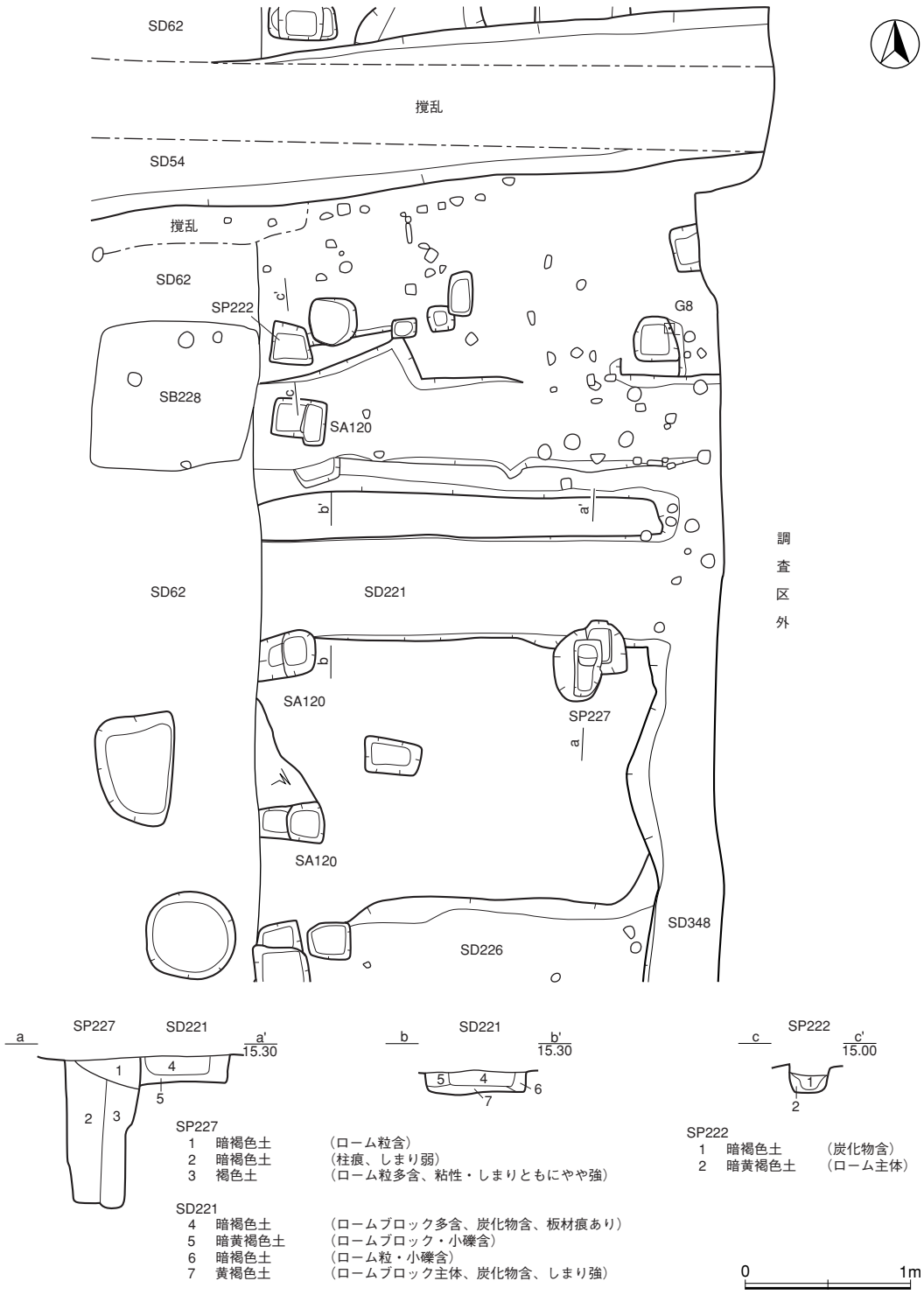
Ⅲ-137図　F7・G7Grid



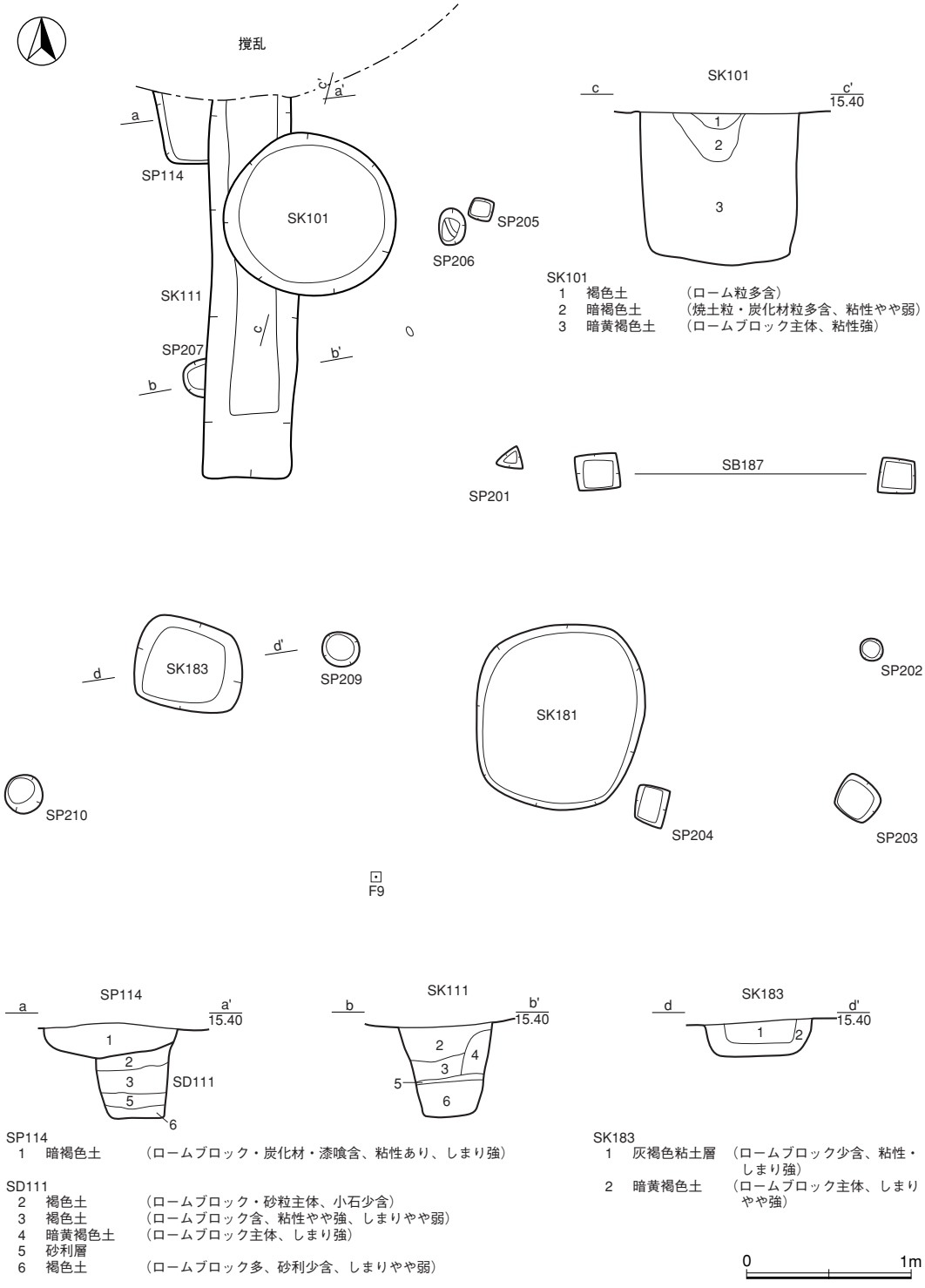
Ⅲ-138図　E7・E8Grid



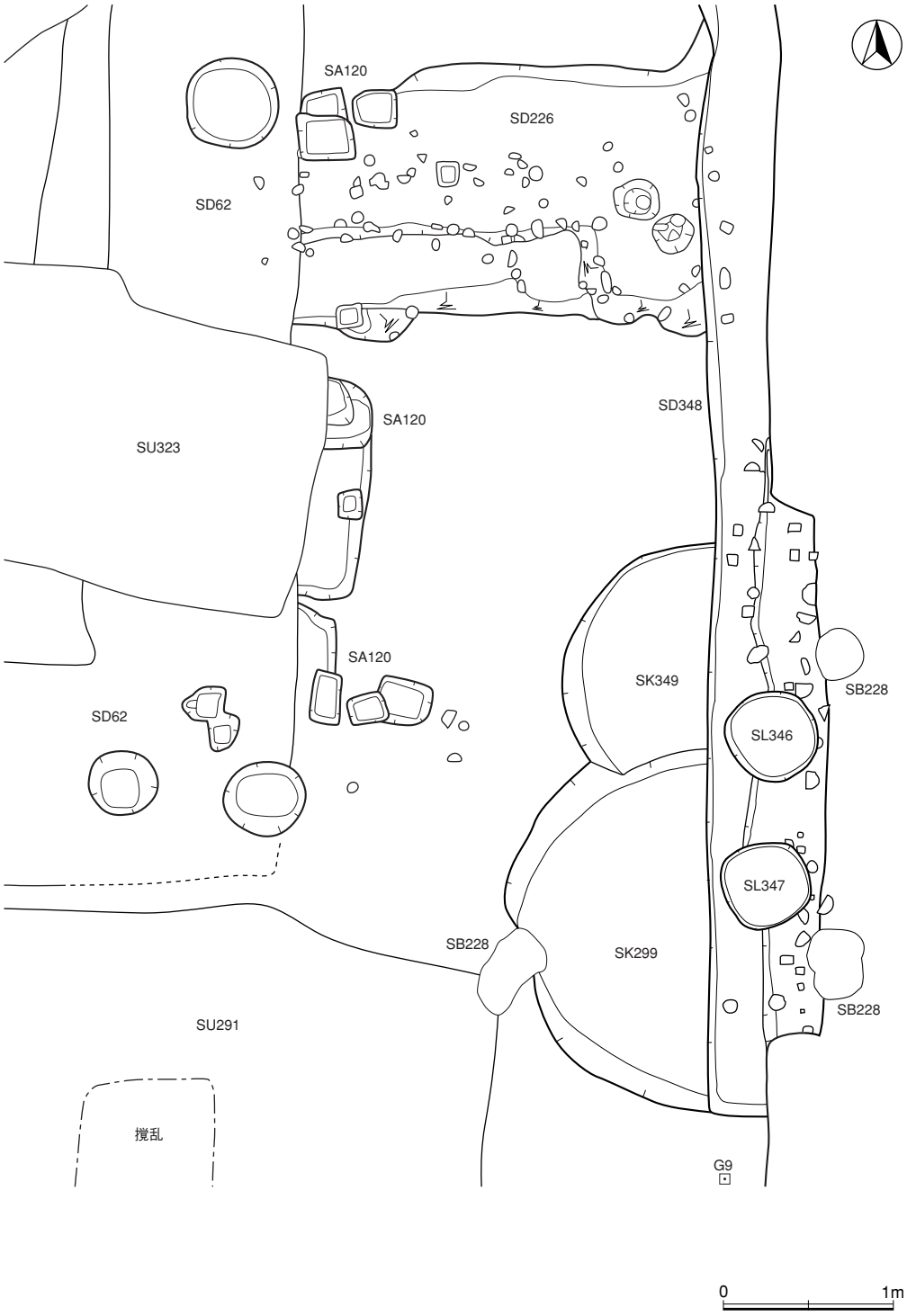
Ⅲ-139図　F8Grid



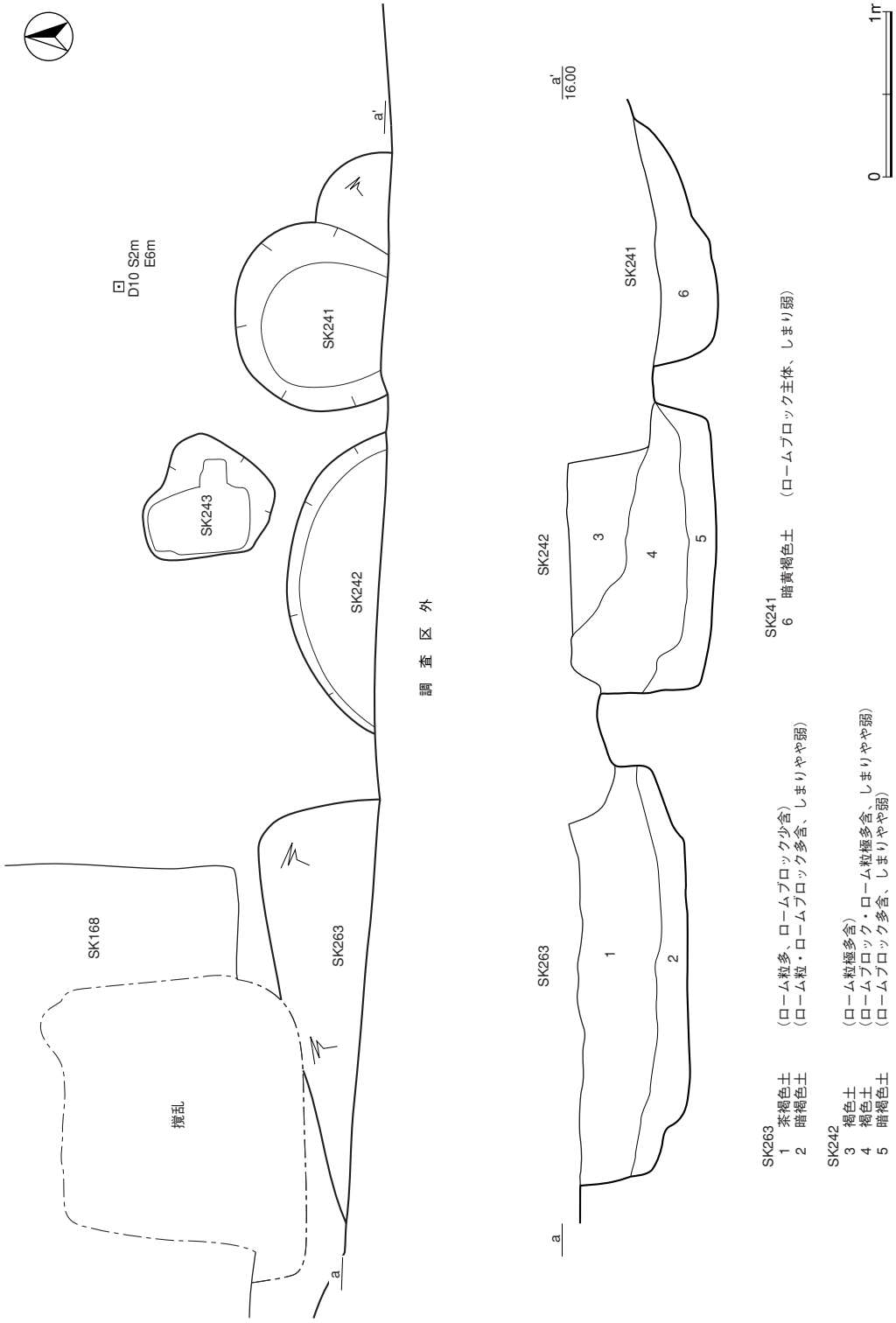
Ⅲ-140図　F7・F8・G7・G8Grid（1）



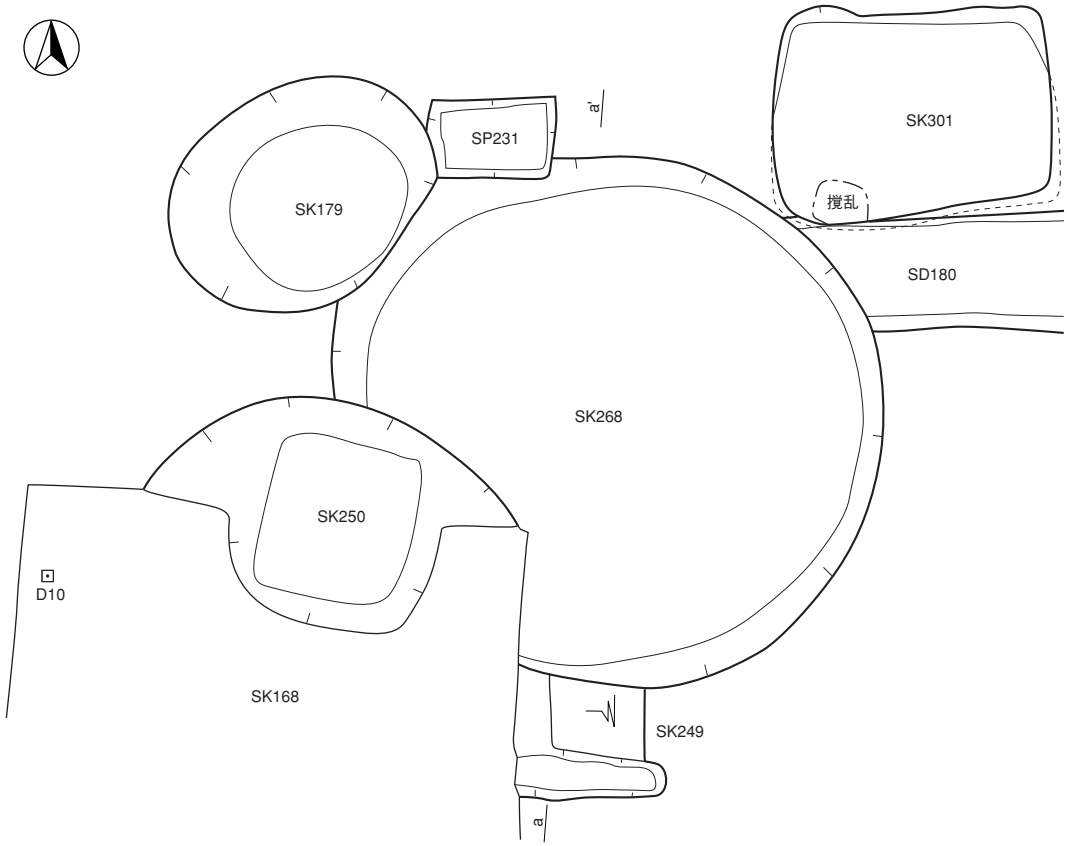
Ⅲ-141図　E8・F8Grid

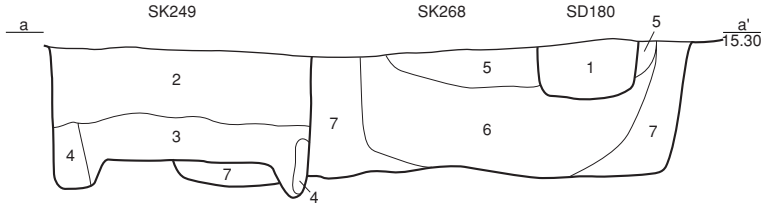


Ⅲ-142図　F7・F8・G7・G8Grid（2）



Ⅲ-143図　D10Grid





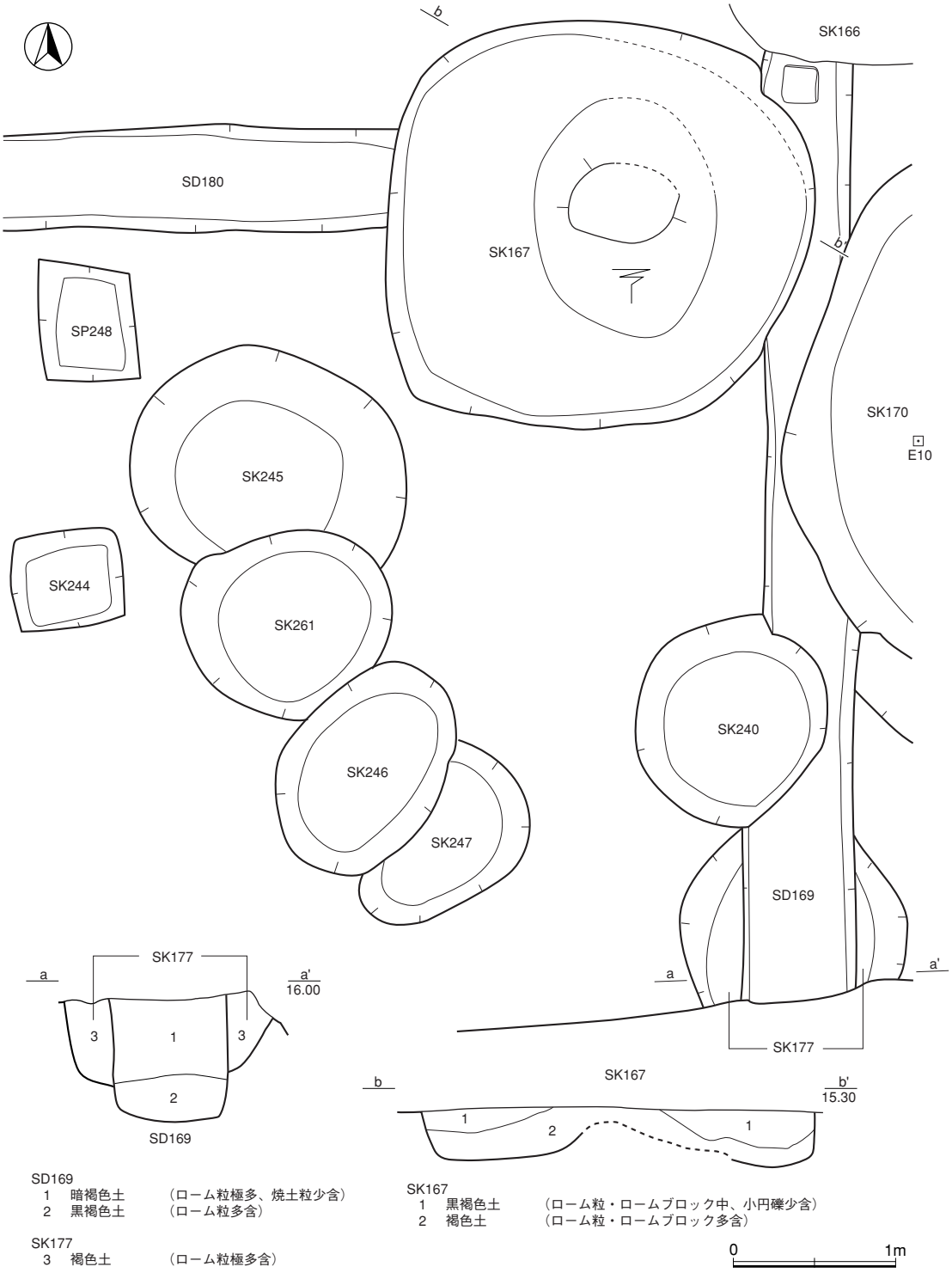
SD180
1　暗褐色土　（ローム粒中含）

SK249
2　暗褐色土　（ローム粒・ロームブロック中、炭化物・小円礫微含）
3　褐色土　（ローム粒・ロームブロック主体、粘性弱）
4　茶褐色土　（杭の腐食土、粘性・しまりともに弱）

SK268
5　黒褐色土　（ローム粒多、黄褐色粘土中含、しまり強）
6　ローム土
7　黒褐色土　（ローム粒・ロームブロック多含、しまりやや弱）

0　1m

Ⅲ-144図　D9・D10Grid（1）

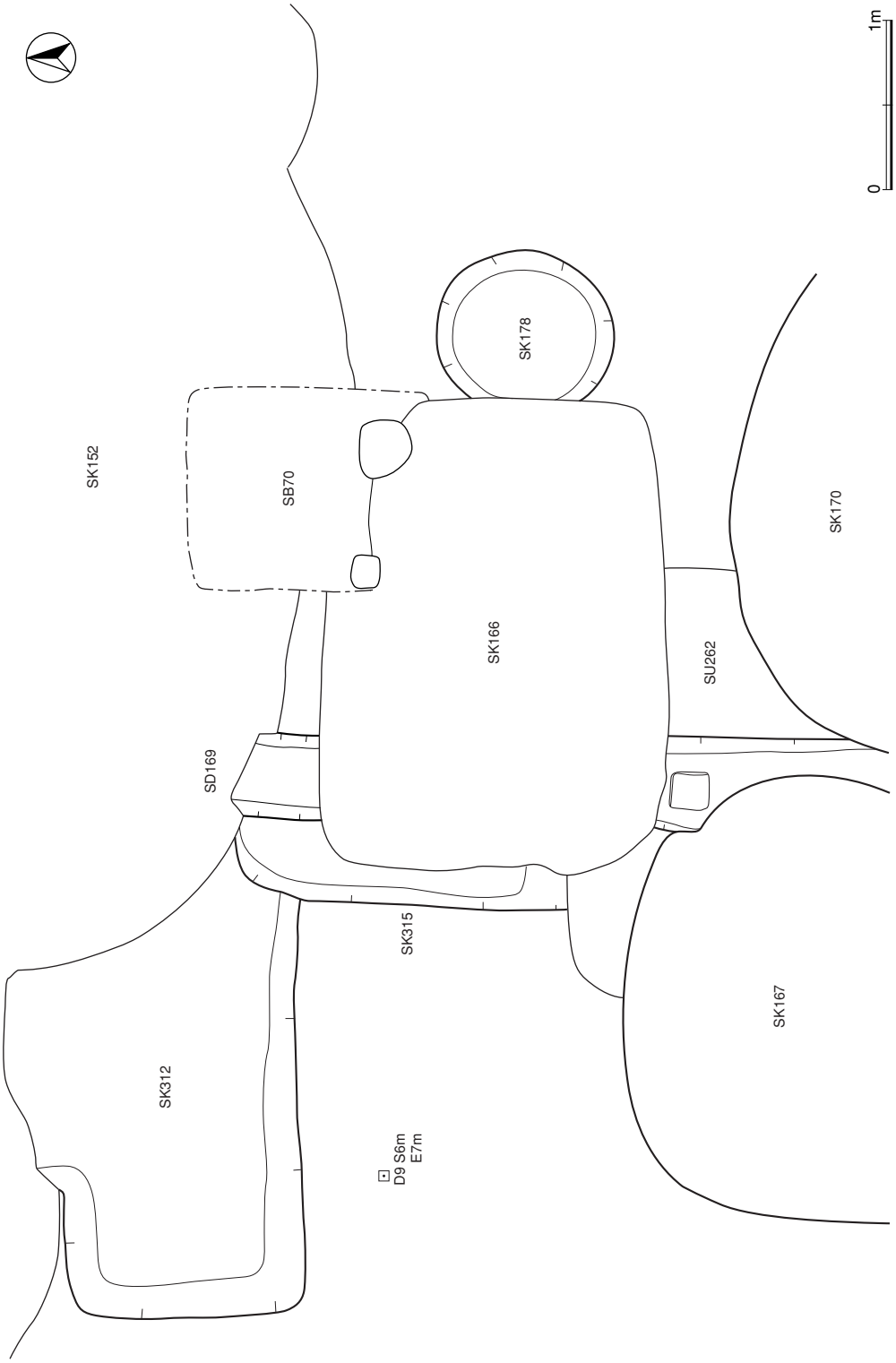


SD169
1　暗褐色土　（ローム粒極多、焼土粒少含）
2　黒褐色土　（ローム粒多含）

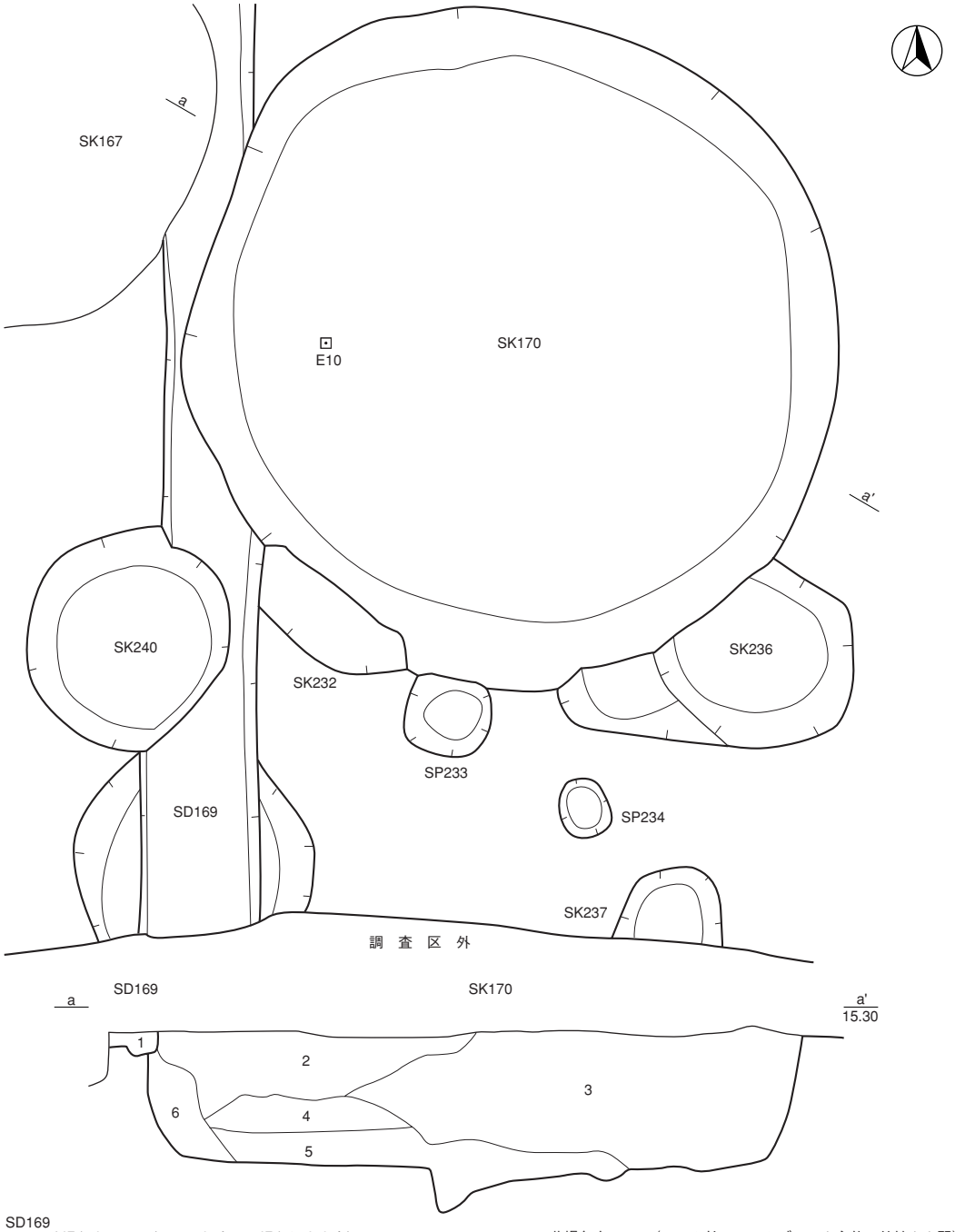
SK177
3　褐色土　（ローム粒極多含）

SK167
1　黒褐色土　（ローム粒・ロームブロック中、小円礫少含）
2　褐色土　（ローム粒・ロームブロック多含）

Ⅲ-145図　D9・D10Grid（2）



Ⅲ-146図　D9・D10・E9・E10Grid（1）

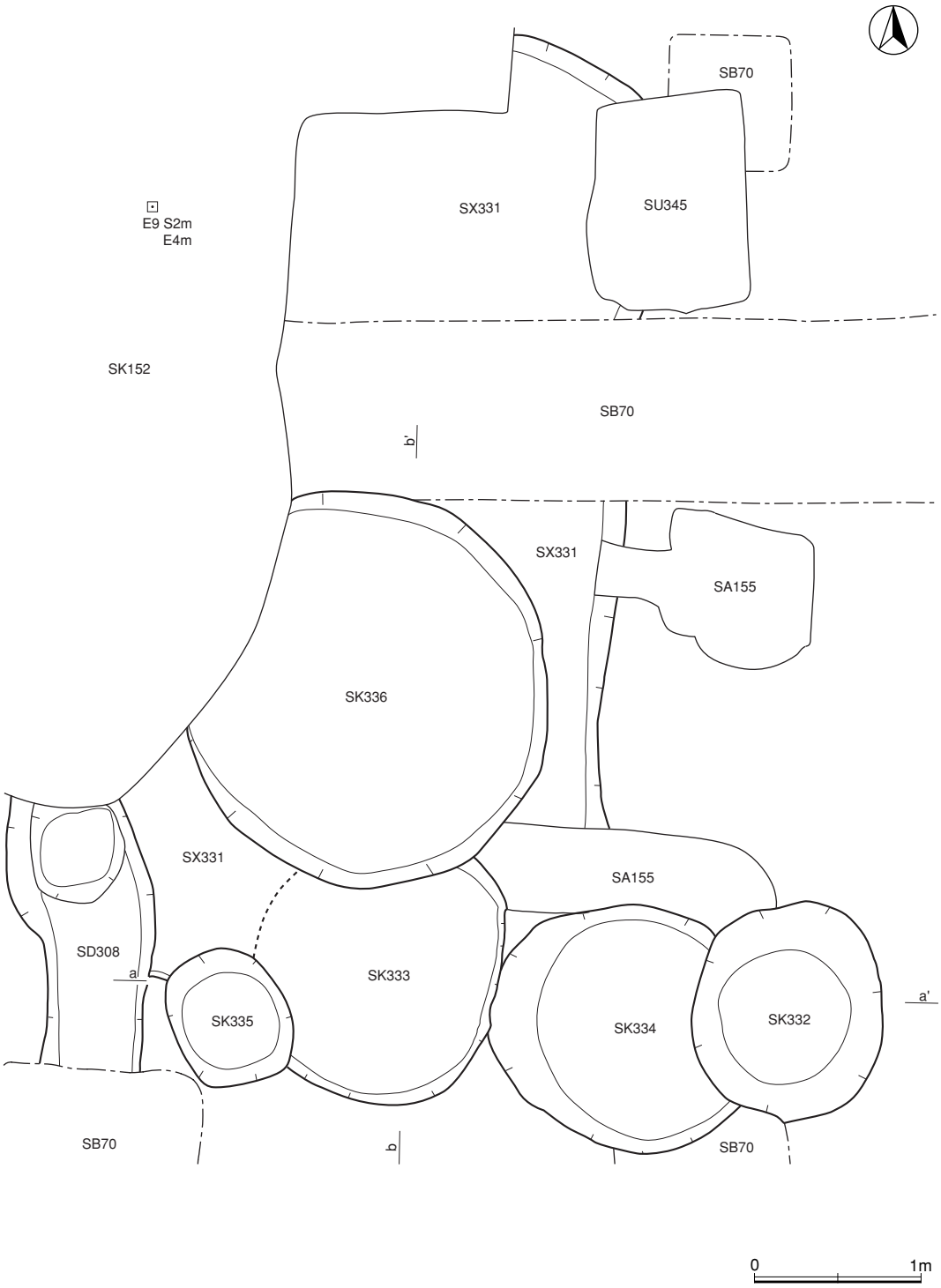


SD169
1　暗褐色土　（ローム粒中、灰褐色粘土少含）

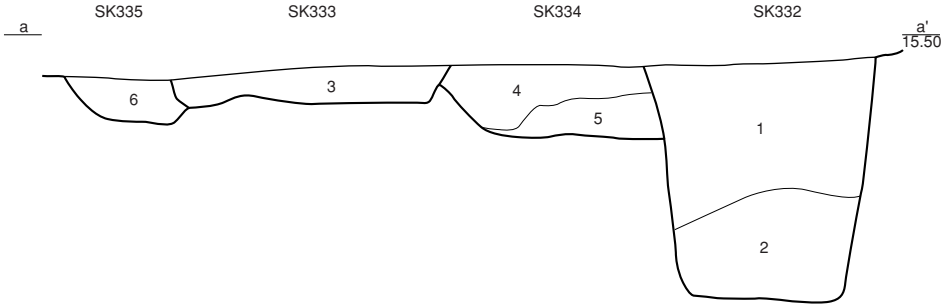
SK170
2　褐色土　（ローム粒・ロームブロック多、小円礫・炭化物微含）
3　暗褐色土　（ローム粒・ロームブロック少、小円礫微含、粘性・しまりともにやや弱）
4　黄褐色土　（ローム粒・ロームブロック主体、粘性やや弱）
5　褐色土　（ローム粒・ロームブロック多含）
6　黄褐色土　（ローム主体、しまりやや強）

0　1m

Ⅲ-147図　D9・D10・E9・E10Grid（2）



Ⅲ-148図　E9Grid（1）

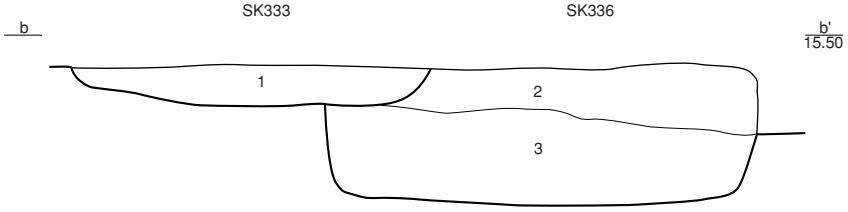


SK332
1　暗黄褐色土　（ロームブロック多含、しまりやや強）
2　黒色土　（粘性やや強）

SK333
3　褐色土　（ローム粒・黒色粒多含、しまりやや強）

SK334
4　褐色土　（ロームブロック多含）
5　暗褐色土　（ローム粒少含）

SK335
6　暗褐色土　（ローム粒含、しまりやや弱）

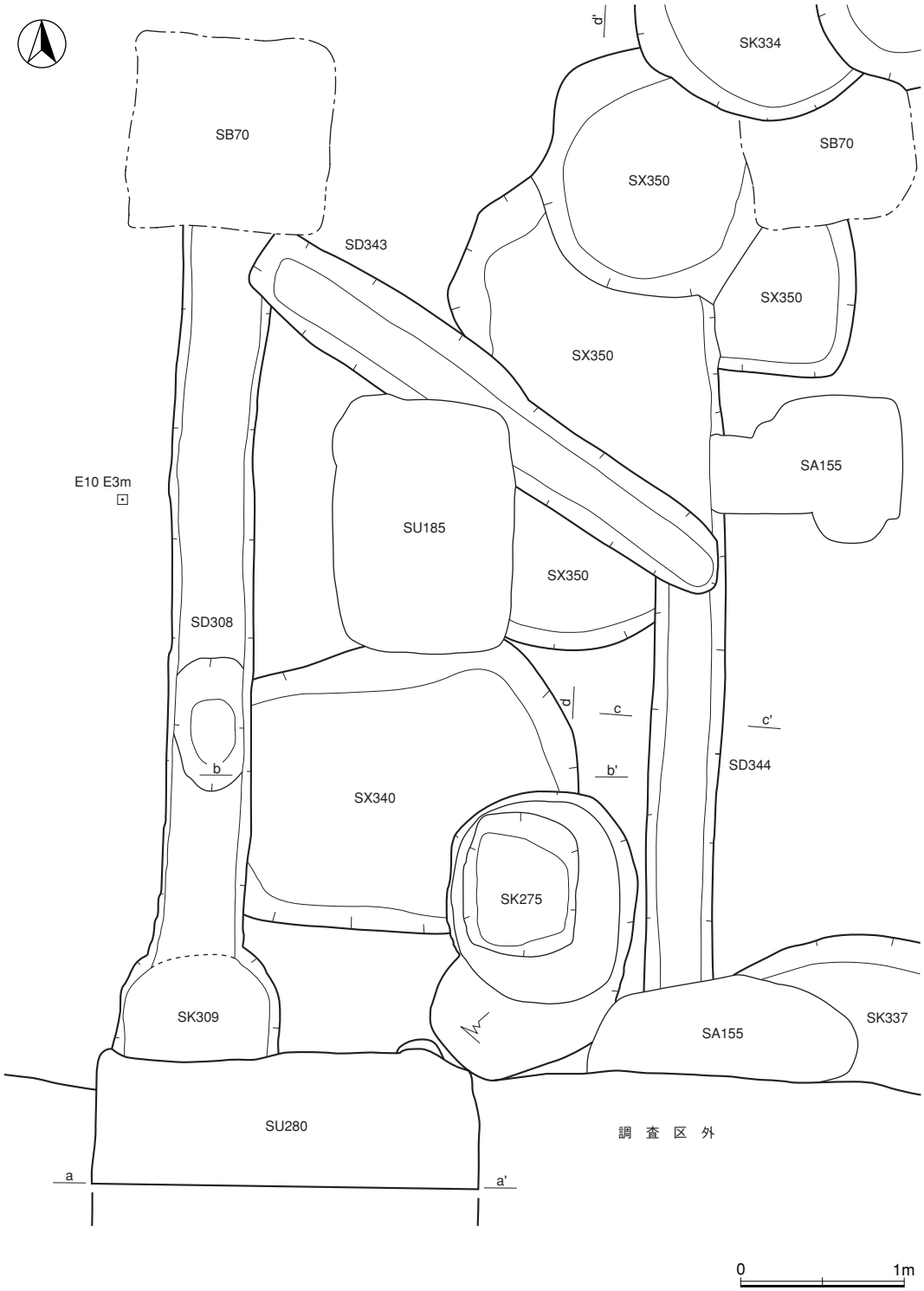


SK333
1　褐色土　（ローム粒・黒色粒多含、しまりやや強）

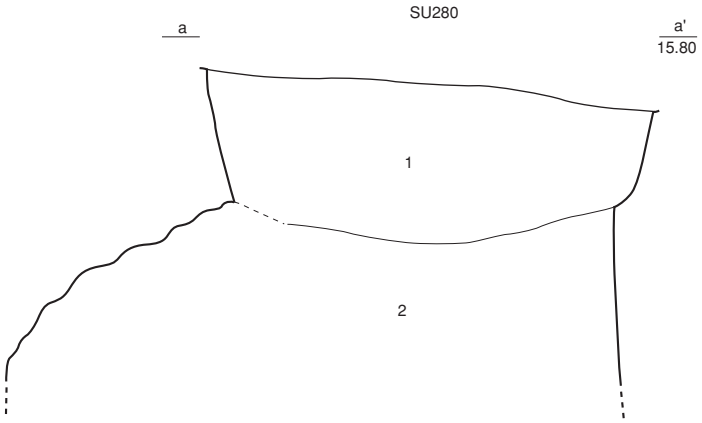
SK336
2　暗黄褐色土　（ロームブロック主体、しまりやや強）
3　黄褐色土　（ロームブロック主体、粘性・しまりともにやや強）

0　1m

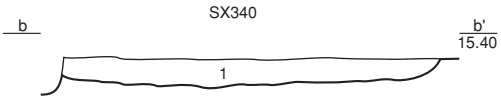
Ⅲ-149図　E9Grid（2）



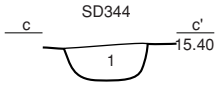
Ⅲ-150図　E9・E10Grid（1）



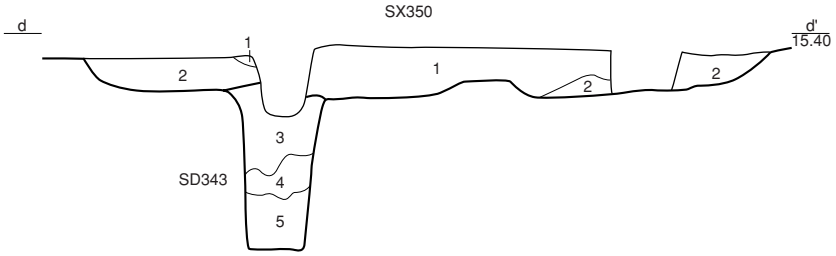
SU280
1　褐色土　（ローム粒多含・小石少含、粘性やや弱）
2　暗褐色土　（ローム粒・小石・焼土粒少含）



SX340
1　暗黄褐色土　（ロームブロック主体、黒色土含）



SD344
1　褐色土　（ローム粒多含）

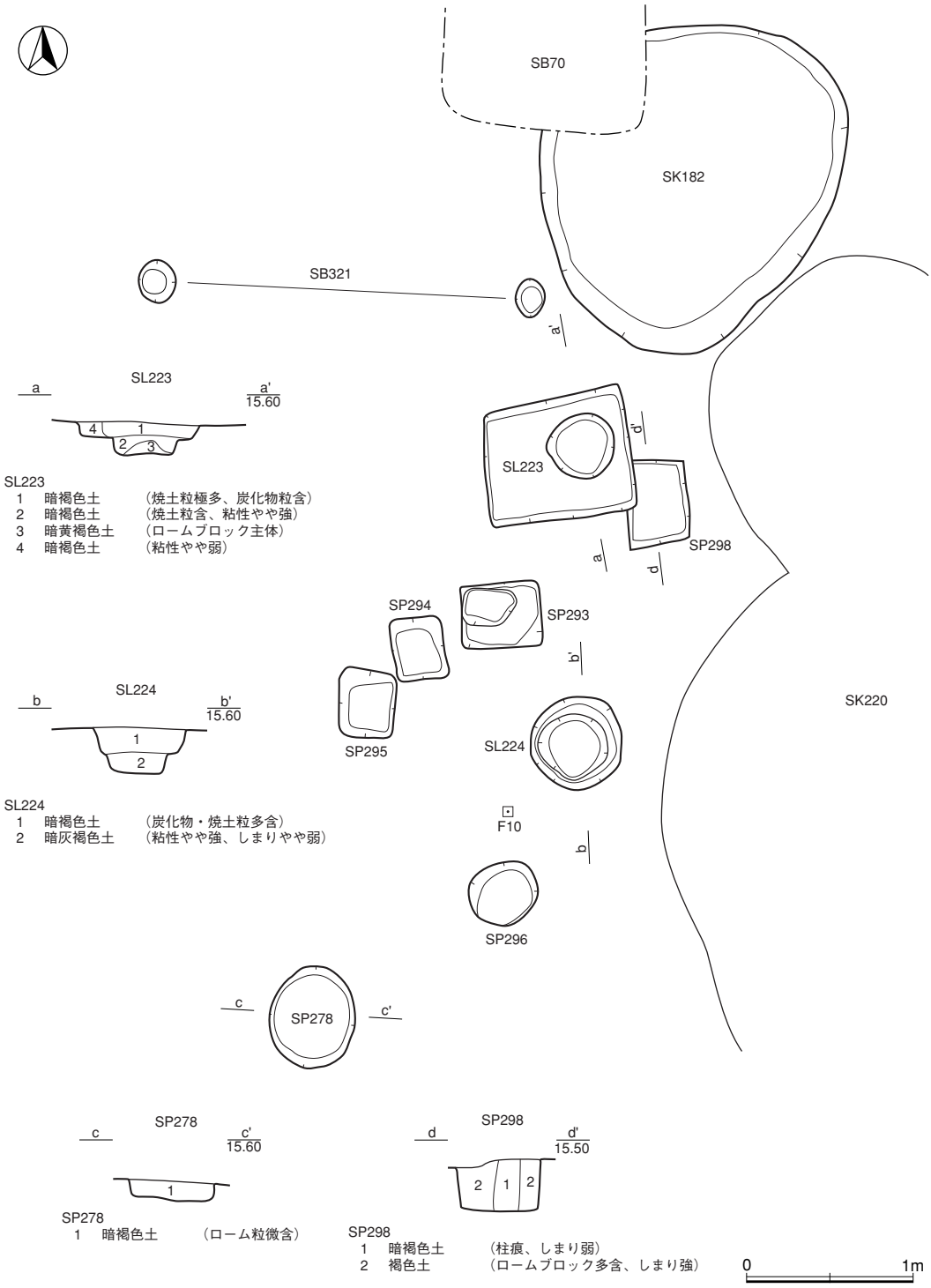


SX350
1　黒褐色土　（ローム粒・ロームブロック極多含）
2　暗黄褐色土　（ロームブロック主体）

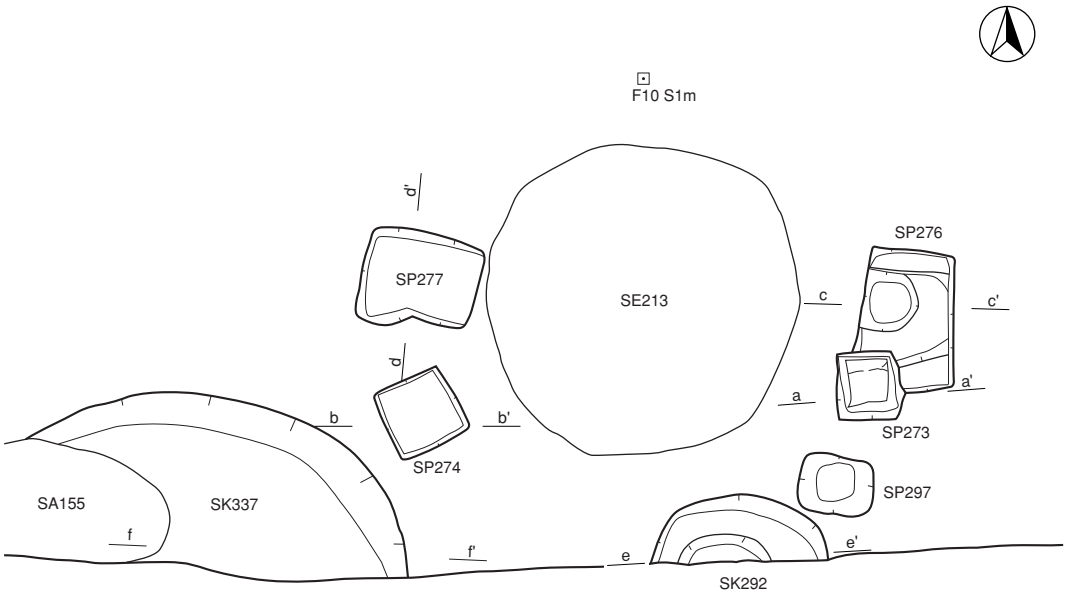
SD343
3　黒褐色土　（ローム粒含、粘性・しまりともにやや強）
4　暗黄褐色土　（ロームブロック主体、黒褐色土含、粘性・しまりともにやや強）
5　暗黄褐色土　（ローム主体、粘性・しまりともに強）

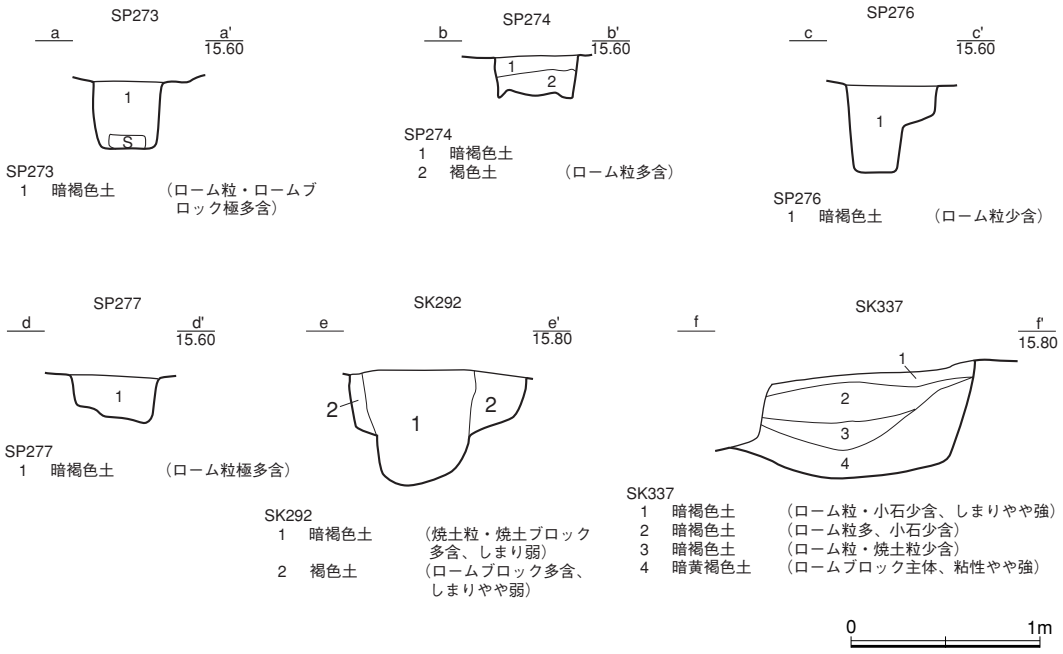
0　1m

Ⅲ-151図　E9・E10Grid（2）

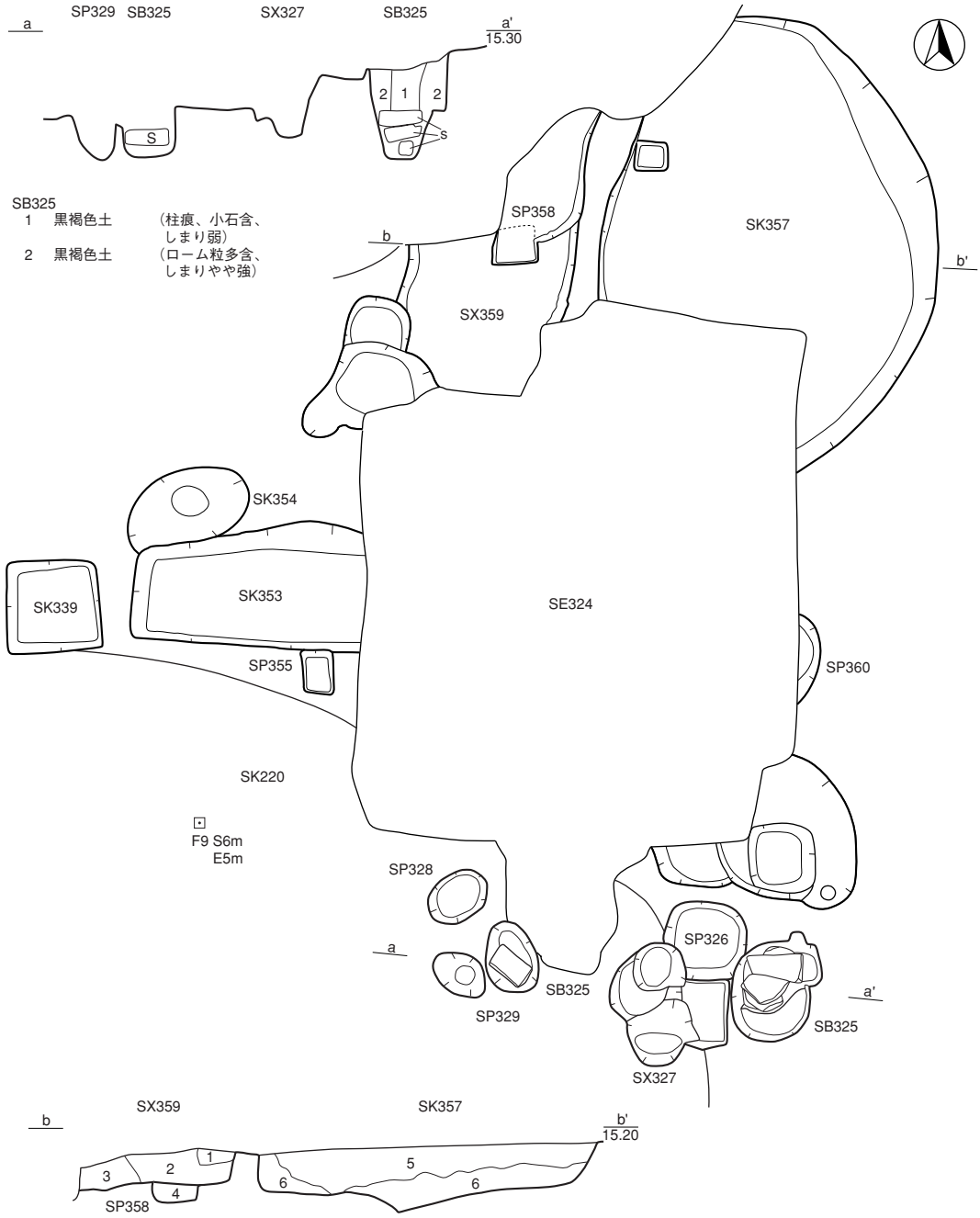


Ⅲ-152図　E9・E10・F9・F10Grid





Ⅲ-153図　E10・F10Grid



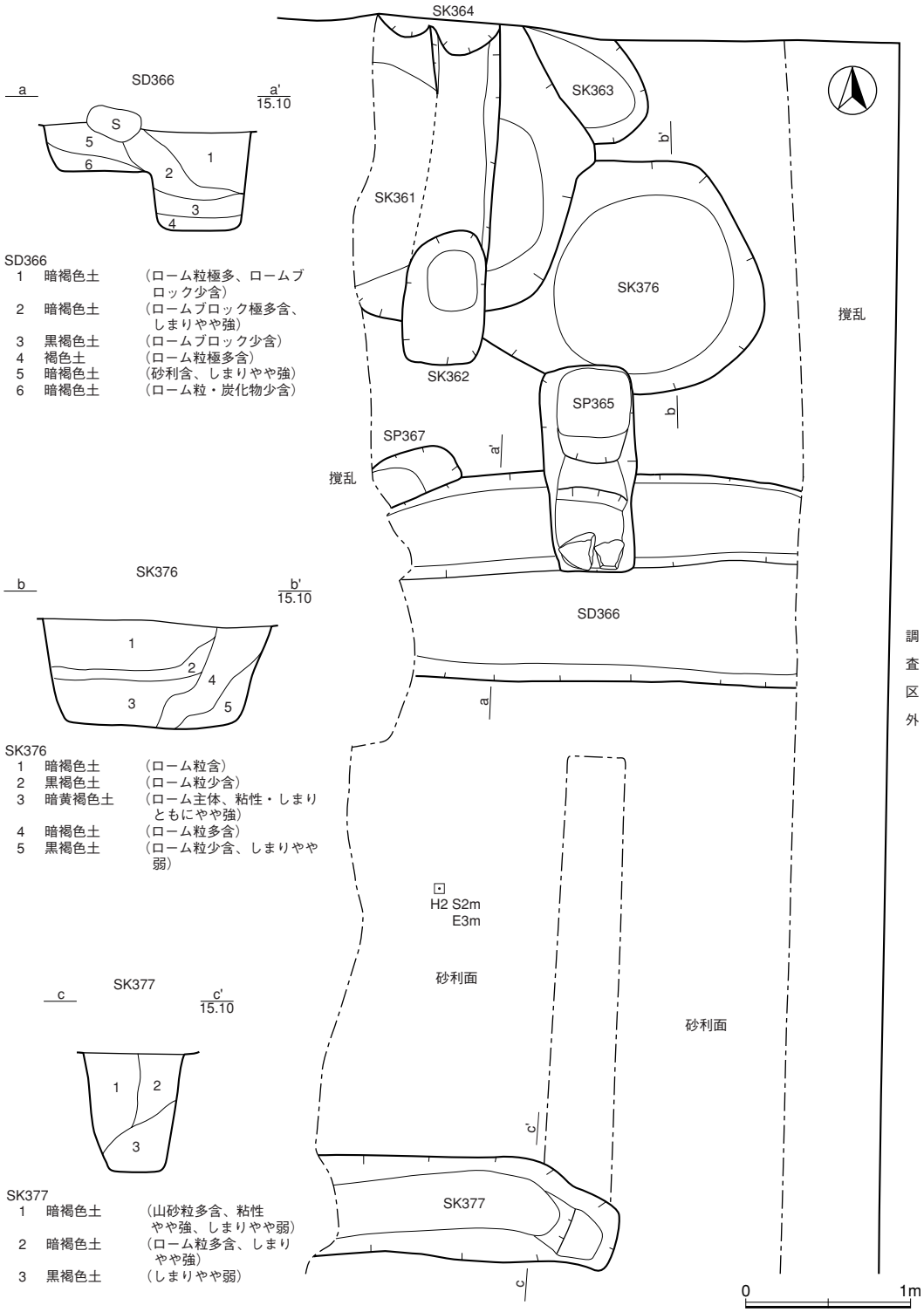
SX359
1　暗褐色土　（ローム粒含、しまり強）
2　暗褐色土　（ローム粒微含、しまり強）
3　暗黄褐色土　（ローム主体、しまり強）

SP358
4　暗黄褐色土　（しまりやや強）

SK357
5　暗褐色土　（ローム粒、炭化物微含、しまりやや強）
6　暗黄褐色土　（ロームブロック主体、粘性やや強、しまり強）

0　1m

Ⅲ-154図　F9Grid

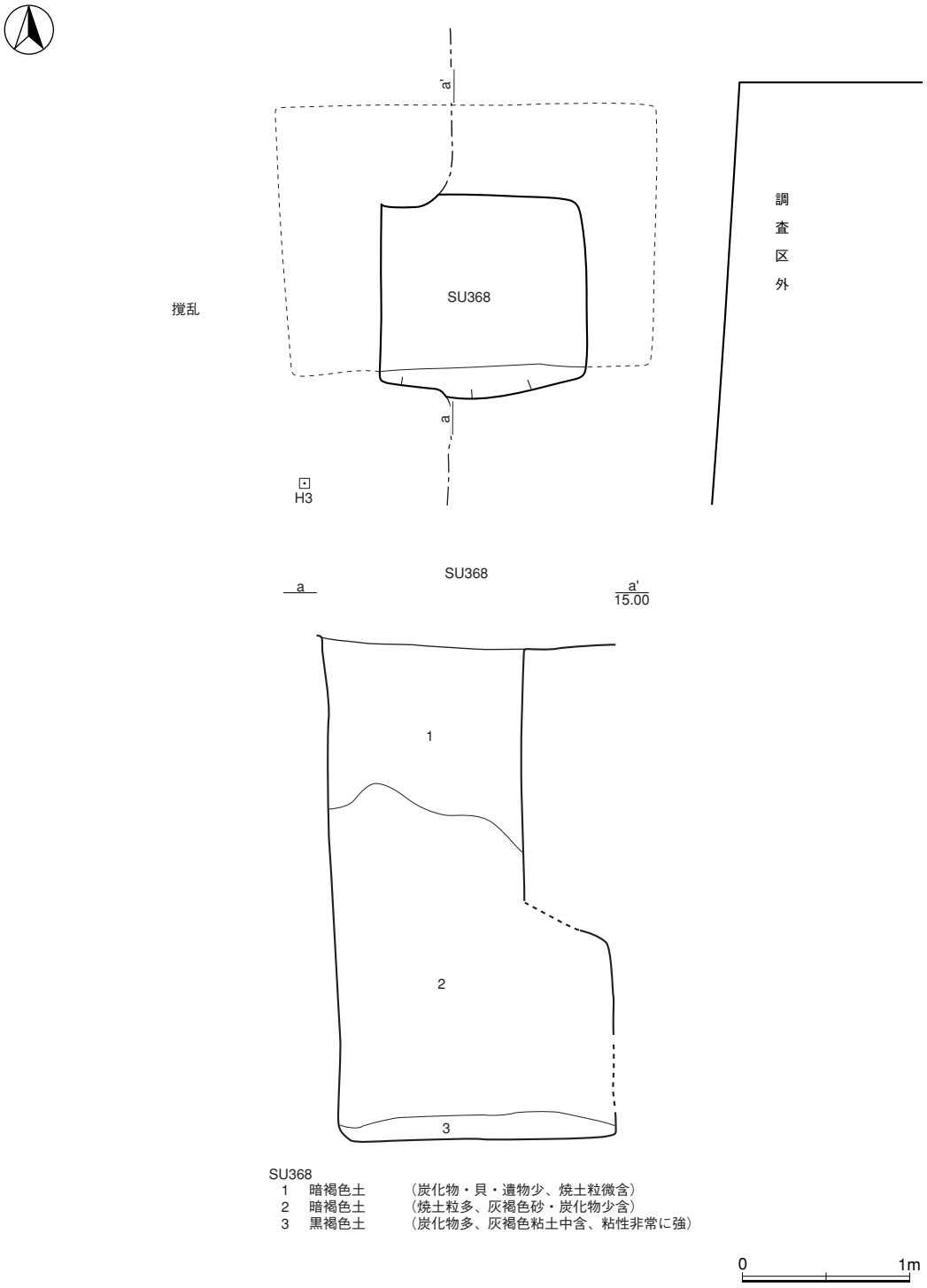


SD366
1　暗褐色土　（ローム粒極多、ロームブロック少含）
2　暗褐色土　（ロームブロック極多含、しまりやや強）
3　黒褐色土　（ロームブロック少含）
4　褐色土　（ローム粒極多含）
5　暗褐色土　（砂利含、しまりやや強）
6　暗褐色土　（ローム粒・炭化物少含）

SK376
1　暗褐色土　（ローム粒含）
2　黒褐色土　（ローム粒少含）
3　暗黄褐色土　（ローム主体、粘性・しまりともにやや強）
4　暗褐色土　（ローム粒多含）
5　黒褐色土　（ローム粒少含、しまりやや弱）

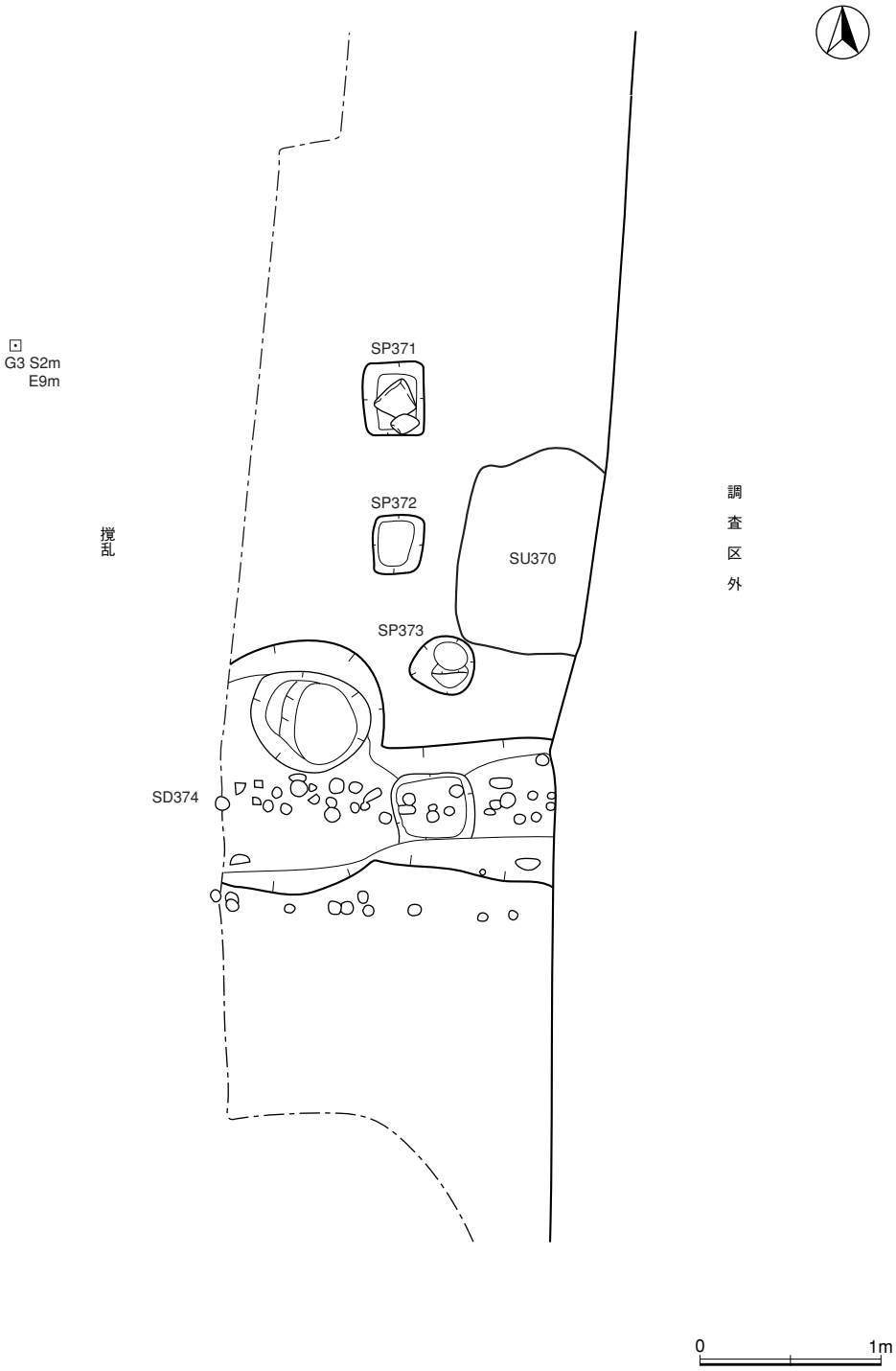
SK377
1　暗褐色土　（山砂粒多含、粘性やや強、しまりやや弱）
2　暗褐色土　（ローム粒多含、しまりやや強）
3　黒褐色土　（しまりやや弱）

Ⅲ-155図　拡張区　H1・H2Grid

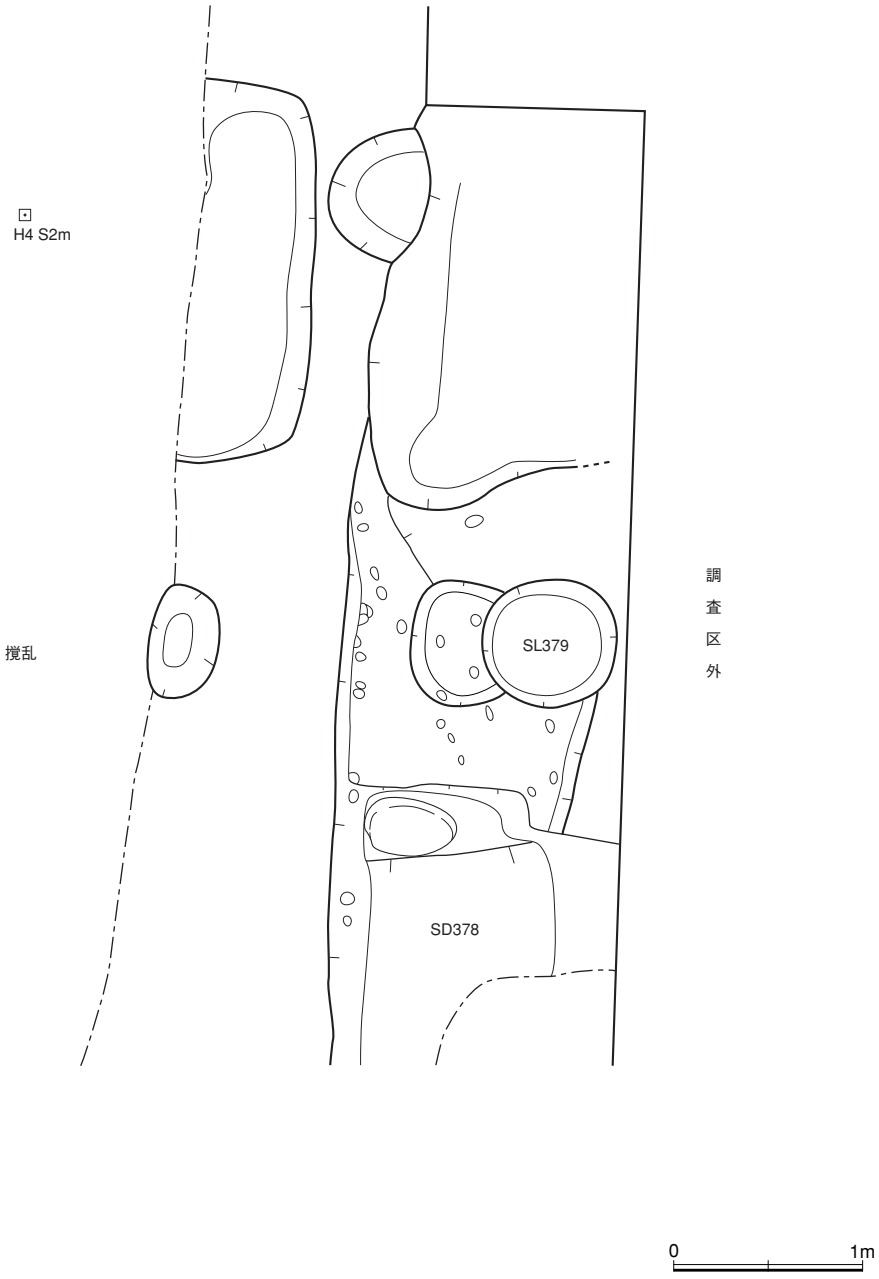


SU368
1　暗褐色土　（炭化物・貝・遺物少、焼土粒微含）
2　暗褐色土　（焼土粒多、灰褐色砂・炭化物少含）
3　黒褐色土　（炭化物多、灰褐色粘土中含、粘性非常に強）

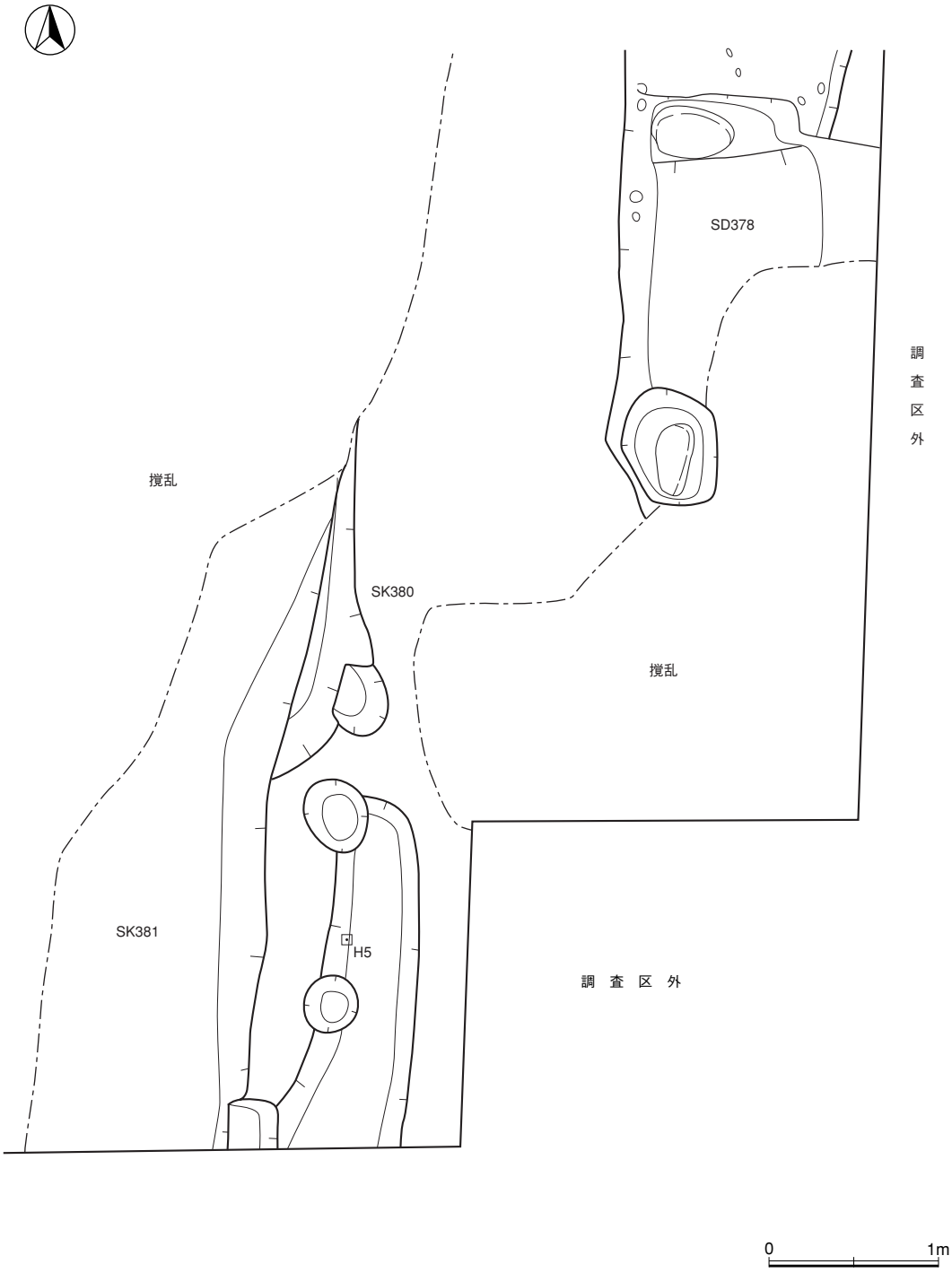
Ⅲ-156図　拡張区　G2・H2Grid



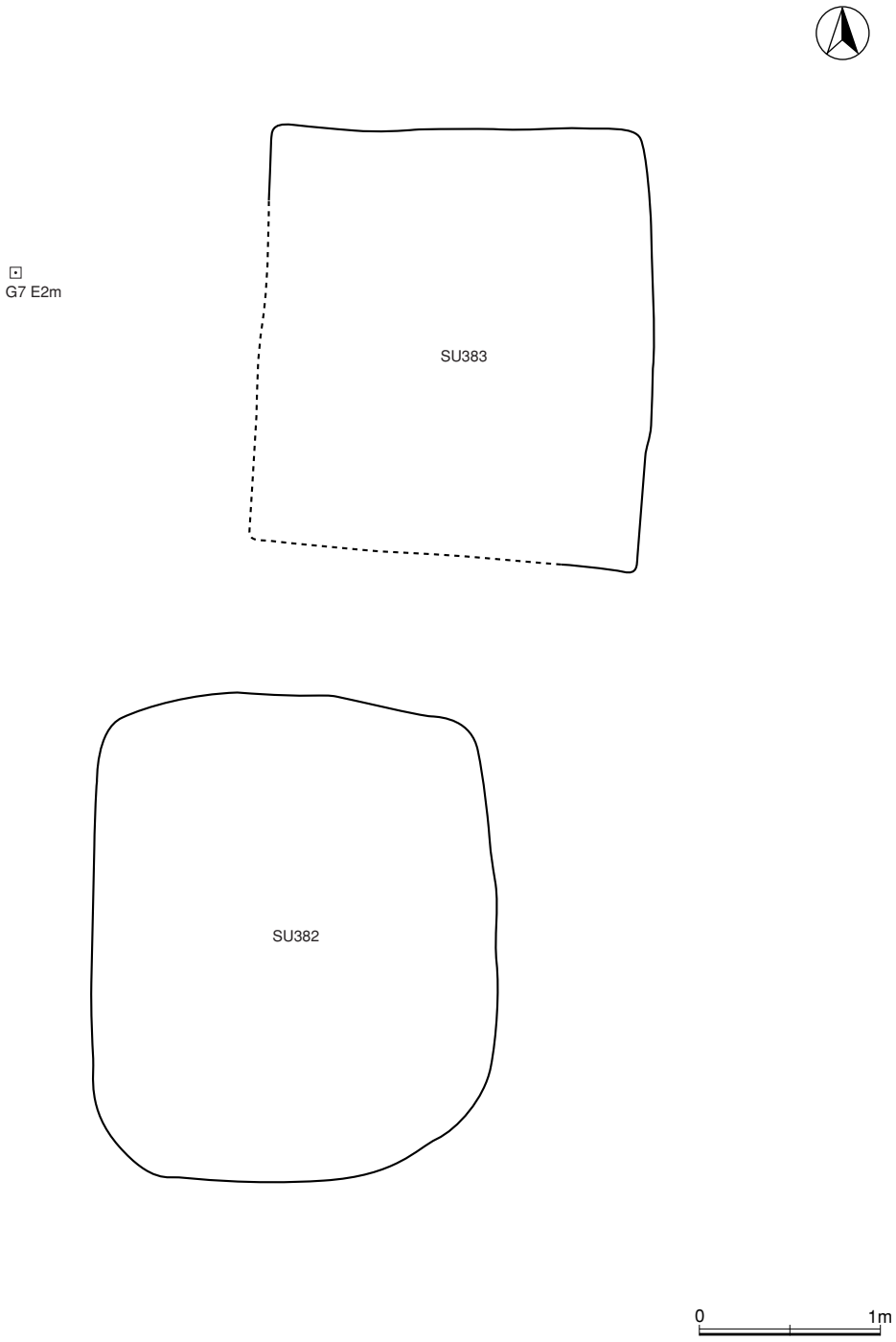
Ⅲ-157図　拡張区　H3Grid



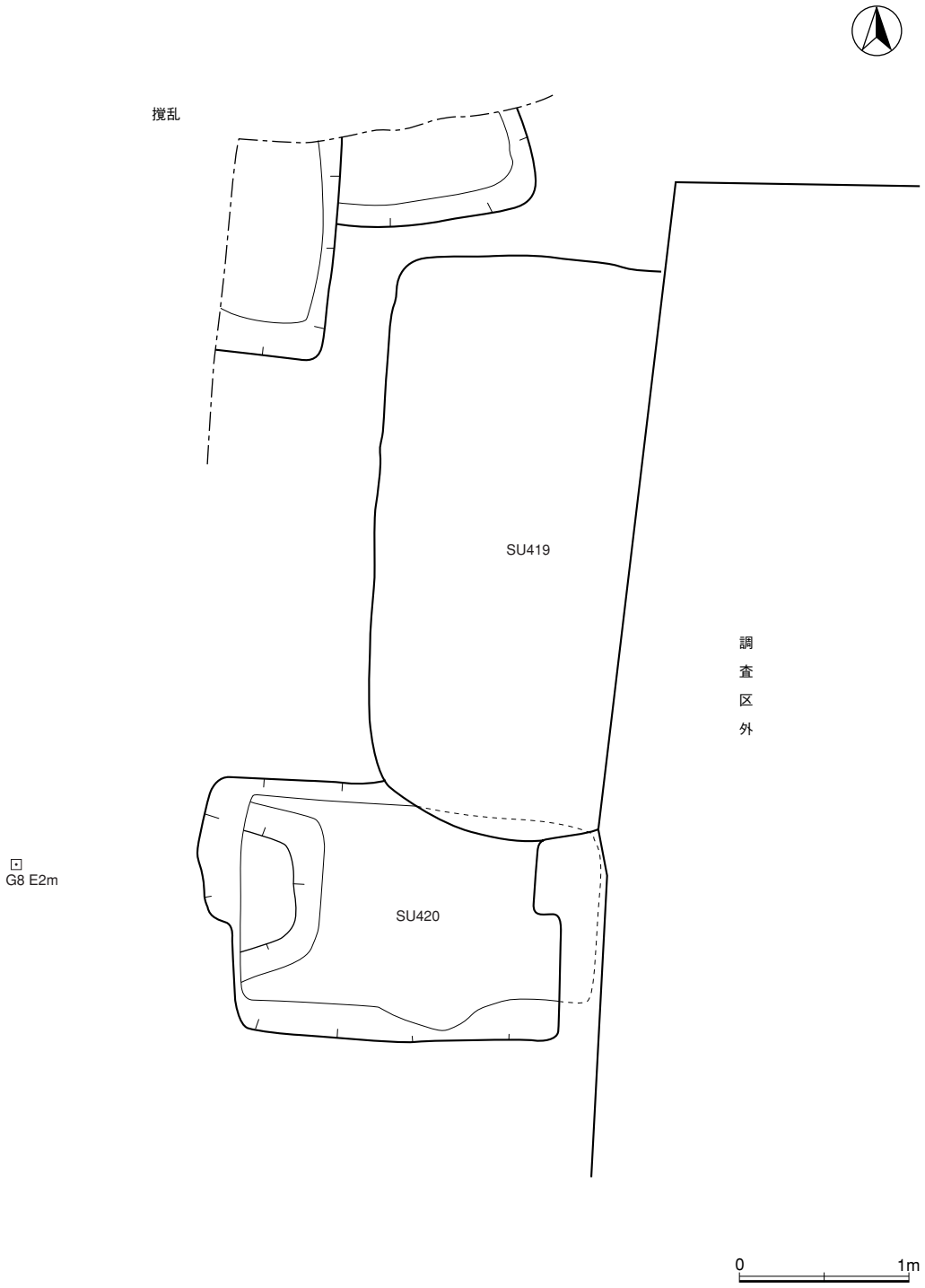
Ⅲ-158図　拡張区　H4Grid



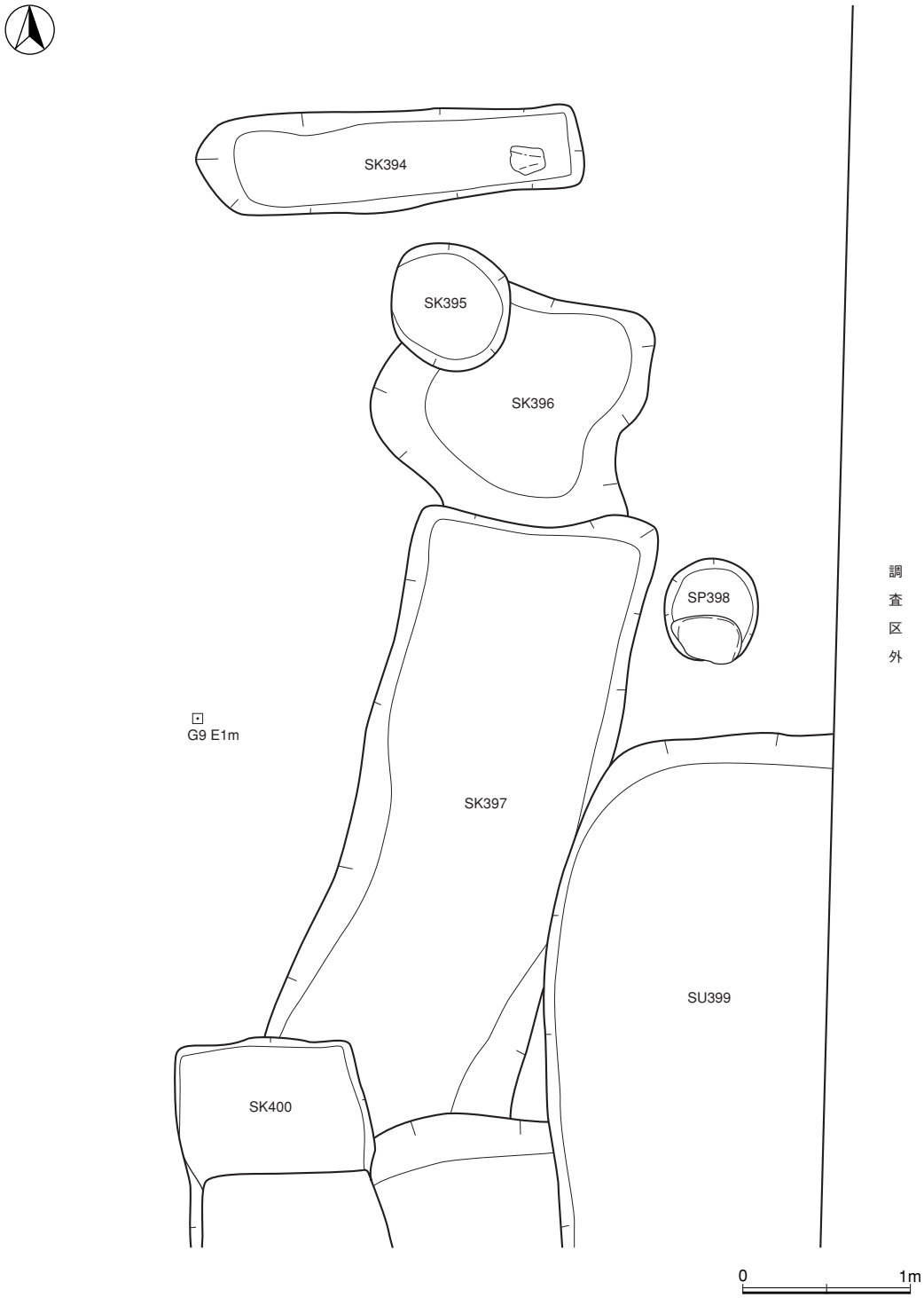
Ⅲ-159図　拡張区　G4・G5・H4・H5Grid



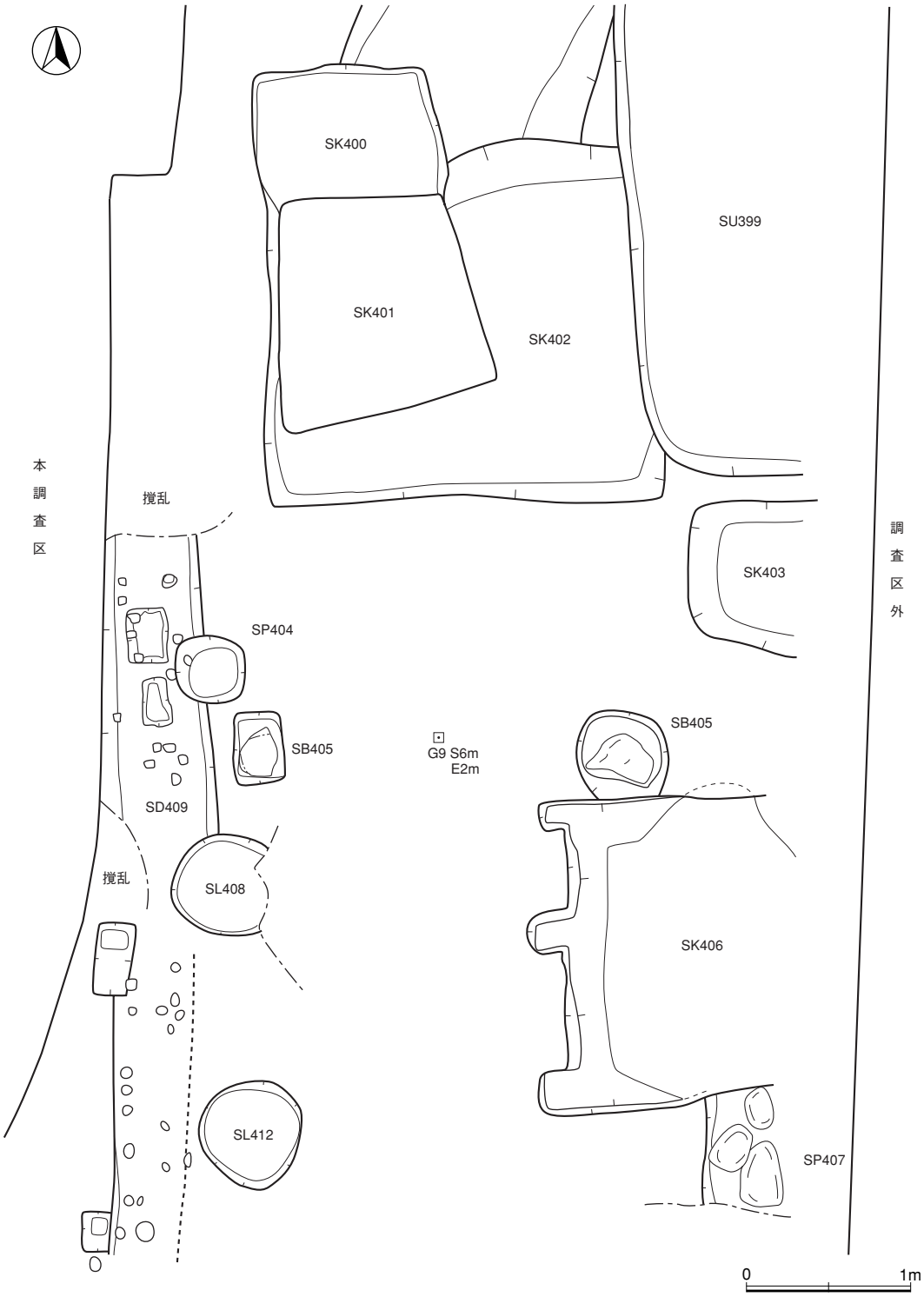
Ⅲ-160図　拡張区　G6・G7Grid



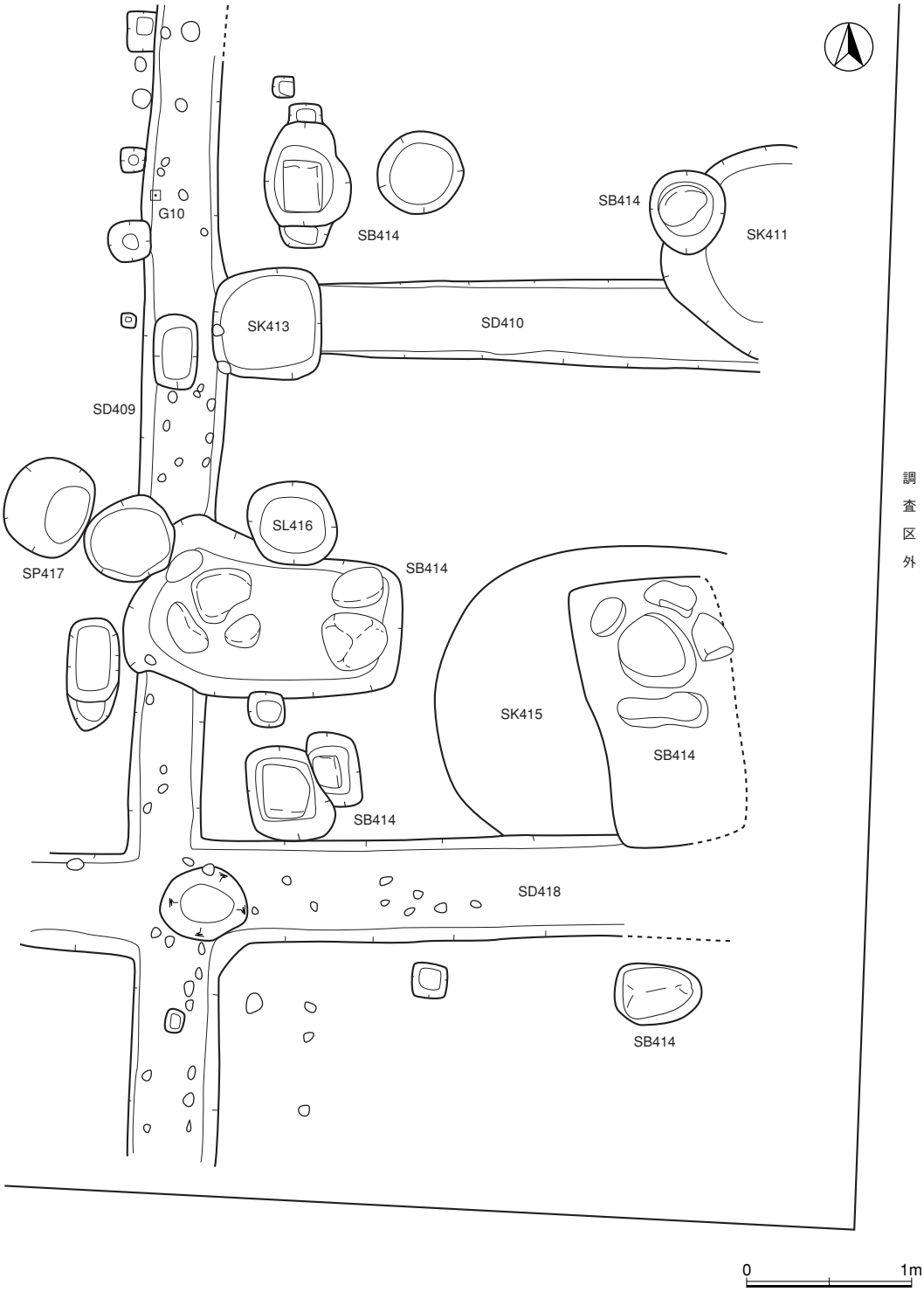
Ⅲ-161図　拡張区　G7・G8Grid



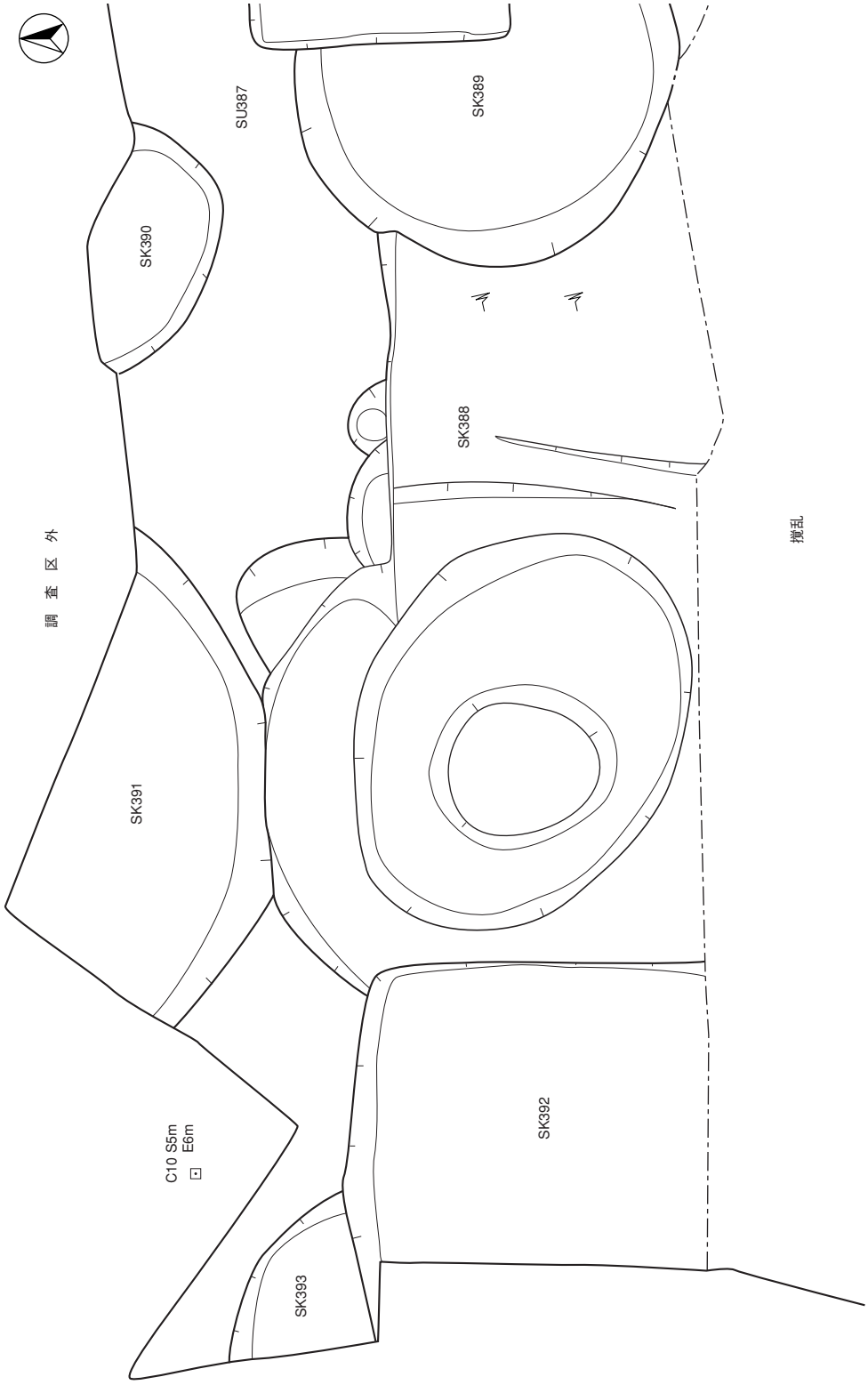
Ⅲ-162図　拡張区　G8・G9Grid



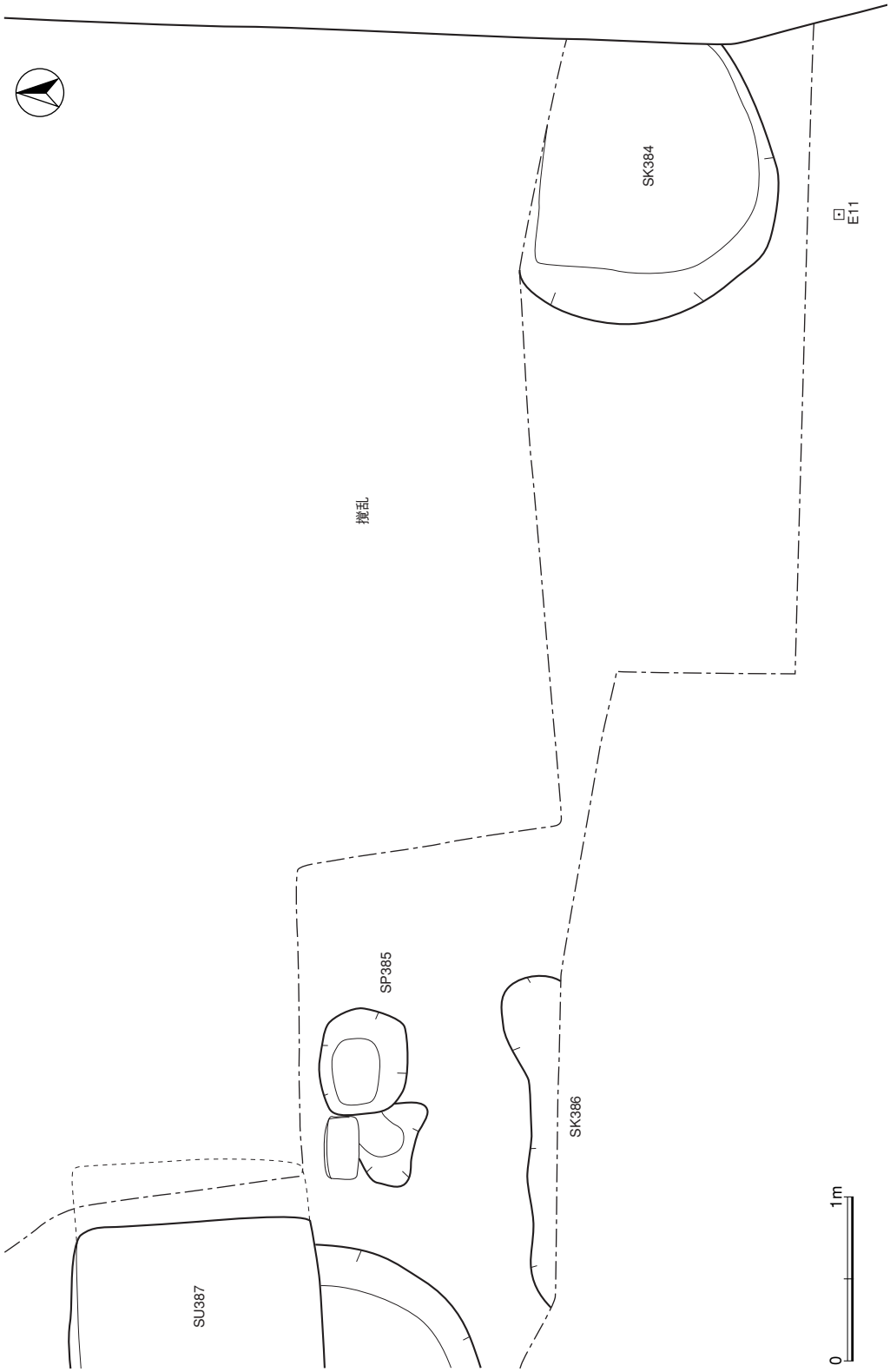
Ⅲ-163図　拡張区　F9・G9Grid



Ⅲ-164図　拡張区　F9・F10・G9・G10Grid



Ⅲ-165図　拡張区　C10・D10Grid



Ⅲ-166図　拡張区　D10Grid